

お腹が空いたのでお金を稼ぎたいです。剣術極めた死神の無自覚ラ
イフ

狂骨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お腹が空いた：何か食べたい：でもお金がない：どうすればいいんだろう。

そうだ。死神になってお金を稼げばいいんだ。

そんな軽い考えから少年は無限の修練へと身を置き誰よりも速く強い抜刀術と身体能力を手に入れてしまった。

「戦い？そんな事より何か食べようよ」

これは己の強さを自覚せずに生きる1人の死神の話である。

目次

1人の少年	1
少年の過去	6
少年の日常そして初めての休暇	10
旅禍到来	16
不審な霊圧と事件	23
解析と真相？	30
処刑の始まり	34
裏切りそしてブチギレ	43
いつもの日常？否	54
久しぶりのお仕事日和。そして庭にある花は…	61
番外編（千年血戦編前）	
番外く斬魄刀異聞録 その1	67
虚圏動乱編	
現地へと向かいます。 謎の男との交戦	74
グリムジョーの災難	82
虚圏の侵攻	89
お仕置きよ	96
新たなる任務！内容キツイがお金の為♡	104
虚圏に突入！合言葉はハリハリハくりベル!?	109
美しき戦士登場！愛の呪文はキュアアップ♡	119
皆さんお待ちせクールホーン登場！美の力は無限大	122
ハゲ染vs連合軍	135
裏切りのバラガン ザビ染の覚醒	145

ぶつかり合う二人の超越者

157

覚醒藍染 でもおしまい

166

帰還

175

瀨霊廷へ帰還。語り出される千弘の力

182

3人とお風呂そして――ハプニング

189

変化する関係

197

番外編 恐ろしき少年の実力

201

恋愛相談 千弘編

206

恋愛相談 ネム編 そして

211

千年血戦編

ザックリと一年半が経過

218

零番隊 謁見そして襲撃

223

見えざる帝国 動く

230

侵攻

234

怒りの強者そして皆さんお待ちせ偉大なる先生のご帰還

241

最強の虚

251

千年前の戦い

259

ユーハバツハとバカの対峙

270

ユーハバツハの受難

286

残された傷跡。そして千弘の秘密

293

思い出話

301

二人の剣八あと卯ノ花さん怖い

309

再び襲来する滅却師

315

恐ろしき術そして最強よ さらば

321

地獄へ堕ちます！そんなこんなでトラウマと再会？

336

	鹿取さんの急接近！そして登場！初代護廷隊の皆様！	345
	混沌なる戦場そして尸魂界崩壊の危機！	354
	抜刀斎	365
	作戦会議（隊長抜き）	377
	新年のご挨拶そして霊王宮への到達	383
	到着そして合流	388
	涅マユリの秘密兵器	395
	積年の恨み	405
	クールホーン先生の恐ろしき力	417
	激怒2回目	424
	開幕！千弘のおもしろすぎるく！！ユーハバツハ覚醒の兆し！	434
	別次元の戦い	447
	決着 安らかに眠れ	459
	後始末	469
	最終話：お腹が空いたしお金も稼ぎたい	475
	番外く滅却師達の道く	482
	Can't fear your お…おうんわーると？編 不穩	496
	の幕開け	496
	新当主の訪問	506
	騒動の幕開け	515
	獄中生活	526
	持て余す暇と藍染との再会	531
	滅びの降臨	536
	滅びの進撃	548

次元の違い	560
絶望と希望	576
いつも通りへ	587
番外編 斬魄刀異聞録 その2	593
神罰	600

1人の少年

—— お腹が空いた…何か食べたい…どうすればこんな地獄から解放されるのだろうか——

—————

尸魂界。それは命を落とした者が死神と会う事で導かれる死の世界。死んだ親族と再会する者もいれば、再会せずに新たな生活構築者もいる。

この世界の住人は現世の人と等しく、交じれば子供を設ける事ができるのだ。この世界で生まれた子は現世の事を知らずに育っていく。

そんな現世と相違ない場所を流魂街という。そしてその流魂街の中心には尸魂界の均衡や平穏を保つ為に立ち上げられた組織『護廷十三隊』の本部が置かれている『瀟霊廷』なる場所があった。

遙か昔。尸魂界の平和を守る為に現総隊長『山本 元柳斎 重國』によって組織されたその部隊は隊ごとに『隊長』と『副隊長』によって統制されている。

そんな隊をまとめる隊長一人一人が個性的であり、得体の知れない者ばかりであった。

中でも個性的かつ不気味な隊と記され、希望者も少ないとされる『十二番隊』には個性的な隊長だけでなく——

—— とんでもない1人の隊員がいた。

◆◆◆◆◆

「ふむ…こんな感じか」

目の前のフラスコに溜まった液体を震わせながら、変化の様子を観

察している1人の男。彼の名は『涅マユリ』顔面を白と黒に分けた特殊なメイクで彩り、変化を観察した際に見せた歯は黄金色に輝いていた。

「いいネ。順調だ」

そんな時だった。

「局長。言われた器具と薬品持ってきましたよ」

後ろから何やら巨大な容器と薬品が入った瓶のぶつかり合う音と共に1人の黒い道着を纏った少年が現れた。

その少年は現世で言えばまだ12か13程の背丈に加えて落ち着きのある目。そして髪を肩まで伸ばしてそれをまとめ上げてポニテールにしており、一見すれば少女に見えてしまう風貌であった。更に腰には黒い柄の日本刀があり艶のある装飾が光によって輝いていた。

「ご苦労。そこに置いておいてくれたまエ」

その少年の声を聞いたマユリは顔も向けずに実験器具を見つめたまま、置く場所を指で示した。

「…ん？局長。今度は何の薬ですか？」

「んん？見て分からないかね？これは回復薬だよ。驚異的な治癒効果があり、傷口程度なら1日で塞がる」

「成る程。赤血球と白血球と血小板を強制的に傷口に集中させるのですね」

「その通り。前は体力と霊力を大量に消費する副作用があったけども今回は回復力を落とさない上に体力だけで済む改良版だ。まあその分疲れてしまいがネ」

「そう言いマユリはフラスコを試験管を立て掛ける容器へと差し込むと、少年に指を向けた。

「そうだ。今日は久しぶりに君に休暇を与えよう。ここ一月ばかり口クに寝ていない様だからネ」

「あ、ありがとうございます。一眠りしたらまた来ますので」

「いや来なくていいから」

その指令に少年は頭を下げると部屋から出ていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふんふんふん♪」

部屋を出た少年は鼻歌を歌いながら回廊を歩いていた。

「今日のぐ飯はく何にしようかなく♪」

この少年にとって食事とは最大の至福である。彼が満面の笑みを浮かべる時は大体が食事。若しくは……

「あ、副長。お疲れ様です」

「はい」

特定の人との対話の時である。回廊を歩いていた時に出会ったのは丈の短い装束を身に纏い髪を後ろで三つ編みにした女性。彼女はただの死神ではない。涅マユリが長年の研究から生み出した人造死神である。

名前は『涅ネム』彼のDNAを元に作られている……簡単に言えば彼女はマユリの娘なので食事の嗜好が似ているのが特徴的だ。それ以外はただの寡黙な少女である。

「んん…？」

するとその女性を見た少年は額に眉を寄せると女性の髪の色を見つめた。

「どうしました？」

「髪が崩れてますよ。私が直してあげます」

「いえお構いなく…それよりも私はマユリ様のところへ…あ…」

言い返すよりも早く。その少年に肩を掴まれた女性は即座に回廊に腰を下ろされてしまう。

そしてその少年は慣れた手つきで三つ編みを解くと再び縫い直し先端部分を肩へと掛けた。

「できました。どうぞぐ確認を」

「ど…どうも」

髪型を整えられたネムは目の前に差し出された鏡に映る自身を見た。先程とは異なった髪型をしている自身の顔を見たネムは少しばかり頬を紅潮させる。

「…ありがとうございます」

「いえいえ。では私は局長から休暇を頂いたので少し休ませていただきます。一眠りしたらまた来ますので」

「それは休暇ではなく休憩…あ…」

ネムが訂正するよりも早く少年は横を通り過ぎて行った。彼はなんとこの1ヶ月間なんの休息もとっていないのだ。休む時といえば数時間程度の睡眠ただそれだけである。

「昼寝するのもいいし…何をしよう…」

回廊を再び歩き出した少年は頭の中で今後の事を考える。

それ程の生活をしておきながら彼はなぜ、こうも明朗快活なのだろうか。それは誰も知らない。

そんな不思議な彼がなぜ、死神となったのか。それは特定の人のみぞ知る。

そんな時だった。

その少年を影が覆う。見れば上空から巨大な岩石が降ってきていた。その岩石は直径は数メートルはあり一直線に少年へと向かってきていた。

「…」

その岩を見据えた少年は刀の柄に手を掛けると岩が向かってくるほんの数秒だけ握りしめた。そして時間が経つと少年は岩が迫ってきているにも関わらず刀から手を離す。

その岩は勢いを止める事なく迫ってきていた。

そして その岩が少年へと降ろうとした瞬間

粉微塵に散った。

辺りには破片が散らばり少年には砕けた際にできた埃しか付着していない。

すると

「おい！大丈夫か!？」

遠くから少年と同じ黒い道着を着用した数人の男性と女性が走ってきた。それに対して少年はニツコリと笑みを浮かべた。

「ええ。大丈夫ですよ。それよりも何があつたのですか？」

「じ…実は更木隊長が大岩を使って修行してその際に気分が昂つたのか投げてしまつたんだ…」

「へえ…更木隊長が」

その言葉を聞いた少年は驚きながらもハアとため息をつく。

「…迷惑つたらありやしない」

そう吐き捨てた少年は男性達の間を通り過ぎて行つた。その少年の後ろ姿を見た男性達は床に散らばっている小石を見た。

「…ん？これって…」

「あの大岩が粉々に…!？」

そこに散らばっていた大岩の破片と粉を見た一同は驚きながら再び少年の姿を見た。

「まさかあんな小さな奴が…」

「い…いや…それはありえないだろ…多分、更木隊長が雑に扱った所為で脆くなつて地面に落ちた瞬間に砕けたんだよ…」

その少年はただ欠伸をする。

「ん…あ、今日スーパーの特売日だった」

少年の過去

私の住んでいた地区は非常に貧乏だった。物心がついた時には育ててくれた母や父は既に死んでしまっていた。

そして 私のいる地区は治安も酷く窃盗や殺しなど日常茶飯事であった。

「おい！俺にも寄越せよクソがあ！」

道端で拾った小さなパンも食べ終える前に他の子に取られてしまう。取り合いなども日常茶飯事だ。

その日暮らしの私にとって唯一のご馳走が湧き水であった。湧き水が喉を通る時だけが凄く心地が良かった。

だが、身体だけでなく心も成長してきた事で私自身がその暮らしに耐えられなくなった。

このままじゃダメだ。

働こう。働いて日銭を稼ぎ少しでも美味しいモノを食べたい。そう思った私は少ない荷物を背中に巻き付けながら住んでいた家を出て夜の道を駆け出した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

空には何も無い。ただ薄暗い風景が広がっているだけである。それでも私は走り続けた。どこへでも。どこへでも。

息切れなども疲れも感じない。このまま世界の果てまでイッテしまおうと思いつつも私は走り続けた。

—————

—————

—————

そして 夜が開けた時。私の前にあったのは賑わう街。そして次々と漂おう美味なる食べ物の香り。

嗅いだこともない香ばしい臭いが私の鼻を擦り誘う。

だが

「悪いがな坊主。アンタに出せる程、ウチは余裕がねえんだわ。ほら、これやるからとつとと帰りな」

中にはいれてはもらえなかった。素朴な料理の一品を貰い受けた私は門前払いをされてしまう。けれども物をくれた事には変わりない。

「ありがとうございます…」

頭を下げた私は街から離れた場所でそれを食べるように食べた。

「う…うう…!!」

初めて食べたその料理はとても美味なるモノであった。サクツとした衣にジューシーな肉の食感。私の飢えを一瞬にして満たしてくれた。

もつと食べたい――。

そう思い私は少しでも稼ぐべく色々な場所を回った。

「ここで働かせてください!!」

「悪いが人手は足りてるんでな」

「すまんが、帰ってくれ」

「ウチは雇わない主義なんでね」

だが、どこを回っても門前払いを受けるだけ。いくらくらい付いても無駄だった。

そんな時だった。

「…!!!」

一人の腹を満たした人の姿を見た。店員に見送られながら店を出た人の腹はタヌキの様に膨らんでいた。

見ればその人は辺りの人とは違い黒い道着に身を包み込んでいた。

その姿を見て私はある事を思い出した。この流魂街に囲われた中心には世の秩序を正す為の『護廷十三番隊』という死神の組織がある事を。そしてその死神を育成する学院も存在していた。見れば電柱に張り出されていたビラには募集と書かれていた。

「そうだ…!!死神になればいいんだ!!!」

「どうした坊主?」

「なんで急に叫んでんだ?」

私はすぐさまその場から駆け出し街から離れた場所へと向かうと、修行を始めた。

身体の体力作りに筋力。そして剣術。

一文無しの私には剣を買うお金が無かった為にそこらに落ちていた木の棒や『丸太』を使って素振りなどの練習をした。

学院に入る為には力を示さなければならぬ。その為には私は無我夢中に筋力トレーニングをした。

食べたい…!!あのジューシーな食感の料理をまた食べたい!!!死神になってたくさん稼いで食べたい!!いっぱい食べたい!一杯ではなくいっぱいだ!!

その思いが私の身体を突き動かしていった。昼夜問わず私は修行を何度も続けた。空腹なども疲れも感じない。身体の動く限り私は修行を続けた。

—————

—————

———

「…」

あれから何年経ったかは分からない。私は血の滲むような努力から無敵の剣術と体術を得た。その代償なのか腹から下の毛が全て失われてしまった。今では歩いた時や風に煽られた時は股間や肛門が

スースーするが気持ちいいから別に問題はない。

死神にもなる事ができ今は日銭を稼いで毎日美味しいモノが食べられる。

だが

何かが違う気がした。

自分自身でも何故か満足がしなかった。まるで、これ以外にも他にやるべき事があるだろう。と自分自身が語りかけてくるかの様に。だがそれが何なのかは分からない。

「一体…なんなんだろう…」

「どうしました？」

「いえ、何でもありません」

思わず溢した独り言にネムさんが声を掛けてくるが私はすぐに誤魔化す。

『園原 千弘』はそんな素朴な疑問に悩みながらも今日も隊員として生きていく。

少年の日常そして初めての休暇

少年の日常は普通の人と比べれば全く違う。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ある日、いつものように実験や研究の絶えない技術開発局にて実験などの助手をしていると マユリが大量の書類を置く。

「これを頼むヨ。ネムは女性死神協会の集まりで留守だからネ。印鑑は全て押してある」

「分かりました」

積まれた書類は俗に言う報告書だ。十二番隊に所属する席次の者達からの全ての報告書が隊長に渡され、その隊長を通じて事務の方へと回されるのだ。

書類を抱え上げた千弘はその場から事務へと向かった。

「それとだ」

「……はい？」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それから事務の方へと書式を渡してきた千弘は帰り道の回廊を歩いていた。死神特有の『瞬歩』というモノを扱えばすぐに到着するのだが、千弘はそんな事はしない。

「はあ。今日はやけに人が少ないですね。これも『朽木ルキア』の処刑と何か関わりでもあるのですかね…」

そう言い千弘は辺りを見回す。朽木ルキアとは同じく護廷十三隊に所属する女性死神であり、尸魂界における法律に違反した為に処刑される事となったらしい。

千弘は3日前から噂程度に聞いていたが、先程、マユリから話された事で確信したらしい。

まあ千弘にとつてはどうでも良い事なのだが。

「…ん？」

考えながら帰り道の回廊を歩いていくと 目の前から白く長い髪を持つ男性死神が現れた。その男性死神は千弘を見ると笑みを浮か

べながら手をあげる。

「…おお！千弘くんじゃないか！」

「これはこれは浮竹隊長。どうも」

その男を隊長と呼びながら千弘はゆっくりと頭を下げた。彼の名は『浮竹』

十四郎』護廷十三隊の中で十三番隊の隊長である。

「調子はどうだい？どこか悪い所とかは？」

「いえいえ。見ての通り完体ですよ」

「そうか。それは良かった。そうだ！丁度いいからお菓子をあげよう！」

そう言いながら浮竹は懐や袖を弄るとお菓子を取り出して千弘へと渡していく。一体どこに入っているんだというツツコミもさせない程の素早い手付きで次々と取り出して渡していった。

「いいんですか？こんなに」

「気にしないで！ほいほいほい…と。彼女さんと食べてくれ」

「彼女？」

ふと彼の漏らした言葉に千弘は首を傾げた。その一方で浮竹自身も『え？』と予想外な反応をしていた。

「決まっているじゃないか。マユリ氏の娘のネムくんだよ。ほら、いつも一緒にいるだろ？」

「ああ…」

千弘は思い当たる節があるのか今までの生活を思い出す。彼の周りには気楽に話せる人が少ない為に仕事場でよく一緒になる副隊長のネムと話していることが多い。彼女も彼女で入隊当初は他人行儀であったが、今ではすっかり千弘に懐いており友人の様な関係となっていた。

だが、異性という程までの感情はない。

「確かにそうですけども、別に彼女と言う訳ではないですね」

「む？そうか。まあそれでも受け取ってくれたまえ。では」

「ありがとうございます。今度何か美味しいお茶でもお持ちしますよ」

「ああ！楽しみにしているよ！」

大量のお菓子を渡すと浮竹は笑みを浮かべながら去っていった。その姿に一礼した千弘は再び回廊を進み始めた。

その時だった。

「よう…千弘おおお!!」

「ん？」

空中から猛々しい声と共に何者かが剣を振りかざしながら飛び降りてくる。それを見た千弘は何の表情も変えずに直立する。

その瞬間

「うお!!」

飛び降りてきた影が何かに弾かれる様にして吹き飛ばされた。

吹き飛ばされたその影を千弘は見ると表情を崩さずに挨拶をする。

「どうも更木ン隊長」

「いつつ…相変わらずのバケモンだな。全く刀身が見えねえ上に2回も当てられちまった」

吹き飛ばされたその影は地面へと着地すると刀を振り払う。その男は身長が2メートルにも達する大男であり独特な髪型と強靱な肉体を持っていた。彼の名は『更木 剣八』護廷十三隊の中で第十一番隊 隊長を務める豪傑である。その実力は他の隊士や隊長の一線を凌駕しており護廷十三番隊の中でも最上位に位置する力を持っているのだ。

「残念ながら4回です」

「おいおいマジかよ…こりや今やつても遊ばれるだけだな…」

更木は残念そうに言いながら立ち上がると、刀を鞘に収めると手をあげて去っていった。

「じゃあな。明日も頼むぜ」

「いいですけど時と場合を考えてくださいよ〜」

千弘はその姿を手を振りながら送り返す。彼は何よりも闘いを欲しており、一度、刃を交えて以来彼に興味を抱き毎日、このようにして奇襲を掛けてくるのだ。前にネムと一緒にいた際に奇襲をしてきた時は彼女が巻き添えを喰らいそうになった為に千弘は『一人でいる時ならいい』と念を押しこの様な形になったようだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それから研究室へと戻った千弘は辺りで研究に没頭する職員達のサポートに回った。

「コーヒーお持ちしました〜。それと床のゴミを片付けときますね。あ、あと頼まれていた薬品はもうすぐ届く様です」

来て早々に人数分のコーヒーを淹れて置き、その後すぐさま頭巾を被ると床に散らばっているクシヤクシヤに丸められた紙や実験装置の隙間にある埃などを次々とゴミ箱の中へと入れていく。

「それじゃ私はこれで失礼します」

技術開発局の掃除を終えた千弘は研究員達にペコリとお辞儀をすると開発局を出ていき、マユリのいる隊長室へと向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「局長。研究室の掃除終わりましたよ。これコーヒーです」

「おやおや気が効くじゃないか。……ぐぼえ!?!」

千弘から出されたコーヒーを口に入れたマユリはぷはあと何も無い机の上に飲んだコーヒーを吹き出した。

「ゲホツゲホツ… 何だネこれは!?!甘すぎるぞ!」

「いや…研究で疲れている局長にただのコーヒーでは申し訳ないと思いい砂糖とミルクを入れました」

「糖尿にさせる気かネ!?!もういい!私少し仮眠を取るから邪魔しないでくれたまえヨ」

「じゃあお任せを」

「何故に刀を構えるのかネ!?!永眠する訳ではない!!仮眠を取るのだ!!ああもういい!しばらく休暇を与えるからもう一度気配りというモノを学んできたまえ!!ついでにコーヒーの味付けもだ!!」

そう言いマユリは指先を向けながら命令する。それに対して千弘は相変わらず笑みをたやさずに頷いた。

「はい！では少し寝て調べたらすぐ戻りますので！」

「ちがあああう!!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それから隊長室を出ていった千弘は首を傾げていた。

『いいか！お前はこれまで1日も休んでない！だからコーヒーに砂糖とミルクを入れたり寝ると言った時に刀を出そうとするおかしな行動を取るのだ。3日休暇を与えるから絶対に研究室へは来るな！いいな!?絶対だぞ！あと休暇という言葉調べておけ!!』

去り際に釘を刺されるかのように言われた一言をずっと考えていたのだ。

「うくん…と言っても…3日も…何もできないなんて…」

彼にとっては手伝いや雑用は遊びのようなモノである。それ以外となると食事しかない。

そんな時だった。

「…ん？」

背後から自身の後を付いてくる足音が聞こえた。振り返ってみるとそこには相変わらず無表情なネムが立っていた。

「ネムさん。今日は女性死神の集会ではなかったのですが？」

「それは終わりました。ですがその後にマユリ様から3日間貴方を監視する命令を受け、ここに。『絶対に奴をここに来させるな！絶対だぞ!』…との事で」

「成る程」

ネムの言葉に納得すると千弘はネムに尋ねた。

「休暇をもらった時は…どのようにして過ごしてますか？」

「それは…」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

城下町へと出た二人は料亭へと着く。

「まずは外食です」

その料亭にてネムが頼んだのはマユリと同じ焼き秋刀魚である。その一方で千弘は巨大なチャーシューメンを注文する。

それから食事を終えた二人は店を出る。

「基本はマユリ様と同行するので食事の後は…分かりません」

「そうですか。なら、軽く雑談でもしましょう。お茶とお菓子くらいなら出しますよ」

「ありがとうございます（この調子ですと夕方まで持ちませんね…）」
「今もお沈むことのない陽の光を見ながらネムは心の中で呟いた。
それから千弘はネムと共に自室に向かおうとした。

その時だった。

『西方府外区にて湾面反応!! 3号から8号付近に警戒警報!!』

瀬霊邸に巨大な警報が鳴り響いた。それと共に空の景色が少し歪む。

「ん？」

旅禍到来

『旅禍』それは死神の交通審査も受けずに尸魂街へ入り込んだ魂の事である。旅禍とは災いを招く者という意味で呼ばれ恐れられており知らせが入り次第即捕縛が義務付けられている。

そのサイレンを聞いた千弘とネムはマユリのいる十二番隊の屋敷へと向かった。

「局長くサイレン聞きましたか？」

扉を開くとそこには寝起きなのか気分が悪そうに机に座るマユリの姿があった。

「勿論だよ…はあ…君の顔を数日見ないで安心すると思つた直後にこれか…」

「まあまあ。それよりも万が一、旅禍がこの邸内に侵入したらどうしますか？」

「決まっているだろ。見つけ次第、即刻捕縛さ。相手によつては被験体として回収する。もちろん君はネムと共に私と行動だ」

そう言いマユリの指が千弘とネムに向けられ千弘は敬礼しネムは頷きながら答えた。

「分かりました」

「了解しました」

—————

—————

—————

その後 夜中となった尸魂界。騒動は一旦収束したものの事態は収まらなかつた。瀨霊廷にいる護邸十三隊は臨戦態勢へと入り各自が旅禍の侵入に備え始めていったのだ。

簡単な会合と作戦会議が開かれ、その後は千弘はマユリの屋敷の手前で他の隊員共々待機する事となった。

マユリが机に指を立てて何かを計算している中、近くで腰を下ろしながら座っていた千弘は尋ねる。

「局長。まさか隊員の皆さんに爆弾仕掛けて爆破させようなんて考えてませんよね？」

「おや、君も分かってくるじゃないか」

尋ねられたマユリは金色の歯を剥き出しにする程の笑みを向けながら答えた。その笑みを見た千弘は目を鋭くさせてマユリへ向ける。

「…」

「まあ心配いらん。前までの私ならそんな事をしていたが、今はしないよ。闘いに勝つための手段に過ぎないし…私も命は惜しいからネ」
「なら安心しました」

マユリの答えを聞いた千弘の目が元の幼い少年の目へと戻る。マユリは今でこそ丸くなったものの、千弘が来る前までは平然と隊士達を囮や武器として扱い人体実験も犠牲を厭わないマッドサイエンティストであったのだ。

それを知っていた千弘はそれを危惧して敢えて聞いたのだ。

「それに君というこれ以上のない戦力があつて囮などもう必要ないだろう」

「それ程まで私は有力ではありません」

それから時間は過ぎていくが一向に旅禍の知らせがくる気配がなく、遂には夜明けに差し掛かろうとしていた。

その時だった。

薄暗い空が突然と光だし辺りを照らし出した。

「…ん？」

その明りに気づいた千弘は外へと出る。見れば上空には白く輝く球状の物体がありそれは形を変えながら花火の様に弾け飛び出し大きな破片となって四方へと散っていった。

その直後に伝令が来る。

何でも旅禍が邸内に侵入した際に隊長である『市丸ギン』という人物が手を引いた疑いにより『隊首会』が開かれる事となつたらしい。隊首会とは文字通り隊長達による会合であり月に一度の間隔で行われる。

その伝令を聞いたマユリは気乗りしていないかの様に残念そうな表情を浮かべると召集元である総隊長の元へと向かつていった。

残った千弘は辺りを見回すとネムに耳打ちする。

「私達で全員捕まえてしまいませんか？」

「いえ…」

それに対してネムは首を横に振った。

「いくら貴方が強くとも隊長であるマユリ様の指示も無しに勝手に動いてしまうのは隊の調子を崩すため危険かと。それに…総隊長からも言われている筈です」

「確かにそうでした…」

ネムの注意に千弘は頬をポリポリと搔きながら引き下がる。彼自身は出撃し成果を上げたいのだが、総隊長である山本から無闇に前に出過ぎない様に言われている為にそうはいかないのだ。

「理由は分かりませんが…山本御大は多分、私の身を案じてくれているのか…それとも隊員が前に出過ぎる事が規律を乱すからそれを危惧しているのでしょうかね」

「両方かと思えます」

「成る程。ではゆっくりと待ちますか」

千弘は頷くとその場にゆっくりと腰を下ろす。上記の理由にネムは頷くもののこれは建前でしかならない。

本当の目的は彼を隠し戦略にするためである。彼ほどの実力者は過去未来に置いてもう絶対に現れないだろう。初めて総隊長である山本と対戦した際には刀身を見せる事なく余力を残して勝利してしまっただから。

仮にこの事が知られば護邸十三隊と敵対する勢力は間違いなく彼を警戒し始め対策を講じるだろう。

ならばそれを防ぐ為に彼を隊員の立場へと止め前線にもあまり出さないようになったのだ。

まああの本人にはその自覚がないのだが。

因みにこの事を知っているのは隊長と副隊長だけである。即ちネムも勿論知っている。

「もう少し自覚を持っていただきたいです…」

「何がですか？」

「何でもありません」

それから少し時間が経過するとマユリが帰還し、十二番隊へと指示を出したことにより、皆は散っていった。

千弘は勿論、ネムと共にマユリと行動である。何故かマユリは不機嫌であったが、何かあったのかは聞かない様にしていた。

◆◆◆◆◆

「…ん？何か感じますね」

マユリと共に出撃した千弘は路地を進む中、ある気配を感じた。その言葉を聞いたマユリは立ち止まる。

「…確かに。これはすぐ近くにいます。護邸十三番隊には見られない異質な霊力…どうやらビンゴの様だ」

そう言いマユリは歩き出した。マユリもどうやら感じ始めたらしい。そのまま進んでいき道を抜けると更に広い道へと出た。

現在彼らがいるのはルキア死刑囚が処刑される場所より少し離れた白い石で作られた場所である。

道へと出た千弘達は道の向こう側に見える分かれ道からこちらに向かってくる気配を感じ取った。

「来ました」

その時だった。

目の前にある分かれ道から自身らと同じ死神の黒い装束に身を包んだ眼鏡を掛けた青年が現れた。

「…な!? 3人か…ついてないな…けど、井上さんと別れたのは正解

だった…」

現れた青年は自身らを見ると齒を噛み締めながら立ち止まる。

その一方で青年を見たマユリは青年の発する独特な霊力を感じると驚きの声を上げる。

「ほう。死神には感じない霊力…これは驚いた。まさか旅禍の中に『滅法師』が紛れ込んでいたとは」

【滅却師】それは死神とは別に霊力を持った呪術師である。彼らは全員人間であり古の時代は現世で有名な術者であったとされている。だが、徐々にその血は絶えていつており、今では全く聞かなくなっていた。

マユリによるとこの青年がその滅法師であるというのだ。

その一方で、滅法師の青年は自身らを睨み付けて警戒していた。

「…道を通してもらえるか？」

「申し訳ないんですが、無理ですね。捕縛を命令されているので」

そう言い千弘は前に出る。それに対して滅法師の青年は眼鏡を掛け直すと両腕から霊力を放出した。

「そうか…なら…力づくで通させてもらうよ…!!」

その言葉とともに青年の霊力は両腕を覆い尽くすと形状を変化させアーチエリーへと変わった。

練り上げられた霊力によって象られた形は極めて繊細であり、彼も滅法師の中では高い水準の実力を持つ事が窺えるだろう。

「やめたまえヨ。大人しく捕縛されて私の被験体になった方が身のためだよ？」

「さり気なく被験体にしようとししないでください。もう興味はないでしょう」

「おっとそうだった。解剖する前に君が現れた事で興味を失ってしまったんだったヨ」

マユリの言葉に突っ込みながら千弘はこちらに向けて矢を構える青年に再度忠告した。

「もう一度だけ言います。めんどくさいので捕まってください。こっちも早く終わらせて研究所の手伝いしなくちゃいけないので」

「おいしい!!それはしばらく禁止と言っただろお!」

「だって落ち着かないですもの。大体休むっていつても何をするか分からないですし」

「それを考える為に数日の休暇を与えたんだろがぁ!?君は本当にバカなのか!?バカ中のバカなのかネ!」

「あ!今バカって言いましたね!?バカって言った方がバカなんですよ!!腐れ局長!!」

「誰が腐れ局長だ!それにバカと言われる方がバカなんだよ!!このバカバカ!こんなくだらない理由で怒ったのは生まれて初めてだよ!なんなんだネこの世界一くだらない体験は!」

マユリと千弘が言い争っている中、後ろで待機していたネムが二人に声を掛ける。

「あの…お二人とも」

「何だ!? (なんですか!?)」

二人が振り向くとネムは自身らの背後へと指を向けた。

「滅却師の方…行ってしまいましたよ」

指を向けられた方向へと目を向けるとそこには駆け抜けていく滅却師の青年の姿があった。

それを見た千弘は瞬歩を使い一瞬にして追いつくと腕を振るい背中に出た。

「失礼」

「が…!?!」

腕がトンつと音を立てながら当たるとその青年はゆっくりと倒れ意識を失う……

筈だった。

そのまま青年は道を隔てる壁に向けて吹き飛んでいく。

「あ」

そして

ドガシヤアアアン!!!

壁に激突していった。その衝撃によつて道を隔てる壁が粉々に破壊され辺りに砂埃が舞い滅法師の青年は下半身を出しながら崩れた瓦礫に埋まってしまった。

「…」

その悲惨な光景を千弘は固まりながら見つめっていると後ろから歩いてきたマユリがメモ帳を取り出す。

「修繕費は今月の給料から引いておくからネ」

「ちくしよおおお!!!」

不審な霊圧と事件

千弘の腕によって吹き飛ばされ気絶した滅却師を医療班に任せると千弘はマユリ達に目を向けた。

「あと3人ですが、どうしますか？」

「ふむ…」

千弘が尋ねるとマユリは顎に手を当てながら考える。
すると

どこから共なく黒い蝶が現れた。これは『地獄蝶』と言い廷内で飼われている伝令用の虫だ。その虫がネムの肩に止まると伝令が言い渡された。内容は最強部隊とされる十一番隊の中でもナンバー3の斑目一角が旅禍の一人に倒されたとのことだ。

「全く…何をやっているのやら」

「まあまあ。取り敢えず彼に情報でも聞きにいきましょうか」

憤慨するマユリを宥めながら千弘達は医療班とされる四番隊の元へと向かった。

◇◇◇◇◇

その後 四番隊の治療室へと赴き斑目から事情を聞き出した千弘達は再び搜索へと出た。やはり今回現れた旅禍は強さが異常なのか、既に治療室には大量の患者が運ばれていた。

「旅禍の目的は死刑囚の奪還…。そうすると他の四人も同じ目的…という事になるネ」

「ええ。更木ン隊長も向かっているとの事なので処刑場に行く道で待った方が的確かもしれませんね。処刑場には山本御大。付近には更木ン隊長がいると思うので行く必要はないでしょう」

「ならばそうしようじゃないか」

その後、千弘達が動き出してから次々と旅禍が捕縛されていった。褐色の肌と筋骨隆々の肉体を持つ男性とオレンジ色の髪を持つ女性だ。

だが、残りの旅禍はいくら探しても見つかる事はなかった。

「ふむ…おかしいな。死刑囚はまだ檻の中…だとしたら必ずここに来る筈なんだがネ」

「まあ気長に待ちましょう」

檻へと続く道にてマユリ達は先回りし多くの隊員達と待ち伏せをしていたものの、一向に旅禍が現れる事がなかった。

それからは騒ぎは収束し隊長と隊士達は休息の為にそれぞれの屋敷へと戻っていった。

深夜は深夜で別の探査隊が搜索するらしいが、それでも警備の為に夜通し起きている隊員も多い。

それは千弘も例外ではない。

けれどもマユリの屋敷へと警備の為に戻ろうとした矢先にネムに引つ張られ自分の部屋へと移動させられたらしい。

◇◇◇◇◇

深夜。外が昼間と一変し静かになる中、部屋に引つ張られていった千弘はネムの監視の元、縁側に座りながらポットで淹れた茶を飲みながら空を見上げていた。

「ふう…夜の景色を見ながら茶を飲むのは気分が安らぎますね」

「…そうですね」

横には同じく腰を下ろしながら茶を啜るネムの姿が。彼女も何気にくつろいでいた。

そんな中、お茶を一飲みしたネムは千弘に目を向けた。

「…一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「ええ。どうぞどうぞ」

ネムは自身の胸に手を当てながら自身が最近、気になっていたある事を探ねた。

「なぜか…貴方と共にいると少し身体が暖かくなってしまおうのですが、これは一体…なんなのでしょうか」

「ふむふむ」

ネムが探ねてくると千弘は数回頷きながら答えた。

「恐らく楽しいという感情の現れだと思いますよ。私も局長をいじり

回してる時や貴方といるとそんな感覚に見舞われますから」

「…そう…ですか」

千弘の答えを聞いたネムは胸に手を当てる。前に女性死神協会にて『草鹿やちる』という少女に褒められた時に感じた気持ちよりも胸はやや熱めの温度であった。

「…楽しい…とは別の感覚のような…」

「そうですかね?」

それから二人は夜通し空を見上げながら茶を啜っていた。それによつて千弘は何度トイレに行つたことか。

そして 空がゆっくりと明るくなっていき朝日が訪れようとしていた。登つた陽の光が瀨霊廷を照らしていくその光景を見ていた千弘は立ち上がると刀を腰に掛ける。

「さて、早く局長の所へ向かいましょうか」

「…はい」

ネムも立ち上がると千弘と共にマユリのいる場所へと向かおうとした。

その時だった。

「いやああああ!!!」

「!?!」

どこからともなく巨大な叫び声が聞こえ瀨霊廷中に響き渡つた。

—————

—————

—————

叫び声が聞こえた場所へと向かつた二人。そこには口元を押さえ膝から崩れ落ちている五番隊副隊長である雛森の姿があった。

辺りにも既に他の副隊長達が集まっており一点を見つめながら絶句していた。

「これは…」

「嘘だろ…!?!」

皆が目を向けている先には心臓部を刀で貫かれ磔のようにして殺されている五番隊隊長である藍染の姿があった。

「藍染隊長…!?!」

皆がその光景を受け止めきれない中、千弘はある方向を見つめていた。その仕草にネムは首を傾げながら尋ねる。

「…どうしましたか?」

「何か妙です。藍染隊長の霊圧が…まだ感じ取れます」

そう言い千弘は飛び上がると藍染の遺体から流れ出ている血液へと手を伸ばし懐からスポイトで採取する。

「ちよ…何をやってるの!?!」

その光景を後ろから見ていた十番隊副隊長である『松本 乱菊』が驚きながら尋ねる。それに対して千弘は血を吸い上げながら答えた。「なんか怪しいので血液を調べようかと。私達は現場を見ていません。それにこのご時世、身代わりの能力を使う輩も少なからずいるでしょう。だから念のためです」

「念の為につて…アンタこれを偽物だと思ってるの…!?!」

「ええ。現在、まだ旅禍が全員捕まったわけではありません。もしかしたら旅禍の仕業で我々を攪乱する為に偽物を用意したのかもしれない。現にまだ藍染隊長の霊圧を僅かながらに感じますからね」

「え…?」

「…!?!」

千弘の言葉に雛森の震えた体が止まると共に目が大きく開く。松本だけでなく辺りにいる皆も次々と驚いている中、千弘はスポイトを懐に仕舞うとネムへと目を向けた。

「では、局長の所へ向かいましょうか」

「私一人でも大丈夫だと思うのですが…」

「いえ。仮にこれが身代わりだった場合、犯人は確実に今の我々を見ているでしょう。ネムさんなら心配がないとは思いますが敵が複数だった場合は危険です。なので私も行きます」

「分かりました。では急ぎましょう」

千弘の言葉にネムは頷く。

「結果が分かったらお伝えしにきますね」

千弘はそれだけ言い残すとその場からネムと共に瞬歩で飛び立ちマユリのいる研究所へと向かっていった。

その姿を皆は後ろから見つめていた。

「あれが…総隊長の言っていた最強の死神…いつ見ても沈着冷静な人だな…」

「ああ…」

千弘の冷静な態度と動きに三番隊副隊長である吉良は驚きの声をあげ、その言葉に同意するかの様に九番隊副隊長である『檜佐木修兵』は同意するかの様に頷いた。

その時だった。

「なんや。朝から皆さんで騒がしいなあ」

「…!!!」

後ろから陽気な声と共に細めの青年が姿を現した。その青年の姿を見た瞬間 雛森の頬から筋が湧き上がった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「もしも血液が偽物なのだとしたら…彼はなぜそんな事をしたのでしょうか…」

マユリの待つ十二番隊の屋敷へと向かう中、千弘の隣で同じく移動していたネムはある疑問を抱き尋ねた。

「分かりませんね。ただ、この状況下であんなドツキリなんてちよつと笑えないですから何か裏があるような気がします」

「成る程。でしたら伝達の用意もした方がいいですね」

「ええ。地獄蝶を数匹ほどお願いしますよ」

そう言い屋根から通路へと着地し二人は走り出した。走り出すたびにすべすべの股間や肛門に風が通る心地いい感覚に見舞われながらも千弘達は十二番隊の屋敷へと急いだ。

そして。あともう少してマユリの待つ十二番隊の屋敷へと差し掛

かったときであった。

【正解 清虫終式・闇魔蟋蟀】

「?」

突然と前から暗闇が現れると辺りの景色を次々と侵食していき千弘達を包み込む様にして暗闇に染まっていった。

「なんだこれ？」

突然と暗闇に包まれていく景色に千弘達は驚き走る足を止めてしまった。

すると 暗闇の発生した場所から一人の男が現れた。その男は褐色の肌にサングラスそしてドレッドヘアといったファンキーな風貌であり、その一方でサングラスから見える目は真っ白に染まっていた。

彼の名は『東仙 要』盲目でありながらも現九番隊隊長を務める猛者の一人である。

「あ、東仙隊長！どうもお疲れ様です」

そんな彼の姿を見た千弘は驚きの声と共に手を挙げた。

だが、その一方で東仙は白く輝く不気味な白い目を千弘達に向けていた。

「…やはり君を警戒していて正解だったな」

見た目と反して落ち着きのある声でふと呟くと手を握り締め地面へと刀を突き立てる。

すると 更に濃密な闇が現れ二人を包み込もうと迫る。
「この先には行かせん。しばらくここで立ち止まってもら

ぐほえ!？」

刹那。何かを吐き出す様な声と共に立っていた東仙の身体がくの字に曲がった。

見れば東仙の腹には一瞬で接近し、腹に刀の柄の先端を突き立てた千弘の姿があったのだ。

「な…なんだ…このはや…さ…!？」

反応できず、ようやく痛覚で痛みを感じた東仙が千弘の反応と接近速度に驚く中、千弘はまるで業務を邪魔する人をあしらうかのような目を向けた。

「すみません。そういう遊びに付き合ってる暇ないので」

そのまま千弘の突きつけた刀の柄によって東仙は吹き飛ばされ、背後にある壁へと激突していった。東仙が吹き飛ばされたと同時に千弘達を囲んでいた闇もゆっくりと消えていき元の景色へと戻っていく。

「おっ…戻った。では、行きましようか」

「はい」

それを確認した千弘はネムと共に再び走り出した。

「さっきの遊びは騒動が終わってからお願ひしますよ隊長」

そのまま千弘達は事情を聞くことなく倒れ臥しながらピクピク動く東仙を横切り置いていくと十二番隊の屋敷へと向かっていった。

解析と真相？

千弘「局長おおおお!!!」

ドガシヤアアアアアンツ!!!

マユリ「ぎやあああ!!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それからマユリの元へと到着した千弘は経緯を説明しながら入手した血液を取り出す。

「藍染隊長の遺体から検出した血液です。解析をお願いします」

「来て早々なんだね…。まあ奴の逝報は私も今し方知った所だ。いいだろう」

マユリは千弘から血液を受け取ると二人を連れて研究室へと向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

研究所へと到着するとマユリは一つの瓶を取り出した。

「君に問おう。蛇の毒にはいくつ種類があると思うかね？」

「うくん：出血毒と神経毒と筋肉毒の3種類ですかね」

「正解。特に出血毒には血に含まれているタンパク質を分解する成分や血液のプロトロンビンを活性化させてゼリー状に凝固させると共に凝固因子を消費させたり血管系細胞を破壊して出血を止まらなくさせると言う効果もある。この毒がまさにこれだ。大体の生物は量によつては短時間で死に至るだろうネ」

そう言いマユリは千弘から受け取った血を一つのフラスコへと入れ、その中に瓶から取り出した毒を数滴垂らしコルクで蓋をすると軽く振る。

「因みに凝固する作用は血液の中に存在するタンパク質や他の成分の正確な割合で発生する。流石に今の私の技術でも一から血液を作るのは難しいネ」

「…つまり本物の血ならばほぼ血液が固まり偽物ならば微量しか固まらない…という事ですね」

「その通りさ。ネム、地獄蝶の用意ヲ」

「はいマユリ様」

ネムは研究所に置かれている地獄蝶を数匹、手の上に乗せて来る。

そして 遂に実験の結果が出ようとしていた。その様子をマユリを挟みながら千弘、ネムは凝視していた。

「そろそろだネ」

マユリは分厚い紙を敷くとその上に試験管を傾けた。

その結果。

粒程度しか凝固しなかった血液が “液体と共に流れ出てきた”。流れ出した血液は紙の上に垂れると浸透して赤く染め上げていく。

それを見た3人は確信した。

「これで真相が分かったネ。ネム」

「はい」

ネムは地獄蝶に伝言を込めると飛ばす。

それを見届けたマユリは隊長羽織を着用し斬魄刀を手にする。

「さて。偽物だと分かった事だし我々も動き出そうカ」

「おや？貴方自ら動くとは珍しい」

「当たり前だろう。血が偽物と分かったら犯人は間違いなく私達に目を光らせている。ここに残れば危険が迫る事間違いなしだ」

そう言うマユリは千弘とネムに目を向けてある事を尋ねた。

「ここへ来る途中…誰かに会った若しくは尾行された事はなかったかネ？」

マユリから尋ねられた二人は自身らがここへ来る途中に東仙と遭遇した事を思い出した。

思い出したネムは東仙が自身らに卍解を使い足止めをしようとした事をマユリに話し始める。

「私達が向かっている中、東仙隊長に会いました。彼を警戒していたと言っており…私達に向けて卍解を」

「ほう？」

ネムの発言を聞いたマユリはニヤリと笑みを浮かべる。

「どうやら『黒』が1匹現れたようだネ」

「なら、それについても伝えますか？」

ネムが東仙についても地獄蝶を用いて伝えるかどうかを尋ねるとマユリは首を横に振る。

「今はやめておけ。奴にはお前達を襲ったという事しかない。広めた所で理由などいくらでも正当化できるサ」

「泳がしておく…という感じですかね？」

「そうだネ」

そう言うのとマユリは隊長羽織を身に纏う。

「さて行こうカ。まずは藍染の遺体を回収するヨ」

「了解です局長」

マユリに続くかの様に剣を腰に差した千弘とネムは共に出撃した。

その後 数匹の内の1匹が四番隊へと到着し事実を知らされた事によって副隊長である『虎徹 勇音』が捕捉・伝達系の鬼道【天挺空羅】を使い全死神へと伝えた。

『解析結果 藍染 惣右介の遺体は虚偽のモノであると判明』

◆◆◆◆◆

藍染の死体が偽物である事が判明した瞬間 四番隊の屋敷にて遺体の側で見守っていた四番隊隊長『卯乃花 烈』は警戒を極めていた。

「た…隊長…」

「落ち着きなさい勇音」

目の前にある遺体が偽物である事を知った途端に震え始めた勇音を卯乃花は落ち着きのある声で宥め落ち着かせる。

「もうすぐ涅隊長達が到着します。それまではこの物体を守らなくてははいけません。だから狼狽えてはいけません。よろしいですね…？」
「は…はい…!!」

それでも不安でしかない。マユリ達へ通信を入れたと言えども、彼らが到着する前にこの遺体を作り出した犯人が現れるのかもしれない。それを考えていた勇音は震えていたのだ。

それから数十秒後に千弘達が到着し、藍染の遺体は無事に回収され研究所にて保管される事となった。

だが、その晩。マユリや研究員達が席を外して僅か数分。回収された藍染の遺体は何者かの手によって奪い取られてしまったのか姿を消してしまっていた。

それと共に本物の藍染も見つかる事がなく、真相は再び闇の中へと消えてしまった。本物の藍染はどこへ行ってしまったのか。そしてあの遺体を作り出したのは一体誰なのか。

謎は謎のままであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

澗靈廷のとある暗い部屋の中。

「よくやってくれたね…『要』」

「…はい…」

「そう落ち込む事はない。相手は正解も無しに総隊長を倒す程の力の持ち主だ。〃対一〃では敵わない。〃私〃も彼には〃力〃で勝てるとは思っていないからね…」

そう言い男は東仙を宥めるとその手に抱えられている〃藍染の遺体〃を受け取り不敵な笑みを浮かべた。

処刑の始まり

それから翌日。廷内にある知らせが届いた。

それは『朽木ルキア処刑日の短縮』であった。本来ならばあと数日の期日があるにも関わらず1日。即ち明日に決行される事となったのだ。

その知らせを自身の部屋で茶を飲みながら聞いていた千弘は監視のネムと共に首を傾げていた。

「四十六室もおかしな命令を出しますね。処刑すらもおかしな罪なのに短縮だなんて」

四十六室とは【中央四十六室】呼ばれ、尸魂界にて護廷十三隊よりも上の立場に立つ者達だ。瀟霊廷の真ん中にある執務室にて罪人の刑や法を決めるといふ現代で言う内閣と裁判官が合わさった機関である。

だが、日頃から決定に対する意識が固い時であれば緩い時もあるの
で隊全体はあまり良い印象を持っていない。

「それに：藍染隊長が消えてから突然ですね…」

「一体何が起きているのやら」

そう言い千弘は不思議に思いながら茶を啜った。

それから

その日も千弘は一睡もする事なくネムと共に茶を楽しんだ。

—————
—————
—————

そして翌日。

朽木ルキアの処刑が執行される時が来た。千弘は緩んでいた隊服の帯紐を締めると刀を腰に掛ける。

「行きましようかネムさん」

「はい」

それからマユリと共に千弘達は処刑が執行される『双極の丘』へと向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そこには既に他の隊長達の姿もあつた。本来ならばマユリは性格上、処刑に興味がない為に実験室に籠るつもりであつたが、犯人に対してまだ油断ができないと共に研究室を破壊される恐れがあるために仕方なくこの場にいた。

そして千弘がなぜいるのか。それは処刑に不備が起きた際の警備だ。総隊長直々に頼まれたらしい。

処刑場に到着した千弘は巨大な処刑台の前に立つ長い髭を伸ばした初老の男性に向けて頭を下げた。

「おはようございます。山本御大将」

「うむ…」

千弘の挨拶にその男性は暗い声で答える。

この男こそ現在の護廷十三隊を束ねる総隊長『山本 元柳斎 重國』である。どんな時にも規律を重んじ人情を持ち込まない性格故に隊士達からは恐れられている。

だが、この日の彼は少し違つた。

たとえ死刑囚であろうとも自身が束ねる隊員の処刑である為なのか、総隊長の元柳斎の表情は厳格でありながらも少し暗くなつていた。

元柳斎へと頭を下げた千弘は他の隊長達へも頭を下げていく。

一番隊副隊長 『雀部長次郎』

二番隊隊長 『碎蜂』

二番隊副隊長 『大前田希千代』

四番隊隊長 『卯乃花 烈』

四番隊副隊長 『虎徹 勇音』

八番隊隊長 『京楽春水』

八番隊副隊長 『伊勢七緒』

十三番隊隊長『浮竹十四郎』

以上、総隊長とマユリ、ネムを含め11名の隊長格達とN.O. 3とされる第3席の者達がその場にいた。

そしてもう一人。処刑場を見つめる影があった。

六番隊隊長『朽木 白哉』

死刑囚と同じ姓を持つこの男は朽木の血筋である人間であり、即ち死刑囚はこの朽木家の養子なのだ。

義妹の処刑を前にしても姿勢や表情を崩す事なくただ見守っていた。

『朽木隊長。おはようございます』

「…ああ」

千弘の挨拶に白哉は見向きもせず答えた。

「何だネこれは。随分と集まりが悪いじゃないカ」

「何か用事でもあるのでしょうか。少ないですが、我々だけでも見届けましょう」

隊長の集まりの悪さにマユリはため息をつき、それを宥めた千弘は処刑台を見上げた。

それから数人の兵士に連れられながら死刑囚である『朽木ルキア』が連行され、処刑が執行される事となった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「双極を発動せよ」

元柳斎の声と共に双極は呼応するかの様に光出す。

罪人の処刑。罪人の両腕にキューブの様な物体が浮き上がり、それらは罪人の両腕と同じ高さまで浮き上がると罪人の両腕に枷をつける様にして特殊な透明な膜を作り出す。それによって罪人の両腕は固定され、空中へと浮き上がっていった。

すると 処刑台に向けて立つ巨大な槍の柱から巨大な炎が巻き上がり、一匹の巨大な鳥の姿へと変貌する。

【燬燬王（きこうおう）】

双極の真の姿でありこの鳥が罪人を貫く事で刑が執行される。

「…」

その恐ろしい風貌に辺りの皆は固唾を飲みながら処刑を見守っていた。

その一方で、マユリは興味が無さそうな表情を浮かべたまま直立し、ネムと千弘はただ何の感慨も浮かばない顔で見っていた。

そしてその炎は巨大な叫び声を上げながら罪人へと嘴を向け、遂に貫こうとその翼を羽ばたかせる。

その時だった。

罪人を貫こうとした燬燬王の炎が突然止まった。

「「!?」」

突然の現象に皆は目を開き驚く。見れば罪人と燬燬王の間には一人の男が立っており斬魄刀らしき得物で斬魄刀100万本に達する程の威力のある燬燬王の嘴を受け止めていたのだ。

「な…なんだあの男は!？」

碎蜂が驚きの声をあげる中、突然 横に立っていた京楽と浮竹が動き出す。それと同時にどこからともなく浮竹の部下2人が現れた。

「な…!?二人とも何をする気ですか!?清音も!」

勇音の驚く声を意に介す事なく二人は一つの機器を取り出すと、その機器から巨大な糸を燬毘王へ向けて射出した。それによって再び罪人を男諸共貫こうとする燬毘王を拘束する。

「済まない！発動に手間取った！」

「ああ!!」

その拘束によって動きを封じられた燬毘王。すると、それを見ていた碎蜂は大前田と勇音に叫ぶ様にして伝えた。

「止める!! 奴らは恐らく双極を破壊するつもりだ!!」

「!?」

2人が聞き入れるよりも早く。浮竹と京楽は既に準備を完了していた。すると、燬毘王に巻きついていていた糸に謎のオーラが纏わると、燬毘王に吸い込まれる様にして消えていった。

「あれま。消えてしまいましたね燬毘王」

その光景を見ていた千弘は思わず呟く。すると隣に立っていたマユリは興味がなさそうに答えていた。

「ああ。まあ当然だろうネ」

京楽と浮竹の用いた道具を見たマユリは相変わらず退屈な表情を浮かべながらハア…と溜息をつく。

「くだらない。早く実験に戻りたいものだヨ。まあ、誰かが死んでその死体を解剖するのもありだがネ」

「そこだけは変わらないですね」

その時だった。

「園原千弘…!!」

「…ん？」

低くドスの効いた威圧感のある声が聞こえてきた。見るとそこには全身から巨大な霊圧を放つ元柳斎の姿があった。

元柳斎は鋭い目を向けながら口を開く。

「絶対に手を出すな。よいな? 貴様はそこで2人と共に待機しておれ…!!」

「え？ああはい」

元柳齋の言葉に千弘は自身の立場を案じてくれていると思い軽く返す。

まあ、全く違うのだが。

その一方で千弘へと指示を出した元柳齋は目の前に立つ2人に目を向ける。それに対して2人は元柳齋から発せられる強大な威圧感と霊圧に冷や汗を流し始めた。

「へへ…まさか園原君を封じられちゃうとはね…口裏を合わせておけば良かったよ…」

「それは俺も思ったよ…。でも彼はどちらかと言えば中立。それに先生も彼を相手にしたくはないと思うし」

「ふん…それだけではないがな…」

京楽のふと溢した言葉に浮竹は答える。それに対して元柳齋はそのつもりなのか頷くと共に他の目的もある事を匂わせるかの様に返した。

「さて…覚悟はできておろうな…？春水…十四郎…!!」

「…!!」

溢れ出るその気迫に気圧されながらも2人は引かなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その一方で元柳齋から待機を命じられた千弘は辺りを見回した。

どこからともなく突然と現れた六番隊副隊長の『阿散井 恋次』は旅禍から投げられた死刑囚であるルキアを受け取ると逃走し、後に続く様にして清音達が続いていき、後を追いかける様に碎蜂達が走っていた。

そして 碎蜂の素早い身のこなしによる蹴りが2人のうち、男性の方を蹴り飛ばすと共に女性である清音の首を掴み地面へと押し倒した。

「がはあ…！」

「お前達の行為は十三隊席巻として恥ずべき裏切り行為だ。まあ安心しろ。自責の念に苦しむ前に…殺してやる…!!」

その鋭い目に獣の様な殺気が籠ると腕を突き刺すかの様に清音へ

と向けた。

すると 突然 黒い影が現れ、碎蜂を抱き抱えると崖の向こうへと消えていった。

「んん？今のは見えたかネ？」

「ええ。何か褐色の肌をした女性がいましたね」

「褐色の肌……ネ……」

それとは別の方向では阿散井を追いかけていった勇音、大前田、雀部が目の前に降り立った旅禍の男によって気絶させられている光景があった。

その様子をマユリ達と共に一望していた千弘は欠伸を垂らす。

「騒がしいですね。何とか話し合いができれば良いんですけど」

「無理に決まっているだろ。それよりも、不思議で仕方がない」

「え？」

ふと漏らしたマユリの言葉に千弘は首を傾げる。

「本来ならば双極は隊長格の処刑の時にみに用いられる。だが朽木ルキアは隊長でも副隊長でもない。その上罪状は『現世にて無許可による長期滞在』と『死神の力の譲渡』のみ。普通は厳しくても禁固刑の筈だ。それなのに死刑かつ場所が双極。幾ら何でもサービスがすぎると思わないカイ？」

「思いますが、珍しいですね。局長が実験以外の事に疑問を抱くなんて」

「これだけ例外な点が有れば流石に疑問に思うさ。どうにも今回の処刑は何か『裏』がありそうだよ。先日失踪した藍染や東仙の事もあるからネ」

「成る程」

マユリの考察に頷く千弘。

その時だった。

「御三方。ちよつとよろしいですか？」

ネムでもマユリでもない第三者の声が聞こえた。見れば四番隊長長である卯乃花の姿があった。

「ん？四番隊長が何の用かネ？」

それから三人は卯乃花のエイの様な斬魄刀である肉雫隠に乗りながら双極の丘を後にした。この斬魄刀は生物であり、体内には傷を回復させる効果があるらしい。

その体内には碎蜂によって傷を負わされた清音や旅禍に気絶させられた勇音が入っていた。

「まずは彼女らを医療室へ。その後にある場所へ向かいます」

「え？どこへ？」

背に乗りながら千弘は卯乃花に尋ねる。すると、彼女は答えた。

「清浄塔居林です」

「ほう？」

清浄塔居林という単語を聞いたマユリは頷くと卯乃花へと尋ねた。

「まさか君も勘づいていたとはネ」

「ええ。少々遅くなりましたが」

卯乃花はまるでマユリの真意を知っているかの様に頷く。

「……………」

「……………」

「……………」

それから勇音を除いた隊士達を医務室へと預け、マユリとネムと千弘を乗せた肉雫隠は再び飛び上がり清浄塔居林へと向かった。

「なぜそこへ？それに何で局長達まで付いてくるんですか？珍しい」

千弘が尋ねるとマユリはフツフツと不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「前に藍染の死体を回収したのを覚えているだろうか？」

「ええ」

「私はその時に死体…いや、人形に発信機をつけていたのサ。私にしか感じ取れない独自の電波を発する奴をネ。そしてその電波が瀕霊邸でも最も安全な場所である清浄塔居林から感じ取れるのサ」

「成る程。つまりその清浄塔居林へ行き真意を確かめるって事ですか

？」

「その通りだ。帰って実験をしたいとも思っていたが、たまにはこういうのも悪くないと思ってネ。

それに：既に私の論理的な思考能力によって犯人も割れている。

犯人の名は――

◇◇◇◇◇◇◇◇

瀨靈廷内でも誰も立ち入ってはならない禁足地『清浄塔居林』その中は巨大な冷気が漂い辺りに巨大な氷が張っていた。

「この時期に見る氷も悪くはない」

男はそう呟きながら刀についた血を振り払う。男の後ろには身体に氷を纏う少年『日番谷 冬獅郎』が倒れていた。そしてその側にはその光景を達観する青年『市丸ギン』の姿があった。

男は辺りの景色を一望すると市丸に呼びかける。

「さてそろそろ行くでしょう。『彼』が来る前に」

その時だった。

「誰が来る前だったテ？」

入り口から声が聞こえた。男と市丸はその方向へと目を向ける。そこには十二番隊隊長であるマユリと四番隊隊長である卯乃花。そしてそれぞれの副隊長であるネムと勇音と雑用係である千弘が立っていた。

「やはり私の推理は正しかったようだ。『死体の人形』がここにあるなら必ず君もここにいると思ったヨ。」

――藍染――

その男は：否。『藍染 惣右介』は不敵な笑みを浮かべた。

「：フツ：よく分かったね：まさかこんなにも早く見つかるとは思っていないかった。一番会いたくもない人物も一緒とは」

「え？随分と嫌われてるんですね局長」

「私ではなくお前だヨ」

裏切りそしてブチギレ

「やあ隊長と副隊長の二人に園原君。よくここにいと分かかったね」

目の前に立っていた藍染は自身らに目を向けると不敵な笑みを浮かべる。それに対してマユリは表情を変える事なく答えた。

「死体の人形が奪われ、君が失踪してから薄々気付き始めていたさ。そして人形に付けている『発信機』が感じる場所から確信がついてネ。君は、人形を身代わりに安全な場所へと身を隠した」と

「まさか知らない間に発信機を付けられていたとは…これは一本取られたよ。だが、これ」は死体の人形ではない」

そう言い藍染は、手に持っていた『死体の人形』を見せる。突然と何の前触れもなく現れた死体の人形を見た勇音は驚きの声を上げた。

「な!?!いつからそこに!」

「〃いつから?今までずっと持っていたよ。ただ、君らには〃そう見せていなかった」だけだ。解くよ?」

そう言い藍染は解号を唱えた。

—— 砕けろ。鏡花水月 ——。

その言葉と共に死体の人形がガラスの様に砕け散ると一本の日本刀へと姿を変えた。

「これが僕の斬魄刀『鏡花水月』。その能力は『完全催眠』催眠を掛けた者の五感、視覚、嗅覚、聴覚を全て支配し、対象を別の物に認識させる事ができる。蠅を竜に見せる事も泥を花に見せる事も可能さ」

「ほう?あの人形から流れていた血もただ単に〃血液〃として認識していただけで本当はただの液体。だから血の性質も見られなかったのか」

「そんな…!!鏡花水月の能力は霧と水流の乱反射により敵を攪乱させ同士討ちにさせる能力の筈…副隊長を集めた際にもそのように説明

して見せていたじゃないですか!？」

勇音が異議を唱える中、マユリが答える。

「それさえも奴の能力なのだヨ。『そう見せていた』だけに過ぎないのさ」

「その通りだ。術に掛かる為の条件は始解の瞬間を見る事。つまり盲目の者には術は掛からない。即ち東仙要も私の部下だ」

「そんな…!!」

「やはりね。どうりで同時に失踪しておかしいと思っていたが、グルだった様だネ」

藍染の言葉に勇音は驚き、卯乃花は目を鋭くさせる。そしてマユリが納得すると、卯乃花は鋭い目を向けながら今回の騒動を巻き起こした目的を問う。

「…なぜこのような事を…? 貴方の目的は何なのですか?」

その質問に対して藍染は笑みを絶やさず答える。

「君達に教える義理はない。だが、それは『もうすぐ達成される』とだけ言っておこう」

藍染の言葉と共に側に立っていた市丸が袖から長い包帯の様な物を取り出した。

それは空中に飛び上がると意思を持っているかの様に唸り出し、藍染と市丸の辺りに巻きついていく。

「そろそろ時間だ。君達とはもう会う事はないだろう」

—— さようなら

その一言と共に藍染と市丸の姿が布に包まれていった。

その時だった。

「何帰ろうとしてるんですか?」

「!?!」

その言葉が辺りにこだますと共に藍染達を取り囲んでいた布が一瞬にして微塵切りにされた。

布に包まれていた二人の姿が再び露わになると共に斬り刻まれた布は床に落ちていく。

「ほう? これすらも斬り刻むとは…やはり君の抜刀術だけでなく斬魄刀の切れ味も素晴らしいものだね」

「いや、褒めなくてもいいので。こんな事したんですからまず謝るのが先ですよね?」

「どこからそんな力が湧き上がるのか、そしてどうやって手に入れたのか気になって仕方がない」

「ほう? それは私も同意見だ」

「いや気にならなくていいですから。あと局長は黙ってて下さい」

千弘の全身から発せられる巨大な殺気はこの場を包み込み空気を震わせていた。それによって辺りの建物から木が割れる音が聞こえ始める。その殺気に市丸は無意識に腰にかけてある斬魄刀へと手を掛けていた。

だが、即座に藍染はそれを制止させる。

「そうだ。去る前に君に一つ提案をしよう」

「そういうのいいので話ねじ曲げるのやめてもらっていいですか?」

「私と共に来ないかい? 君のその力を存分に発揮できる場を設けると共に一生分の富と食を約束しよう」

そう言い藍染は手を差し出した。その手を取るか否か提案を持ちかけて来たのだ。本来、金に汚い上に食事にも気を使う彼ならば間違いない手を取るだろう。

だが

「だくから……………」

今は全く違う。自身の発言を無視された上、藍染達の後ろで倒れている日番谷と雛森を見た事でそれが起爆剤となり彼の頭の中にある糸が一本切れてしまったのだった。

「謝るのが先だと言っているでしょうが…ッ！！！！」

「…！！！！」

その瞬間 この場だけでなく尸魂界全土を巨大な殺気と霊圧が包み込んだ。その霊圧は空気を振動させるどころか割れ掛けている木面や氷を音を立てながら壊す程の威力であり根本である千弘の足元にある板は粉々に壊れていた。

それを後ろで受けていた四人のうち、勇音は全身を卯乃花は脚を振るわせていた。

「流石にこの霊圧は予想外だ。君は本当に『死神』なのかい？」

「知りませんよそんな事。取り敢えず貴方達をとっ捕まえて局長共々、特性下剤の刑に処します。1ヶ月間トイレに籠る覚悟ぐらいしてもらいますよ？」

「なぜ私まで入っているのかネ!？」

だが、千弘の殺気を向けられても尚藍染と市丸の顔からは余裕が消える事はなかった。

その様子を見ていたマユリは驚くと共に興味を抱き尋ねる。

「それよりもまさか千弘の殺気と霊圧を直に受けても余裕を崩さないとは…君達をそこまで余裕にさせるとはそれ程の“何か”があると
いう事かネ…?できたら教えてほしいものだ」

「君に教える義理はないよ涅隊長。だが、“それ”は私達のすぐ近くにありもうすぐ手に入る…とだけ言っておこう」

「おや残念。だがまあ君達は本当に覚悟をしておいた方がいいよ?千弘を怒らせてしまったのだからねえ」

マユリが笑みを浮かべたその瞬間

藍染の側に千弘が現れ藍染の身体に向けて裏拳を振り回し脇腹へと打ち込んだ。

それによつて藍染の身体がその場から吹き飛ばされ、壁へ巨大な破壊音を轟かせながら叩きつけられた。

「謝るのが先だと何弁言つたら分かるのですか？それに倒れているのが誰かと思えば獅郎君とお雛さんじゃないですか。まさか貴方がやったのですか？なら、もう下剤だけじゃ済ませませんよ。あと市丸隊長は引つ込んでください」

「まだ手を掛けてすらないのに気づくなんて…アンタの感知能力どうなってんの…」

その言葉と共に千弘は目も向けずに刀へと手を掛ける動作へと移行しようとした市丸へと忠告する。その感知能力に市丸は驚きながら冷や汗を流していた。

「おい。原型はなるべく留めておいてくれたまえ。後の解剖に差しつかえる」

「ええ勿論。でなきや生き地獄を味わわせられませんからね。一回殴り飛ばした程度では済ましませんよ」

「いやいや…パンチだけでこの威力って…バケモノですよ…」

マユリの指示に千弘は拳を鳴らしながら答える。その傍らでは、市丸は冷や汗を流しながらもその笑みを垂らす事なくある事を添えた。

「それよりも大丈夫？今のが『本物の藍染隊長』だったんか？」

「え？」

その言葉を聞いた千弘は驚きながら吹き飛ばした箇所を向ける。

その時だった。

『砕ける。鏡花水月』

「「:?!」」

その言葉が入り口から聞こえた。その瞬間 辺りの景色が横にいた市丸ごとガラスのように砕け散り、見れば目の前には誰もおらず、先程の藍染が吹き飛ばされた箇所には何もなかった。

「こういう能力さ。分かったかい？園原君」

その言葉が聞こえた時にはもう遅かった。声が聞こえた入り口付近に振り向くとそこには二人の姿があったものの、既に先程の布が再び辺りを包み込んでいた。

彼は一度解いた鏡花水月を再び発動していたのだ。

そして布が包み込む中、藍染は自身らへと目を向ける。

「今度こそさようなら。もう君達とは会う事はないだろう」

「:!!」

その言葉に一番近くに立っていたマユリ、卯乃花、ネム、勇音の内、ネムと勇音が捕縛すべく動き出そうとするもそれよりも早く二人の姿は虚空へと消えてしまった。

だが、千弘は諦める事は無かった。

「あんなに言って謝罪どころか返答無しとは…」

藍染に完全に揶揄われた事で騙された事に対する怒りではなく揶揄われた事に対する怒りが爆発してしまったのだ。

「絶対にぶっ飛ばあああす!!」

そこから即座に藍染の霊圧をその身で感知すると、その場から駆け出した。

「待て千弘！」

「待ちませんよ局長！アイツ一発ブン殴らないと気が済みません!!!」

◇◇◇◇◇

その場所から外へと出た千弘は藍染の気配をその場から遠くにあ

る双極の丘から感じ取った。

「(…距離数千…双極の丘ってどこか…)」

心の中で感じ取った霊圧の濃度から藍染の居場所を即座に特定するとその方向へと目を向け腰を低くし、一気に駆け出した。

「…!!」

凄まじいインターバルで足音を鳴り響かせながら千弘は廷内にある道を駆け抜けていく。

その時だった。

「…?」

誰かが道を隔てる壁に背中を預けながら倒れている姿を見つけた。それは市丸が所属する隊の副隊長である『吉良イズル』であった。

「吉良副隊長…?大丈夫ですか…?!」

即座に吉良に駆け寄る千弘。すると、吉良は瞑っていた目をゆつくりと開き、目を覚ます。

「園原く——ぐえ?!」

「喋れるなら大丈夫ですね。近くの詰所まで送ります」

目を覚ました吉良が喋ると、すぐさま首根っこを掴み背中に背負うと走り出した。

そんな中 頭の中に勇音の声が聞こえてくる。

『瀨霊廷内にいる全隊員及び旅禍の皆さん。こちらは四番隊副隊長の虎徹 勇音です…。これは四番隊隊長〔卯乃花烈〕と私〔虎徹勇音〕からの緊急伝心です…暫しの間 ご静聴願います…これからお伝えする事は全て真実です…』

鬼道を扱い皆へと先程の出来事を伝えようとしているのだ。

だが、それを聞いた千弘の額には青筋が浮かび上がり始める。

『五番隊隊長…藍染 惣右介は——』

「うるせえええええええええッ!!!」

「のわあ!?!どうしたんだいきなり!?!」

「今アイツの名前聞くだけでもムカつくんですよ!!あのインテリ眼鏡
!獅郎くんやお雛さんを斬っただけじゃ飽き足らず人の質問に一切
答えず格好ばつか付けて消えやがって!!」

「え…それは…ぐえ!?!」

詰所へと到着した千弘は吉良を即座に門の前に立っている見張りの
隊士へと吉良を預けた。

「すぐに治療をお願いします!」

「はあ!?!お前…一般の隊士がなに——うお!?!」

吉良を預けられた隊士が文句を言うよりも早く千弘は駆け出して
いき、突風を発生させる。

再び延内を駆け抜けていく千弘。そして、小さく見えていた双極の
丘が遂に巨大に見える程の距離にまでやってきた。

「…あそこです…か…ッ!!!」

語尾を力むと共に脚を踏み込むと千弘は跳躍する。その跳躍力は
瞬発力合わせて他の隊長を軽く凌駕しており、一瞬にして処刑場から
数十メートル下の地点から処刑場全体が見渡せる高度まで飛び上
がっていた。

そこには既に他の隊長達が集まっており藍染、市丸、東仙を包囲し
ていた。

それと共に空は割れており、中から仮面を被った謎の生物達が顔を
出し奇妙な呻き声をあげていた。

だが、千弘にとってそんな事はどうでも良い。

「…!!」

そこに向けて落下していく中、刀の柄へと手を掛ける。藍染を拘束
している二人の女性の内、褐色の肌を持つ女性と目が合うも意に介す
事なくそのまま藍染へ向けて突っ込んでいった。

「離れる碎蜂!!」

「…!?!」

褐色の肌を持つ女性は即座に碎蜂へ呼びかけ、二人は即座に藍染から離れた。その一方で藍染は千弘の霊圧を感じていないのか不思議そうに首を傾げると、褐色の女性が見ていた方向へと目を向けた。「ほう？」

向かってくる千弘を見た藍染は余裕の笑みを崩す事なくその場に直立していた。

「来てもらって申し訳ないんだが、もう迎えが来てしまつてね」

「何言ってるんですかこの腐れ眼鏡：ツ！！」

千弘があと少し。ほぼあと少しという所まで藍染へ迫り自身の間合いへと入った時であった。

空にある割れた空間から特殊な光が放たれ藍染と市丸、そして東仙を包み込んだ。

「…！！」

その光を見た千弘は刀から手を離し身体を回転させると藍染にスポットライトの様に当たる光に脚を突き出すと、三角飛びをし、着地をする。

「何ですかこれは…？」

千弘が疑問に思う中、ボロボロの姿で上半身を曝け出していた元柳斎が答えた。

「…反膜…大虚が同族を助けるために使うものじゃ…。あの光に包まれたが最後…内と外では完全に別の世界。即ち…今の藍染には触れる事ができぬ…！」

「成る程…本当に貴方の用意周到さには恐れ入りますよ」

そう言い千弘は光に包まれている藍染を睨みつける。その一方で光に包まれている藍染達はゆっくりと上昇していった。

すると 浮竹が駆け寄り上昇していく藍染に鋭い目を向けた。

「藍染…大虚とまで手を組んだと言う事か…!?何故そこまで…」

「高みを求めてだよ」

「…！完全に地に堕ちたか…!!」

「傲りが過ぎるぞ浮竹」

裏切りを確信した浮竹の言葉に対して藍染は声を強める。

「誰も彼も最初から天になど立っていない。君らも僕も。だが、そんな空白もすぐに終わる」

そう言いながら藍染は自身の眼鏡を取ると手で握り締めて粉々にすると共に髪に手を掛け後ろへと流した。

「これからは――」

――私が天に立つ――

眼鏡の奥にあったその目は先程までであった穏やかさが完全に消え去っており野望に燃える野心家の様な鋭い目付きへと変わっていた。

皆が驚きのあまり硬直している中、元柳斎の前に立っていた千弘が前に出た。

「随分な事を言いますね。天に立つ？何を根拠にそんな事を」

「いづれ分かるさ。手に入れた『崩玉』さえあればすぐに君など超えられる」

そう言い藍染は懐から結晶に包まれた一つの球体を取り出した。それを見た千弘は何も驚きもせず、ただ溜息を吐いた。

「はあ…超えるとかそんなのどうでもいいですけど、謝罪が無いようでしたので、私からせめてもの罰を受けてもらいましたよ。光があつてちよつとしか出来ませんでした」

「何を言っているんだい？君の剣は私へは届いていない。世迷言が過ぎるぞ」

「『届いていない？』ならもう一度自分の『髪』に手を当ててみて下さいよ」

「…はっ。」

藍染は崩玉を懐に入れると再び後ろへ流した髪へと手を当てる。

そこには髪の毛のサラサラとした感触ではなくまるで磨いた宝石の様な固みと若干、ザラザラとした感触があった。

「あ……あらあ……こんな事に……」

「……!？」

後ろに立っていた市丸の驚き様に藍染は釣られる様に驚くとようやく理解した。

「……」

だが、それでも取り乱す事なく再び冷静となると下に立ちながら此方を見つめている千弘へと目を向けた。

「覚えておけ園原千弘……!!君は必ず私がこの手で殺す……!!」

そう言い藍染は市丸達と共に空間の割れ目へと着地する。すると、ゆっくりと空間の裂け目が消えていった。

此方に向けて背を見せた際に見えたのは――

――頭頂部の髪だけが切り飛ばされ某キリスト教宣教師の様な髪型となっていた藍染の後ろ姿だった。

「似合ってますよ」

「黙れ!」

千弘の言葉に藍染が声を荒げた事を最後に空間の裂け目が消えた。

いつもの日常?・否

藍染が去った後。その場は大勢の救護班が駆けつけた。日番谷や雛森、そして吉良は勿論だが、なんと白哉まで重傷を負っていたらしい。

その他 多数の隊士達も治療所へ運ばれて、その日は深夜まで怪我人達の治療が続いていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして次の日。院内ではいつもの様な雰囲気に戻っていた。十二番隊隊舎から離れた十一番隊舎では旅禍の少年が一角と一本勝負を始めているらしい。

そんな中 千弘は今日も縁側にネムと共に座っていた。

だが、いつもと状況が違う。

「…ネムさん」

「何ですか?」

「離れて下さい」

千弘は縁側に座るネムの膝の上に抱き締められながら乗せられていた。なぜ、この様な絵面になってしまったのか。それはマユリの命令だからである。

藍染達による騒動が去ったその翌日に千弘は研究室へ雑用として赴こうとしたのだが、マユリが門前払いをしたのだ。

理由は彼曰く騒動は休暇の期間には入らないらしく、故にもう3日は研究室だけでなく隊長室の雑用には来るなどの事だ。

更にマユリは千弘がそれを忘れると考え、阻止するべくネムを派遣したのだ。

『絶対に奴をここに来させな』

その命令を受けたネムは実行するべく彼を拘束するかの様に抱き締めているのだ。

「マユリ様の命令ですのぞ」

「だからと言って密着しすぎです!緩めるだけでも!」

「ダメです」

千弘がネムの腕から出ようとするとネムは抱き締める力を更に強くさせていく。しかも何故か頬を紅潮させながら胸元に収まる千弘の頭を撫でていた。

「分かりましたから！行きませんから離して下さい！と言うか何で頭撫でてるんですか!?!」

「お気になさらず」

そう言いネムは赤ん坊をあやすかの様に頭を撫でていき、一向に離す様子を見せなかった。まるでネム自身が今の状況を望んでいるかの様に。

その時だった。どこからともなく1匹の地獄蝶が飛んできた。その地獄蝶は千弘のすぐそばの縁側に着地すると伝言を渡す。

『十二番隊隊士『園原 千弘』四隊隊舎まで来るように』

「え…?…何故急に…まあいいでしょう」

千弘は疑問に思いながらも立ち上がる。すると、ネムも立ち上がった。

「おろ?…どうしました?」

「四番隊隊舎へ行くのでしたら…私もお供いたします」

千弘が尋ねるとネムはゆっくりと両手を広げた。

「えつと…お供してくれるのはありがたいのですが…そのポーズは?」

「決まっています。抱っこです」

—————

四番隊隊舎へと到着した千弘。目の前には優しい笑みを浮かべながらお茶を淹れる卯ノ花と杖を構えながら相変わらず厳格な表情を浮かべている元柳斎の姿があった。

「急にどうしましたか山本御大。何か違反でもしましたっけ?」

「違う。今回呼び出しのは貴殿の今後についてじゃ」

「今後?」

元柳斎から発せられた言葉に千弘は首を傾げる。

「まあ座りなさい」

◆◆◆◆◆

千弘を座らせた元柳斎は卯ノ花が淹れた茶を飲む千弘をその鋭い眼光で見つめていた。

「……（やはり見たただけで感じるのう…完璧に一般の隊士程まで抑え込んでおるようじゃが…何という霊圧じゃ…）」

目の前で黙々と茶を飲む姿から感じるのは自身でさえも見た事がない巨大な霊力。1000年前に刃を交えた男よりも更に上にいく程だ。その大きさは例えるならば天に向けて聳え、屋上さえも見えない超巨大なビル。限界が見えなかった。

更に前回の藍染の裏切りの際に感じた超巨大な霊圧。正に千弘のものであったがああの時の霊圧は本当に規格外のものであった。仮にあの霊圧を発したまま現世へと赴いてしまえば確実に地鳴りが起こる程の影響を及ぼすだろう。

それを見据えた元柳斎は茶を飲み干すと改めて千弘へ目を向け話し始めた。

「藍染が去った今。お主の実力が公となるのも時間の問題じゃ。なればこそお主を隊士ではなく隊長として迎え入れ、隊士達の士気の底上げ、そして戦力の向上を図るべきじゃと思つてのう」

「はあ…」

そう言い元柳斎は細めていた目を開き鋭い眼光と人差し指を向ける。

「今日付でお主を空席となった五番隊の隊長に任命しようと思う」
「…え？」

元柳斎の突然の切り出しに千弘は湯呑みを口に運ぶ手を止めた。そしてゆつくりと湯呑みを下げると確かめるかのように元柳斎へと目を向ける。

「私が隊長ですか？」

「うむ」

「推薦も一対一の斬り合いも何もかも無しですか？」

「左様」

元柳斎が頷くと千弘は茶を飲み干しすぐに答えを出した。

「お断りします」

「何故じゃ…?」

予想していた答えなのか、元柳斎は取り乱しもせず理由を問うと千弘は湯呑みを置き答えた。

「そもそも私には隊長に成る程の器量はありませんし技術も統率力もない。私よりも相応しい方が必ず他にいます。仮に私に隊長と認められる程の力があつたとしても統率力が無ければ務まりません。故にお断りします」

「…」

千弘の何の迷いなき理由と淡々と答える姿勢に元柳斎は一瞬黙り込むとすぐさま指を向ける。

「よいか…?お主の実力は既に零番隊と同等。零番隊に入れないにしろ本来ならば十三番隊の隊長になつてもおかしくないのだぞ…!?分かつておるのか!?!」

元柳斎は何度も何度も。まるで釘を刺すかの様に言い放つ。

【零番隊】それは護廷十三隊とは別の組織であり、尸魂界の王【霊王】の住まう霊王宮にて住居を構える猛者たちの総称だ。一人一人が百万年続く尸魂界の歴史に置いて名を刻んだ者達であり、その戦力はたつた数人でありながらも護廷十三隊よりも上だと言われている。

「はい…!?!」

それに対して千弘は心外なのか目を細めながら首を傾げる。

「いい加減にしてください。貴方は私の強さを買い被りすぎです。確かに私は血の滲むような努力をし自慢できる程の剣術を手に入れました。ですが私が隊長?おかしすぎますよ!」

「ええ!?!お…お主はワシにも勝つたじゃろ…?」

「それは貴方が手加減したからでしょう!油断していた貴方に私が不意打ちをしたに他なりません!!」

「えええ!?!(油断もしていないし初めから本気だった!!技も何もかも発動する前に倒されたのだぞ…!?!此奴どれ程まで謙虚なのじゃ!?!)」

千弘の圧倒的すぎる謙虚さに元柳斎は全身から力が抜ける程まで驚くと共に引いてしまい、頭の中でこの後、どの様にして会話を続ければ良いのか分からなくなつていった。

故に横で生花を作ろうとしている卯ノ花へと目を向け尋ねる。

「どうすれば良いと思うかの…?」

「今のままでよろしいかと…」

卯ノ花から小声で尋ねられた彼女は冷静に笑みを浮かべながら耳打ちをする。

「総隊長のご意志も確かですが急に彼のような人が隊長になれば隊も隊で混乱するかと。隊の中では彼の力も知らない者が殆どですからね」

「そう言い卯乃花は元柳斎から千弘へと目を向けた。」

「千弘くん。今のままでよろしいのでしたら強要はしません。ですがもし私達が出撃する程の事態となりましたら共に前線で戦ってまいりますよ」

「そう言われた千弘は頭に手を置き、困り果てながら答えた。」

「微力な私でよろしければ…」

—————

それから元柳斎は茶を飲み干すと隊舎から出て行った。それに釣られて千弘も自身の隊舎へと戻ろうとした。

だが、それを卯ノ花は止めた。

「千弘くん。ここに座りなさい」

「そう言い卯ノ花は自身の膝下を指差す。」

「え?」

突然と膝に座ることを命令された千弘は首を傾げながらも卯乃花の膝下に腰を掛けた。すると、卯ノ花の手が腹に回り身体を抱き締められると共に頭を撫でられた。

「あの卯ノ花隊長。何をしているのですか?」

「見れば分かるでしょう。撫で回しているのですよ」

「は…はあ…」

それから千弘は十数分間に渡り卯ノ花に撫でられたらしい。

「また来てくださいね。お菓子もご用意しておきますから」

「分かりました」

卯ノ花から解放された千弘はそのまま彼女の部屋を出ると四番隊隊舎の出入り口へと歩いていった。その様子を後ろから見ていた卯

ノ花は薄らと不気味な笑みを浮かべる。

「(必ず来るのですよ…私を満たした最高の男よ…)」

その目は四番隊隊長である母性溢れる優しい目ではなく、血に飢えた獣の様な目”であった。

因みに千弘は帰り道にて勇音とも会い彼女からも撫で回された様だ。

◆◆◆◆◆

四番隊隊舎から出た千弘は背伸びをする。入り口の目の前にはネムが待つており千弘を見ると歩いてきた。

何故、彼女がここにいるのかというと、監視の為らしい。彼女にとつて監視とは24時間目を離さない&行く時は必ず同行というモノのようだ。

「お戻りになられましたね」

「ええ終わりましたよ。では帰りましょうかね」

「はい。では…」

千弘が答えるとネムは手を彼の脚に通してお姫様抱っこをする。それをされた千弘は複雑な表情を浮かべていた。

因みに四番隊隊舎に来る際もネムにこの様に抱かれながら送られており、見かけた乱菊や吉良からは大笑いされたらしい。最初は赤ん坊をあやす様な抱き方であったが、千弘が必死に懇願した結果、この様な形になったらしい。20センチ以上も身長が離れている為か、ネムが千弘を抱き上げると様になってしまっている。

「…抱き心地が良いですね」

「複雑なのでやめてください」

それからネムに抱き上げられた千弘は彼女と共に十二番隊隊舎へと戻った。ネムに抱えられる中、照りつける太陽が院内を照らしている光景が目に入ってきており、昨日の騒動があったにも関わらず、いつもの風景と雰囲気を目の前が溢れかえっていた。

そんな時だった。

「…ん？」

目の前から誰かが走ってくる姿が見えた。それはオレンジ色の短髪を持ち死神特有の装束を身に纏う一人の少年ともう一人はやや濃いオレンジ色の髪を持った少女であった。

それを見た千弘は驚きの声を上げる。なんとその少年は先日、瀨霊廷内を騒がせていた旅禍だった。

「ん!? あ…アンタは!？」

「おや、いつぞやの旅禍の少年ではありません…あら？」

「すまん! 今急いでるからまた今度な!」

此度の中心人物であり、尸魂界の恩人と記された少年と少女は自身の状況にツツコミもせずあつという間に横を通り過ぎて走り去っていった。

「彼はまだいたのですね」

「そのようですね。そうだ、帰りにアイスでも買って帰りましょうか」

旅禍の少年達の名前も聞かずに見送り帰路へとついた二人は軽く談笑しながら廷の道を歩いていった。

「では私は小豆バーを要求します」

「私が奢りですか…まあ良いですよ。ネムさんにはいつもお世話になってますから」

瀨霊廷に再び平穏な日々が戻ってきたのであった。

だが、それも束の間である。否、寧ろ平穏が去ったと言うべきだろう。藍染が護廷十三隊を去った翌日から尸魂界の中でも化け物の住まいとされる「虚圏」にて多数の強大な「何か」が不穏な動きを起こし始めていた。

久しぶりのお仕事日和。そして庭にある花は…

瀨靈廷における騒動より数日後。

技術開発局は相変わらず研究の毎日であり、化学者が実験室へと籠っていた。その一方で、マユリは書類の整理があつた為に隊舎の執務室にて書類の執筆を行っていた。

隊長としての自覚があるのか、こういう作業は真面目に行う様だ。すると

「局長くコーヒーとパンケーキが入りましたよ」

「!?」

聴き慣れた声と共に案の定、アイツが扉を開けながら入ってきた。しかもいつもと格好が違い頭には三角頭巾。そして身体に割烹着という手に持つ物との関連性が凄まじく希薄なものを身につけていた。「……おい。今回は本当に大丈夫なんだろうネ……？ 仏の顔も三度というが…私の顔には二度はないヨ……？」

「ご心配なさらず。ちゃんと習ってきましたよ」

「そうか。なら安心だ」

疑いながらもマユリはコーヒーを啜る。

それから千弘はそのまま技術開発局にも向かい、副局長や助手の皆にもホットケーキやコーヒーを振る舞った。

—————

—————

———

千弘の仕事は研究室の書類や器具の整理だけではない。その他の雑用全般である。

「ホイホイホイホイ」

千弘は現在、割烹着と三角頭巾を被りながら十二番隊隊舎の雑巾掛けを行っていた。板の面に添いながら水で濡らした雑巾を掛けていき、更に土足で上がり埃や土が付いた箇所を次々と拭き取っていく。

「スイスイスイくササササ……！」

雑巾を掛け終わった次は庭の掃除だ。箒を用いて次々と落ち葉などを掃除していく。

そんな時だった。

「よう!!!園原千弘おおおお!!!」

猛々しい雄叫びと共に空中からいつものように更木が舞い降りてくる。それを気づいた千弘は箒を投げ捨てると腰に常備していた刀へと手を掛ける。

その瞬間

「ぐう!?!」

いつものように斬りかかってきた更木が巨大な金属音と共に弾き飛ばされた。

だが、今日は違う。

「ハッハアア!!!耐えたぜコラア!!!」

「あら」

気分が最高潮に達した叫びと共に弾き飛ばされた更木は空中で体勢を持ち直すと共に千弘に向けた刀を再び振りかざした。

それに対して千弘は予想はしていたのか、驚く素振りを見せながらもその場で直立する。

すると今度は更木の身体ではなく刀を握る腕全体へと衝撃が伝わり更木の肉体を刺激する。

「ぐう!?!」

それによって斬魄刀は更木の手から離れると地面へと突き刺さった。斬魄刀が手から離れてしまった更木はそこで動きを止めると舌打ちをしてしまった。

「ケツ。今日もダメだったか。防いだのに慢心しちゃったぜ」

「そうですか?速度、体勢、力。全てにおいて今まで以上だったのです
が」

「お前に当てられなきや意味ねえんだよつと」

そう言い更木は悔しみながらも笑みを浮かべると突き刺さった斬魄刀を抜き肩へ掛ける。

「そんじゃあ邪魔したな。偶にはウチの隊舎にも顔出せよ。茶ぐれえ出すからよ」

「ええ。近いうちにまた〜」

手を上げながら去っていく更木に手を振りながら見送った千弘は辺りを見渡した。

「…」

土埃が付着した縁側。集めた葉っぱが散乱する敷地。それを見た千弘はため息をついた。

「またやり直さなきゃ…」

それから掃除を終えた千弘は軽く息を吐いた。

「ふう〜。終わった〜」

辺りに散らばっていた落ち葉もビニール袋に纏められ、隊舎に付着した土埃も綺麗に拭き取られ。全ての掃除を終えられた事で十二番隊舎はピカピカとなった。

そんな時だった。千弘の背後からネムが姿を現した。

「千弘さん。少しよろしいですか？」

「あ、ネムさんどうも」

ネムの姿を見た千弘は振り返ると笑みを浮かべながら手をあげる。そんな中でネムはある事を切り出した。

「今日は『あの花』へ水をあげる日かと」

「あ〜！確か今日でしたね！では行きましようか！」

◇◇◇◇◇◇

「はあ…十二番隊への書類を届けるの…ちよつと怖いなあ…」

十二番隊隊舎へと続く道のりを手に書類を抱えながら進む影があった。それは四番隊の副隊長である虎徹勇音である。彼女は十二番隊にあまり良い印象を抱いていないのだ。その理由が殆どマユリの風貌と性格の所為なのだが。

その後、マユリへと書類を届けた勇音はカタカタとしながら執務室を出ると回廊を歩いていった。

「ん？ああ。これは最近、私が品種改良して生み出した『秋刀魚草』です」

「さ…ササササ…ささ…秋刀魚草!？」

「はい。最初は金魚にしようと思ってたんですが…金魚だと怒られそうなのがしたのでネムさんの大好物な秋刀魚にしました」

「素晴らしいです千弘さん…!」

「は…はあ」

千弘の説明を聞いた勇音は啞然としながら秋刀魚へと目を向ける。その目には光が宿っておらず、何も感情のないように口をパクパクとさせておりとても不気味な物であった。

「因みに最大で5メートルにもなるんですよ。これで食費も節約できますし。あ、そうだ。記念に1匹どうですか？」

そう言い千弘は植木鉢で育てられている手頃な大きさの秋刀魚草を持ち上げると勇音へと差し出した。

「え…いやいやそんな大丈夫ですよ！（食費!?なにそれ!?食べられるのこれ!?）」

「因みに良い声で『泣き』ますよ」

「泣く!?泣くんですかこれ!?いやいやいいですって本当に!!」

流星に初めて見る得体の知れない物は受け取れないのか、勇音は丁重に断った。それに対して千弘は「そうですか?」と言うと再び植木鉢を置いた。

「あ、5メートルに育ったら解体ショーをやるので勇音副隊長もよかったですか?」

「え…ええ!?いやいいですよ別に!千弘さんが育てたんですから千弘さんが食べないと!では!」

「あ」

千弘が向き直つてくると勇音は即座に手を振り丁重に断ると即座に十二番隊隊舎を立ち去った。

その後 得体の知れない物を見た勇音は頭の中に残ったのか十二

番隊に対する印象が更に悪くなってしまったらしい。
「十二番隊…怖い…」

番外編（千年血戦編前）
番外く斬魄刀異聞録 その1

斬魄刀。それは護廷十三隊全ての死神が持つ業務用具。それは時には人を斬る武器となるが、迷いし魂を尸魂界へと導く神具ともなる。

これは藍染が護廷隊を裏切り虚圈へと去ってからしばらく経った尸魂界で起きたとある騒動の話である。

――

藍染が虚圈へと去って数日。突如として各地で斬魄刀の不備を訴える死神達が相次いでいた。なんと卍解と始解が出来なくなってしまうのだ。その事態はその日の終わり頃には既に瀨霊廷中に渡っており、もはや知らぬ者はおらず、大事へと発展していた。

「いやあ…それにしてもおかしいですね。斬魄刀がいきなり故障だなんて」

「はい…今までこんな事ありませんでしたからね。マユリ様もお困りになられております」

「むしろ喜ぶんじゃないですかね？」

いつものように技術開発局にて皆にコーヒーを配っていた千弘も、その事態を耳にしていた。彼の言葉にネムは頷くと共に千弘の持つ斬魄刀へと目を向けた。

「千弘さんの斬魄刀はどうなのですか？」

「え？あゝ私は元から卍解どころか始解すら出来ない落ちこぼれですから、特に何もありませんよ」

そう言い千弘は苦笑しながら頭を掻く。まあ剣術だけで戦ってきた千弘には今更 始解や卍解など必要ないだろう。

その後 総隊長である元柳斎から全隊長、副隊長にて双極の丘への集合命令が出されたのであった。

そんな中、千弘もネムの警護の為に同行しようとするが、それをマユリが止める。

「お前はここに残れ。ただし、腕のブレスレッドが鳴つたらすぐにくるんだヨ」

「了解です」

千弘はマユリから命令されると、頷き、その場に残る事に決めるのであった。

—————

—————

↓

マユリ達が向かってからおおよそ数分。

千弘は暇であった為にネム達を出迎えるべく調理場にてお手製のどら焼きを作り待機していた。だが、いくら待ってもネムとマユリが帰ってくる気配は無かった。(たった数分なのに)

「遅いなく……ん？」

そんな中、どら焼きを食べていた千弘はマユリの実験室を見る。

酷く散らかっており、机には実験の記録が記された用紙が散らばっている有り様であった。

「…まあ、たまにはこういうのも悪くはないか」

そう言い千弘は周辺の散らかっているものを次々と分類しながらまとめて置いていった。千弘も十二番隊に配属される中で知識も習得してきたためにどの記録がどれに関連付けられているのかは理解していた。それによって片付けは意外とスムーズに進んでいった。

それからしばらくして

あれほど散らかっていたマユリの研究室は見事に整理整頓された。掃除を終えた千弘は茶を入れて一息つくつと、まだ時間があるために今日分の報告書もその場で書き終えた。

「ふう〜。終わった〜」

目の前の報告書を再度確認し、誤字脱字が無い事も確認し終えるところ、その場から立ち上がり、マユリから待機命令が出されているにも関わらず、外出の支度をした。

「よぉ〜し。待機命令が出てたけどハンコ貰いにいきますか!」

それから千弘は準備を終えると、早めに職務を終わらせて気が楽になったのか、ルンルンとステップを踏みながら技術開発局を後にした。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

「ふんふんふ〜ん♪ハンコ終わったらネムさんとお茶しよ〜つと♪」

自身が尊敬する上司であるネムとお菓子を食べながら会話をする光景を思い浮かべながらルンルンと夜の澁霊廷を歩いていった。

その時であった。

「ふんふんふ〜」

ドガアアアアアアアアッ

!!!!!!!

突如としてその場が大爆発し、千弘と彼が一生懸命書いた報告書が爆炎の中に飲み込まれてしまった。

その後、爆心地から巻き上がった黒い煙の中から黒焦げとなった報告書の欠片が飛び出し、上昇気流によって空へと舞い上がっていったという~~~~~。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その一方で隊長達が集められた双極の丘では 更木とやちる以外の集められた隊長達は謎の人物と会敵していた。突如として現れたフェザーコートを身に纏う謎の青年。死覇装でもないその服装から死神ではない事は確かだ。

そんな怪しい青年の一言を聞いた粕村は彼を捕えるべく卍解するが、それは発動したと同時に粕村へと襲い掛かった。

そんな粕村に続き、日番谷と碎蜂も斬魄刀を引き抜き解号を唱えるものの、斬魄刀が答える事はなかった。

続け様に恋次、雛森、一角、松本も解号を唱えるが、やはり斬魄刀が答えることはなかった。

「な…!?なんでだ!?斬魄刀から霊圧が感じられねえ…!!」

「な…:…:…:…:…:!?」

「侘助!おい!」

突然の事態を飲み込まず恋次、雛森、吉良は何度も斬魄刀へと呼び掛けるが、応える事はなかった。

「ほうほう。確かに霊圧が無くなっているネ。どうなっているんだい?」

その様子を同じく観察しながら見ていたマユリは見たこともない現象に興奮しながら目の前の青年へと目を向けた。

「簡単な事さ」

対してその青年は笑みを浮かべながら答えた。

「君達の斬魄刀は君達と共にない…。私が君達死神共から解放したんだ」

「な…:…:…:…:…:!?」

青年の言葉に、倒れた雀部を介抱していた勇音は信じられないのか瞳を震わせる。

すると その青年の右目が黒く染まると共に赤い血が流れ始める。それと同時に青年が腕を振り翳した時であった。

!!!

背後に見える瀨霊廷の数箇所が爆発した。

「[[[[[[:]]]]]]」

突如として起きた爆発に全員は驚き、武器を構えていた恋次は目の前の青年を睨んだ。

「テメエ…何しやがった!？」

「フツ…私ではない。これは――」

君達の斬魄刀のした事さ。斬魄刀は君らの支配から解き放たれのだ」

その一言は更に皆を戦慄させる。その表情を待っていたかのように青年は空を見上げながら不気味な笑い声を上げる。

「これは…ほんの挨拶だ。我が同志の力を…君達に理解してもらおうためなの」

そして 笑い声を止めた青年は再び皆へと鋭い瞳を向けると目から流れた血を拭き取り、煙が巻き上がり大混乱へと陥る瀨霊廷へと目を向けて手を広げた。

「そしてこれが…君たちが自分の物と思っていた…斬魄刀の真の姿だ!!!」

その瞬間 瀨霊廷から次々と何かが飛び立ち、その上空へと現れた。

全身から毛が生えた女性や着物を着た女性。

それだけでない。

皆の背後から次々と謎の人物達が姿を現し、青年の方へと向けて歩いていく。

刀である斬魄刀はその青年によって【具現化】してしまったのだ。

「……貴様……何者だ……？」

その状況に白哉は、彼らを従えるかのように立つ青年を睨んだ。それを聞いた青年は自身の名を口にする。

「我が名は『村正』。死神による斬魄刀の支配は今宵……終わった。これからは……我ら斬魄刀が死神を支配する……!!」

その言葉と共に村正と名乗った青年の手に刀が現れた。村正がその刀を地面へと突き刺した瞬間に地面に青い炎が迸り、その場を崩壊させたのであった。

「……………」  
ところ変わって爆発が起きた場所では――。

「報告書が……せつかく書いた報告書があああ!!うわあああん!!」

死覇装だけが所々に焼けているものの、身体は無傷の千弘が、黒焦げとなり、散っていった報告書を握り締めながら大泣きしていた。

その時であった。

周辺の建物が再び爆発し、炎が舞い上がった。

「……………」

その光景を目にした千弘は涙を拭き取ると共に、何者かの霊圧を感じ取り、背後へと目を向ける。

「ハッハー!!どこへ逃げた隊長連中!!俺が相手になってやるツ!!」

そこには燃え盛る景色を屋根に乗りながら周囲を見渡し、薙刀を振り回す一角の斬魄刀『鬼灯丸』の姿があった。

彼の斬魄刀であるとは知らずに、その姿を見ると、千弘はゆっくと立ち上がる。

「……貴方が……私の報告書を焼いたのですか……？」

「ハハハッ!!……んん?なんだ?こんなガキ……まあいいか。恨みはねえが死んで――――ぼがはあ!」

その瞬間 千弘の姿が鬼灯丸の前に現れると腹へ向けて拳を突き出した。それによつて、放たれた拳は深く突き刺さると鬼灯丸の巨体を何十軒もの建物を突き抜けながら吹っ飛ばしていったのであった。

「……」

鬼灯丸を吹っ飛ばした千弘は周辺で暴れるもう1人の人物へと目を向ける。そこには和服に身を包みながら周囲に火の玉を投げつける、雛森の斬魄刀である『飛梅』の姿があった。

「……とりあえず…全員とつ捕まえて土下座してもらいましょうか…」

そう言い千弘はその場から瀨霊廷全域に感覚領域を広め、突如として現れた異質な霊圧全てを感じ取り位置を把握すると飛び出したのであった。

## 虚圏動乱編

現地へと向かいます。 謎の男との交戦

それから日が経ち、旅禍達の騒ぎによる廷内の補修も完全に終え瀨  
靈廷にはいつもの日常が戻り始めた。

だが、そんな日も束の間だ。現世にて白い装束に身を纏った謎の男  
達が現れたらしい。その者達の靈力は凄まじく、一般の死神を凌駕し  
隊長格に匹敵する者ですら太刀打ちできなかった様だ。

まあそんな事など “彼” には関係ないが。

◇◇◇◇◇

そんなある日の事だった。

「ふんふんふん♪味見味見♪」

「…」

千弘は十二番隊隊舎の庭にて囲炉裏を置き秋刀魚を焼いていた。  
その秋刀魚は見る限り品種改良させた秋刀魚草の花の部分であり、黒  
い煙を上げながら全身から香ばしい香りとアツサリとした脂が滴り  
落ちていた。

そしてその傍らでは相変わらず風に煽られながら揺れる秋刀魚草  
があった。特に地面に直接植えられている個体は以前よりも大きき  
が増しており最大サイズである3メートルを越していた。

「千弘さん…そろそろ焼けたかと」

「その様ですね！それにこちらも良い感じに育って来ていますよ。こ  
れなら数ヶ月後には5メートルにいきそうです！」

「はい…楽しみです…」

千弘の言葉に頷いたネムの手がギュツと千弘の手を握った。

「あら？どうしました？」

「いえ…何でもありません…」

手を掴むネムの頬は紅くなっていた。それを千弘は不思議そうに



見つめているとネムは即座に顔を逸らす。

すると

「おい。こんな真つ昼間に庭で何をやっているのかネ。匂いに釣られてしまったではないカ」

近くの回廊の奥から一枚の手紙を手に持ちながらマユリが歩いてきた。

「あ、局長。食べます？良い感じに焼けてますよ」

「後でもらおう。それよりも…ちよつと君に急用を頼みたい」

「急用？」

「ああ。現世視察に行つてきてもらいたいんだヨ」

そう言いマユリは手に持っていた手紙を差し出したそれを受け取った千弘は内容も見ずにあつさり承諾する。

「現世視察？良いですよ」

千弘はマユリから受け取った手紙を開いてみる。そこには内容と行くべき場所が記されていた。

「空座町で素材の採取と特定の場所の調査…ですね。分かりました」

「因みにネムも同伴だ」

それから指令を受けた千弘はネムと共に現世へと向かった。因みに千弘が去った後にマユリがホツと胸を撫で下ろしたのは別の話である。

○○○○

現世視察。それは死神に課された責務の一つである。死神の仕事はまず悪霊や地縛霊を成敗し本来帰るべき場所へと帰らせる即ち尸魂界へと向かわせる事ともう一つは恨みが募り変形した化け物【虚】の討伐である。

【虚】とは白い骨格の様な装甲を身に纏う化け物であり人間や死神達を襲う。だがその【虚】は元は人間の悲しき怨念の集まった者。それを斬り本来帰るべき場所へと向かわせる事も重要な責務なのである。

現世視察とは即ち尸魂界の死神達が現世へと赴き調査を行うという事なのだ。

そしてそれとは別に現世にて死神と同じ力を持ちながらも死神ではなく、責務をこなす者がいた。その者を『死神代行者』と呼ぶ。死神代行とは文字通り死神の代わりであり現世にて生活しながら虚や悪霊を退治する事だ。

その代行者とは前回の尸魂界を騒がせた旅禍の一人であり、オレンジ色の髪を持つ青年であった。名を『黒崎一護』

その青年である一護は現在、窮地へ立たされていた。

「はあ…はあ…はあ…!!」

「おい。冗談だろ死神い？」

肺に不足していた空気を必死で補給するかの様に小刻みで激しく呼吸する一護。目の前に立っているのは白い袴に肩と腕を包み込む程度の白い上着を身に纏う水色の髪の男であった。

一護は斬魄刀の切り札『卍解』を使用し現在の實力は隊長である朽木白哉に匹敵する力を手に入れていた。

そんな彼が全身がボロボロで満身創痍の状態であり、相手側は傷一つついていなかった。

その男は耳の穴に小指を入れながら気だるそうに一護を睨みつける。

「俺はまだ刀すら抜いてねえんだぜえ？なのにそつちだけ息切らしやがってよお。ずりいだろ」

「ぐ…!!」

この男の身体能力、霊圧が隊長達と比べて明らかに桁違いだったのだ。卍解の状態であるにも関わらず刀が身体を刺すどころか切り傷さえも与えられない上に相手の蹴り数発だけでこの有様である。

「ウルキオラの野郎が何で始末しなかったのか不思議で仕方ねえが、まあいい。そろそろ決着といかせてもらおうぜ」

その言葉とともに水色の髪を持つ男の脚が動きゆつくりと此方に向かってくる。

一護は咄嗟に考えた。どうするべきか。どう巻き返すか。いや、コイツをどう追い返すか。

「(くそ…!!)」

何の案も浮かばず下唇を噛み締めた。

その時だった。

ドドドド…!!

「……ん? 何だ…?」

突然と後方から激しく砂埃を上げながら何かに向かってきていた。その音を耳にした水色の髪の男は振り向き、一護も目を凝らしながらよく見つめた。

敵か? はたまた味方か?

『さくんまさんま! 秋刀魚で秋刀魚! 夕飯秋刀魚! 秋刀魚のリズムに乗っちゃって♪』

「な…なんだありやあああ!?!」

なんとそこには一人の小柄な少年が独特な音楽を大爆音で流すと共にリヤカーを引きながら走っている姿があった。しかもその荷車の後ろにはそれを手伝うかの様に押している女性の姿があった。

そしてその荷車はスピードを落とすどころか更に加速させながら此方へと向かってくる。

「到着ですよネムさくん」

「はい」

「なあ?! おい来るな! 止ま——ごはああ!?!」

そのまま水色の髪の男は荷車を引く少年によって空中へと吹き飛ばされた。

「到着」

その言葉と共に男を吹き飛ばした少年はその場で止まった。その

様子を一護は啞然としながら見つめていた。

その一方で空中へと吹き飛ばされた男は口元を拭いながら自身を吹き飛ばした相手へと鋭い目を向けた。

「クソがあ……何者だあテメエ!!!」

「え!?!誰かいるのお:!!?」

「テメエだテメエ!!!」

「ああ、私ですか」

男に指名された少年はその場で後ろの女性とクルクルと回転し始めながら名を名乗り始めた。

「私の名は護廷十三隊 第十二番隊所属。雑用兼技術開発局生物開発

課『園原 千弘』!」

「同じく十二番隊副隊長兼園原千弘さんのお世話係 涅ネム」

「何だそのポーズ!?!初めて見るけど無性に腹立ってきやがる:!!!」

その言葉と共に少年と女性は月夜に現れ月に代わってお仕置きする女性戦士の決めポーズをすると男にアツサリと近づき秋刀魚の身体から草が伸びている謎の植物【秋刀魚草】を差し出す。

「此方、秋刀魚草です。記念にどうぞ」

「誰がんな得体の知れないモン貰うか!!いらねえわ!」

「え〜美味しいのに」

男は差し出された手を突き飛ばし現れた千弘とネムへと鋭い目を向けた。その一方でネムは無表情で直立し千弘は男が突き飛ばした秋刀魚草をキャッチすると屋台へと戻した。

「それよりも雑用だあ?副隊長ならともかく何で雑用の雑魚がここに来て——「月に代わってお仕置きよ!!」「ッこはあ?」

「!?!」

その瞬間 男の腹へ千弘の拳が突き刺さった。それによって男の身体はゆっくりとスローモーションでくの字へと曲がっていき、そして再び空中へと吹き飛ばされていった。

「嘘……だろ……!?!」

一護は目を疑った。卍解した自身ですらも傷一つ付けられなかった相手をあの千弘という少年は斬魄刀を使うどころか拳だけでダ

メージを与えていたのだ。

一方で空中に吹き飛ばされた男は即座に体制を立て直すと少年を睨みつけた。

「テメエ…やりやがったなコラア!!! 明らかに隊長格の奴じゃねえかあ!!!」

そして男は空中を蹴ると千弘へと向かっていく。それに対して千弘はやれやれと首を横に振った。

「私が隊長格？何を言っているのやら」

水色の男が吐き出す中、千弘は屋台の中からスリッパを取り出す。

「私が隊長格ならば…他の皆さんは総隊長です」

「よッ!!!」

『奥義 スリッパでスパアアンツ!!!』

「がへえ!？」

「スリッパ!？」

突然と手に取ったスリッパを持った少年は一瞬で向かってくる水色の男の前に現れると頬へ向けスリッパを叩きつけた。それによって男は口から唾を吐き出すと共にまたもや空中へと吹き飛ばされていった。

そして吹き飛ばされた男は再び体制を立て直すとスリッパで叩かれた箇所を拭いた。

「…!!」

その手に付いていたのはまさかの「血」であった。更に身体全域に巡る衝撃。自身を吹き飛ばした少年は明らかに対峙した死神とは「別物」であると認識した。

「(コイツ…殴った時もそうだが弱え霊圧とは別に何つう力だよ…!! あのオレンジ色の奴とは桁違いじゃねえか…!!)」

それを見た男は目を大きく見開くと共に毛細血管が湧き上がる程まで血走らせた。

「ふざけんな…!!こんなガキに…!!」

「ガキではありません。園原千弘です。それよりも貴方のお名前は？」

男が現実を否定する中 目の前に自身をスリッパで吹き飛ばした千弘が現れた。

「園原千弘…は…!!」

再びその名を聞いた瞬間に男の中の脳内で “ある男” から聞かされた話を思い出した。

『君達に言っておく。園原千弘という男とはどんな事があっても刃を交える事は勧めない。逃亡を優先した方がいい』

自身に数字を与えたあの男。独特な髪型をしながらも巨大な強さで自身らを束ねるあの男が警戒する程の人物がこの少年だったのだ。

「テメエが…藍染が警戒してた…!!」

「あのインテリ眼鏡ですか？まだ生きてたのか…まあいいや。その前に貴方のお名前を…」

「そうかあ！テメエか！だったら手加減はいらねえなあ!!こつからは帰刃で——ペふう!!」

刹那。刀を抜こうとした男の目の前に一瞬にして千弘が迫り頬に平手打ちをした。

平手打ちをした千弘は額に青筋を浮かべると共に男の胸元を掴み出すと反対側の手を構えた。

「人にどうこう言う前に名を名乗るのが常識でしょうがアアアアアアアアア!!!」

ベシベシベシベシベシベシベシベシ

「ぶへええええええええええ!!!」

「……」

水色の髪の方が千弘に胸元を掴まれ次々と顔面にビンタを打ち込まれ頬を腫れ上がらせていく。

「…何だこの状況…」

その光景を倒れていた一護は啞然としながら屋台にいたネムと共に見つめていた。

「さあ名前を言いなさい!!!」

「せ…第六エスパ——ぶべえらああ!?!」

「ふざけてないでさつさと言いなさい!!!」

べしべしべしべしべしべしべしべしべし…ツ!!!

## グリムジョーの災難

あれからしばらくして。千弘のビンタによって顔面がフグのようにパンパンと腫れ上がった男は膝をつきながら荒い呼吸をしていた。

「はあ…はあ…はあ…!!」

「成る程。グリムジョーですか。勢いのある良い名前ですね」

相手から名前を聞いた千弘は顎に手を当てながらフムフムと頷いた。その一方でグリムジョーの全身は何ともないが顔だけは酷く腫れや痣が目立っていた。その理由は簡単だ。何度も何度も名を名乗ろうとしてもその度に千弘にビンタを喰らい妨害されていたからだ。

かれこれ同じ事を30回。それを経てようやく彼は自身の名を名乗る事に成功したのだ。それによってビンタは止まったものの、その威力が桁違いなのかグリムジョーは動けなくなっていた。

「テメエ…一体何者なんだよ…!!」

完全なる別次元の実力者にグリムジョーは舌打ちをしながら睨みつける。それに対して千弘はやれやれと首を振りながら答えた。

「何度も言ってるでしょ。ただの“雑用”と」

「ふざけんじゃねえ!!ただの雑用がこんな腕力してる訳ねえだろおうが!何なんだよテメエのその力はあ!!」

「そう言われましても…うん…」

「ぐ…ッ!!!」

まるで近くのないその態度にグリムジョーの額に更に青筋が湧き上がると立ち上がり剣を抜いた。

「認めねえぞ…!俺は絶対に認めねえぞ…!!!」

そして 剣を構えたグリムジョーは鋭い目を更に鋭くさせると共に全身に力を込めると千弘へ向かって飛び立った。

「こんなふざけたガキにやられてたまるかああああ!!!」



「ガキじやありません!!」

「ぶべえらあ!？」

だが、結果は同じ。千弘の一声と共に一瞬で目の前に現れたと同時に放たれたビンタによってグリムジョーの身体は再び空高く吹き飛ばされていった。

「人様に向かってガキとは何事ですか!それにこちらピチピチの100代なんですよ!!」

その時だった。

突然と夜空の景色に一筋の黒い線が引かれると共に開くとその中から東仙が姿を現した。

「東仙…ぐ!？」

「何をしているグリムジョー…!」

現れた東仙はすぐさま吹き飛ばされたグリムジョーを羽交い締めにする形で受け止めると千弘に目を向ける事なく暗い空間の中へと引つ張り出した。

「あ!おっ!東仙隊長く!!」

「早く引くぞ…!!」

「な…!?放しやが」

そして 千弘の声に耳を傾ける事なく東仙がグリムジョーを中へと引き摺り込むと、時空の歪みは消えていき元の夜空の景色へと戻っていった。

「あ…。はあ…せっかく再会できたのに冷たい人だなあ…」

グリムジョー達が去り辺りが沈黙に包まれると千弘は溜息を吐きながらその場からネムの元へと着地する。

「さて、また探しますかネムさん」

「その必要はありません。もう見つけました」  
「あらー！」

千弘はネムへと呼び掛けると再び屋台を引き始めようとするがそれを止めた。今回の調査内容は現世にしか咲かない花の調達なのだ。だが、千弘が戦闘（説教）している内にネムが採取し終えていたらしい。

「これはこれはお手が早い！さすが副長ですね！」

「！！お…お役に立てて光栄です…千弘さん…」

千弘から満面の笑みと共に絶賛の言葉を貰ったネムは顔を真っ赤に染めながら誤魔化すかの様に俯いた。

そんな時だった。

「おいアンター！」

「？。」

背後から自身らと呼ばひ止める声が聞こえて来た。振り返るとそこには斬魄刀を杖代わりにして立ち上がる一護の姿があった。

「私ですか？」

「いや女の人じゃなくて…小さい方の」

「ああ私ですか」

一護に呼ばれた千弘は首を傾げる。

「なんですか？」

「さっきの奴らは一体なんなんだ…？すげえ強かったし…一瞬感じた霊圧が虚と似ていた…何か知ってるのか!？」

一護の問い掛けに対して千弘は先程、東仙に回収された男グリムジョーを思い出す。確かにあの男の霊圧は虚と似ていた。だが、それ以外は何も分からなかった。

いや、そもそも彼は興味が無かった。

「申し訳ありません。私にもよく分からないです」

「そ…そうか…」

「では、そろそろ失礼させていただきます。行きますよネムさん」

「はい。千弘さん」

一護が頷く姿を見た千弘はネムに目を向けると再び屋台を押しな

がら暗い夜の回路を歩いていった。

その後 欠けた仮面を付けた男達は虚が更に進化を遂げた破面である事が発覚。グリムジョー以外にも四人の破面がその場にいたらしいが、松本乱菊、日番谷冬獅郎、斑目一角、阿散井恋次、綾瀬川弓親の活躍によって見事に討伐されたらしい。

そして勿論のことだが、千弘がグリムジョーを撃退した事も一護からルキアを経由して元柳斎へと報告された。

◇◇◇◇◇◇◇◇

それから一夜明け。

破面を撃退したにも関わらず相変わらず千弘は十二番隊隊舎の掃除を済ませ、ネムと共に庭に植えてある秋刀魚草へと水をあげていた。

「そう言えばあの青い髪の人って破面だった様ですね」

「はい。日番谷隊長の報告によると十刃(エスパード)と呼ばれる10人の精鋭部隊の一人だそうです」

「成る程。はあ…捕縛しておいた方が良かったなあ…」

ネムから聞かされた話に千弘は溜息を吐きながら後悔すると空を見上げた。

「あとマユリ様からしばらく休暇という伝言を預かっています」

「またですか？」

◇◇◇◇◇◇◇◇

一方。

草も木もないただ果てしない砂漠の大地が続き灰色の空に白銀の月が輝く不気味な世界『虚圏』では。

「おかえり。グリムジョー」

「……」

東仙に救出され虚圏へと帰還したグリムジョーの目の前には帽子を被りながら巨大な玉座に座る藍染の姿があった。玉座へと座りそ

の姿から発せられる存在感と威圧感は東仙に横槍を入れられ苛立っていたグリムジョーを強引に鎮ませる。

「さて、今回は散々な目にあつた様だね。まあ無理もないだろう。彼が相手だったのだから」

「ええ。まあ…」

藍染の言葉にグリムジョーは軽く答えるだけであつた。その様子を横から見ていた東仙はグリムジョーを睨みつける。

「どうしたグリムジョー…謝罪の言葉はないのか…？」

「別に」

「貴様——!!」

「……」

「いいんだ要。私は何も怒つてなどいない」

東仙がグリムジョーへの言葉を強めると、藍染が声を掛け制止する。東仙を宥めた藍染は再びグリムジョーへと目を向けた。

「今回の事は…彼の御し難い忠誠心の現れだと思つているんだが…違ふかい？」

藍染の問いにグリムジョーは表情を変える事なく頷いた。

「………そうです」

「!!!」

その瞬間 東仙の白い目が開かれグリムジョーの襟元を掴み上げた。

「藍染様！この者の処刑の許可を！」

「ハッ！私情だな。ただ俺が気に食わねえだけだろ。統括官様がそんなんでいいのかよお？」

「グリムジョー…私は調和を乱す者を何よりも嫌う…許すべきではないと考える」

「ソイツは組織の為か…？」

「…否。大義の為だ…!!お前の行動にはそれは見当たらない」

その瞬間 東仙が手に持っていた太刀が一瞬、光ると共にその一閃がグリムジョーの左腕目掛けて放たれた。

「!!」

その一閃は一筋の流れ星の如く軌跡を残しながらグリムジョーの左腕へと入り込むとすり抜けていく。

その直後。グリムジョーの左腕が音を立てる事なく身体から切り離され地面へと落ちた。

「な…!？」

「破道の五十四…【廃炎】…ッ!!!」

グリムジョーが斬り飛ばされた瞬間の痛みに声をあげる中、東仙は斬り飛ばした左腕に向けて刀を振るう。すると、振われた刀の先端から青い球が飛び出すと湾曲しながらグリムジョーの左腕へと向かっていき彼の腕を焼失させた。

「て…テメエ…!!よくも俺の腕を…!!」

腕を斬り飛ばされたグリムジョーは痛みを堪えると共に怒りの声をあげると刀を構え東仙へと駆け出した。

「ぶっ殺してやる…!!!」

その時だった。

「グリムジョー」

「…!!」

再び藍染の声がその場に響く。それを聞いた途端にグリムジョーは東仙へと向かっていく脚を止め、藍染へと目を向けた。そこには先程とは異なり自身をまるで睨みつけるかの様に冷たい視線を向ける藍染の姿があった。

「お前がそこで要を攻撃すれば…私はお前を許す事はできない」

「……」

その言葉を聞いたグリムジョーは舌打ちをすると剣を腰に収めた。これ以上は藍染の気に障り彼に殺されてしまうと感じたからだ。

それからグリムジョーは重い足取りで下がっていった。

そして下がる際に藍染は彼を呼び止め言い残した。

「それとグリムジョー。もう一つ言っておくよ。」

「……私に余力を残して勝てなければ彼には一生敵わないぞ」

「……!!!」

その言葉を受けたグリムジョーはようやく認識した。自身が闘った相手は虚圏をたった数日で支配し自身らを統べる藍染すらも敵わない相手である事を。

## 虚圏の侵攻

あれから数日。千弘達の住む瀨霊廷は緊迫状態へと陥ろうとしていた。それもその筈だ。破面が侵攻してきたのだから。因みに破面とは大虚が変化した虚の最上位種である。その強さは破面になる以前の状態に依存する。破面となる大虚は大きく分けて3つの種類があり、下から『最下級大虚』『中級大虚』『最上級大虚』と分けられている。話によると最上級大虚から進化した破面の強さは別格であり、仮にこの破面が10体もいれば尸魂界を滅ぼす事は容易いと言われている。その上その強さは隊長格を大きく凌駕するらしい。

まあ、彼には関係ないのだが。



「なななくななくな〜 I wanna start fight!!  
so what!」

いつものように千弘はネムと共に秋刀魚草へと水を上げていた。育ちは順調であり、一番大きな個体の体長がもうすぐ4メートルへと達しそうであった。

そんな時であった。

「ほう？ここが噂の隊舎か」

いつものように秋刀魚草へと水を上げていた千弘にネムとは別の女性の声が掛かる。振り返るとそこには褐色の肌を持ち、身体のラインをそのまま浮き上がらせる様なスポーティな衣服を纏う女性が立っていた。

「おや？貴方は」

「ん？あゝすまんすまん。まだ名乗っていなかったな。儂の名は『四楓院 夜一』じゃ。よろしくのう」

「おお！四楓院家の方でしたか。これは失礼。私の名は…」

「まあ待て待て」

ニコニコと笑みを浮かべながら手を振り夜一と名乗る女性に対して千弘も自身の名を名乗ろうとすると彼女は手を前に出して口を止める。

「お主の名前も知っておるぞ。『園原 千弘』護廷十三隊最強の男とな」

「え?」

夜一の言葉に千弘は首を傾げ即座に否定する。

「いやいや何を言っておられるのやら。私が最強?そんな馬鹿な。私などまだまだ副隊長にすら程遠いのに…」

「ふむ…噂通り謙虚な男じやのう」

すると 夜一という女性は自身の背後にある秋刀魚草へと目を向けた。

「それよりも儂が気になっておるのはその植物?じや。なんなのじや?それは」

「ああ。これは秋刀魚草です。身が引き締まって美味しいですし良い声で泣きますよ」

「ほうほう」

泣く?」

「ええ。例えるなら悲しい出来事があって堪えきれずに背中泣くダンディな男の様に」

『う…うう…!!ちく…しょう…!!』

千弘が秋刀魚草を強引に揺らすと秋刀魚草の先端部にある秋刀魚が正気の宿っていない目から涙を流し口元を噛み締めながら少女の様な声で泣き始めた。

「ふむ。中々面白いではないか」

千弘の紹介や秋刀魚草の不気味ながらも哀愁漂う泣き方に夜一は興味を示したかのように秋刀魚草をジロジロと見つめる。すると、彼女は段々と目を輝かせながら千弘へと尋ねた。

「美味しい物でもあるのじやな?」

「ええ。普通の秋刀魚よりも身が詰まっていますし脂も乗っています。それに育てて更に巨大化させれば味も更に変化しますよ。小さければ



小さい程、市販の秋刀魚に近く、大きければ大きい程、骨は太くなり取り除きやすくなると共に身も引き締まり焼いた際の脂の量も多く市販のものより美味しくなります」

「ほうほう……！」

千弘の説明を聞いた夜一は更に目を輝かせ遂には涎までも垂らしながら千弘へと目を向けた。

「よければ数匹譲ってもらえないか!? 良い値で買どうぞ！」

「いいですよ。取り敢えず一番大きいのは1匹10万。中型は6万。赤ん坊の小さいモノなら400円で。待てるのでしたらその植木鉢の赤ん坊の方がおススメですよ。育てればすぐ大きくなりますし、大きくなりすぎたら根っこごと抜いて地面に植え替えれば良いので」

「なるほどな。よし！コイツを貰おう！」

「どもども〜」

それから夜一は植木鉢に植えられた小型の秋刀魚草を2000円分(5本)買い取り鼻歌を歌いながら帰っていったそう。因みにその後、何故だか二番隊長の碎蜂もやってきて大型の秋刀魚草の買い占めを強請ってきたのはまた別の話である。

その日の夜であった。縁側でいつものようにネムと共にお茶を飲んでいると、突如として彼女は切り出した。

「他にも買いたいと思う方が増えると思うので栽培してみてはいかがかと」

「ナイスアイデアですネムさん！ではどこか土地を買い取って大農場にしましょう！」

それを聞いた千弘は目をキラキラと輝かせるとネムと共に早速、行動へと移した。破面によって廷内がざわついていっているにも関わらず廷内にある空き地の土地の権利を付近に住む者と交渉して手に入れそこに大量の秋刀魚草を植えていった。

すると、数日もしない内に発芽し植えてからたった3日で小さいながらも秋刀魚草達が出来上がった。

「取り敢えず価格設定を決めないと！場合によっては儲かったお金の

分、十二番隊予算として全部貰えると思いますよ！」

100平方メートルの畑の中で秋刀魚草達が風に揺られる中、千弘は今後の計画をネムへと伝えた。それを聞いたネムは張り切り出したのか、無表情ながらも腕をグツと握り締める。

「では簿記はお任せを」

それから二人のビジネスは始まった。因みにここまでの予算は全て千弘の実費であり、これによって千弘は財産の95%を失う事となった。

だが、この商売は意外と好評となったのか、秋刀魚草となった個体はビジネスが始まったその日にアツサリと10体売れたという。

◆◆◆◆◆

そんなある日の事であった。

「おい。お前に指令ダ」

「はっ。」

瀨靈廷でいつものように隊舎の掃除をし終え、秋刀魚草へと水やりをしていた千弘へとマユリが一枚の紙を手に持ちながら現れ、その紙を差し出した。

差し出された紙を千弘は受け取ると内容に目を通す。

「ふむふむ…現世に向かい『浦原喜助』へ今後の破面に対する策と案が記された書物を届けよ……………ですか」

「そうダ。アイツにウチの隊員を送るのは不本意だが…まあお前の事だ。引き込まれる心配はない。取り敢えずサツと渡してすぐ戻ってこい」

「了解です」

指令となれば文句は言わない。千弘はアツサリと理由も裏も考えずに穿開門を開き現世へと向かっていった。

浦原喜助とはマユリの前任の十二番隊隊長であり、技術開発局を設立した初代局長である。千弘からすれば大先輩と当たるだろう。

因みに千弘は初めて浦原と会う為なのか自作の秋刀魚焼きや焼き肉が敷き詰められた弁当を風呂敷に包みそれも持っていった。

彼曰く、初めて自身から会いに行く場合は「何か」を持って行く事

が礼儀らしい。

◇◇◇◇◇◇

現在の現世の状況はとても凄まじいモノとなっていた。破面の出現の報告が上がってから滞在し始めた日番谷達と4体の破面が会敵していたのだ。しかもその破面の3体の内の2体が精鋭部隊である十刃であり全員の霊圧が辺りを覆い尽くしていた。

その中の一人。癖のある髪と小柄な体躯を持つ破面が此方を睨みつける日番谷達へと目を向けた。

「いっっぱいいるね死神。あの中にいるのかい？君が闘いたかった奴。ねえ？『元第六十刃』」

「……ああ」

その目線の先には数日前に千弘に張り倒されたグリムジョーの姿があつた。元と呼ばれたグリムジョーは軽く頷くと即座に飛び立った。

「お…おいグリムジョー！」

「放っておきなよ。どうせ十刃落ちだ。僕らはコイツらと遊ぼうか」

グリムジョーを引き止めようとした大柄な体躯を持つ破面『ヤミー』を制した破面は日番谷達を睨みつけた。

「テメエ…何者だ…？」

「僕は第六十刃『ルピ・アンテノール』さて、誰が僕と遊んでくれるのかな？君？それとも全員かな？」

「おいおい！俺の分も残しとけよ！」

「く…!!」

日番谷達は自身らが会敵している相手が苦戦していた相手よりも遥かに強力な破面である事を認識すると歯を噛み締めた。

その時であつた。

両者が対峙している空の上に突如として穿開門が現れた。

「ん？ありや藍染の言つてた『穿開門』って奴じゃねえか」  
「じゃあ援軍か。こんな所に開くなんてバカか…まあいいよ。撃つちやうて」

「ケッ！」

ルビの指示にヤミーは悪態を吐きながらも従う様にして口を開き口内へと光を収束し始める。

「…させるか！」

「もう遅い。『虚閃』!!!」

日番谷達が動き始めようとしたその直後。収束された光が更に光出すと一筋の光の線となり穿開門へと放たれた。

放たれた虚閃は穿開門へと直撃すると赤い閃光を放つと共に大爆発を発生させ赤い爆炎へと飲み込んだ。

「…!!!」

「な…なんて事を…!」

その凄まじい破壊力を後ろから見ている日番谷や松本達は瞳を震わせながら呆然と立ちた尽くしていた。今の威力をモロに喰らってれば席官でも致命傷は免れないであろう。下手をすれば消し炭にされている。

その一方で、門を通ってきた者を殺したにも関わらずそれを歯牙に掛けないかのように二人の破面は再び日番谷達へと目を向けた。

「さてと、サッサとやろうぜ死神ども。なあに安心しろ。お前らもすぐ今の様にしてやるからよ」

ヤミーは手を出し誘う様な仕草で日番谷達を挑発した。

その時であった。

「おい」

「「「「!?」」」」」

突如として聞こえたドスの効いた低い声。その声と共に辺りを超重度の霊圧が包み込んだ。その霊圧は日番谷達は勿論だが会敵していたヤミー達さえも動けない程のものであった。

その霊圧は十三隊歴代最強と謳われる元柳斎のいる日番谷達と藍染という知力と力を兼ね備えた死神がボスであるヤミー達の双方からから見ても全く得体の知れない者であった。

そして 皆はその霊圧を感じる方向へとゆっくりと目を向ける。そこは先程、穿開門が開いた場所であり現在もヤミーの放った虚閃の爆発による黒煙が舞っていた。

するとゆっくりと黒い煙が晴れてゆき中から一人の小柄な死神のシルエットが見えてくる。そのシルエットに見覚えがあるのかヤミー達は額から冷や汗を流し始めた。

「お…おいおい嘘だろ…？アイツってまさか…」

「ええ…まさかこんなところで会っちゃうなんて…」

煙が晴れそこに立っていたのはボロボロとなった風呂敷と焦げた中身を抱えている千弘であった。

「私の大事なお土産を燃やしたのは誰ですか…？これじゃビンタどころじゃ済みませんよ…!!!」

真の最強が怒りを見せる。

## お仕置きよ

虚圏にて。玉座へと腰を掛け知らせを待っていた藍染の元へ一人の伝達兵士である虚が駆けつけた。

「藍染様……報告いたします…。現世に向かった十刃が『園原千弘』と接触した模様……」

「…ほう」

その知らせを聞いた藍染はまるで予知していたかのように取り乱す事なく鎮くと即座に指示を出す。

「案外来るのが早いものだね。速やかに彼らを回収したまえ」

「御意……」

それに領いた伝令兵は即座にその場を後にする。すると、背後の影から市丸が姿を現した。

「ほんまに彼は厄介やなあ。現れた途端すぐ作戦中断にせなあかんくなる」

「フツ。だからこそ彼と戦う可能性がある場合は最善の準備が必要なのさ」

「でもこないな事態が続くんなら計画も止まるんやない？少しでもあの子をどうにかせんと……」

「ギン。それについては問題ない」

藍染は首を傾げる市丸に軽く答えると頭の帽子を被り直しながら目を鋭くさせる。

「彼を倒す策が無い訳ではない。今がその時では無いだけだ」

そして藍染は帽子の隙間から手を入れると刈られた後頭部へと手を伸ばした。

「いずれこの『借り』は必ず返すつもりだよ……!!」

「それ借りというより刈———」 「それ以上は言わないでくれギン」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一方で現世にて。

突如として煙の中から現れた千弘は動揺する日番谷達に目を向け

ず、ただ立ち尽くす破面達を睨みつけていた。

「その人達。誰が私に爆弾を投げたのですか？別に痛くは無かったですのでそれについては怒っていません。問題なのは……これですよ!!」

千弘が破面達へ向けてパカッと手に持っていた箱を開き中を見せた。中には黒焦げとなり灰と化している食べ物が増まれており、千弘が触れると形を維持していた物体は即座に粉々に砕け散っていった。「よくも食べ物粗末にしてくれましたね!?これは今から会いに行く浦原さんへのお土産なんですよ!!どうしてくれるんですか!?誰ですか私に爆弾を投げたのは!!」

千弘は怒りに燃えるかのように背後から炎を湧き上がらせながら佇む破面達を睨んでいた。

その様子を見ていた日番谷達は千弘が現れた事で破面達へと向かうとしたその足を止めて様子を伺っていた。その中で隊長でも副隊長でもない席官の弓親と一角は千弘が現れた際に感じ取れた霊圧に疑問を抱いていた。

「アイツ…確か十二番隊の雑用係だったよな…」

「あ…ああ…。それにさっき…あの子からとんでもない霊圧を感じたよな…」

一瞬ながら感じられたのは自身らの所属する隊を率いる最強の男『更木 剣八』さえも子供に見えてしまう程の強大かつ全く質の違う霊圧。それが一瞬すぎるあまり彼のものなのか別の何かなのかさっぱりであった。

そんな中、松本は何かを閃いたのか千弘へと声を掛けた。

「園原〜!」

「…ん?はい。何ですか?お松副隊長」

千弘が此方へと顔を向けると松本はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながらヤミーへと指を向けた。

「アンタを攻撃したのはあのデカイ方よ〜!」

「ほう?」

松本の声を耳にした千弘の目がゆっくりとヤミーへと向けられた。

「貴方ですか」

ヤミーへと目を向けた千弘はポキポキと腕の骨を鳴らし始めた。そしてその目を向けられたヤミーは顔から冷や汗を流し始める。

「あららヤミー大丈夫？ターゲットにされてるよ〜？」

「元はと言えばテーマエがやれて指示したんだろうが…!!」

その一方で横に立っていたルピは千弘のターゲット外であるのか、余裕の笑みを浮かべながらヤミーに目を向けた。するとそれを見ていた松本は更に千弘に付け足した。

「因みに隣の奴はデカイ方に攻撃しろって指示してたわよ〜！」

「なら首謀者は貴方ですか」

ルピ「なあああ!!このクソアマああ!!」

ヤミー「はいザマア〜(笑)」

ルピは松本に怒鳴り散らすも時すでに遅し。ルピも千弘のターゲットとされてしまった。

「さてと…とりあえずあなた方二人にはしっかりと償ってもらいますよ。取り敢えず材料費と人件費込みの3人前の弁当。併せて5000円を謝罪と共に払ってください」

「持つてるかなもん!!」

ヤミーが千弘の要求を声を荒げながら拒否をしたその時だった。

「くびれ、 葛嬢  
!!!!!!」

「!?」

ルピが解号を唱えると共に全身が光出した。それと同時に先程とは全く規模は小さいものの巨大な霊圧が辺りを包み込んだ。

その発せられた巨大な霊圧に一角や弓親は冷や汗を流し始める。だが、その一方で日番谷と松本は全く意に介している様子は無かった。まるで「慣れてる」かのよう。

「霊圧は…アイツに比べれば大した事ねえ…だが…」

「はい…アイツの実力は前に戦った奴とは比べ物にならない…」



だが、霊圧は慣れているものの感じられる闘気には何も言えなかった。恐らく本来の実力を解放したとしても苦戦を強いられるだろう。

すると

光が収束しゆっくりと中心に収縮していく。光が収縮して完全無くなると、そこには先程とは雰囲気が一変したルピの姿があった。

「ふん」

装束の様な衣服は変わらないが、上半身に肋骨の様な形状の白い骨格が巻きつく様に形成され、その発端となる背中からは巨大な8つの触手が生えていた。

「もういいや。取り敢えず救出が来るまで試してみようよヤミー！アイツがどれほど強いのか…!!」

「…まあそうだな。どうせ救援が来りや奴も手は出せねえ。最強の力がどんなものかみてみ――」

その時だった。目の前が影に覆われると共に両手にペットボトルを構えた千弘が姿を現した。

「金ないなら謝罪ぐらいしなさいやああああああ!!!」

「ぎゃあああああ!!!」

その一言と共にヤミーとパワーアップしたルピの身体が千弘の水平蹴りによって吹き飛ばされた。

「て…テメエ…!!!」

吹き飛ばされた二人は全身に襲ってくる痛みには耐えながら即座に体制を立て直す。そんな中、蹴り飛ばされた事でヤミーは相手が藍染の恐れている強者であるにも関わらず睨みつけ敵対心を露わにし額に筋を沸き立たせるとその場から姿を消し一瞬にして千弘の背後へと現れる。

「よくもやりやがったなあ…!!!」

そして背後から移動したヤミーは両手を重ね合わせると振り上げ

巨大な鈍器のように千弘の後頭部目掛けて振り下ろした。

「死ねっ！らああ!!!」

「ふん…!」

だが、その振り下ろしもすぐに見切られる。咄嗟に千弘の身体が背後へと振り返ると脚を振り上げ振り下ろされたヤミーの両腕を蹴り飛ばした。

「ぐう!」

「何ですか背後からいきなり」

「クソがあ!!」

骨の髄まで響き渡り伝わってくる衝撃に歯を食い縛る中、ヤミーは千弘に向けて口を開けた。すると、先程と同じく口内に赤色の光が収縮し始めて行く。

「喰らえや!!! 虚閃”!!!」

その一言と共に溜め込まれた光が大きく発光すると千弘に向けて放たれた。

「あぶな」

「はえ!」

その瞬間 ヤミーは今まで出した事が無い程の力の抜けた声を発すると共に口をガーンと開け驚いた。

なんと千弘が放たれた虚閃を脚を振り上げる形で上空へと蹴り飛ばしたのだ。上空へと蹴り飛ばされた虚閃は空高く飛び上がるとそのまま花火の如く大爆発し空気へと溶けて消えていった。

「うそ…だろ…!」

すると虚閃を蹴り飛ばした千弘の姿が一瞬にして消えた。

「な…!?どこ行きやが———」 「迷惑者撃退。パァアアンチ!!!」 がはあ!!!」

その直後に背後から衝撃が伝わると共にヤミーの身体が「く」の字に曲がりながら地面へ向けて吹き飛ばされていった。ヤミーの身体はそのまま地面へ大音量の破壊音と共に叩きつけられた。

「ヤミー…何やってんだか———て…うわあ!」

意識が沈み形成された巨大なクレーターの中心で気絶しているヤミーの様子を観察していたルピが呆れていると、ヤミーを下へと叩き落とした千弘が一瞬にしてルピの目の前に現れる。

「く……チビが！」

驚いたルピは咄嗟に帰刃し生み出した8本の触手を唸らせ千弘へと向かわせるがその触手全てが千弘に近づいた途端に一瞬にしてミリ単位まで粉々に刻まれた。

「え……う……………ぐぼえ!？」

「誰がチビですか！」

驚く暇さえもなかった。唾然としていたルピの頬へ千弘のピンタが放たれ彼の頭を仰け反らせた。

すると 千弘の手がルピの衣服の首元を掴み上げる。

「ごめんなさい…は？」

「があ…(何なんだよコイツ!? 藍染様…から…聞いてたけど…ここまでする…!!)」

すると 更に次の痛みが同じく頬へと伝わってきた。

「ぐへえ！」

「いいですか!? 実行した人もそうですが指示した人も同罪なんですよ!! ほらさっさと謝罪しなさい!!!」

ベシベシベシベシベシベシベシベシ……………!!

「ぶべらああああ!!!」

千尋は次々とルピの頬を叩いていく。辺りには次々と頬を叩く音とルピの絶叫する声が重なり合いながら響き渡っていく。

その時だった。

「…ん？」

千弘は空中から何かを感じたりその場から飛び退いた。すると、空から光が差し込みルピをスポットライトで照らすかのように包み込んだ。背後を見ると地面へと叩きつけられたヤミーも同じくその光

に包まれている。それを見た千弘はデジヤブを感じ藍染が去った日を思い出す。

「これって…確かあのバカ藍染の時と同じ奴…」

「ひひ…その通りだよ…」

すると 頬がパンパンに腫れまくったルピが笑い始めた。

「いくらお前でもこの反膜には手も足も出ないだろう！これで終わったと思うなよ！次会ったら十刃全員で惨ったらしく殺してやるからなバーカバーカ!!」

「…」

ルピの言葉が最後まで続いたその直後であった。

———  
パリン

辺りにガラスの一部分が割れる音が響く。

「何だ？この音…」

「何かが割れるような…」

一角や弓親。そして日番谷達もその音を不思議に思いながらも即座に気を持ち直し反膜に包まれる2体へと目を向けた。

一方で、先程のその音はルピの方から聞こえていた。見ればルピは先程とは一変し目の前を見つめながら全身を震え上がらせていた。

「く!!!」

目元からは涙が少し垂れ、下半身を見れば衣服の股関節辺りに黒いシミが出来ていた。日番谷達が危険を感じる程の戦闘能力を持つ彼がなぜここまで震えているのか。

それは簡単だが、全くもって信じられない事実であった。

なんと千弘の拳が反膜へと———

ヒビを入れていたのだ。

外と中との空間を完全に隔絶するその破壊不可能な壁にヒビを入れていたのだ。見れば割れた箇所からは煙が上がりすぐにそのヒビはゆっくりと修復されていく。

「ひ…ひいい!!!」

そしてルピの目の前には今までに無い程まで目を鋭くさせている千弘の姿があった。

「すみませんが…安全な場所からゴチャゴチャ言うの…やめてもらっていいですか…? 凄く腹が立つので…」

「!!!」

反膜越しであるにも関わらず伝わってくる殺気と死神とは思えない程の鋭い目線にルピはその場で腰を抜かしながら必死に頷いた。

それからルピは恐怖に支配されながらヤミー共々虚圏へと吸い込まれていった。千弘の拳が反膜を破壊しかけていた事はルピ以外誰も知る事は無かったという。

「はあ…それよりもどうしよう…浦原さんへのお土産…まあ取り敢えず会うだけ会おう」

それから千弘はお土産を無くしながらも浦原と合流して無事に書類を届ける事で任務を終えた。だが、その直後に前回の旅禍の一人でありながらも乱戦の後に隊士達を次々と回復させた恩人である『井上織姫』が破面の一人と共に姿を消してしまった事が知らされた。

## 新たな任務！内容キツイがお金の為♡

その後、浦原へ書類を渡した千弘は彼の元でお茶を一杯ご馳走になつていた。

「いや〜まさか夜一さんが言つてた園原さんが私のここに来てくださるとは思わなかつたっス」

「どうも。私も技術開発局の創始者の方と会えて光栄です。んん…お茶ごちそうさまです」

目の前には帽子を被り浴衣の様な軽い和服を纏う一人の男性が団扇を仰ぎながら涼んでいた。この男こそが元十二番隊隊長であり、技術開発局初代局長である。涅マユリを監獄から解き放ち副局長へとスカウトした男でもあるのだ。

お茶を飲み干した千弘は立ち上がると浦原に頭を下げた。

「では、私はこれで失礼いたします」

「あ〜！ちよいとお待ちを」

「はい？」

「これどうぞ」

去り際に千弘は浦原に呼び止められるとある物を差し出された。それはとても美しい純白のリストバンドであった。

「お〜。綺麗なリストバンドですね」

「でしよでしよ？ 因みにお2つあるのでもう一つはお友達にでも」

「いいんですか!? ヤッターア！ありがとうございます！」

その後、リストバンドを受け取った千弘は穿開門を通り尸魂界へと戻っていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

尸魂界へと戻った千弘は十二番隊隊舎へと戻りマユリへの報告を終えるとネムを探し出し彼女へ浦原から貰ったリストバンドを差し出した。

「はいネムさん！」

「なんですかこれは？」

「浦原さんという方から貰いました！十三隊の中でネムさんとは一番付き合いが長いので是非受け取ってください！」

そう言い千弘は満面の笑みでネムへリストバンドを渡した。リストバンドを渡されたネムは少し不思議そうに見つめると千弘と同じく右腕にそのリストバンドをはめた。

すると 千弘はニコニコと笑いながら右腕を見せてくる。

「お揃いです♪」

「…」

そう言われたネムは千弘と同じ腕に同じリストバンドがはめられた腕を見て彼の腕と重ねる。

「…ふふ」

『彼とお揃い』その言葉を聞いたネムは男女のパートナーが同じ服を着用するペアルックの様な物と認識する。そう認識した彼女のいつもの無表情な顔がやや薄いながらも明るい笑みに包まれた。

「はい…お揃いですね千弘さん」

千弘からリストバンドを受け取ったネムはいつもよりも明るい表情を浮かべると彼の手を取る。

「おやつ…食べに行きませんか？」

「はいー」

それから二人は互いに手を取り合いながら昼を過ぎすといつものように秋刀魚草農園へと赴き秋刀魚草の栽培へと取り掛かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それから数日後。廷内は更に慌ただしくなっていた。それもそうだ。藍染達が侵攻してくるのも時間の問題。早く手を打たねばならないのだから。

そんな中、千弘は元柳齋と呼ばれ、一番隊隊舎へと来ていた。

「よく来たのう。 園原隊士よ」

「どうも山本御大。 それよりもなぜ私を？」

「うむ…」

元柳齋は千弘の問い掛けに首を俯かせると背後に立つ副隊長から一枚の紙を受け取り千弘へと渡した。

「ん？」

紙を受け取った千弘は丸められた書式を開いて内容を確認する。

「…え!?」

その内容を見た千弘は驚愕する。

記されていた内容は『虚圏へ赴き井上織姫を救出せよ』との事であった。

その内容はとてつもなくランクの高い物である。虚圏といえは虚が蔓延る世界であり普段戦っている虚よりも更に強力な個体が大量に生息している。更に藍染達のアジトもそこに存在しており精鋭部隊『十刃』全員も揃っている。その場所へ単身で乗り込むのは自殺行為と言えよう。

だが、千弘にとってこんな任務など子供のお使いの様なものであるだろう。

それでも千弘自身が謙虚な為に当然、拒否の姿勢を示した。

「流石に私には荷が重いですね…。虚圏の広い世界でたった一人の方を見つけるのはちよつと…それに私の力ではとても…」

「因みに報奨金はたつぷりとはずむぞ」

「行つてきます」

千弘は拒否の姿勢を示したかと思うと金の事を聞いた瞬間にアツサリと一転し承諾。即座に出撃する姿勢を見せた。まあ仕方ないだろう。秋刀魚草農場を立てた件で財産の殆どを失ってしまったのだから。

「うむ。ただ確かにお主一人では不安になるだろう…。誰かもう一人の同行を許可する」

「分かりました。それよりも井上さんを探す中で藍染のクソ野郎を見つけたらぶつ飛ばしてもいいですか？」

「いいだろう」

「やった〜!!」

それから千弘は一番隊隊舎を出ていった。その後ろ姿を見守っていた元柳斎に副隊長が小さな声で耳打ちする。

「あの…よろしいのですか…? 園原隊士を向かわせて…藍染の奴らが



すれ違い此方に攻めてくる可能性も…」

「問題ない。それについても対策済みじゃ…!」

◇◇◇◇◇◇

それから隊舎を後にした千弘は十二番隊隊舎にて涅マユリと共に作業するネムの元へ赴き事情を伝え誘った。

「…そんな訳で。一緒に行きませんか？一人だと怖いので」

「はあ…」

急に誘われたネムは首を傾げる。その一方で作業に没頭していたマユリは千弘の提案に対して顎に手を当てた。

「ふむ…もう一人の同行者か。本来ならば私が直接赴き色々と調査したいところだが…」

マユリは科学者である為に千弘の虚圏同行に名乗りをあげようとしていた。それもそうだ。虚圏など滅多に行ける場所ではない。その上そこには独自の技術や発明品が存在している故にマユリは迷っていたのだ。

「…」

そんな中。マユリはチラリと千弘とネムの付けているリストバンドへと目を向けた。それは浦原が千弘へと渡した純白のリストバンドであった。

「(千弘の奴が虚圏へ行く事も想定済…ということか。アイツの事だ…何か仕組んでいるんだろう。だからあのリストバンドを…)」

長年、技術開発局を共に背負ってきた故に彼の性格を知っているのかどうか定かではないが、マユリは彼らが手にはめているリストバンドを見て考察すると頷く。

「ネム、行ってこい。虚圏で実験室や発明品の様な物を見つけた時は必ずこれに納めろ」

そう言いマユリはネムへ小型のカメラを渡した。

「はい。マユリ様」

「では行きましょうか!」

それから千弘とネムは特殊な門を通り虚の蔓延る世界『虚圏』へと向かった。

――

――

――

「あ、井上さんの写真貰うの忘れてた…」  
虚圏に来てまさかの事態。どうなる!?

虚圏に突入！合言葉はハリハリハくりベル！

虚圏へと到着した千弘とネムは辺りを見回した。

「ここが虚圏…」

見渡す限り広がるのは無限の砂漠。辺りに木々が生えてはいるものの葉っぱは一枚もなくただの枯れ木となっていた。

そして、上空には暗い空が広がりそれとは対照的に白い月が輝き辺りを照らしていた。

「変な所ですね。はあ…取り敢えず井上さんを探しますか」

「はい。名前から察するに…女性の方と思われます」

「女性ですか。では取り敢えず髪の毛の長い若しくはすぐに女性と分かる人を探しましょう。あの塔の中とか」

そう言い千弘は遠くに聳え立つ巨大な城へと指を向けた。そこには白で統一された巨大な建造物があり、白で統一されている一方で、複雑な形状をしていた。千弘とネムはそのまま塔へと向けて走り出した。

走り出す中、千弘は何かを思い出す。

「そうだネムさん。取り敢えずあの城 撮っておきますか」

そう言い千弘はネムに提案した。千弘の提案にネムは頷くと胸元にしまっていたカメラを取り出すと目の前にある巨大な城をパシャッとカメラに収めた。

「さて、次行きましょか」

その時だった。

ドガアアアアン!!!

「ん？」

離れた場所から巨大な大爆音が響くと共に砂煙が湧き上がった。

「何でしょう…？あれは…」

「恐らく蟻地獄か何かですよ。放っておいて行きますよ」

そう言い二人は城へと走っていく。

「……………」

その城の前に立つと千弘は辺りを見回し入り口を探し出す。その中で一つの入口を見つけ出すとネムと共に侵入した。

「ほっほっほっほ」

「…」

千弘が降りて行きその後ネムが続く。そして、暗い階段の道を抜けていくと一気に広い空間が目の前に現れた。

「おっ……は…」

千弘達が出てきたのは円形の部屋でまるで照明をつけているかのように外よりも明るかった。正面を見れば入ってきた時と同じ形状の入り口が目の前に数箇所あり、その奥は暗闇に包まれていた。

その時だ。

「見つけたぞ侵入者!!」

「二ん?」

一つの声と共に辺りの入り口から次々と大量の足音が聞こえてきた。すると、辺りの入り口全てから次々と仮面を被り白い和服を身につけ、槍を手に持った謎の集団が現れた。

現れた集団は即座に千弘達を追い詰めるかのように辺りを取り囲むと槍の先端部分を向けてきた。

「たった二人で来るとは命知らずな奴め!!」

「大人しく降伏するのだ!!」

その姿はまるで仮面をかぶっているかのようにであった。即ち「虚」である。

虚に取り囲まれた二人の内、ネムは相変わらず無表情で直立していた。まるでこの状況を何とも思わないかのように。

「取り敢えずどいてください」

その傍らで溜息をついた千弘は刀へと手を伸ばすと一瞬だけ強く握った。

その瞬間

「うう…!?!」

「が…!?!」

千弘達を取り囲んでいた虚達が一瞬にして力が抜けたかのようにその場に倒れた。

「峰打ちしたので。では行きましようか」

「はい。千弘さん」

大量の虚を一瞬で気絶させた千弘はネムと共に数力所の内、一つの出口を選びその奥へと進んだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一方で千弘達が潜入した巨城 ラスノーチェスのとある一室では。藍染直属の精鋭部隊『十刃』の全員が集められていた。皆は厳格な表情を浮かべながら紅茶が置かれた長いテーブルに掛けてある椅子へと座りながらある一点を見つめていた。その一点には白い帽子を被りながら紅茶を啜る藍染の姿があった。

紅茶を飲み終えた藍染は本題に入る。

「さて、皆も既に知っているとは思いますが虚圏に“7人”の侵入者が現れた。その内の一人に私が警戒している『園原千弘』もいる」

その言葉と共にテーブルの中央に映像が映し出され虚の兵士達を次々と気絶させながら進む千弘とネムの姿があった。

「…」

集められた十刃達はその映像を険しい目で見つめる。中でも千弘にコテンパンにされたグリムジョーやヤミーはよっぽど腹が立っているのか映し出された千弘の映像を見た瞬間に恐ろしい程、睨みつけていた。

「園原千弘と涅ネムの目的は不明だが、あとの5人は間違いなく井上織姫の救出だ。君達もいずれ出会う事だろう。別に殺しても構わな。だが、園原千弘と出会った時は無理に闘わなくていい。誤魔化すなり逃げるなり上手くやり過ぎす様にしてくれ」

「…」

その言葉に皆は頷くものの、中には藍染に対して忠誠心の欠けらのない者や恨みを持つ者もいる。そんな者達は藍染の言葉を全く信用していなかった。そして自身の強さに絶対の自信を持つ者も。

「…という事は…この坊ちゃんには打つ手無しって事ですかい？」

「その通りだスターク。今の所はね」

「……了解です」

スタークは藍染の言葉から打つ手アリという事を読み取ると頷いた。それは他の十刃の何人かも同じである。

そして 緊急の招集が終わると皆はそれぞれ散っていった。

だが、藍染の話を聞いても一部の十刃は聞き入れておらず既に動き出していた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

城の中へと侵入した千弘とネムは暗い回廊を進んでいた。

「ハイサイ！ニーハオ！アンニヨハセヨ！グーテンターク！」

「ごはあ!？」

「な…なんだこの強さ!？」

「いだあああ!!！」

次々と迫り来る虚の兵士達を千弘は挨拶しながら何処から取り出したのか分からないハリセンで次々と倒していった。暗い回路をぐんぐんと進んでいくと再び目の前に明かりが見えてくる。

「千弘さん」

「はい！次の部屋が見えてきましたね！」

目の前が明かりに包まれると再び広い空間のある部屋へと辿り着いた。

「ここは…」

千弘達が入ってきた空間は先程の回廊よりも更に広い場所であり辺りには巨大な柱がいくつも立てられていた。

「ここは特に調べる必要は無いようですね。先を急ぎましようか」

「はい。千弘さん」

辺りに柱以外、何も調べる必要はないと判断した千弘はネムと共に

再び前方に見える道への入り口へと走り出した。

その時だった。

「貴様らが侵入者か」

その声が響くと共に突然、目の前にスキンヘッドの巨漢が現れた。「私はゾマリ・ルルー。愛染様の計画のため……貴方方にはここで捕まっていたいただきます」

現れた巨漢ゾマリを見た千弘は先程の兵士達よりも話が通じると考えたのか、ハリセンを仕舞いゾマリに尋ねた。

「あ、すいません。ちよつとお聞きした——」

その言葉が言い終わる直前。ゾマリが数十人に分裂し千弘とネムを取り囲んだ。

「凄い!!!影分身の術ですか!?!って事は螺旋丸も……」

「否!これは私が最も得意とする【響転】による残像です!我が響転は十刃(エスパード)最速。いくら力のある貴方でも見切るのとは不可能でしょう。さあどこから攻撃してくるかお分かりかな?」

その言葉と共に辺りを高速で移動するゾマリの速度は更に上がり無数の分身を作り出した。

「……」

そんな中、ある一点を見つめた千弘は手を出した。

その瞬間

「よいしょ」

「我が力『愛(アモール)』によつ——うごお!?!」

先程まで辺りを取り囲んでいたゾマリの分身が消えると共に本体のゾマリが驚きの声を上げると共に地面へとめり込んだ。

「な……私の響転を見切り本体を捉えただ?!」

地面へと押し込まれ身動きが取れないゾマリは自身の肩に手を置きながら見つめる千弘に驚く。その一方で千弘は当然かと思うよな

表情を浮かべていた。

「まあ。あんな速度でずっとやられてちゃ慣れてしまいますよ」

「あんな速度…!?それに慣れるだとお!?たった数秒で私の響転をお  
!?!」

「いや、ソニードか任天堂か知らないですけどあんまりでしたよ。あ、  
取り敢えず井上織姫っていう人が何処にいるか教えてくれませんか  
?」

「あんまり…!?く…!!だがこれしきでは終わらせません!!ヌン!!」

咄嗟にゾマリは身体に力を入れ、埋まっていた地面から抜け出そう  
とする。

「……………」

だが、いくら抜け出そうとしても地面から身体を出すことが出来な  
かった。いや、寧ろ更に埋まっておる。よく見れば千弘の手がまだゾ  
マリの肩に置かれていた。

「……………あ…あの…手…退けてもらえませんか…?」

「いいですけど井上さんの居場所を教えてください。あと、もう邪魔  
はしないですか?」

「し…知らないです…あと邪魔もしません…」

「分かりました」

その言葉に頷くと千弘は手を退けてゾマリの横を通り過ぎ、奥の部  
屋へと進んでいく。

そんな中、千弘の背後を狙うゾマリの巨大な影があった。

「背中がお留守で——ゴハア!?!」

「正当防衛キック!!」



ドガアアアン!!!

だがそれもアツサリと潰えた。騙し討ちを読んでいた千弘の回し蹴りによってゾマリの身体はそのまま蹴り飛ばされると共に壁を次々と突き抜けていき外まで吹き飛ばされてしまった。

「あ、やり過ぎた…まあいつか。では次行きましょうかネムさん」

「はい」

それから二人は道を進んでいく。何故か先程の部屋を出ると道の作り方が変わっており、辺りに火が灯されると共に道幅が広くなっていた。

「お〜い！井上織姫さ〜ん！どこですかあ！いたら返事してください！」

千弘は辺りに呼びかけながら城内をネムと共に進んでいく。だが、いくら呼び掛けてもそれらしき姿も見当たらず声も返ってこない。

その時だった。

「ヒヤッはああああ！見つけたぜチビガキいい!!!」

巨大な破壊音を鳴り響かせながら近くの壁が破壊され、その瓦礫の煙の中から長身痩躯の男が超巨大な錨の様な戦斧を振り回しながら飛び出してきた。

「死ねえやああああ!!!」

「ぎやああああ!!!通り魔撃退パアアアアンチツ!!!!」

バキイイインツ!!!!

「ゴハアアアアアアアアアアツ!!!」

その瞬間 千弘が男の振り回してきた戦斧を握り潰し破壊すると

共に叫び声をあげながら拳を放った。それによって拳が腹へと見事に減り込み、男はゆっくりと身体を『く』の字に曲げその場から一瞬にして何層もの壁を巨大な破壊音を鳴り響かせながら突き抜けていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「……これは……一体……」

とある一室にて休んでいた十刃の一人、『ティア・ハリベル』は突如として鳴り響いた巨大な破壊音に驚き状況を確かめるべく即座に部屋を出た。

そこにあつたのは何層もの壁を突き抜ける穴。その穴はなんと幾重にも重ねられた壁を全て串刺しにしたかのように続いており、隣どころかその先の部屋も丸見えの状態となっていた。

「……あれはノイトラ……」

そしてその穴を除き終端地点らしき場所を見るとそこには十刃の中で最も防御力が高い身体を持つ『ノイトラ・ジルガ』が目を回しながら気絶していた。

「ハリベル様！何があつたんですか!？」

「凄いい音がしましたけど!」

その音を聞きつけたのかハリベルの従属官である3人も奥の部屋から出てくるとその光景を見て啞然とする。

「な……何だよこれ……」

「こんなもの……あり得ない……こんなことができる死神がいるという……の……!？」

「完全に化け物……ですわ……」

3人が壮絶な光景に声を震わせている中、ハリベルはノイトラが吹き飛んだ方向とは逆方向。つまり風穴を開けた存在がいると思わしき場所から声を聞き取った。

「……」

『うう……』

『大丈夫ですか千弘さん……よしよし』

聞こえてきたのは少年の啜り泣く声とそれをあやす女性の声。それはゆっくりと此方に近づいてきた。

「は…ハリベル様…」

「…お前達は下がっている…」

その鳴き声の主はゆっくりと近づいてくる。

「うう…あ！何か面白いものがありましたよ！」

「これは…持って帰りましょう。あと、其方も写真に収めるべきかと…」

「わく！いいですね！早速データとして撮っておきましょう！」

何かを採取しているのか、その声の主達は途中の位置で止まり始めた。その不気味な状況に従属官達だけでなくハリベル自身も冷や汗を流し始めた。

すると

「あ！こつちから人の声がしますね。井上さんの事で何か知ってるかも」

「では早速会って話を聞いてみましょう」

遂に自身らに気づき始めたのか此方へと向かってきた。それを聞いた瞬間、ハリベルは立ち上がる。

「…お前達は逃げろ…！」

その言葉と共にハリベルは駆け出し目の前の角を曲がっていった。

「「ハリベル様！」」

従属官達が驚きの声を上げると彼女が向かっていった方向を見つめていた。

その時だった。

「はううう…！」

「「?!」」

いつもより甲高い声と共に冷静さを失った甘い声が聞こえてきた。

その声を聞いた瞬間 3人は奮起し飛び出した。

「テメエ!!ウチのハリベル様になにやって」

「随分と性根が腐ってい」

「締め殺すだけでは済みませ」

角へと飛び出し目の前の光景を目にした瞬間 3人は固まってしまった。

そこには巨大なバックライトに照らされながら緑と青の学生服を着こなし、足腰を強調するかの様に立ち人差し指を向ける男女とその真ん中で鎖のついた長ランを着こなし腹筋を強調しながらジョジョ立ちをするハリベルの姿があった。

「「ぎやあああああああ」

!!!!!!!

「」

美しき戦士登場！愛の呪文はキュアアップ♡

カツ…カツ…カツ…

暗い暗い道の中。辺りが沈黙に包まれる静かな空間に一定のインターバルを刻みながら靴の音が鳴り響いていた。

その足音を立てる者は無造作に伸びた髪をたなびかせ、胸筋や腹筋がハッキリとしている美しき肉体を闇夜で輝かせていた。その男は第二の十刃に仕える従属官である。だが、その強さは従属官…：否…十刃をも軽く上回る。

彼はこの世に生まれた千弘に次ぐ二人目のイレギュラーなのである。

その男は行く先から霊圧を感じ取ると不敵な笑みを浮かべる。

◆◆◆◆◆

あれからしばらくして。

「……………」

現在、千弘は出会ったハリベルと対峙していた。千弘は相変わらずケロッとしているが、ハリベル達は敵対心を剥き出しにしており鋭い目を此方へと向けていた。

「デメエ…一体何者だ！ハリベル様にあんな格好させやがって！」

「いやあ…『バックライト』を見つけたら急にしてみたくありません。二人だけじゃなあ…と。それで偶然にも其方のハリベルさん…？が通りかかったのです」

「いやおかしいだろ!? 通りかかった奴をいきなりコスプレに誘うなんて正気の沙汰じゃねえぞ!？」

「あくそれについてはすいません」

そんな中、千弘への警戒心と得体の知れない態度に遂に限界が来た

のか声を荒げた従属官『エミルー・アパッチ』が剣を引き抜いた。

「テムエ…生きてここから出られると思うなよ…！」

「…！」

それを見たハリベルは咄嗟に彼女を止めた。

「待て…奴からは殺意を感じない…」

「だけどハリベル様！このまま奴らを野放しに！」

「いや…落ち着けアパッチ…目の前にいるのは藍染様が警戒する男だぞ…私達では絶対に勝てん…」

「そうですね。あの坊やをよくご覧なさいな。本当に血の気が多いこと」

「ぐう…分かりました…っていうかスンスン！テムエは黙ってるー！」

4人が警戒している中、千弘は自覚がないのか、アツサリとハリベルに近づき尋ねた。

「あの、早速なんです。井上織姫っていう人どこにいるか知りませんか？」

「…すまないがそれについては知らない…他を当たってくれ…」

「成る程…そうですね。わかりました。ありがとうございます」

千弘は情報をくれたハリベルに一礼するとネムと共に他の場所を当たることに決めた。

すると

カツン——カツン——カツン——。

遠くの方から何やら歩いてくる音が聞こえてきた。その音を耳にしたネムは千弘に伝える。

「千弘さん…あちらからも誰かが近づいてくる気配が。またお話を伺ってみてはどうかと…」

「そうですね。では4人共、失礼します」

ネムの提案に賛成した千弘はハリベル達に頭を下げると足音の聞こえる方向へと目を向けた。その一方で、足音は徐々に大きくなってきていた。

すると 遂にその足音は止まり暗闇からゆっくりと姿を現した。  
「あーら。侵入者って聞いて来てみたけど、案外可愛い子じゃない」  
そこに立っていたのは全身に極限なまでに溜め込まれた筋肉を圧縮し見事なボディラインを持つ男性であった。その筋肉は逞しいと共に美しい。腹筋や胸筋がハッキリし、それを支える脚も強靱であり暗闇の中で輝き光を放っていた。見事なまでの魅惑的なボディを兼ね備えたその肉体はまさに見た者を魅了する芸術に他ならないだろう。

「え？だ

「後ろよ。坊や」

「!!!」

その声<sup>!</sup>が再び聞こえた瞬間 千弘とネムを除いたハリベル達は驚くと共に冷や汗を流し始める。

ノイトラを一撃で葬る程の実力とゾマリのスピードを捉える千弘がその場へと目を向けた直後にその男は彼の背後へと気づく事なく移動していた。

「うふ♡藍染様から待機するよう言われてたけど、やっぱり来ちゃったわ」

それと共に暗闇で隠されていた顔が顔となり、その顔を見たハリベルはゆっくりと名を口にした。

「貴様は…『シャルロッテ・クールホーン』…」

皆さんお待ちせクールホーン登場！美の力は無限大

千弘の背後に現れた男は不敵な笑みを浮かべていた。それに対し千弘は振り返ると首を傾げた。

「貴方は？」

千弘が尋ねるとその男はウインクをしながら答える。

「バラガン陛下の従属官【シャルロツテ・クールホーン】ちゃんよ。よろしくね♡」

「成る程。私は護廷十三隊 第十二番隊隊員『園原千弘』以後お見知り置きを」

千弘はクルクルと回りながら自己紹介を終えるとクールホーンに目を向けた。

「そうだ。貴方にお尋ねしたいのですが、井上織姫という方が何処にいるかご存じですか？」

そう尋ねるとクールホーンは頷いた。

「ええ。知ってるわよ。教えてほしい？」

「是非」

「そうね…なら」

——私に勝ってみなさい——

その言葉と共にクールホーンの前脚が振り回された。

「お」

前脚が振り回されると千弘は腰に納めていた斬魄刀を鞘ごと取り出し目の前に差し出す形でその振り回された前足を受け止めた。千弘も大概だが、クールホーンの脚を振り回す速度は正に規格外であった。本来ならば動いた直後でも千弘は即座に見切り弾く筈だが今回は受け止めていたのだ。



二人の脚と鞘がぶつかり合った事で辺りに暴風が舞った。

「ぐう!? な…なんつう力のぶつかり合いだよ!?」

クールホーンの繰り出した脚と千弘の斬魄刀の塚がぶつかった。それによって二人の中心から衝撃波と共に暴風が吹き荒れ辺りにいたハリベルやアパッチ達を吹き飛ばしていった。

そんな中、その中心地にいたクールホーンは自身の蹴りを剣の塚だけで受け止める千弘に笑みを浮かべた。

「やるじゃない貴方。私のエクスタシーキックを受け止めるなんて」「不意打ちとは感心しませんが、貴方こそ。これほどの重い蹴りは初めてですよ」

「あら。安々と受け止めという随分買ってくれてるじゃない」

「それは勿論。結構強いので」

クールホーンは千弘の買言葉に笑みを浮かべると拳を構えた。

「ヌン…!!」

「…!!」

クールホーンの放った蹴りが千弘の腹へと直撃すると共に彼の身体を一直線にその場から吹き飛ばした。

「ぐう!?」

「きやあー!」

「なあ!? スンスンなにやってんだ!」

蹴り飛ばしたと同時に巨大な風圧が生じ付近にいたネムやハリベル達は近くの壁へと寄り掛かりその風圧を凌いでいたが、風圧が強すぎる為か体重の軽いスンスンは吹き飛ばされようとしていた。

そんな中、千弘を吹き飛ばしたクールホーンは千弘が吹き飛んでいった方向を見つめると態勢を低くさせる。

「逃さないわよ」

その言葉と共にクールホーンの身体は一瞬で虚空へと消え去っていった。

「消えた…!?ハリベル様…今のは一体…」

「…」

マリーローズとスンスンの腕を握っていたアPATCHが今の現象について尋ねるが、ハリベル自身も何が起こったのか認識して出来なかったのか、目を震わせていた。

そんな時。ハリベル達はふと横に目を向ける。そこには千弘と共にいたネムの姿があった。

「お前に聞きたい…アイツは…園原千弘は何者なのだ…?」

尋ねられたネムは淡々と答えた。

「ただの雑用であり私の友人です」

◇◇◇◇◇◇◇◇

千弘の身体はそのままラスノーチェスの宮廷内の壁を次々と突き破りながら吹き飛んでいく。

「いくわよ」

その一方で後方から砂埃を上げながら駆け抜けてくるクールホーンは一瞬にして吹き飛ぶ千弘まで追いつくとまるでバレーのように高速回転しながら飛び上がると吹き飛ぶ千弘に向けて脚を突き出した。

「あの夏の日の…○○○○!!!」

その叫びとピー音と共に振り上げられたその脚は見事に吹き飛ぶ千弘の腹へと直撃し、彼の身体をくの字のように曲げるとその場からさらに吹き飛ばした。

ドガシヤアアアアアン!!!

そして 吹き飛ばされた千弘の身体はラスノーチェスの分厚い壁を突き破り遂に外へと飛び出した。

「あら、ちよつとやりすぎたかしら?」

それと共に飛び出したクールホーンは千弘が落下した砂場へと着

地すると横たわる身体を見下ろした。吹き飛ばされ砂場へと落下したその身体はボロボロであり死神特有の黒い装束も所々に穴が空いていた。

「聞いていた割には案外あつけないわね。ねえ！もう終わりかしら？」

クールホーンは倒れている千弘へと呼び掛ける。だが、呼び掛けても千弘が起き上がる気配は無かった。

その時だった。

「ぐはあ!？」

クールホーンの身体が突然と前屈みとなる。突然と腹部から襲ってきた巨大な苦痛にクールホーンは胃液を吐き出すと共に腹部へと目を向けた。

「あ……あんだ……!!」

見ればそこには先程、目の前で倒れていた千弘が拳を握り締めたりクールホーンの腹へと深くその拳を突き刺していたのだ。

「あのすいません…流石に貴方の方から殴ってきたのでおあいこですよね?」

「…!!」

自身の腹へと拳を打ち付けるその表情は全くの無表情であった。

その直後。クールホーンは声を上げる事なくそのまま一直線上に吹き飛ばされていった。

「ぐ……ぬう!!!」

だが、クールホーンは咄嗟に空中で吹き飛ばぶ状態を立て直した。

「……」

状態を立て直し胃液に塗れた口元を拭うと共に殴られた箇所へと手を当てる。感じるのは想像を絶する程の痛みであった。

「……フフ（予想以上のダメージね…だけどそれがいい。ウズウズしてきたわ）」

だが、その痛みを感じた事によってクールホーンの内に秘められた本来の力を発動させるキツカケを作ってしまった。

「いい。いいわね貴方！ここまで気持ち良い攻撃は初めてよ！」

「え？」

千弘が首を傾げる中、クールホーンは高らかな笑い声を上げると腰に掛けてある刀へと手を伸ばすと握り締めた。

「…… “煌めき照らせ” ツ!!!」

その瞬間。クールホーンの身体が紅桜の花びらに包まれると共にその身体が巨大な大爆発を起こした。

「……ん？」

爆発した衝撃によって辺りに暴風が発生し散る砂が巻き上がり超巨大な砂嵐を発生させる。だが桜色の爆炎によって生じたその砂嵐は奇しくも現世に咲く桜の如き美しき姿へと変わっていく。

更に発生したその衝撃波の威力は凄まじく、二人がいる場所から遠く離れた場所に位置するラスノーチェスを小刻みだが揺らしていた。

「よくお聞きなさい！破面は必ず自分の力を抑えた斬魄刀を持っていてそれを解放する事で本来の強さを取り戻し何倍も強くなる事が可能なのよ！」

その言葉と共にクールホーンを中心に巻き起こる爆炎の中から巨大な白き翼が羽を散らしながら生えた。

「ほとんどは解放したらお終い。だけど私は数少ない第二段階の解放を持っているのよ！さあ！ここからは一気に本気で行くわよ!!」

その言葉と共に砂嵐が晴れ包まれていた煙が吹き去っていく。

「……」

千弘は驚愕した。そこに浮いていたのは上半身の胸回りと下半身の腰回りの部分だけを装甲で覆いそれ以外は全て生身を曝け出すアダムのような姿となったクールホーンであった。

服の下から曝け出された褐色の肌と見事に鍛え積み立てられた筋肉。その筋肉は翼から発せられる白い光に照らされ見事にその肉体美を披露していた。

白き翼が放つ光と筋肉が反射する光によって虚圏の薄暗い空が昼の如く照らされていった。その姿はまさに女神（嘔吐）に等しいと言っても過言ではない。

【シャルロツテ・クールホーン】『夜ノ女神ノ羽衣』

「花のように散りなさい」

輝きを放つ中、クールホーンはゆっくりと拳を構える。

その瞬間、クールホーンの身体がその場から消えると共に千弘の目の前へと現れると共に握りしめた巨大な拳を千弘へ目掛けて放った。

「ヌン!!」

「お」

放たれた拳を千弘は紙一重で避けていく。千弘の真横をすり抜けていった拳の拳圧は軌道上にある空気突き抜けていき地平線の彼方へと存在する砂を吹き飛ばしていった。

「ぬあああ!!!」

その直後。クールホーンの雄叫びと共に次々と拳が放たれた。千弘は向かってくる拳を全て避けていく。

そして迫り来る拳の雨が降り注ぐ中、千弘は遂に自ら動き出した。

「ヨッ。ハッ!」

向かってくる拳をアツサリと避けるとクールホーンの顔面へと数十発の連打を放った。

脆い音と共にクールホーンの身体へとその連打が叩き込まれてい

く。

「……効いたわ。少しね」

だが、その連打を受けたにも関わらずクールホーンは吹き飛ばす事なく何食わぬ顔で笑みを浮かべるともう一方の拳を千弘へ向けて放った。

「セイヤアツ!!!」

「お?」

空気を突き抜けながら放たれたその拳は――

千弘の腹へと深く突き刺さり彼の身体を大きく前屈みにさせた。

「いい?連打っていうのはね。相手を仕留めるために一発一発殺意を持って撃つだよ」

その言葉と共にゆつくりとのけぞる千弘の前でクールホーンは即座に拳を構える。

「こんな風に――ねッ!!!!!!」

その直後。千弘の身体へと何百……いや、何千もの拳が放たれた。次々と放たれていく拳は千弘の全身へと叩き込まれていき彼の死覇装を歪めていく。

『夜ノ女神の乱舞 (ラッシュ・オブ・ゴッドマリア)』

そして

「ゼイヤアアア!!!」

連打が終わった直後に雄叫びと共に振り回された脚が千弘の身体を蹴り飛ばしラスノーチェスへと吹き飛ばしていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「千弘さん…気を確かに…」

ネムさんの声が聞こえてくる。けど、それよりも私はある事を思い出した。

まだ霊術院に通って間もない頃だった。私は自身の武術に何か足りないと思っていた。何故剣術だけでなく武術にまで手を出したのか。それは簡単だ。もしも斬魄刀を紛失してしまった際に身を守る術がないからだ。斬魄刀を紛失しても少しでも自身の身を守るようにするために武術を学んだ。

だが、それを学んでも上手くはいかなかった。動きは出来たとしても威力は見せられた手本どおりにはいかない。格闘術について専門である碎蜂隊長から一時期は教えてもらったが、彼女の教えられた通りにしても的である岩を木っ端微塵にする事が出来なかった。

『いいか！木を砕けと言ったのだ！誰がそんな数百メートルもの岩石を砕けと言った!?というか砕けたのか!?私でも斬魄刀を使わないと無理だぞ!』

碎蜂隊長は私の身を案じてくれていたのか何度もそう私に言い訓練の中断を言い渡してくれていたが、私は諦めず何度も拳を突き立て、遂に「割る」ことから「砕く」事が出来るようになった。

これで碎蜂隊長と同じ域に達する事ができた。そう喜びに満ちていたが、碎蜂隊長から言い渡されたのは意外な一言であった。

「貴様の身体能力は大した者だ。だか…まだ一つ足りていないモノがある」

「一つ…?」

「ああ。それは「非情」だ。私と同じく「情けを捨てる」そうすればお前は体術において誰にも負けぬだろう」

碎蜂隊長が言っていた事の意味が何なのかよく分からず今までずっと考えてきた。卒業して隊に配属された後も時折考えていた。

だが、ようやくその意味が分かった。

“相手を仕留めるために一発一発殺意を持って撃つよ”

私に足りなかったもの。それは他の感情もない純粹なる“殺意”

「行くわよ園原千弘おおお!!!美しき世界を作り出す私の野望の礎と

おなりいよいよ!!!」

「ひいひいひい!?ハリベル様アアア!!空から!空から羽の生えた変態

がああ!!!」

「お…落ち着けアパッチ!あれはクールホーンだ!クールほー…:

おえ…」

「ハリベル様あ!?!」

叫び声をあげながら“あの人”が向かってきた。

「貴方のお陰で分かりましたよ」

私は立ち上がり心から御礼を…感謝の念を抱く。

ありがとう碎蜂隊長。ありがとう

———  
クールホーン先生。

向かってくる彼に向けて私は拳を握り締め最大限の殺意と感謝の念を込めながら放った。

「……!!!」

「へえ。やればできるじゃない。やっぱり藍染様の言った通

り強いわね貴方…」



「な…なあミラーローズ…」

「なんだアパッチ…」

「私ら…何を見せられてんだろう…」

「気にしたら負けだ…」

ある一点をアパッチやハリベル達は変な物を見るような目で見つめていた。一方でハリベルは先程のクールホーンの姿があまりにも受け入れきれなかったのか、後ろでスンスンに背中をさすられながらエズいていた。

そこには倒れるクールホーンの腕を握り締める千弘の姿があった。

「……ふふ。まさか土壇場で殴るのをやめて刀の鞘で突くなんて器用な坊やね」

「…貴方は私の欠けていたモノを教えてくれた恩師。殺したくなかったんですよ」

「全く…さっきの言葉を取り消したいものだわ。だけど、残念。あんな気迫を見せられちゃ取り消しようがない……がはあ……！」

「先生!!」

「先生!?!」

血を吐いたクールホーンを咄嗟に先生と叫んだ千弘にアパッチ達は驚きの声を漏らす。

「ごめんなさい…さっきの織姫ちゃんのいるところを知ってる…つて言うの…嘘だったの。貴方と戦いたいと思ってしまっただけ…本当に悪かったわ」

「そんな！先生が謝る必要なんかない！」

その一方で千弘は何故、藍染達と手を組んだのか尋ねた。

「先生…なぜ藍染なんかと…」

「初めて…破面化した際に言ったのよ…この世界を私の力で更に美しく彩りたいと…そしたら彼は言ってくれたの。『私と共に来れば今

の腐敗した世界を壊し君の望む美しき世界へと変えられる』と。バラガン陛下から無駄と言われてきた事を彼は否定せず受け入れてくれた。だから私は彼の元についたのよ」

クールホーンの答えに千弘はピシツと固まると即座に真実を伝えた。

「それ嘘ですよ」

「…え？」

「アイツ平気で人裏切るし付け入るの上手いので」

「嘘…でしょ!？」

「マジです。現にこちら側にいた際に好意を寄せていた方や敬意を抱いていた方を斬られていたので。それに、私がここへ来た目的は織姫さんの救出は勿論ですが、その様な所業を成した藍染のクソヤローを殴り飛ばすためでもあるので」

「……」

千弘の言葉を受けたクールホーンは黙ると共に先程のシリアス雰囲気を一気に消し去ると立ち上がった。

「藍染様…いや…藍染…!!よくも私を騙してくれたわね…!!」

その顔からは先程までの戦闘による疲労が一才もなく消え失せており、それを帳消しにする程の憤怒に満ちていた。

そしてクールホーンだけでなくハリベルも驚きの表情を浮かべ千弘へと尋ねた。

「そ…それは真実なのか…!？」

「ええ。貴方方も何を吹き込まれたか知りませんが、まず、絶対嘘です。根拠はないですが…」

「…!!」

千弘の返答にハリベルは驚くと共に目を震わせながら言葉を失った。

「あ、ネムさん。お怪我はありませんでしたか？」

「はい。千弘さんも…お怪我がなくて…何よりです…!」



ドガシヤアアアアンツ  
!!!!!!

「!?」

「な…なんだあ!?」

遂に目の前の壁が破壊された。辺りへと瓦礫が散り土煙が舞う中、その中から此方へと向かってくる複数の影が見えてきた。

その影は近づいてくるにつれて大きくなると共に鮮明になっていく。

「な…!?」

それを目を凝らしながら見たザエルアポロは驚愕する。そこにいたのは……

「藍染ぶつ飛ばす!!!」

「ウキウキな千弘さん…可愛いです」

「待て二人とも!まずは話を聞いてからだ!!」

「ハリベル様!大丈夫なんですか!?こんな奴らについて!」

「本当にとんでもない事になり兼ねませんよ!?」

「まさに修羅の旅路ですわ」

土煙をあげながら駆け出す二人の死神と5人の破面達であった。

ザエルアポロ・石田・恋次 「な…何だあれええええ!!!!!!」

## ハゲ染 VS 連合軍

「……！」

ラスノーチエスの最奥にある玉座。月の見える場所にて、切り札であるクールホーンが倒された知らせを耳にした藍染は苦悩のあまり歯を噛み締めていた。

「いやあくまさが切り札まで倒されてしまうとはね……どないしましよか？」

「……」

糸が途切れたかのように計画が再び破綻した事で藍染が困惑する中、今後の作戦についてギンは尋ねた。

そんな中、藍染は頭の中で再び計画を練り直し新たなる作戦を考え出す。

「スタークとバラガンそしてハリベルとウルキオラを引き連れ現世へと向かおう。崩玉もすぐに覚醒を迎えるだろうからね。それ以外の破面はもう使い物にならない。ここに置いていく」

「了々解です」

「御意……」

市丸と東仙が頷く中、入り口から伝令兵士が息を切らしながら入ってきた。

「藍染様……ご報告致します……敗れたクールホーン様……並びに虚夜宮内にて待機していたハリベル様とその従属官3名……更に……：……：バラガン様が寝返った模様……!!」

「なに……!?!」

「その上……ザエルアポロ様が倒され、ウルキオラ様が黒崎一護と衝

その時であった。

ドガシヤアアアアンツ  
!!!!!!

伝令兵士の背後にある入り口が巨大な爆発音と共に爆発した。発  
生した衝撃と風圧によって辺りに瓦礫が散らばり次々と土煙が立ち  
込めてくる。

そんな中、目の前に複数人もの人影が見えてきた。

「…!!」

それを見た瞬間 藍染は驚愕しながらも目を鋭くさせる。

すると 一番手前に立つ影が腕を横に振るい立ち込めていた煙を  
一瞬で晴らした。

「やっと思つきましたよ藍染このヤロー」

「私達を騙したこの恨み…生徒達に変わってこのクールホーンが美し  
く晴らしてあげるわ」

煙が晴れたそこに立っていたのは小柄な身でありながらも全身か  
ら闘気を放ちネムと共に背中を合わせながら月に代わってお仕置き  
ポーズを決める千弘、そして手でハートを型取りながら美しく積み立  
てられた筋肉を披露するクールホーン、更にその後ろにはマリ・ロー  
ズ、スンスンとそれぞれ背中を合わせながらジョジョ立ちを決めるハ  
リベルとアパッチ。脚を組みながら椅子に座るバラガンをおだてる  
かの様なポーズを取る3名の従属官だった。

◆◆◆◆◆

それは数十分前の事であった。

ザエルアポロの前に現れた千弘やクールホーンが率いる軍団はザ  
エルアポロを見つけると立ち止まった。

「おわつと!?!誰かいますね。あれも破面ですか?」

「ああ。奴はザエルアポロ…第8十刃だ…」

「ザエルアポロ…神秘的な名前ですね。んん?」

ハリベルの説明に頷く中、千弘はザエルアポロの背後に立っている  
二人の人物へと目を向けた。中には千弘が知る白哉の所属する六番  
隊副隊長である恋次の姿があった。

「あ!阿散井副隊長!」

「げ!?!お…お前は…」

「奇遇ですね!あれ?でもなぜ貴方が…あ!成る程。山本御大が向かわせたのですね」

「いや…それは…」

恋次が困惑する中、千弘はもう一人の男性へと目を向ける。それはなんと、数ヶ月前に千弘が吹き飛ばした滅却師であった。

一方で滅却師は千弘の事を覚えているのか、目があつた途端に声を出す。

「ああ!!お前は!僕を吹き飛ばした奴!」

「え?あ、貴方はあの時の滅却師じゃないですか。貴方までここにいらるとは」

「吹き飛ばした相手によくもそんな抜け抜けとした態度が取れるな!?!というかそれよりも!!なぜ君が破面を連れてくるんだ!?!」

「目的が合致したので取り敢えず一緒にになりました」

石田が千弘達がハリベル達を連れてくる事について尋ねると千弘はそれについて簡単に答えた。

その一方で、ザエルアポロは千弘の言葉を聞き、同行しているハリベル達を目を鋭くさせながら睨みつけた。

「それはどう言う事かね?目的が合致?目的とは何なのかね?」

「…」

ザエルアポロが尋ねるとハリベルは前に出て答える。

「私は」

「簡単よ。私達を騙した藍染を叩き潰す為よ」

「な!?!」

ところがどっこい。いきなりクールホーンが前に出て淡々と答えた。それ。聞いたハリベルは咄嗟に訂正する。

「おい…!藍染様にまだ何も聞いてないだろ…!?!」

「裏切られた子が言うんだから信憑性は高いでしょ。それに…薄々、アンタも感じてるんじゃないの?」

「それは…」

ハリベルが言葉を失う中、クールホーンに続くように千弘も前に出

る。

「そう言う訳で、ここは通らせていただきますよ。井上織姫さんの救出もあるのです」

「井上織姫？ああ。グリムジョーの腕を治した女か」

千弘の言葉にザエルアポロは納得するものの、前を退こうとはしなかった。いや、それどころか腰のポケットを弄ると何かを取り出す。

「そうか。だが、残念な事に…僕は藍染様に色々と提供してもらった恩がある。だからここで君らを止めさせてもらおうよ…!!」

「…!!」

その言葉と共にザエルアポロは取り出した物を千弘達目掛けて投げた。それを見た瞬間にネムやハリベルの従属官達は構える。そんな中、千弘は投げられた物を不思議そうに見つめていた。

「ん？なんですかあれ？」

「あれは…まずいー」

千弘が首を傾げる中、ハリベルは思い出したのか、咄嗟に塞ごうと前に出ようとするが既に遅かった。

ザエルアポロが投擲した物は空中で一瞬 小さく破裂するとその直後に巨大な閃光を放ち辺りを包み込んだ。

「ぐう…!!」

その閃光に視界を照らされた石田達は顔を腕で覆う。

そして その閃光が収まると石田はゆっくりと腕を解き前を見た。

「な…!!」

石田は絶句する。そこにはネムやアパッチ達を残して先程まで立っていた千弘、クールホーン、ハリベルの姿が

—— 跡形もなく消え失せていたのだ。



「な…!!消えた!!」

「消えたんじゃない。閉じ込めたんだよ。僕が投げたのは反膜の匪といってね。対象物を永久的に異次元に閉じ込めておける代物なのさ」  
「なんだと!?!」

「じ…じゃあアイツらは…!?!」

「勿論 異次元さ。流石にハリベル達がいたからもって数時間つと言ったところだが、園原千弘やクールホーンを数時間閉じ込めておけるだけでも大金屋だろう」

石田や恋次に答えるとザエルアポロは残りの4名へと目を向けた。

「さて、侵入者に加担した君らには藍染様に代わって僕が罰を下そう」

「く…!!」

「…」

ザエルアポロから粛清対象とされたアパッチ達は口元を噛み締め、ネムも千弘を消し去ったザエルアポロへと完全なる敵意と殺意を抱き戦闘体制を取った。

「…よくも…よくも千弘さん…を…!」

「いくら十刃だからってアタシらのハリベル様を封印したからには許さねえ!!」

「絞め殺してさしあげますわ…!!」

戦闘態勢を取るネムに続く様にアパッチ達もザエルアポロを迎え撃つべく体制を低くする。

その時だった。

目の前の壁が破壊され巻き上がる煙の中から数人の破面を連れた大柄な隻眼の破面が現れた。

「おやおや。これは心強い援軍が来てくれたモノだね。第2十刃『バラガン』殿」

「なに!?!」

ザエルアポロがこぼした言葉にアパッチ達は目を大きく見開く。壁から現れた初老の破面はなんと十刃の中でハリベルよりも上の強

さを持つ者だったのだ。

「さてさてバラガン殿。園原千弘はいましたが僕の僕の反膜の匪で異次元に葬ったところだ。今は残りの反逆者達に手を下すところだね」

「……」

ザエルアポロが進言する中、バラガンは斧を握りながら一度、アパッチ達を見ると即座にザエルアポロへと目を向けた。

「…ん!?!」

その瞬間、ザエルアポロの両肩にバラガンの手が二度置かれた。

「な…!?!」

両肩に触れられた瞬間、ザエルアポロの両腕がまるで骨が折れたかのように垂れ下がった。何が起こったのか分からないが、ザエルアポロ自身は分かっているのかバラガンを睨みつける。

「ど…どういふつもりだ!?!」

「儂は元々、ボス…いや、藍染の小僧がいけすかなくてな。これを機に儂も奴を叩き潰そうと思う」

「なんだと…!!ぐう!?!」

驚愕した直後、ザエルアポロの身体が脚から崩れ落ち地面に両手をついた。

「悪いが貴様はここで強制退場（リタイア）だ。さらばだ」

「く…!?!くそがああああああ!!!」

その言葉と共にバラガンが巨大な斧を振り下ろした。迫り来る巨大な斧の影に覆われる中、ザエルアポロは断末魔を上げながらその生涯を終えたのだった。

すると

パキイン…ツ!!!

「ん?」

バラガンの目の前の空間がガラスの割れる音と共に裂けると、中か

ら千弘が現れた。

「よつと…あら？貴方は…」

「貴様が園原千弘か」

バラガンは現れた千弘を見ると斧を肩に掛ける。すると、後から出てきたクールホーンやハリベルはその姿を見た瞬間に驚いた。

「お前は…バラガン…！」

「ほう？まさか貴様らもいたとはなハリベル、クールホーン」

バラガンが二人の姿を見る中、千弘は突然と現れていたバラガンという男に首を傾げる。

「貴方はどちら様で？」

「儂は第二十刃バラガンだ。園原千弘、儂に協力しろ」

「はい？」

その後、バラガンから目的を話されたと同時に協力を要請され、千弘は難なく承諾。ハリベル達からの反対もあったが、千弘は特に気にも留める事は無かった。

そして連合軍を結成する様な形となった千弘達はそのままラスノーチエス内を突き進み遂に藍染の待機する場所へと到着したという訳である。

—————

—————

—————

「ほう。だからここまで来た…と」

藍染は鋭い目をバラガンへと向けた。

「驚いたよ。まさか君が他人の下につくとはね」

「ふん。勘違いが過ぎるぞボス…いや、藍染。儂はただ手を組んだまだけだ。貴様をその玉座から引き摺り下ろす為にな」

「成る程。初めて会った時と比べると随分と成り下がってしまったものだね。虚圏の神が聞いて呆れるよ」

「なんだと…？」

藍染の挑発にバラガンが引つ掛かり額に筋を湧き上がらせる中、千弘は手で制す。

「落ち着いてくださいバラガンさん。挑発はアイツの十八番です」  
「フン」

気に入らないのかバラガンが鼻を鳴らす中、ハリベルは藍染に尋ねた。

「藍染様…一つお聞きしたい…。私達を騙していたというのは…事実なのですか…?」

「ハリベルか。君は確か犠牲のない世界を望んでいたな」

ハリベルの問いに対して藍染は目の色を冷酷に満ちた鋭い目へと変化させると答えた。

「その通りさ。君達など最初から私の計画のためのコマの一つに過ぎない。用が済めば即座に斬り捨てる予定だった」

「な…!!」

その答えにハリベルは目を震わせた。十刃の中でも比較的忠誠心の高いハリベルにとってその返答は精神を揺さぶらせるモノであると同時に怒りを湧き上がらせた。

そんな中、千弘は冷酷な藍染に対して怒りを込めた鋭い目を向けて睨みつけた。

「取り敢えず藍染隊長…微力な私ですが、少々出しゃばらせていただきます。ここで貴方を倒して連れ帰る」

「そうか。できるものならば――

――やってみるといい」

その瞬間 藍染の身体から巨大な霊気が放たれた。その霊気の量は十刃を遥かに凌駕しており辺りを暴風のような風と巨大な威圧感で包み込んでいく。それと共に両側で待機していた市丸と東仙も同じく霊気を放っていた。

3人の霊気がまるで共鳴するかの様にラスノーチェスだけでなく虚圏の空気を揺らしていった。因みにこの風で藍染の帽子が吹き飛ばない件については触れないでおこう。

「崩玉を手にした私の前には君達などゴミに等しい」

「崩玉？ウカムのレア素材ですか？まあいいです。では開戦と行きましようか。先生、合図をお願いします」

「オツケーよ」

千弘から頼まれたクールホーンは自慢の長い髪を描き上げながらポーズを決める。

クールホーン「私が…天に立つ（☒ ?? ☒）」

千弘「ダ〜ハ〜ハツハツハツ!!!そっくり！先生もう一回！もう一回お願いします！」

クールホーン「崩玉を手にした私の前には君達などゴミに等しい…!!」

千弘「あく!!!もうダメ！限界！もう無理!!」

「!!」「ふうふう…!!」

藍染「……!!」

クールホーンのモノマネとそれを見て大爆笑する千弘、更にバラガンを除く辺りの全員がその爆笑に釣られてほくそ笑み出す中、藍染は顔を真っ赤にさせながらプルプル震え出すと刀を引き抜いた。

「園原千弘…楽に死ぬると思わない事だ…!!」

その時だった。

「それぐらい分かっていますよインテリ眼鏡」

背後から千弘の声が聞こえると同時に藍染の帽子が吹き飛ばされた。それによって藍染の隠されていた頭頂部が再び顕となってしまう。

「…!!」

それに気づいた藍染は驚くと共に背後で自身に背を向けながら立つ千弘に鋭い目を向けた。

「き…!?きさち…がはあ…」

振り向き言葉を発しようとしたその瞬間 愛染の身体がゆっくり

と床に崩れ落ち、皆に向けて頭頂部を曝け出す様にして倒れた。

「安心してください。峰打ちです」

「藍染様…!?!」

「あれまゝ。始解して間もなくアツサリとやられてしもうたね」

その光景を見つめていた市丸は不敵な笑みを浮かべるのであった。

## 裏切りのバラガン ザビ染の覚醒

千弘達のいる最奥から最も離れた端の場所。藍染がいる場所とは異なる場所にて一人の死神と破面が対峙していた。

「…!」

一人は黒く長い死覇装を身に纏う青年『黒崎一護』もう一人は藍染より第4の数字を与えられた十刃『ウルキオラ・シファー』

「どうした黒崎一護。それで終わりか？」

「いや…まだだ…!!」

対峙している二人のうち、ウルキオラは所々に傷を負っているながらもまるで何ともないかの様な表情を浮かべていた。それに対して一護は全身に傷を負っているだけでなく肩で息をしていた。

だが、一護は決して諦める事は無かった。自身のクラスメイトである織姫を助けるまでは絶対に諦めないと心に誓い、今にも崩れそうになる自身の身体にも訴えかける。

「存外…しぶといものだな。(藍染様が警戒していた男に会ってみたかったものだが…まあコイツを始末した後でも問題あるまい)」

ウルキオラがそう呟いた時であった。

ラスノーチエスの最奥が爆発した。

「……?!」

その爆発と共に辺りに驚く爆発音に驚いたウルキオラはその場へと目を向けた。

「何が…起こっている…!?!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「終わりです。藍染さん」

始解を発動し、たった0.1秒経過した直後に千弘の一太刀をその身に受けた藍染はゆっくりとその場に倒れた。

覚醒しようとした藍染が千弘の不可視の一閃によって撃破された事により辺りから先程の緊迫した空気が消えていき、両者は臨戦体制を解き始める。

「それと…」

その中で藍染の背後に立っていた千弘は倒れる藍染に目を向けるとそのまま付近に立っていた市丸と東仙へと目を向けた。

「あなた方お二人も連れて帰りますよ。下手な抵抗はしない事を願います」

「……」

千弘の言葉に市丸は相変わらず笑みを浮かべているが、その一方で東仙は黙秘する中、突然、刀を引き抜くと喉元にその切先を向けた。

「…何をしているのですか？」

「…」

千弘が尋ねると東仙は何も答えず、ただゆっくりと首の根本へと切先を近づけていった。

だが、質問に答えず黙って逝く事を千弘は許さなかった。

「質問してるでしょうが！」

「!?」

その場に突然と金属音が響き渡った。その音と共に東仙の手元から刀が弾き飛ばされ遠くの場合に突き刺さる。そして東仙の武器が無くなった事を確認した千弘は口元を動かし鬼道を唱えた。

「縛道の四　『這繩』　ッ!!」

「ぐ?!」

そう唱えられた瞬間、千弘の身体から一本の長い縄が現れ目にも止まらぬ速さで一瞬にして東仙を隙間なく巻きつけ拘束した。

「なんだこの威力は!? 離せ! 今すぐこの縄を解け!!」

「そうは行きません。目の前で自殺を許す程…私は大人ではないので」

「ならば私を殺せ! 今すぐにだッ!!」

「さて、取り敢えず東仙隊長はオツケーとして、次は貴方ですよ。市丸隊長」



「おい！無視するなあ!!」

ピョンピョンと水揚げされた魚の如く跳ねながら騒ぎ立てる東仙を尻目に千弘は今もなお不敵な笑みを浮かべているギンへ目を向けた。

だが、寸前に千弘は倒れている藍染に目を向けた。

「その前に…藍染さんも拘束しときましようか。また鏡花なんとかを使われると厄介なので」

そう言い千弘は再び鬼道を唱え這縄で倒れ臥す藍染を拘束する。藍染が拘束されると千弘は再びギンへと目を向けた。

「貴方の目的は分かりませんがご同行が無理ならば拘束します」

「うくん…僕は別にええよ。けど…今、そんな状況じゃないんやない？」

「え？」

ギンの言葉に千弘が首を傾げた時であった。

「千弘さん！避けてください！」

「ん？」

背後から自身の名を呼ぶネムの声が聞こえた。それに対して千弘はゆっくりと振り向くとそこには自身に向けて斧を振り下ろすバラガンの姿があった。

「お前との同盟もここまでだ」

その一言と共にバラガンの斧が千弘目掛けて振り下ろされた。振り下ろされたその斧は空気を突き抜け対象を叩き潰すべく向かってくる。

だが、相変わらず千弘は無表情。まるでその動作自体を馬鹿馬鹿しく見ているようだった。

「危ないのでやめてください」

その瞬間 バラガンの腹部に目掛けて千弘の斬魄刀の柄が突きつけられた。

「…ぐ!?がはあ…!!」

深く突き刺さった鷹によってバラガンは動作を中断すると共に体

勢を前のめりに倒し地面に手をつくと共に口内から酸素を吐き出した。

「全く…何ですかいきなり…ん？」

バラガンを吹き飛ばした千弘は突然の彼の行動に呆れながら辺りへと目を向けると首を傾げた。

そこにはバラガンの従属官が斬魄刀を此方へ向けていた。その傍らでは攻撃を受けたのか、スンスンを抱き抱えるアパッチ達の姿もあった。

「テメえら…！やっぱ裏切りやがったな…!!」

「それによくもハリベル様を…!!」

「ふん。裏切るも何も最初から仲間になった訳ではない」

アパッチとミラ・ローズは仲間であるスンスンを攻撃された事に怒りを露わにする。そんな彼女らも左右からバラガンの従属官である二人の破面から刀を向けられており行動を封じられていた。

更に辺りを見渡せば、もつと驚くべき光景が広がっていた。

「な…ネムさん…!!」

自身と最も交流が深く親友と呼ぶべき死神であるネムがバラガンの従属官であるキヤリアスに拘束されていたのだ。いや、それだけではない。よく見れば先程までその場にいたハリベルとクールホーンが姿を消していた。

「それに先生とハリベルさんが…」

「随分と驚いておるようだが…儂も藍染から反膜の榧を預かっていな。奴ら二人にはしばらくの間 消えてもらった」

そう言い地面に膝を付いていたバラガンは不気味な笑みを浮かべる。

「そして貴様の連れであるメスの命も我が手中。もしもピクリと動かせばあのメスの命はないと思え」

バラガンは忠告すると共に手を挙げる。すると、それに答えたキヤリアスはネムの首筋へと斬魄刀を突きつけた。

「申し訳…ありません…千弘さん…」

捕らえられていたネムは弱々しい声で謝罪の言葉を口にした。身体には特に傷や打撲などは見当たらないが、恐らく背後から攻撃を受けその隙に捕らえられてしまったのだろう。

それを見た千弘は瞳を震わせながら地面に手を付いているバラガンへ目を向けた。

「なぜ……こんな事を……」

千弘が震えた声で尋ねるとバラガンは腹を抑えながら答える。

「フン。先程も言ったであろう？ 目的は達成し貴様はもう用済みだ。儂が貴様に手を貸した事が知られれば生涯の恥となりうる。故にここで死んでもらう」

「……即ちネムさんは人質……ですか……」

ネムが人質に取られていると認識した千弘はそのまま顔を俯かせ佇んでしまった。

それを後ろから見ていたギンは佇んでいる千弘から何かを感じ取ったのか冷や汗を流し始める。

「おいおい……これは不味いなあ……」

その一方でバラガンはゆっくりと立ち上がり俯く千弘の肩などに触れる。

「もういくら貴様とて儂からは逃げられん。帰刃など使わずこの手で直々に葬ってやろう……!!」

その言葉と共にバラガンの斧がゆっくりと振り上げられた。彼のこの発言の意味は文字通り彼からはもう物理的に逃げる事が不可能であるという事だ。

その理由はバラガンの能力による影響である。バラガンが司る能力は『老い』彼が触れた箇所は急激に老いていき遂には朽ち果ていくのだ。例としてあげるならば腕に触れれば骨が脆くなり容易く骨折。そしてこれはバラガンの身体の表面に攻撃を放つ事でも適用される。

バラガンが触れたのは千弘の両手と両足。即ち――

—— 時期に千弘の両手両足の骨が骨折してしまうのだ。いくら千弘でも脚の骨が腐り切つてしまえば闘う事は不可能である。

そう考えていたバラガンは自身の能力を明かさず機会を待っていたのだ。今がその時。触れた事で勝利を確信したバラガンは立ち尽くす千弘目掛けて再び斧を振りかざす。両足の骨が折れ、その身が大地に伏すまで待たない。

「…!!」

それを後方から見ていたネムは目を大きく開くと拘束から逃れるべく身体を揺らす。だが、拘束している破面の腕力の方が上なのか一向に解く事ができなかつた。

「ぐ!?!」

「無駄だ。陛下の能力に触れられれば奴とてもう身体は使い物にならん」

暴れるネムを咄嗟に床へ叩きつけキヤリアスは強く言い放つ。だが、その言葉はネムに届いていない。ネムは千弘を守るべく必死に身体を動かすが死神よりも身体能力が桁違いに高い破面の拘束を解く事が不可能であつた。

「終わりだ。せめて貴様を未来永劫にない最強の死神として覚えておいてやる」

そして

「死ね」

その言葉と共にバラガンの斧は俯く千弘に目掛けて振り下ろされた。

その時だった。

「……………遺言はそれだけですか？」  
「!?」

斧が頭の上に振り下ろされる直前にその斧が金属音と共に弾かれた。弾かれた斧はそのまま空中を回転し離れた位置へと突き刺さる。

一方で、バラガンの額からは大量の冷や汗が流れていた。

「な…何故だ…!?なぜ立っていられるのだ!?!」

見れば触れてから数分が経過しているにも関わらず千弘の身体には何の異常も発生しておらず、五体満足のままなのだ。能力は絶対であり必ずどのような死神でも破面でも効果も発揮する。

だが、千弘にはまったくその効果の発揮が見られていないのだ。

「知りませんよそんな事。触れられただけで何だって言うんですか？  
くだらない」

「な…に!?」

バラガンはようやく認識した。自身らのボスであつた藍染が警戒していた男は実力どころか『能力』さえも通じない。別次元の化け物である事を。

咄嗟にバラガンは後方へと目を向けて自身の従属官へと指示を出す。

「おい…そのメスを殺—————はえ!?!」

背後へと目を向けその光景を見た瞬間　バラガンはつい腑抜けた声を漏らしてしまう。

何とそこには寸前ほんのコンマ数秒前まで目の前にいた千弘が立っておりネムを拘束していたキャリアス、そしてアパッチ達へと刃を向けていた従属官2名の首が斬り飛ばされていたのだ。

「き…貴様…いつからそこに…」

「『瞬歩』で移動しました。他の方々に比べればフォームがイマイチでまだまだ未熟ですがね」

そう言い従属官達を瞬殺した千弘は解放されたネムに手を差し出して立ち上がらせる。

「大丈夫ですか？ネムさん」

「はい…千弘さん…」

立ち上がったネムは握った千弘の手を更に強く握り締める。

「本当に…ありがとうございます…お手を煩わせてしまい大変申し訳ありません…」

ネムが謝罪をする中、千弘は首を横に振り背伸びをしながら彼女の頭を撫でた。

「いえいえ。お安い御用ですよ。副長は我が隊を纏める大切な方。守り通すのは当然ですから」

「(隊を纏める……?)」

マユリそつちのけでネムをあたかも隊長であるかのような発言をする千弘にネムは内心、不思議に思いながらも笑みを浮かべる。

「あらら。こんなに埃が…パンパンと…よしオツケー」

そしてネムの安否を確認し、死覇装の所々に付着していた埃を払った千弘は頷くと、背後に立っているバラガンへと目を向けた。

「さてと…」

「…!!」

此方へと振り向いた千弘の表情を見た瞬間、バラガンの額から流れ出る汗の量は更に増す。

「よくも私の親友であるネムさんに酷い真似をしてくれましたね…」

此方を見つめるその瞳は誰よりも鋭く冷酷であり見た者全てを無に帰す『化け物』のようなモノであった。

それを見たバラガンは今まで感じた事がない感情が溢れ出す。それは『恐怖』目の前に立つ超次元の生物を目にした事でその存在に対する激しい拒絶反応が無意識に生じてしまったのだ。

「ぐう…!!」

だが、バラガンは決して引くことはない。即座に後方へ跳躍すると先程、千弘に弾き飛ばされた斧を再び握り締める。

「蟻ごときが儂に牙を剥くなど笑止…ッ!!我が【虚圏の神】本来の力で葬ってくれよう!!」

斧を握りしめたバラガンは唱えた。

朽ちろ——『髑髏大帝（アロガンテ）』——ッ!!!

すると 斬魄刀が一瞬光だしバラガンの身体が煙幕へと包まれていった。

その煙幕が晴れると、そこには全身から肉が抜け落ち骸だけの恐ろしい姿となったバラガンが立っていた。

骸へと変化したバラガンの全身からは黒い靄が溢れ出ており、なんと触れた箇所を次々と朽ち果てさせていったのだ。バラガンの足元にある足場は既にガラスのように砕け散りながら空気へと溶けていつており足場が完全に消え失せていた。

「これこそ我が真の姿!!不用意に攻撃する事は勧めないぞ…?我が全身から発するオーラは全てを朽ち果てさせ無に帰す!触れれば貴様は瞬（すん）で塵と化するのだ…!!」

その言葉と共にオーラは更に拡大していき辺りを崩壊させていく。アパッチ達はそのオーラから逃れるべく千弘の元へと集まり避難した。

「お…おい!どうすんだよ!このままじゃ藍染のヤロー共々、共倒れだぞ!」

「何か策はないのかい!」

「…」

付近に寄ってきたアパッチやミラ・ローズが千弘へと詰め寄る中、千弘はこの発言を耳に入れず、バラガンをまるで「アホ」を見るかのような目を向けていた。

「はあ…何かつくづく…理解ができませんね…あの人…」

「はあ!?!」

アパッチに対して千弘が腑抜けた声で軽く返答する中、バラガンは全身から更にオーラを放出する。

「これで貴様は手も足も出まい!! さあ! 我が力に打ち滅ぼされるが――

だが、それすらも千弘には全く効果を及ぼす事はなかった。

「だからもういいですってそんなの」

「があ…!?!」

そう溢した瞬間。バラガンの視界がガラスのように黒い亀裂が走っていき次々と欠けていく。

「何なんですか? 力を借りたから生涯の恥? だから私を? 恩を仇で返すというのですか? よっほどの事情があるならば私は聞き入れますが…: そんな自己中な理由でされるのは――

――本当に腹が立つんですよ」

その言葉が終わると共にバラガンの視界は闇の中へと消え去ると共に骸と化した全身は粉々に砕け散っていった。

「な…: 儂の身体が!?! 何をしたのだ!?!」

「はい? ただ斬っただけですよ?」

「斬っただと!?! 嘘だ!! 貴様は動きもしなかった…: その状態からどうやっ――まさか…!?!」

先程から変わらぬ千弘の姿勢と斬られた感覚さえも感じさせない剣術。ようやく斬られたと自覚したバラガンは再び理解した。この千弘という男は自身さえも捉えきれない超次元的な速度で刀を振り回していたという事を。

「おのれ…!?! お前のような物がなぜこの世に…!?!」



崩れゆく中、バラガンは自身を鋭い瞳で見つめる千弘を見た。

「この化けも――

そして 最後の言葉を言い終える事なくバラガンの身体はゆつくりと崩れ去っていき空気の中へと溶けて消えていった。

――

――

――

バラガンが消え去った事により辺りは再び沈黙に包まれた。

「さてと……」

千弘は刀を納めるとネムに顔を向け両手を広げながら抱きついた。

「ネムさ〜くん！良かった！本当にご無事で何よりです！」

抱きついた千弘は飛び上がりながら首に手を回し抱きつくと頬を擦り寄せた。すると、それが嬉しいのかネムも頬を赤くさせながら抱きついた千弘を抱き締め返して頬を擦り寄せる。

「お陰様で……！貴方も無事で本当に……よかったです……」

それから、千弘がバラガンを倒した事によって彼の反膜の檻が解けてハリベルとクールホーンは無事に帰還した。

クールホーンが帰還すると千弘は即座に彼に駆け寄った。

「先生……無事で!!」

「ええ。心配かけたわね。怪我はない？」

「はい先生！」

クールホーンはハリベルと同じくピンピンしており自慢の筋肉も健在だ。もう彼らの邪魔をする者はこの場にはいないだろう。

「さてと、あとは市丸隊長達と藍染隊長を拘束して織姫さんを探すだけだ」

そう言い千弘はネムと共に本来の目的である織姫の散策を再開しこの場を立ち去ろうとする。

その時であった。

!!!!

その場を超巨大な霊圧が覆った。その霊圧は辺りの瓦礫を次々と吹き飛ばしていき千弘、クールホーン、ネム以外の全員は瞳を震わせると共に冷や汗を流し始めた。

3人以外の皆が驚く中、全員はその霊圧が感じられる場所へと目を向けた。

そこには千弘によって倒され、拘束された藍染が立っていたのだ。だが、先程とは雰囲気が一変していた。

千弘によって刈られていた箇所髪が再生すると共に背中まで伸び、全身に纏う衣服はローブのような物へと変化し、唯一人間味を感じさせていた目は青と白に分けられていた。

「ようやく崩玉が…私の意思に答えたようだ…」

不気味な白い瞳を輝かせながら自身の手脚を眺めた藍染はその不気味な瞳を千弘達へと向ける。

「さて園原千弘君。第二ラウンドと行こうか…!!」

「ええ〜」

突然と変化した藍染から再戦を申し込まれた千弘は嫌そうな表情を浮かべながらも頷く。

「まあいいですよ。終わったらちゃんとか束されてくださいよ。というか何故に早着替えと植毛を？」

## ぶつかり合う二人の超越者

「さて、第二ラウンドと行こうか」

新たな姿へと変貌し千弘の縛道による拘束を引きちぎった藍染は東仙を担いだギンを引き退らせると、そのままゆっくりと歩いてくる。皆が構える中、千弘は姿を変えた藍染に首を傾げていた。

「何ですかその姿？天に立つおじさん最終形態ですか？」

「そんな口もすぐに叩けなくなるぞ。私はもう死神でも虚でもない。全てを超越する存在へとなり得たのだからな」

その瞬間

——藍染の姿が一瞬にして空気へと溶ける様にして消え去ると千弘の前へ現れる。

「…!!」

「おっ」

斬魄刀を引き抜いた藍染は千弘に向けて振り下ろす。対して、千弘も斬魄刀を鞘ごと引き抜くとその一撃を受け止めた。

二人の斬魄刀が衝突した事で鳴り響いた金属音と共に二人を中心に巨大な衝撃波がサークル状に広がり辺りの瓦礫を吹き飛ばしている。

その衝撃波は千弘の背後に立っていたネム達だけでなく藍染の後ろに立っていたギン達にも影響を及ぼしていった。

「ぐ!?!」

迫り来る突風によってハリベルやアパッチ達は腕で顔を覆い風を防いでいたが、その凄まじい威力に耐えきれず少しずつ身体が後ろへと引き摺られていった。

そんな中、目の前では迫り来る風圧をもともせず腕を組みながら

クールホーンは見据えていた。そしてクールホーンの身体の影に隠れるようにネムも同じく目の前の光景に目を向けていた。

「手助けは野暮な様ね」

「千弘さん…」

皆が見ている合間にも戦いは続いていた。藍染が瞬歩の何十倍ものスピードで周囲から千弘に向けて切り掛かっており、千弘もそれを刀の塚で全て防いでいた。

一度その場でぶつかり合うと二人は消え別の場所でぶつかり合う。

次々と辺りには刀と刀のぶつかり合う金属音が響き渡ると共に衝撃波が発生し瓦礫を吹き飛ばしていった。

「あら。藍染もやるわね。あの子と互角だなんて。いや、互角というより彼が遊んでいるのかしら？」

「恐らく。ですが、藍染隊長も…相当な力を得ているかと。千弘さんとあそこまで渡り合う相手は…初めて見ます…」

そう言うネムの額からは一筋の汗が流れていた。

—————

二人の闘いは苛烈さを増していき、その領域はもはや死神も虚さえも介入できない程にまで発展していた。

「フン…!!」

「おっ」

二人は次々と空中で衝突し合い、辺りに影響を及ぼせながら互いの武器をぶつけていく。それは遂に剣だけでなく拳や脚などもぶつかり合っつていき先程まで剣の金属音のみを響き渡らせていたが、肉体と肉体がぶつかり合う鈍い音までも響き始めていった。

「ぬん…!!」

一瞬にして藍染は千弘の背後へと現れると拳を放つ。それに対して千弘も拳を放ち二人の拳が衝突し再び衝撃波を発生させた。瓦礫を吹き飛ばしていく中、藍染は再び姿を消してしまう。だが、千弘自身も藍染の動きを先読みし、同じく姿を消すと再び現れた彼の前に立った。

「ばあー」

「な…!!」

それを見た藍染は咄嗟に長く俊敏な脚を千弘目掛けて振り回した。それに対して千弘も小さく華奢な脚を振り回して藍染の脚へとぶつけていった。

空中で再び肉体がぶつかり合う中、双方は即座に体勢を立て直すと空中から地面へと着地し、互いに向かい合うと再び武器を衝突させた。

「…!!」

「よっ」

次々と刀がぶつかり合い金属音を響き渡らせる中、再び大きく衝突し、両者は鏝迫り合いとなる。

鞘と刀身が擦れ合いながら火花を散らせる中、藍染は自身の刀を難なく受け止める千弘に向けて笑みを浮かべる。

「どうだ園原千弘。これほど長く続いた戦いは久しぶりだろう」

「はあ…まあ確かに霊術院に入ってからはずうですね。みなさん体調が悪いのか、模擬戦の時はみんな倒れてしまいましたから」

藍染は刀に力を込める中、タイミングを見極めると即座に力を抜きその場から瞬歩で一瞬にして千弘の背後へと回ると刀を振るった。

それをアツサリと千弘は見えているのか、振り向かず、直立する。すると、藍染の刀が一瞬にして千弘の見えない斬撃「不可視の抜刀」によって弾かれた。

「く…!!」

先程から幾千もの刃を受け止められた上に今度は刀で弾かれた藍染は後方へと後退すると弾かれた刀を見つめた。見れば刀には千弘の刀によるものなのか、若干の傷跡が見られた。

「やはりまだまだ君には及ばない…か。この状態になって尚…君の斬魄刀の刀身すら見えないとはね…」

「…?」

そう言い藍染は立ち上がると刀を振るう。藍染は何度も千弘へ攻

撃を仕掛けていた。それに加えて千弘の刀の弾き返しによって身体の姿勢も崩す事も無かった。

だが、それも千弘には全く通用する事はなかったのだ。

「藍染隊長もう帰りましようよ。コッチだってあと織姫さんも探さなくちやいけないんですよ？勝負なら囲碁や将棋などで受けて立ちますから」

千弘本人は無自覚であったが、彼自身の力は崩玉を覚醒させ我が者とし超越者となった藍染すらも歯が立たないどころか次元が違うレベルにまで達していたのだ。

それでも藍染はまだ諦めてなどいなかった。遠く及ばない。ならば及ぶ存在になれば良い。

そう考えた藍染は千弘を無視して胸に手を当てる。

「ならば君に近づけるよう…更に進化すればいいだけの事…!!!」

「一人でなにブツブツ言ってるんですか？」

藍染の願いが込められたその言葉に胸中に宿る崩玉が答えた。

「君に限界が無いと同じように崩玉を手にした私にも限界など存在しない!!!」

その瞬間 藍染の全身が光り輝き出すと共に先程よりも更に巨大な靈気が暴風として藍染の身体から溢れ出した。

◆◆◆◆◆

一方で、千弘によって救出された石田と恋次は回廊を進んでいた。そんな中、石田は千弘を見た際の恋次の反応を不思議に思ったのか、尋ねた。

「そう言えば…彼を見た時に君は凄く驚いていたが、彼は一体何者なんだ…？」

「…アイツのことか」

そんな疑問を抱く石田に対して恋次は思い出しながら話した。

「出生はごく普通の流魂街。特に特別な要素を持ってた訳じゃねえ。階級でこそ平隊士で雑用が基本だが…奴のその実力は…もう桁違いだ。この世のもんじゃねえ…」

「は…!? どういう事だ!？」

「そりやそう思うだろうな。簡単に言えばアイツの強さが規格外なのさ。刀持たせりや微塵切り…刀無くせば殴り飛ばし…。抜刀術は速すぎて見えず本場にその場にただ立っているだけの様に見える、相手を斬るその刀の刀身さえも誰も見た事がねえ。そんなでもって刀が無くても相手を殴り飛ばす程の身体能力も持ってやがる…。アイツはマジで本気を出さなくても――

――俺達 護廷十三隊全勢力より全然上だ」

「…!!」

恋次の冷や汗を流す表情から石田はハツタリではない事を見抜き瞳を震わせた。

一方で話し終えた恋次は驚く石田に向けてある事を尋ねた。

「お前…確かアイツに吹き飛ばされたって言ってたよな…?」

「あ…ああ」

石田が頷くと恋次は冷や汗を流しながら答えた。

「マジで幸運だぜ…本来ならデコピンや手刀だけでも首跳ね飛ばされてもおかしくねえんだからよ…何で隊長にならねえのか不思議で仕方ねえよ…」



「ぐう…!?」

藍染の身体から溢れ出る先程よりも更に巨大な靈気の嵐。その威力はもはや規格外でありラスノーチェスの壁や天井を吹き飛ばしていく程であった。それによってハリベルやアパッチ達は耐えきれず遂に地面へと両手を付きしがみつく様にして踏ん張り始めた。

「な…なんつう靈圧だよ!? 藍染のヤロー…まだ実力を隠してやがったのか!？」

そんな中、そんな靈気の嵐の中を相変わらず平然と立っていたクー

ルホーンがアパッチ達へ声を掛けた。

「アンタ達。私の後ろなら安全よ。危ないからこつち来てなさい」

クールホーンの呼び掛けにアパッチを抱えたハリベルと傷ついたスンスンを抱えたミラ・ローズは頷きネムに続き彼の背後へと移動した。

そんな時であった。

「うおおおおー！何だこれ!?凄おおおお!!!」

「!?!?!」

突然と目の前から千弘の興奮しながら仰天する声が聞こえてきた。その声ハリベル達は驚き咄嗟にクールホーンの肩に手を掛けると風圧に飛ばされない様にその場に目を向けた。

「な…何があつたんだ?!」

ハリベルが疑念の声を上げる中、その声に気づいたのか千弘が顔を上げる。

「ハリベルさん！それに皆さんも見てくださいいよ!!」

そこには全身から暴風の如き靈気を放つ藍染を地面にうつ伏せで踏み倒しながら背中に跨り髪を次々とむしり取っている千弘の姿があつた。

「確かにこれはもう死神でも虚でもありませんよ！いくらむしり取ってもまだまだ髪が伸びてきます!!これはもう毛の神ですよ!!」

「こんな時に何をやっているんだお前は!?!」

覚醒して全身から靈気を放つ藍染の背中に乗りながら髪をむしり取っている千弘に遂にハリベルまでもが仰天の声を上げる中、身から溢れ出る靈気は更にハゲしさを増していった。

「うおすづい!!ちよつとどれぐらいまで伸びるかやってみよ!!!」

「良い加減にし…ごふ?!」

「おいやめろ!!何か可哀想に見えてきたぞ?!」

「千弘！そろそろ私に代わりなさいよ!!」

「お前もお前でなに乗ろうとしてんだよオカマ!?!」

覚醒しようとする藍染が地面に叩きつけられる光景にアパッチ達



が見てられないかのような表情を浮かべる中、遂にその千弘の所業に藍染も堪忍袋の尾が切れたのか覚醒中にも関わらず怒鳴り声を上げるが、千弘の脚が後頭部を踏みつけた為に再び地面に沈められる。

その間にも藍染の覚醒は着々と進んでいく。崩玉の意思が藍染の願いを受け入れ、それに応えるべく藍染の身体へと力を注ぎ込んでいったのだ。

千弘が持つのは果てしなく続く無限の体力とコンマ数秒の内に放つ無数の斬撃、圧倒的な身体能力。

対して藍染にあるのは相手を完全な催眠下における鏡花水月のみ。

藍染側が圧倒的に不利な立場である故に崩玉はこの答えへと行き着いた。

相手が持つのは“無限の斬撃”ならば此方が持つのはそれに対抗しうる頑丈な身体と霊力そして――

果たしなき速度で分裂する細胞。

それによって藍染の全身の細胞が次々と変質化していき髪も怒涛の勢いで伸びていった。

「ぐう!?!」

その細胞の変化は藍染の全神経を駆け巡り彼の全身を刺激すると共に更に輝かせていった。

「ヴオオオオオオオオオオ!!!」

「ヴオオオオオオオオオオ!!!」

千弘に踏みつけられながら覚醒の雄叫びを上げる藍染。そしてその上では千弘も同じく雄叫びをあげながら次々と伸びてくる髪をバツサバツサと切っていった。

「うおおおお!!!凄いい凄いい!!!切っても伸びてくる!!!ウィッグ何個作れるんですかコレえええええ!!!」

「いい加減私の背中から降りろおおおおお!!!」

「いいじゃないですか星海坊主さん」

「誰が星海坊主だあああ!!!」

その時であった。

藍染の身体の発光が突然止まると共に再び輝き出し藍染の身体が巨大な光に包まれた。

「:!!」

その閃光にギンやクールホーン達は眩しさのあまり目元を手で覆う。すると、光がゆっくりと収まった。

クールホーンやその背後にて光を防いでいた皆は閃光が収まると身体の影からゆっくりと顔を出しその場へと目を向けた。

「な…!!」

「:…こりやエラいこつちや…」

そこにあつた光景を目にしたハリベル達やギンは瞳を震わせた。そこにいたのは人間としての面影を消し去り“別の存在”へと成り果てた藍染であつた。全身の肌は正気さえも抜けた真っ白なものへと変わり、背からはまるで蝶のような異形な翼。そして青と白で分けられていた目も悪魔のような赤い血の色へと変色していた。

そしてなによりも注目すべき点は“靈氣”である。

「なんやこれ…全く靈氣が感じられん…」

崩玉によつて藍染の身に秘められた膨大な靈氣が精錬されると共に量も質も限界を超え誰にも感じ取る事ができぬ領域へと達してしまつたのだ。

それは藍染自身でも驚く程の結果であつた。

「まさか…ここまで強くなれるとはね。まるで生まれ変わった気分だよ…」

覚醒を終え新たな存在へと生まれ変わった藍染は不適な笑みを浮かび上がらせる。

ただし、千弘に乗られたまま。  
「あれ？今度はメイクですか？」  
「いい加減降りろ!!!」

## 覚醒藍染 でもおしまい

新たなる存在へと覚醒した藍染。千弘が背中から降りると彼はゆっくりと立ち上がった。

【藍染 惣右介 頭頂部 100%】

その姿は正にこの世の者とは思えぬ物であった。全身からは一介の死神では感じられない程まで透き通った靈気が輝きながら溢れ出ており、辺りを照らしていた。

そんな中、藍染の鋭い目が一瞬だけ千弘の背後に立っていたクールホーン達へと向けられる。

その瞬間 クールホーン以外の皆の全身が震え始めた。それは破面の中でも上位の実力者であるハリベルも例外ではない。

「な…何だこれ…霊圧感じられねえのに…身体が…」

マリ・ローズが疑問の声を上げながら震える中、ハリベルは額から冷や汗を流し始める。

「まさか…眼力だけで私達を威圧したと…いうのか…!?!」

ハリベルの予想は的中していた。

覚醒した藍染の力は全身体能力が限界以上に強化されており、強化された部位のうち、眼の眼力は睨みつけるだけで隊長格を圧倒する破面さえも威圧してしまう程まで進化していた。

その一方で、アパッチやハリベルがその姿を見て身体を振るわさせている中、目の前に立っていたクールホーンは頷きながらその姿を観察する。

「ええ。アンタの言う通りよ。今の藍染からは靈気はちよつとしか感じられないわ。その靈気は凄く透明。まるで0.1ミリ以上の細さで切られた布のよう。少しでもあの子に近づいたらって感じかしら」

◆◆◆◆◆

対峙する二人は互いに見つめ合う。二人の間の空気はそのあまりにも巨大かつ精細な靈気の影響を受けて歪み始めていた。そんな

中、藍染は口を開く。

「君に問おう…この世界についてどう思う…?」

「はい?」

藍染の声は元の人間の声とは異なり、洞窟の中で静かに響くような物へと変わっていた。だが、そんな声を不思議に思わず、藍染の質問に対して千弘は首を傾げる。すると彼は続けた。

「靈王が統治し支配するこの世の現状について問うているのだ」

「靈王…ですか。うん…」

それについて千弘は少しばかり考え込む。この世は靈王によって統治されており現在も彼がこの世を支えている。だが、千弘にとってそんな事などどうでも良かった。彼にとって今の現状など日常に等しいのだ。

故に千弘は答えた。

「別に何とも」

「…ほう、何故だい?」

千弘の答えを聞いた藍染は再び問いかける。

「私はまだ若造故にこの世のシステムについては理解できておりません。仮に出来ていようと、そのシステムが続いているお陰で今の日常が続いているのならば氣にもしません。私はただ隊士として働き、局長や皆さん、そしてネムさんと楽しい日常を過ごせるのならばそれでいいです」

そう答える千弘の瞳はいつもと違い鋭く真っ直ぐであった。その視線を向けられ答えを聞いた藍染は表情を歪めた。

「つまり、君は今の現状に満足している…と言う事か…」

「ええ。とりあえずアンタの計画なんて知ったこっちゃありませんし協力する気もありません」

「成る程…それが君の答えか…残念だよ。」

ピキッ

千弘の答えを聞いた藍染は失望に満ちた瞳を閉じると即座に限界まで開眼する。その瞳は青く輝き眼球はドス黒い血の色に染まって

いた。

「ならばこの場で散るがいい…!!!」

その言葉と同時に藍染の姿は一瞬にして千弘に迫り彼をその場から虚夜宮の外へと吹き飛ばした。

そして 藍染も後を追うようにその場から千弘目掛けて飛び立った。

夜に包まれる虚圏の空を空気を突き抜けていきながら吹き飛ぶ千弘に藍染は追いつくと両手の拳を握り締め、その全身に向けて乱舞を放った。

「ウオオオオオオオ!!!」

響き渡る咆哮と共に放たれた乱舞は次々と鈍い音を鳴り響かせながら千弘の身体へと打ち込まれていき、彼の身体を歪めていった。次々と乱舞を放つ藍染はこれまで見た事が無いほどまで顔を歪めながら叫び出した。

「仮に君が成長してから私と出会っていれば…私の考えが分かっていた筈だろう…ッ!」

その言葉と共に拳を打ち付ける速度と藍染の全身から放たれる靈気の激しさが増していく。

「いいか!君のような世界の理に従うは敗者の考えだ!!勝者とは常に世界がどう在るべきか語らなければならない!」

そう言い終えた藍染は一瞬にして千弘の目の前に現れると右拳を握り締め、千弘の腹に向けて放った。

「ゼイヤアアアアアアア!!!」

雄叫びと共に放たれたその拳は蒼いオーラを纏いながら千弘の鳩尾目掛けてゆつくりと打ち込まれていき、その身体をその場から下へ一気に突き落とした。

すると 千弘が地面へと叩きつけられた瞬間 その地点が蒼い爆炎を巻き上げ巨大な火柱を天に向けて上げながら大爆発を起こした。

だが、それでも千弘の霊圧は消える事はない。藍染は想定済みであったのか、その場から煙が舞う爆心地へと急降下する。すると予想通り千弘はボロボロの死覇装以外は無傷で装束の埃を払いながら立ち上がった。

「だが…あの涅マユリが作り出した感情のない人形の小娘と戯れている所為で君は今ある日常に入れ浸り…その勝者としての資格を見失った…!! 本当に残念だ…それ程の力を持つておきながら古い世界の理に何の観点も見出せず縛り付けられる様になってしまったのだからなッ!!!」

続け様に叫ぶと藍染は斬魄刀を出現させ立ち上がった千弘に向けて一閃するかの様に振り回した。

### その瞬間

千弘の周囲の空間に青い亀裂が走ると共に粉々に砕け散っていた。

「おっ?」

それを見た千弘は咄嗟に飛び上がる。すると、千弘の周囲の空間は千弘の立っていた空間を飲み込むかの様に歪み粘土の如く形を変えながら元の景色へと戻っていった。明らかに虚圏から現世などへ移動する際の物とは違っていった。

「驚いたか!? 私の力は既に空間さえも斬り捨て亜空間を生み出してしまふ程にまで進化しているのだッ!!」

「はあ。成る程。それよりも貴方…ネムさんを」

「その反応…やはり君にはこの程度では無意味なようだ…ならば…!!!」

千弘の言葉を最後まで聞く事なく遮った藍染は目を大きく開かせ

るとその場から飛び退き天に腕を掲げると人差し指を向けた。

「我が全身全霊を持ってして鬼道で葬ってやろうッ!!」

その瞬間

藍染と千弘の立つ場所だけでなく虚圏全体が地鳴りと共に激しく揺れ始めた。

元から隊長格の中でも突出して高く、崩玉によってそれが更に数千倍にまで高められた藍染の霊圧が遂に世界にさえも影響を及ぼす程にまで膨れ上がっていたのだ。

そして 藍染は詠唱を始める。

『滲み出す混濁の紋章、不遜なる狂気の器、湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる

爬行（はこう）する鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形

結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ 』

一つ一つの詠唱が辺りへと透き通りながら鳴り響くと共に千弘の身体が黒い霊子に包み込まれていき、包み込んだその霊子は黒く巨大な立方体へと変わった。その大きさは並の鬼道とは比べ物にならない程であり縦も横も長さも数千メートルを超えていた。

「ヌン…ッ!!」

そんな中、藍染は更に全身に力を込め、腕を握り締める。すると千弘を包み込んだ立方体が一瞬にして数十m<sup>3</sup>にまで縮小した。

極限なまでに圧縮されたその黒棺は本来ならば数千m<sup>3</sup>も要する膨大な重力の奔流をも強制的に圧縮させる。その威力は、本来の



数千倍である。

並の死神——否、隊長格の猛者でもコンマ数秒程度で塵と化すであろう。

「全てを超越し進化した私の完全詠唱の鬼道だ：！！極限なまでに圧縮された次元の奔流に飲まれ塵になるがいい：ツ！！」

だが、藍染は知りもしなかった。ネムを2度も馬鹿にした事で千弘の逆鱗に触れてしまった事を——。

『破道の九十』【黒ひ——ぶべらあ!?!」

「うっさいわ話聞けやボケエツ!!!!!!」

藍染の言葉が言い終わる前に限界まで圧縮された黒棺が一瞬にして消し飛ばされ中から飛び出した千弘が藍染の頬へ向けてドロップキックを放ったのだ。

ドロップキックによって突き出された脚は藍染の頬へと深く突き刺さっていくとその端正な顔をゆっくりと歪めていく。

そして

そのまま千弘は藍染の身体を蹴り飛ばした。それによって藍染の身体は回転しながら一直線に虚夜宮に向かって吹き飛んでいった。

—————

—————

—————

—————

「はあ…はあ…はあ…!!」

虚夜宮の中でも天に向けて聳える塔に位置する場所。その内部にある無数の柱の立つ場所にて二人の男が対峙していた。

一人は黒崎一護、そしてもう一人はウルキオラ。互いに斬魄刀をぶつけ合い何度も力を衝突させていた。

「もう終わりなのか？」

「まだだ…!!」

その時であった。

近くの壁が巨大な破壊音を鳴り響かせながら爆発し、何かが飛び込んできた。

「な…なんだ!？」

一護が突然の破壊音に驚く中、飛び込んできた物を見た瞬間、固まってしまった。

「こ…コイツは…!!」

そこに倒れていたのは、以前ルキアを手に掛けようとした男 藍染であった。

すると もう一つの影が降りてくる。

「な…お…お前は…!」

「ん？」

その影を見た瞬間 一護は更に驚いた。降りてきたのはなんと以前に自身とグリムジョーの闘いの際に乱入してきた千弘だったのだ。

その一方で、一護を見つけた千弘は軽く手を振る。

「貴方は何時ぞやの旅禍の人じゃないですか。どうも。ま、それは別として」

一護へと軽く会釈した千弘は藍染へと目を向けた。千弘の殴打を2回連続でその身に受けた藍染は力が抜けたかのようにその場に倒れている。

だが、その命や意識はまだ途絶える事は無かった。

「う……うう……!!」

崩玉の効果なのか、はたまた藍染の果てしなき執念なのか、その身をゆっくりと起き上がらせ再び大地へと立ちあがる。

「まだ……だ……!!」

そう言い息を吐きながら立ち上がった藍染は再び千弘を睨みつける。その底なしの執念は流石と言っても良いだろう。

だが、

「私はま——ぐへえ!?!」

「藍染様……!?!」

「うるせえええ!!このクソメガネがあ!!!」

立ち上がったその瞬間 目の前に一瞬で現れた千弘のビンタによって付近にある建物へと吹き飛ばされてしまった。

藍染を吹き飛ばした千弘はそのままゆっくりと歩いていく。

「貴様が園原ちひ——ぐッ!?!」

「すみません退いてください」

道中にて藍染へと近づいていく千弘を阻止すべくウルキオラが剣を振りかざすが、千弘が鞘を振り回した事でその場から藍染と同じく付近の建物へと叩きつけられてしまった。

ウルキオラを羽虫の如くあしらった千弘はそのまま倒れ臥す藍染へと近づくと腰を下ろすと首元を掴み上げた。

そして

パァン!!!

再びその頬へとビンタを放った。

「こんのクソメガネがあ!!!さっきからネムさんの事を悉く馬鹿にしやがって!ネムさんと関わった所為で勝者としての考えを見失った!?!ハア!?!貴方の勝手な自論でウチの局長よりも大切な副長を侮辱する

のはやめてくれませんか!?それに貴方にネムさんの何が分かるんですか!?あの人は何度も私を助けてくれた!局長の顔に落書きした時や局長のコーヒーに下剤を仕込んだ時の反省文の際も隊士としての仕事の時もです!」

次々と吐き出されていく言葉と共にビンタの勢いは増していき、次々と藍染の端正な顔が腫れていく。

その光景を一護や吹き飛ばされたウルキオラは唾然とした顔で見つめていた。

そんな中、千弘はビンタの手を止めた。

「ぐふう…何故…攻撃を止める…?」

数百回の往復ビンタを受け顔を腫れ上がらせた藍染は鋭い瞳を千弘へと向ける。それに対して千弘は先程まで鋭くなっていた瞳を元の形へと変え表情を穏やかにさせた。

「ネムさんを馬鹿にしたのは許せません…ですが、そんな事は後でします。それよりも…」

そう言い千弘は藍染へと手を差し伸べた。

「藍染隊長…戻りましょうよ護廷隊へ」

「な——!!」

## 帰還

「戻りましょうよ。護廷隊へ」

「!!」

その言葉は藍染だけでなく付近に立っていた一護にも聞こえていた。咄嗟に一護は驚き意義を主張するべく声を出そうとするが、即座にそれを止めた。

「貴方は確かに犬のフンに等しいクソ野郎ですが、これまでの功績は全て本物です。貴方が考案した鬼道の詠唱方法は今でも教科書に残っています。頭なら私が共に下げましょう。だからお願いです。この先の尸魂界でも貴方のお力が必要なのです」

「…」

千弘から差し伸べられた手を藍染は見つめていると、ゆっくりと右腕を動かしてその手を取ろうとした。

だが、それを彼自身が許さなかった。

「私に…改心しろというのか…？ 罪を認めて更正しろと言うのか…？ ふざけるなッ!!!」

藍染は叫びながら差し伸べられた千弘の手を取ろうとした右腕で振り払うと立ち上がる。

「私は間違っただけだ…!! 首を垂れるのは私の考えの真意にすら気付かない貴様らの方だろう!!」

立ち上がった藍染はそのまま千弘の胸ぐらを掴み上げた。

「…まずい!!」

その行動を見た一護は咄嗟に千弘を助けるべく動こうとしたが

既に千弘は手を動かしていた。

「ならとつととくたばれやクソ眼鏡こらあああ!!!」



いつス』って頼まれてたので、申し訳ないですけど、これ預からせてもらいますね」

その目に映ったのは自身の体内にあった崩玉をいつのまにか手に持っている千弘の姿であった。

その光景を見た藍染は先程から次々と見せつけられた千弘の超常的な力を思い出す。

「君は……どこまで馬鹿げている………のだ…」

そして 崩玉が自身を見限り千弘に屈服している光景を目にしなからゆつくりとその場に倒れたのであった。

その時であった。

「よつと。ようやく見つけたぜ黒崎一護お!!!」

「な!? テメエは!!」

付近の瓦礫から巨大な袋を担いだグリムジョーが飛び降りてきた。

だが、グリムジョーは知らなかった。不運な事にそこには自身では手も足も出なかった死神である千弘がいた事を。

「あら? 貴方は…」

「げ!? テメエは!!」

—————

—————

—

その後、倒れた藍染を千弘は這縄でぐるぐる巻きにして拘束する。それと同時にネム達を担いだクールホーンが現れた事で上に向かう必要も無く無事に合流も出来たのだった。

因みに驚く事にグリムジョーが担いでいた袋の中身はなんと千弘の任務対象である織姫であり、幸運な事に任務を達成する事もできたのであった。

その途端に千弘はグリムジョーへと多大な感謝の念を抱き何度も何度も頭を下げていた。

「いやあ、貴方には何とお礼を言ったら良いか…まさか私達の知らない場所で密かに任務を手伝ってくれていたなんて…」

「違あぁう!!俺は黒崎一護と全力で戦う為にこの女を連れてきたんだよ!おい頭下げんじゃねえ!お礼を言うんじゃねえ!!」

「まあまあ。あ、お礼と言っちゃなんですが、此方の秋刀魚草 ミニミニサイズを」

「またコイツかよ!?だからこんな不気味な生物いらねえつつつてんだろ!!」

「グリちゃん。ツンデレで可愛いのは結構だけど偶には答えるのもアリよ」

「誰がグリちゃんだあ!?誰がツンデレだ!?この変態オカマがあ!」

グリムジョーがハリベルと共にウルキオラを介抱しているクールホーンへと叫ぶ中、合流したネムは千弘に駆け寄った。

「千弘さん…お怪我はありませんか…?」

「はい…この通り何とも!」

千弘はそう言い傷一つついていない身体を見せる。その様子を見たネムは安堵の表情を浮かべながら千弘の頭を撫でた。

因みに一護の方では何故か子供の破面に抱きつかれており、その傷を心配していた織姫がアタフタしていた。

すると

そんな賑やかな中、クールホーンと共に降りてきた市丸ギンが千弘へと向かって歩いていった。

「いや〜お見事お見事。さすがやな千弘くん。あとは僕に任せてもらおうか」

「市丸隊長…?」

千弘の付近へと歩いてきたギンは手を叩きながら千弘を称賛すると彼が担いでいる藍染へと目を向け刀を抜く。それを咄嗟に見た千弘はギンを警戒した。

「何をするのですか?」

「決まってるやろ。殺すんや…!!」



その言葉と共にギンの目が一瞬開くと共に刀の切先が千弘の担いでいる藍染へと向けられた。

『死せ……神殺槍ッ!!』

その刀は一瞬 塵と化すと即座に形を変え数百メートルもの長さの刀へと変化していく。

それを変化工程からアツサリと見切った千弘は藍染を担ぎながらも一瞬にしてギンの前へと移動。そして手を掴み静止させた。

「ぐっ！」

突然の出来事に辺りで賑やかに会話していた皆は一瞬にして黙りその光景を見つめていた。

一方で、千弘に静止させられたギンは彼の握力に対して苦い表情を浮かび上がらせるとその場で剣を下ろした。

「はあ…ほんまに君は速いなあ…」

空が苦言を漏らす中、千弘は尋ねた。

「市丸隊長…なぜこんな事を？」

「……」

尋ねられたギンは最初は話す事に躊躇していたのか、途中から気が変わったのか刀を納め、理由を話した。

話によれば彼は元々、藍染を殺す為に彼の仲間となったのだ。その理由は自身がまだ護廷隊どころか死神にすらなっていない時に崩玉を完成させる為に数多くの死神や流魂街の人々の魂魄を奪っていた藍染が、自身の幼馴染である松本乱菊の魂魄をも奪っていたからである。全て奪われていなかった為に彼女は死んではいなかったものの、大切な人を苦しめた故に彼に恨みを抱き復讐を決めたのだ。

「あの子の命は助かったものの…傷つけたアイツを許せなかった。だからずっと機会を窺っていたんや…コイツを殺す為にどれ程待っていたか…!!」

その目はいつもの陽気と不気味を併せ持つ様な物ではなく果てし

無き恨みを持つ悪霊の様な物であった。

「成る程。確かに大切な人を傷つけられれば恨みを持つてしまうでしょう。貴方の中には殺す以外にないという感じですか？」

「ああ…仮に出来なかったとしても生きるのが嫌になる程の苦痛を与えられなきや気が済まへんね…」

「成る程」

ギンの理由を聞いた千弘はしばらくの間考え込む。すると、近くでウルキオラを解放していたクールホーンが何かを思いついた。

「良い考えがあるわよ」

—————

—————

———

瀨靈廷の一番隊隊舎。そこでは相変わらず厳格な表情を浮かべている元柳斎の姿があった。千弘とネムが虚圏へと任務に向かいもうすぐ一日経つ。彼の実力を知っている為にその報告と帰還を今か今かと待ち望んでいたのだ。

その時であった。

「!!!」

突然と複数の巨大な霊圧を感じ取る。その霊圧は千弘程ではないが自身以外の隊長格の者達に匹敵あるいは勝る程のものであった。

「……」

杖を手に取りながら瞬歩で一瞬にして上空へと移動。すると、元柳斎と同じく霊圧を感じ取ったのか浮竹や京楽、そして日番谷や乱菊といったマユリを除いた全隊長と副隊長が同じく空に現れた。

皆が見つめるその一点には空間に裂け目が生じていた。それは間違ひなく虚が現世などを行き来する際に使用する「黒腔（ガルガンタ）」であった。

すると 裂け目が開きそこから数人もの破面が姿を現した。

「……」

咄嗟に元柳斎を除いた全員は刀を抜こうとするが元柳斎がそれを止めた。見るとその背後から次々と見覚えの人物が現れたのだ。

ゆつくりと姿を現したその人物を見た一同は驚きの表情を浮かべた。

「[[[[[[:]]]]]]」

そこには任務対象である織姫、攻め入った一護やルキア達を引き連れている千弘とネムのすがたがあったのだ。更にその中にはなんと這縄によつてぐるぐる巻きにされた東仙を担いだギンの姿もあり吉良や乱菊、修平、狛村は驚きの表情を浮かべる。

そんな中、千弘の背後からもう一人の人物が姿を現した。その人物を見た一同は先程よりも更に驚きの表情を浮かべる。

そこには自身らを見限った元五番隊長である藍染惣右介の姿があったのだ。

—————  
スウエツトを着て。

そんな中、先頭に立った千弘は皆に向けて敬礼する。

「ただいま戻ってまいりました！」

## 瀨靈廷へ帰還。語り出される千弘の力

瀨靈廷に現れた千弘達や藍染を見た一同は更木とやちるを除き、啞然としながら見つめていた。現れた破面の数は6体。その内の4人が女性型でもう二人は男性型であった。中でも男性型二人と女性型一人の霊圧は別格でありその霊圧は元柳斎を除いた隊長を凌駕していたのだ。

その光景を冷や汗を流しながら見つめていた隊長達の内、千弘と仲が良い京楽が恐る恐る尋ねた。

「ね…ねえ千弘くん…なんで破面なんかを連れてるんだい…!？」

「あ、京楽隊長どうも。送ってもらったんです」

「へえ!？」

千弘の答えに京楽が驚く中、皆は次々とその場から飛び降りていき廷内へと着地していった。

「じゃあね皆くまたいつでも遊びに来るのよ♪ほらさっさとお行きクソ藍染!」

「がはあ!？」

体格の良いオカマらしき破面がスウェットを着た藍染を蹴り落とすと残りは千弘とネムのみとなった。千弘は振り返り自身らを送ってくれたハリベル達へとお礼を述べた。

「私たちもこれで。色々とありがとうございますハリベルさん、ココスタさん」

「いや…気にするな。礼を言うのは此方も同じだ。これは借りにしといてくれ」

「ほらほら、御礼はいいから早く行きなさいや。皆待ってるぜ」  
「ではー」

ココーテ・スタークから頭をポンポンと叩かれた千弘はその場からネムと共に手を繋ぐと飛び降りて廷内へと着地した。そして振り返ると此方に目を向けるハリベルやスターク、手を振るクールホーンに向けて手を振り返した。

すると彼らもそれに答えながらゆっくりと入口を閉じて虚圏へと帰っていった。

――

――

――

織姫を救出するどころか藍染らまで連れ戻してきた事に一同は驚きを隠さないでいた。千弘の強さは知っていたものの、まさか幻術を扱う藍染に勝てるとは思ってもいなかっただらうのだ。

帰ってきた事については喜ばしいものの、そんな雰囲気は一瞬にして消え去った。

「さて…お主らを拘束させてもらおうか」

千弘達と共に降り立ったギンや東仙は勿論、藍染も謀反を企てていた罪人の為に即座に何重もの拘束具によって捕らえられた。

「連れて行け」

元柳斎の命令に頷いた碎蜂と彼女らが率いる隠密隊は3人を連行していった。そんな中 元柳斎はすれ違い際に藍染へと目を向ける。「お主には後でたっぷり話を聞かせてもらおうぞ。一応、その姿についてでもな」

そう言い元柳斎は藍染が着用している【鏡花水月】と書かれたスウェットを指差す。すると、藍染は珍しく涙を流しながら頷いた。

「長く……なりますよ」

その涙は何故か悲しみは感じられずとてつもなく無念な思いが込められているようであった。

それだけ言うと彼は再び歩き出した。すると、その際に元柳斎の後ろで控えていた雛森と日番谷の横を通り過ぎる。

「あ…藍染たいち」

「よせ…雛森…！」

スウェット姿であるにも関わらず声を掛けようとした雛森を日番谷は咄嗟に口元を押さえる形で制止させると、藍染を睨みつけた。そ

れに対して彼は一眼だけ彼らを見ると再び前へ向き直し謝罪の言葉もその他の言葉も何一つ口にせずそのまま歩いて行った。

そして 藍染に続く様に東仙やギンも連行されていく。

「東仙……！」

「東仙隊長……」

彼の事を今も尚 気に掛けていた狛村と修平が声を掛けるが東仙はただ俯いたまま狛村達の声に応えるどころか顔も合わせずそのまま通り過ぎていき、二人はその様子を哀しい瞳で見つめていた。

その一方でギンは乱菊や吉良と再び会えた事が嬉しいのか、いつもの不気味な笑みではなく、ただ満足しているかのように柔らかい笑みを浮かべていた。

「ギン……」

「隊長……」

「……」

その表情を見た乱菊と吉良は彼の今後を心配していたのか声を掛けるが、彼は何も答えずただ笑みを浮かべながら通り過ぎていった。

「狛村隊長……東仙隊長は……」

「……仮に事情があったにせよ……謀反した事実は変わらん。いつか面会に行つてやろう……」

「はい……」

狛村と共に東仙へ面会に行き彼の真意を聞きに行く事を誓い合つた修平は頷くと、乱菊や吉良と共に二人を連れ戻してくれた千弘達へと礼を言うべく振り返る。

「園原、本当にありがとな。東仙隊長をつれも————え？」

「では早速、局長の所へ行って収集したデータを見せに行きましょうか」

「はい。千弘さん。これ程のデータがあればマユリ様もお喜びになる

かと…」

「そうですね！では皆さんお先に失礼します！」

そこにはネムと共にアツサリとその場を後にする千弘の姿があった。しかも疲れのつの字も見せていない状態であり、その様子を見ていた皆は不思議そうに見つめていた。

「本当に不思議な子ですね…隊長達と闘ったにも関わらず疲れも見せないで、その上に破面も従えて…本当に彼は何者なのでしょうか…」「分からん…。出生も至って普通、強さも始解、卍解無しの剣術と体術のみ…となるならば、あの子は本当に『神』の寵愛を受けこの世に生まれたのかもな…」

その後ろ姿を見つめていた吉良の言葉に答えながら狛村や他の皆もその姿を見送ったのであった。

彼の強さは一体何なのか。それは誰も知る由もなかった。

因みにその後、カメラの中に入っていた“ある一枚の写真”を見たマユリの絶叫する声が技術開発局に響き渡ったと言う。

—————

—————

———

そしてその後。藍染達は投獄される事となった。連行された3人の内、東仙とギンは同じ監獄へ。以前マユリが収監された牢へと投獄される事となった。

その一方で主犯格である藍染は瀨霊廷の中で二番目に嚴重な檻にて幽閉された。一時的に拘束する場所にしては厳しすぎるかもしれないが、彼の場合は身体の部位一つでも自由にしてしまえば脅威となるために嚴重な場所で拘束される事となったのだ。

暗闇の中、両手脚を鎖で繋がれながら椅子に座らせられた藍染はただ黙っていたが、千弘から離れられたのか、謎の安心感を得ている様にウツスラと笑みを浮かべていた。

すると

「いやあく随分と嬉しそうだね」

陽気な声と共に女物の着物を羽織ると共に番傘を頭に被る隊長京楽が現れた。その姿を見た藍染はゆっくりと閉じていた目を開ける。

「何の用だい？」

「様子見さ。山爺なら後で来るよ」

「そう言い京楽はまるで遠慮がないかの様にその場に座り込む。

「さて、君の悪巧みについては少しばかり勘づいてたけども：まゝさか本当になるとはねえ。まあ見る限り千弘くんに偉くやられたと見える。笑えるどころか可哀想に見えてくるよ」

「そう言い京楽は藍染を憐れみの瞳を向けながら苦笑するそれに対して藍染は俯いた。

「ああ。彼は本当に強かったよ」

「ちよいと聞かせて欲しいね。君は去り際に崩玉があれば僕らどころか千弘君を超えられると言っていたが、越えられたのかい？」

「…」

その問いに対して藍染は首を振らずとも否定すると共に数時間前まで対峙していた千弘の動きや力などを頭の中へと再び思い浮かべた。映り込んでくるのは完全に覚醒した自身が千弘に傷一つ負わせられず技も全て掻き消され、殴り飛ばされたり蹴り飛ばされたりする光景であった。

「いや、全く手も足も出なかったよ」

「そう言い藍染は去り際に崩玉を持っていた右手を見つめた。

「崩玉を手にし、覚醒させたとしても何一つ変わらなかった。願いを募らせ望み通りの究極の力を手に入れても尚、勝負にすらならなかった。彼の太刀筋を見切るどころか刀身さえも見ることが出来なかった上に発言が起因である怒りの拳一つで私は倒されたのだ。超える：いや、それどころか一步も近づく事すら出来なかったな。あの子の前では崩玉さえもただのガラクタであると痛感したよ」

「そうかい：大体想像はしてたけども、まゝさか君が予想以上に強く



なっても勝てないとはね。しかも破面すらも従えちゃうなんて本  
当に恐ろしくも頼もしい子だよ」

藍染の意見を聞き驚きながらも千弘がいた事に安心しながら京楽  
は立ち上がる。

「まあ取り敢えず裁判まで大人しくしときなさいや。それに良かった  
じゃない。千弘君にもっと早く止められなかったら君、もっと罪が重  
なっただと思うよ?」

「フン」

京楽の笑い混じりの言葉に鼻を鳴らすと虚空を見つめる。まるで  
その方向に自身を倒した千弘がいるかのよう。

「もう彼を超えられる可能性がある者は誰一人として存在しないだろ  
う。これからもこの先も…」

「それよりも、何でスウェット何か着てるんだい?随分とシンプルな  
デザインだけど」

「それを聞くのは…野暮だと思うがな…」

—————

—————

—————

—————

藍染達が捕らえられた事により事態は収束。瀨霊廷にまた平穏な  
日常が戻ってきた。因みに一護達は闘いの疲れを癒すべく1日は此  
方にいるらしい。

そして藍染達が捕らえられた日の真夜中の事である。

マユリに虚圏に赴いた際に撮影した研究施設や建物などの写真  
データが大量に保存されているカメラを渡した千弘はネムと共に休  
暇を言い渡され夜の瀨霊廷を上機嫌に歩いていた。

「ん〜!!疲れた。写真もいい評価もらえましたし、休暇も貰ったことなので甘味処でもいけますか」

「そうですね。私は小豆ものを要求します」

「良いですよ!お金も沢山入ったのでとことん奢ります!」

そう談笑しながら千弘とネムが歩いていると、突然と目の前に卯ノ花が現れた。

「お疲れ様です。お二人とも」

「あ、卯ノ花隊長。お疲れ様です。これから甘味処へ行くんですが、一緒にどうですか?」

「まあ……それは良い案ですね。私も丁度……お茶に合うお菓子が欲しいと思っっている所でした……ですが」

千弘の提案に卯ノ花はペアと笑みを浮かべながらもそれを止める。

「その前にまずはあそこへ行きましようか♪」

「え?」

—————

カポーン——。

「お風呂へ」

「はひい!」

波乱な1日はまだ終わらない。

### 3人とお風呂そして——ハプニング

彼と初めて会った時から感じていた。この子は「あの男」以上に私を楽しませてくれると……

まだ小さい身でありながらもいつ襲い掛かっても隙のない精錬された感知能力。そして何者も寄せ付けぬ剣術。あの私でさえも……彼に一撃も見舞うどころか彼の刀身さえも見えなかった。だが、見えないなながらもその空気が裂ける形からその太刀筋は本当に美しいものであった。

次々と私の刀を見えない手捌きで防ぐその姿と力は……闘うことでしか己を満足させる事ができなかった私の心を満たしていった。

そして 幾度も剣を交える中——いつしか私の剣は悟った。

「コイツには勝てない」

勝利などどうでも良い。ただ斬り合えるのなら何だってよかった。だが幾度も幾度も弾かれている内に私の果てしない剣と血への渴望も液体の溢れでた器のように満たされ尽くしてしまい、いつしか興味を失ってしまった。

剣を混ざり合わせる楽しささえも渴きに乾き切った時、ふと私の中である一つの興味が湧いた。私から剣の楽しみを奪ったあの男を……どんな方法でも良いから壊したい——と。

—————  
—————  
—————

あの後、技術開発局へマユリにカメラを届けた直後に卯ノ花に連れられやって来た場所は四番隊の中で卯ノ花だけが使う事ができる風

呂場であつた。その風呂は銭湯に比べるとやや狭いがそれでも一人で扱うには十分すぎる広さであつた。

そして千弘は衣服を剥ぎ取られ、今は卯ノ花へ背中を見せるようにして椅子に座っていた。

千弘はまだ異性とお風呂は入つた事がなく裸への耐性もない。因みに言うとお卯ノ花は女性隊員の中でもそれなりにスタイルが整っており、胸もかなり大きく育っている。こんな女性が背後に立っていれば一部を除いた男性ならば耐えられないだろう。

そんな彼を弄ぶかのように卯ノ花は背後から更に身を寄せた。

「ひやあ!?うう…卯ノ花隊長!む…胸が!?それに…なぜこんなところに…!?」

卯ノ花の手が千弘の首に巻きつき肩から顔を覗かせる。それと同時に彼女の魅惑的な身体が千弘の小さな身体へと押しつけられ巨大な胸の感触がタオル越しでありながらも彼へと伝わっていく。

「ふふ…決まつているでしょう。あなた方が酷く汚れているからです。この後の業務にも差し支えますしここで区切りとしてサツパリとしていきましょう…?」

「ひぐう!?!」

その吐息が混じつた艶やかな声が耳元で囁かれたことで千弘は身体を震わせる。震える彼の耳元では艶やかな声とは裏腹に不気味な白目を輝かせている彼女の顔があつた。

「(そう…もつと慌てふためきなさい…その成す術もなく追い詰められた表情…ああ…!!なんて心地が良いのでしょうか…!もつと私を満足させなさい…!!)」

その様子をまるで楽しそうに見ているか、卯ノ花の目はいつしか優しい母の様な目ではなく、ただ純粋に弄ぶ事に徹している恐ろしい女の目へと変化していた。

「で…でしたら銭湯に…」

「今日はお休みです」

すると

「お待ちせしました…」

「!?」

扉が開く音と共にもう二人の女性がタオルに身を包みながら入ってきた。

見ればそこには顔を真っ赤に染め上げている勇音と相変わらず無表情でタオルを巻いているネムの姿があった。二人の内、勇音は卯ノ花と同等、ネムに至っては二人以上のプロポーションを持っている為に身体の形がクツキリと浮き出していた。

それを見た千弘は咄嗟に顔を背けるが二人はそのまま彼の背後に座ってくる。

「あ…あの…隊長…なぜ私まで…」

「勇音もいずれは殿方へ嫁ぐ身、ここで練習しておいて損はありません」

「うえ!?で…でもよりによって千弘さ——あ…何でもないです…」

拒否の声を上げようとする勇音の真意を知っているのか、卯ノ花は相変わらず笑みを浮かべながら威圧すると、横で千弘を見つめていたネムへも目を向ける。

「ネムさんも。いつも一緒にいる彼と裸の付き合いというものをしてみるのも良い経験かと思えますよ」

「分かりました」

すると ネムは石鹸で泡立てたタオルを千弘の背中へと当てた。

「ひぐ?!」

「千弘さん…じつとして下さい…」

「は…はい…」

ネムが背後から声を掛けながら千弘の長い髪を撫でると共に背中を流していくその様子を見ていた卯ノ花は優しい笑みとは裏腹に体内ではドス黒い笑みを浮かべていた。

「ふ…ふふ…（ああ…なんて心地が良いのでしょう…貴方の耐えきれずに壊れてしまいそうなその表情…心をくすぐられてしまう…。今まで剣でしか喜びをえられなかったというのに…貴方が困惑して

いる顔を見ると心が疼いてしまう…!!」

一瞬ながら不気味な笑みを浮かべた卯ノ花、その横では相変わらず勇音が顔を真っ赤に染めていた。

カポーン――。

その一方で、湯煙が舞う中、ネムに背中を流されていた千弘は少し混乱はしていたものの、次第に感じられるそのタオルと肌の擦れる感覚が丁度良く気持ち良いのか目を細めていた。

「千弘さん…どうですか…?」

「凄く気持ちいいです…」

「良かったです。いつも…ありがとうございます」

「いえ…私の方こそ。いつも一緒にいていただき、ありがとうございます  
ます」

そう言い千弘はネムの言葉に返した。

すると突然と彼女の背中を擦る手が止まった。

「あれ…どうしました?」

千弘は気になったのか振り返り確認してみる。するとそこには頬を赤く染め上げている彼女の姿があった。普段、寡黙な雰囲気を漂わせている彼女が想像もつかない程まで頬を赤く染め上げながらタオルを握り締めていた。

「!?!」

その姿を直視してしまった千弘は咄嗟に顔を逸らす。すると彼女の少しばかり縮こまった様な声が聞こえてきた。

「あの…そう言われてしまうと…少し…恥ずかしいです…」

「す…すいません…!!」

すると、今度は勇音がネムの隣に座る。

「千弘さん…次は私が…流します…ね」

そう言い勇音は顔を真っ赤にさせながらもタオルに石鹸を混ぜ合わせた。

「ふ…副隊長まで…!?お…お手柔らかに…」

それから勇音もネムと同じく背中を流す。ネムと比べると彼女はやや力が弱く少し痒みが残るものであった。

「あ…あの…もう大丈夫ですよ…」

「わ…わかりました」

千弘からそう言われた勇音は即座に千弘の背中を洗う手を止めタオルを引き剥がした。

だが、それだけでは終わる筈が無かった。背後から様子を見ていた卯ノ花は更に不気味な笑みを浮かべるとネムと勇音の肩に手を置いた。

「勇音…ネムさん…今度は“前”を洗ってあげましょうか」

「なあ!?」

「分かりました」

突然と言い放たれた卯ノ花の言葉に勇音と千弘の声が重なると共にネムの了解する声が響く。

そして了解の声を上げたネムは千弘の身体へと手を回すと、無理矢理にも前を自身らの方向へと向けさせようとする。

「い!?ネムさん!!やめてください!」

「前を洗わなければ…千弘さんが汚いままで…大人しくしてください!」

「ダメです!本当にこれはダメですから!!」

「副隊長命令です。ジツとしてください」

そう言いネムは強引にタオルを引っ張り出して抵抗する千弘を前へと向かせようとした。それを見た勇音は咄嗟にネムを止めるべく彼女の手をつかみ出した。

「ちよ!?ネムさん落ち着いて!流石にそこま——あれ?」

すると勇音がネムの手を掴んでしまったことでネムの手勢いがついてしまい、千弘の腰に巻き付けられたタオルを剥がしてしまっ

た。それを見た千弘は咄嗟に見えそうになった股間を押さえると取り返すべく身を乗り出した。

「な!?!か…返してくだ! — わあ!?!」

「え…わわあ!?!」

「!?!」

だが、その拍子に立ち上がった千弘は足元にあったネムの扱っていた石鹸が混ぜ込まれたタオルへと脚を踏み入れてしまう。その結果、その場で転び、すぐ目の前にいたネムと勇音を巻き込むようにして倒れてしまった。

バタ—ーン!

「あらあら…」

風呂場全体に床に打ちつけられる音が響き渡った。その光景を背後から見つめていた卯ノ花は口元に手を当てながら驚くと倒れた3人へと目を向けた。

「3人とも。大丈夫で — まあ!」

その光景を見た卯ノ花は驚きの声を上げると共に再び不気味な笑みを浮かべた。

その一方で、倒れた千弘は頭を抑えながらも倒れた上半身をゆつくりと起き上がらせた。

「いつつ…」

「大丈夫ですか?」

「なんとか…あ! それよりタオル返してくだ —

ムニユ

「はひい!?!」

その時だった。股間部分から何やら柔らかな感触が伝わってきた。ネムの安否確認に答えながらも千弘は咄嗟にタオルを取り返そうと奮起するが、その直後に下半身から何やら柔らかい感触を感じた千弘



は再び少女のような甲高い声を上げると共に全身を硬直させた。

「あくいてて…すみません千弘さん…大丈夫で…ってどうしたんですか？顔が赤いですよ？」

起き上がった勇音も顔を真っ赤に染め上がらせている千弘にネムと同様に不思議に思い首を傾げていた。

そうしている合間にも千弘の顔は益々 赤く染め上がっていく。何故、彼の顔がこれ程まで赤く染まっているのか？それは簡単だ。

———  
ネムと勇音の豊満な胸が、頭となった千弘の股間部分を左右から挟み込むようにしてアツサリと覆い尽くしていたからだ。

「あれ…何か胸に食い込んで…ええ!？」

千弘に遅れて勇音もようやく認識した。だがその一方で鈍感なネムは二人が慌てる様子に首を傾げながら身体を動かし始める。

「ん？どうしまし———」

「わあー!!!ネムさん！動かないで！これ以上は…！これ以上は…!!」  
「何がですか？」

千弘の叫び声に耳を傾けながらもネムは再び首を傾げながら身体を動かした。それによって動揺する勇音とネムの間にある密室の密度は最大限にまで高まってしまった。

その直後。

「うあああああ  
!!!!!!」

千弘が顔を天井へ向けながら叫び出した。その表情はまるで身体の中にある「何か」が放出されると共に身体の力が吸い取られているかのようなものであった。

「あ……あ……」

それから千弘は瞳を上空にさせ、口元から唾液を垂らしながらゆっくりとその場に倒れた。その様子を不思議に見ていたネムは勇音にも目を向けた。

「あ……ああ〜!!／／／／／」

「……?」

見れば勇音も顔を真っ赤に染め上げており、瞳がグルグルと回転しながら混乱していた。何を見ても分からなかったネムは背後で相変わらず笑みを浮かべている卯ノ花へと尋ねる。

「理事長……何があったのですか?」

「ゆっくりと離れてみてください」

卯ノ花に言われた通りネムはゆっくりと千弘と勇音から離れるべく、身体を起き上がらせた。

「あ」

そして背後ではその光景を見つめながら卯ノ花は頬を紅潮させ興奮しながら舌舐めずりをしていたのだった。

「(はあ……!その力の抜けたその表情……なんて健気で可愛らしいのでしよう……!!)」

その後、3人は即座に身体を洗い流すと千弘を抱えながら風呂を後にしたのだった。

## 変化する関係

それから目を覚ました千弘はネムと共に四番隊を後にした。ネムの横で歩く千弘はいつもの活発な雰囲気は失われておりネムと目を合わせる度に顔を逸らしていた。

「どうしましたか?」

「いえ…なんでもありません…」

ネムは尋ねてみるが、即座に千弘は顔を逸らしてしまう。その様子にネムは首を傾げると共に何か寂しさを感じるのであった。

—————

———

一日の始めである掃除を終わらせ、主要な勤務も終えた千弘はネムと共に離れにある秋刀魚草の栽培地にて農家のお婆ちゃんが着ている作業服を身に纏いながら秋刀魚草の栽培を行っていた。千弘達が丹精込めて育ててきた秋刀魚草は成長して、前では小ぶりなモノが今では彼らの背を越す程まで大きくなっていった。しかもその身はギツシリと詰まっているかのように膨らんでおり、見る物の舌をそそらせていた。

「千弘さん。こちらの個体が売り時かと」

「は…はいー!」

ネムが声を掛けると千弘はいつもの様に天真爛漫な素振りを見せず、まるで畏まっているかの様に返事をする。その様子にネムは次第に不思議に思い始めてきた。

「千弘さん…?」

「あ…!?いやその…なんでもありません!」

尋ねてみると千弘は慌てながらそのまま作業に戻るのであった。

そんな中。ネムや千弘が所属する技術開発局から招集がかかった。

—————

———

千弘とネムに招集を掛けたのはマユリであり、彼らが現れるや否や白衣を投げ渡した。

「ぶべら!？」

「40秒で支度しな！グズは嫌いだよ！」

白衣を投げ渡された千弘は不思議に思いながらその白衣を身に纏うと事情を尋ねた。

「いきなりどうしたんですか？」

「今から虚圏へ行くのだヨ。君達が撮ってきた研究室の写真と資料を見て興味が湧いてね。あの研究室を使って新たなる発明がしたくなってきたのだヨ」

準備を終えたマユリはそう言いながら隊長羽織を身に纏う。

「ですが、どうやって?」

「不本意だが、浦原喜助の手を借りる。本当に不本意だがね。分かったらサツサと支度しな。グズは嫌いだヨ」

それから千弘とネムも支度をする。浦原と連絡を取り、虚圏へと入り口を開いてもらった。

—————

—————

—————

—————

その後、虚圏へ赴きネムが撮影した研究室へと到着すると解析などが開始されたが、それはすぐに終わった。目を通した資料に記されていたのは内容は破面の蘇生だけでなく外界と行き来するための擬似ガルガンダの製法らしく、マユリは自身の知識でそれを解読。無事に生成に成功したのだった。

だが、この時も千弘は珍しく何故かソワソワとしていた。

それから数日後に無事に瀟靈廷へと帰還するとマユリは取ってきた研究材料を持ち込み再び研究室へと閉じこもってしまった。

マユリは研究室へと閉じこもるとしばらくは出てこないらしく、更

に集中している為に気安く声が掛けられなくなってしまふのだ。この調子だと今日はもう出て来ないだろう。

その間に休暇を貰ったネムは再び千弘に声を掛ける。

「あの…千弘さ——」

「ひゃい!? な…なんですか!？」

マユリの研究室の扉に設置されている小さな入り口から食事を入れ終え、院内を歩いていた千弘は突然　ネムに話しかけられた瞬間に顔を真っ赤にさせながら驚いた。

その様子を見ながらネムは近づくと彼の両肩に手を置き顔を覗き込む様にして見つめた。

「ん…」

「…!! あ…あの…！ 顔が…！」

ネムが見つめている千弘の顔は真っ赤に染め上がっており全身も震えていた。その様子を見つめながら観察していたネムは鼻と鼻が触れ合う程の近さまで近づきながらも首を傾げた。

「(何故でしょう…顔が凄く赤い上に身体も震えている…寒いのでしょうか…? それに私も熱くなって……これとは似た物を前にも…)」

そう考えながらネムは次々と顔を近づけていき、遂には口と口が至近距離に成る程まで近づいていた。それに伴うように千弘の顔も更に赤く染め上がっていく。

それによつて千弘自身はもう限界であつた。

「わ…わあああああ／／／／／／／／」

「!？」

急に叫び出した千弘は肩に置かれた手を振り払うとそのまま土煙を上げながら走り去っていつてしまった。

取り残されたネムはただただ不思議に思いながら胸に手を当てていた。

「…この感情は一体…」

――  
――  
――  
――

「はあ……はあ……はあ……!!」

ネムの素から逃げて十二番隊隊舎から一瞬で瀧霊廷の東の門まで到着した千弘は城門近くの建物の屋根の上で頭を抱えながら蹲っていた。

「(だめだ……!!前まで平気だったのにお風呂の時からネムさんと……ネムさんと話すたびに……」

―― 凄く熱くなってくる……!!)――

## 番外編 恐ろしき少年の実力

いつの年も入隊してから時が経ち名を連ねる死神が現れる。例で言えば浮竹十四郎や京楽秋水。そして雛森桃や日番谷冬獅郎。

だが、今世紀の卒業生の中には歴代の中でも最も異例な人材が紛れ込んでいたのだ。

その少年は「規格外」としか言えなかった。霊術院において筋力や探索力、そして霊力による記録を過去最高の記録として大幅に更新していき、その実力から市丸ギンに続き霊術院を一年で卒業し隊へ配属される事となった。

そんな少年がある日、総隊長は呼び出したのであった。

「……………」

「……………」

霊術院の卒業式が終わった直後の瀨霊廷にある一際広大な広場。そこには瀨霊廷に住まう護廷十三隊の隊長と副隊長の全員が集められていた。皆の目の先には総隊長である『山本 重國 元柳斎』とその総隊長と対峙する一人の小柄な死神がいた。

背丈は子供程度。言うなれば最年少の日番谷冬獅郎とそう大差は無いほどだ。身に纏うのは死神の仕事着である『死覇装』それを着込んだ少年に対して寡黙な元柳斎は杖を持ちながら鋭い目を向ける。

「まずは卒業おめでとう……と祝っておこう」

「ありがとうございます。御大将」

元柳斎が祝言を述べると少年は頭を深々と下げた。それに対して元柳斎は頷くと少年へと尋ねた。

「さて聞こう……お主がなぜここへ呼ばれたか……分かるか……？」

元柳斎から尋ねられた少年は少しの間、唸るとすぐに答えを出す。

「……私が粗相をしでかした故にお灸を据える為でしょうか……？」

「否」

出した答えをすぐに否定した元柳齋は両手で掴んでいた手を右手で掴み出す。すると、その杖の木面が弾け飛び一振りの大太刀が姿を現した。

「お主の力を知る為じゃ」

—— 万象一切

灰燼と為せ 【流刃若火】

!!!!

その言葉と共に大太刀へと炎が灯された。

「私の力…!?!」

「左様。靈術院にて…どの課程においても主は過去の中で比べ物にならない記録を叩き出しておる。特に筋力、靈力、体術、探索力、共に歴代でダントツ…そして何よりも儂が目にしたのは『劍術』じゃ。聞けば斬魄刀を手にしてからお主の刀身を見た者も一太刀浴びせた者も誰一人としておらん…と聞いておる。その実力…今一度。この者らの前で見せてもらおう…!!」

その言葉と共に大太刀を包む炎が激しさを増していった。それを見た辺りの隊長格の者のうち、十二番隊 以外の全員が驚愕する。

「山爺!いきなり『卍解』は…!!」

「黙っておれ京楽!!」

八番隊長である『京楽 秋水』の言葉を一蹴した元柳齋はそのまま刀を水平に持ち出す。すると、刀を包んでいた炎が消えると共に中から煙を放つ黒色の太刀が現れた。

いや 消えたのではない。あまりにももの高温により炎さえも焼き尽くしてしまったのだ。

【卍解】

—— 『残火の太刀』

その刀の一振りには千里一帯を灰燼と化す劫火の刃となる。

「全員…下がっておれ…!!」



長年に渡り総隊長の座に居座り続けていた歴戦の死神は最初から目の前に立つ少年を消し炭にするつもりで刀を振るい出す。

北——【天地灰尽（てんちかいじん）】——ッ!!!

そして 黒色の太刀が振るわれた瞬間 巨大な炎の渦が波の様に巻き起こり少年ごと斜線上の景色を消し飛ばしていくかのように迫っていき少年を飲み込んでいった。

その光景を後ろから見ていた隊長格の皆は冷や汗を流していた。全員が全員 突然の卍解の使用に理解が出来なかったのか疑念の目を向けていた。

「なぜ…元柳斎先生は卍解を…!?!」

「僕も全然理解できないよ浮竹…もしかしたら山爺自身が理解してるんじゃないのかなあ…卍解を使わなきゃいけない程——」

——あの子が強いという事をねえ…!——

その時であった。

目の前を焼き尽くしていた炎が一瞬にして消し飛んだ。

そしてその直後。

目の前を焼き尽くしていた激しい劫火の炎が掻き消されると共に太刀を構える元柳斎の目の前に少年が現れ一瞬にして元柳斎の身体をすり抜けていった。

“完全不可視の峰打ち”——!!!!

「ぬ…!!」

刀を振り翳していた元柳斎は自身の身体をすり抜け少年が背後に

立っていた事と攻撃を受けた事をようやく認識すると刀を握り締め  
た両腕を下ろしながらゆっくりと口にした。

「見事…」

その一言と共に総隊長である元柳斎の身体は地面へと倒れたので  
あった。

「！！！！」

その光景を目にした一同はようやく認識したかのように瞳を震わ  
せた。だが、認識した時には既に少年の身体は“そこ”にあり総隊長  
である元柳斎の身体が床へと倒れていたのだ。

「き…京楽…今の…見えていた…か…？」

「いや…全く見えなかった…あの子が太刀を振るってる姿も…とい  
うか…太刀を振るってたのかな…？こりやまた…とんでもない子が出  
てきたものだね…」

二人以外の全員も目が飛び出す程まで開いておりその光景を瞳を  
震わせながら見つめていた。少年の動きは極限なまでに高められた  
隊長格らの動体視力でさえも捉える事が不可能な程の速さだったの  
だ。

中でも最も驚いていたのが五番隊隊長である藍染であった。千弘  
の刀を握るその姿勢に瞳を震わせていた。

「流石のお前も驚きを隠せなかったようだな…」

「うん…彼の霊圧を感じたがもう何も言えない…僕も多少なりと霊圧  
に自身があつたんだけど、それが豆粒に見えてしまう程の凄まじい霊  
圧だったよ…」

日番谷の質問に答えながら藍染は驚くと共に一瞬ながら笑みを浮  
かべていた。その笑みがどの様なものであつたのかは本人以外が知  
るよしも無かつた。

隊長達が動揺している中、その少年は倒れた元柳斎に目を向けると、慌て始めていた。

「わ!?大丈夫ですか!誰か!救急箱がどこにあるか知りませんか!?総隊長が突然倒れて…!!」

「い…いや…君がやったんじゃないの…?」

「私が!?とんでもない!私はただ柄を打ち込んだだけです!私程度のも物が総隊長を気絶させられる程の技量など身につけておりません!恐らく何か“病気”に掛かっているのでは…」

そう言い少年は慌てながら元柳斎の身体を仰向けにすると心臓マッサージを始める。

だが、総隊長は病など患っていない。むしろ完体であり強さも過去と大差はない。それに最初から油断もしておらず霊圧も乱れず冷静であった。

総隊長を一般の隊員よりも知っている皆は確信した。

この少年は本気かつ細心の注意を払っていた元柳斎を“一突き”だけで倒したという事を。

そしてその光景を見つめている隊長格の中で一人だけその強さを目の当たりにして目を光らせている者がいた。

「いいねえ。アイツの強さ…実に興味深い…!!」

十二番隊隊長 『涅 マユリ』

後に元柳斎を破ったこの少年はマユリの進言によって十二番隊へと配属される事となった。それと共に元柳斎を破った事は隊長格らとの間の秘密とし混乱防止の為に口外禁止という指令が出されたのであった。

それと同時にこの少年に零番隊となる期待の念も持たれ始めていった。

## 恋愛相談 千弘編

「はあ…何でだ…何でこんな…」

屋根の上で蹲っていた千弘は顔を上げると深い溜息をつきながら空を見上げた。だが、空を見上げててもこの熱い感情は晴れる事は無かった。

そんな時である。

「お〜い千弘く〜ん。そんな所でなにやってるんだ〜い？」

「ん？京楽隊長…」

下から声が聞こえ、見るとそこには酒瓶を肩に背負う京楽の姿があつた。

—————

—————

—————

「いやあく偶然だねあそこで会うなんて。一杯どう？」

「いえ、お酒弱いので良いです。ジュースキださい」

あれから千弘は出会った京楽のいる八番隊の隊舎に招かれ、彼から飲み物を振る舞われていた。千弘がジュースをゴクゴクと喉に流し込む中、同じく酒を口元に注いでいた京楽はいつもと違う彼の様子に首を傾げていた。

「それにしても珍しいね。君が一人なんて。いつもは涅隊長のこのネムちゃんと一緒になのに。何かあつたのかい？」

「そ…それは…」

「ん？」

ネムの名前を出した直後に千弘は頬を赤く染めながら顔を逸らす。その様子を見た京楽は「さては…」と思いきや笑みを浮かべた。

「ははん成る程…。その様子だと—————

恋した様だね」

「!?」

京楽の言葉に千弘は先程よりも更に顔を赤く染め上げた。完全に凶星である事を見抜いた京楽は手をパンパンと鳴らしながら高笑いする。

「アツハツハ！やっぱりねえ。いやあ〜青春じゃないかい」

「ち…ちち！違います！私が副隊長に恋なんて！」

「じゃあ他に何があるんだい？名前を聞いただけで顔真っ赤にして慌てふためくなんて恋しかないじゃない〜」

そう言いながら京楽は高笑いを止めると再び酒を口にする。

「『思い立ったが吉日』 好きなら今すぐ好きってストレートに伝えた方がいいかもよ〜？」

「いや！まだ好きだなんて一言も！」

「うんうん分かるよ。否定したくなるよね。僕が君と同じくらい頃はそういう男子をいくつぱい見てきたよ。うん。正に隣の席にいた子にそっくり♪」

すると

「隊長。勤務がまだ残っているというのに何をやっているのですか？」

「お〜!?七緒ちゃん!？」

襖がバタンと激しく開かれると共に眼鏡を輝かせながら副隊長である七緒が姿を現した。

「見つかったか…」

「見つかったかったか…じゃありません！ほら！早くいきますよ！

あ、園原さんよく来てくださいました。どうぞごゆっくりと」

それから京楽は七緒に連れられながら去っていった。一人残された千弘は未だに素直になれていない自身に苦悩するのであった。

「私がネムさんに恋なんて…そんな事…あの人はただの私の上司…それに私の様なチビが…絶対にないです…」

未だ、恋心である事を自覚していない千弘は己にそう言い聞かせながら廷内を歩いていった。

「オラアアアア!!クソガキいいいい!!前はよくもやってくれ——ぐぼはあ!？」

「すみません…いまそれどころじゃないので…」

空に開いたガルガンダから武器を振り下ろしながら降ってきたノイトラを再びガルガンダへと殴り飛ばした千弘は己がどうするべきなのか、迷っていた。

「あく!!!これから帰ったら必ず会うしどう接すればいいんだあああ!!!」

—————  
—————  
—————

「〜という訳なんですけどどう思いますか？」

「なぜそんな事を私に聞く？」

あれから千弘は悩みに悩み、遂には裁判まで牢獄で特殊な術式で収容されているスウェット姿の藍染の元にまで来てしまっていた。藍染は裏切る前までは護廷隊や霊術院に関わらず相談役として皆から多くの悩みを聞いていたのだ。それは雛森は勿論だが、日番谷も入っている。

その一方で突然と千弘から相談された藍染は冷静でありながらも驚いているのか、意外な目を向けていた。

「他の人にも相談できないですし、広められる可能性もあるので、誰よりも暗い場所に閉じこもってる貴方の方に聞くのが一番良いかと。おまけに霊術院の方々から相談役として人気だったので」

「できれば後者がメインの理由であって欲しかったな…!!」

「あ、でも貴方の場合は相手の気持ちを踏み躪る様な良からぬ結果を

招く答えを出しそうですね」

「だったら最初から来なければいいだけの話だろう。さっさと帰りたまえ。君の顔を見ていると無性に腹が立ってくるのだよ」

「あ、お互い様ですね。私も貴方見ると唾吐きたくなるぐらいイライラしてくるんですよ」

「だから今すぐ帰れといっているのだよ。聞こえなかったのか?」

そう言い藍染は千弘との短時間のやり取りに疲れたのか大きな溜息をつく。

「まだ護廷隊にいた頃もよくこの様な相談を受けたが、素直に相手に言えとだけしか言えないな…。それでも言えないのなら知らぬ場所まで吐き出して普通に接していくのがいいだろう。まあ色恋沙汰に興味がない私にとっては好意なんてものは持ち始めた途端に精神に苦痛を与える重荷でしかないがな…」

「成る程。貴方らしい意見ですね…。敵味方関係なく指摘や意見してくれる性格がまだある様で安心しました」

藍染のアドバイスに千弘は頷いた。千弘も藍染を嫌っているがこの様な様々な面から物事を見据える事ができる彼の性格は素直に尊敬していたのだ。今となっても彼のこの様な人への指摘や客観的な立場、または多角的面から見た際の助言を行う癖は無くなっていないと言えるだろう。

「……ん? そうだ! それよりも園原千弘!」

「はい?」

すると 藍染は何かを思い出したのか突然と表情が突然と険しくさせると千弘へと尋ねた。

「あの写真」はどうなった…!」

「あの写真? あゝ」

藍染から尋ねられた千弘も思い出したのか、アツサリと答えた。

「局長が広報部に回しました」

「おのれええええ!!!」

それから藍染からも助言を得た千弘はそのまま牢獄を出ていった。後に残された藍染は片手で顔を覆いながら俯くのだった。

因みに彼が言っていた写真とは何なのか。それは――

――千弘に下剤を飲まされ、白い装束の下腹部が茶色に染まった時の写真である。

更に余談であるがこの写真が新聞へと載せられたものの、最初は大きな反響を呼んだがそれも長くは続かず3日程度で冷めてしまったが、立て続けに藍染が何者かによつてハゲにされたり脱糞している様子を撮られたりと不幸に見舞われている事で遂には『哀れな藍染 哀染』というあだ名で呼ばれる様になってしまったらしい。

「園原千弘おおお!!!涅マユリいいいい!!!私は貴様らを蔑如する!!!」

そしてこの記事を見たひ○○○ ○も は思考が停止し数日間寝込んだという。



恋愛相談 ネム編 そして

この胸の熱いものは…いつからできたのだろうか…  
その日。初めて少女は恋をした。

――――

――――

――

ネムと彼が初めて会ったのは彼が十二番隊に所属されて数日経った時であった。主人であるマユリあらゆる人物の監視を命令されたネムはその人物が待っている部屋へと向かうと襖を開けた。

「…」

そこにいたのは此方に向けて背を向けながら正座をする一人の少年だった。その少年は死覇装を纏っているために死神である事は間違いない。体格を見る限り十番隊隊長である日番谷冬獅郎とほぼ同じであるためにまだ年頃が幼い者だろう。

するとその少年はゆっくりと振り返った。

「あー初めましてーこの度 十二番隊に所属する事となりました『園原千弘』です！よろしくお願いしますー！」

その少年の声はまるで少女の様に高くとても幼いものであった。

「この度…貴方の監査役を命じられました『涅 ネム』です」

その日から主ではなく千弘という名の少年と過ごす日々が多くなった。それはマユリの命令故に従う他なかったが。主の命令の二元、彼の日常を何日も観察していった。

朝は起きて廷内の見回り。そして掃除。彼の日常はただそれだけであり、ごく稀に異常な力を観察する事ができた。暴走した刀獣の討伐や現世の視察。更に十一番隊隊長である更木剣八の奇襲捌き。だが、その異常な力の根源が何であるのかはサツパリ分からなかった。

「あ、ネムさん！暑いのでアイスでも買っていきませんか!？」

彼は熱い日や寒い日などはこの様にして自身と接してきてくれる。そして遂には悩み事まで相談される様になった。

最初は彼を観察してそのデータを送る事が任務であったが、彼と過ごしていく内に…気が付けば自身も楽しくなっていた。

「…はい…小豆ものを…」

いつしか自身は彼を観察対象ではなくなったただ一人の友として認識していたのだ。

それから私は観察をすると共に彼と日常を謳歌し始めていった。任務を共にした後は食事を摂り、開発を共同したりと――

だが、そんな感情もすぐに異常が現れ始めた。

――

――

――

――

そんな日常が続き2年が過ぎた時であった。いつもの様に隊舎の回廊を歩いていると彼と遭遇する。

「あーネムさん！どうもこんにちは！」

「…」

軽く会釈する。すると、彼はジッと此方を見つめた。

「あの…どうかさされましたか？」

「髪が少し乱れてますね。ここへ。私が直しますよー！」

「いえ…そこまでしていただくか――!?!」

断ろうとしたが彼に肩を掴まれそのままその場に座らせられた。だが、彼の肩が触れたと同時に何故だが心の中が突然と熱くなった。いつもならばこんな事はない筈だ。なのに何故か今はとても熱い…。

「はい！終わりましたよー！」

「あ…ありがとうございます…」

「では、私はこれで」

そう言い彼は小さな足取りで通り過ぎていった、気が付けばその後ろ姿が見えなくなるまで見つめていた。

「……」  
過去を思い出しながら必死にこの胸の熱いものの正体を知ろうとするものの、全く分からなかった。

そんな時だった。

「あら？ネムじゃない。どうしたの？」

「……松本副隊長……」

目の前の角から長いウェーブの掛かった髪を持つ女性死神『松本乱菊』が現れた。

「珍しいわね。いつもなら千弘と一緒にいる筈なのに今日は一人だなんて」

「……」

「……」  
ネムが事情を話すと松本は頷きながら自身の隊舎へと場所を移す。隊長不在の執務室にて向かい合う様にソファに座りながら松本は先程の話について頷くと目を向けた。

「それってやつぱり……恋じゃないの？」

「恋……ですか？」

「だってそれしかないじゃない。アイツの側にいると熱くなるんでしょ？」

「はい……ですが……私が恋な……」

自身が恋心など持つはず無いと言い掛けた瞬間、ネムの脳内を千弘との思い出が駆け巡った。何度も助けてもらった思い出や彼を抱えながら走った思い出、そして彼と共に虚圏へ行った思い出。それが浮かび上がる度に心の奥底から再び熱くなり始めていったのだ。

「（私は本当に……あの人に……）」

その時であった。

「失礼します。松本副隊長！新しいお菓子が手に入ったので女性死神協会の皆で集まって食べませんか！」

扉が開きオレンジ色の髪を持つ小柄な女性死神が現れた。彼女の名は虎徹清音と言い、四番隊副隊長である虎徹勇音の妹である。因みに彼女が所属しているのは浮竹が率いている十三番隊である。

現れた彼女に乱菊は軽く会釈する一方で、ネムは駆け巡る思い出によつて彼女に気づいていなかった。

「あ！涅副隊長も丁度良かった！一緒にお菓子を」え？」

「清音！丁度いいところに！」

—————

—————

—————

—————

あれからネムは意識をハッキリとさせる。その一方で松本から事情を聞いた清音はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた。

「ん？どうしたのよ」

「いえいえ…（ふふふ…前までは姉さんと千弘くんの凹凸カップルを想像してたけど…そこに涅副隊長が合わされば…はあく！！小さい男の子が二人のお姉さんにメチャクチャに…!!!）」

そう言いながら清音は頭の中で左右からネムと勇音が千弘を挟む様にして抱き締める光景を思い浮かべながらお盆を抱き締めた。それによつて彼女の鼻からは赤い液体が。

「何を想像してるか知らないけど…取り敢えず鼻血止めなさい」

それから気を取り直した清音は松本と共にネムの相談に乗る事となった。だが、ネムは粗方、自身が彼に恋心を抱いている事を自覚した模様であるが、その後の接し方が分からない様だ。

「これからは…千弘さんと…どの様にして接していけば良いのですしよ  
うか…それにこの後に顔を合わせた際にも…」

「うくん…」

尋ねられた二人は腕を組み考え込む。そんな中、オトナな女性乱菊が目を目をカッと開き立ち上がった。

「じゃあこうしなさい!!!」

—————

二人からアドバイスをもらったネムはそのまま十二番隊隊舎へと  
戻り回廊を歩いていった。

すると その次の曲がり角でバツタリと千弘と会った。

「ね…ネムさん…!?!」

「千弘さん…」

出会い頭に千弘は先程の逃げ出してしまった事を悔やんでいるの  
か、申し訳なさそうな目で此方を見つめていた。

「あの…先程は申し訳ありませんでした…。突然と逃げ出してしま  
まして…」

「いえ、お気になさらず。それよりも千弘さん」

「な…なんでしよう…?」

ネムはそのまま千弘を凝視するとゆっくりと両手を広げた。両手  
を広げる中、ネムは先程、松本や清音から言われた事を思い出す。

『取り敢えず気持ちを伝える事が大事よ。抱えたままじゃストレスに  
もなるし今後も接し辛くなるわ。もしも逃げようとしたら大胆に行  
くのよ。』

「キスなり抱き締めるなりしちやいなさい!」

頭の中で二人のアドバイスを思い出したネムは両手で千弘の顔を  
挟み込むと自身の顔へと引き寄せた。

「キスなり…抱き締めるなり…」

「え…!?なんですかいった」

その瞬間

ネムと千弘の唇がゆっくりと重ね合わされた。

「!?」

唇が触れた瞬間 千弘の顔が一瞬にして真っ赤に染め上がる。その一方で押し付けていた唇をゆつくりと離したネムはそのまま彼の身体を胸元に抱き寄せた。

「!?ね…ネムさん…!?いまのって…!?」

「千弘さん…私は貴方の事を異性として好いています」  
「ええ…!?」

そう言いネムは力ある限り千弘の身体を強く抱き締めた。自身の思いを必死に伝えると共に彼の心臓の鼓動をその身で感じ取るかの様に。すると千弘の身体は更に熱くなっていた。

「千弘さんは私の事をどのように思っているのですか？」

千弘の身体を抱き締めながらネムは尋ねた。その一方で彼女の胸元では千弘は顔を真っ赤にさせながら状況を飲み込めずパニックに陥っていた。

「千弘さん…聞こえてますか？」

「はひい!?あ…あのええと…」

ネムから尋ねられた千弘は驚きながら顔を逸らす。先程の事が頭から離れず恥ずかしさのあまりネムと顔を合わせられなかったのだ。

そんな中。千弘は京楽と藍染の言葉を思い出す。

『思い立ったが吉日。ハッキリと言っちゃいなよ』

『素直に言え』

二人の言葉で我に帰った千弘は一度深呼吸をし緊張を抑え込むとネムと目を合わせる様に顔を向けた。

「私も…私も貴方の事が好きです！友達としてではなく…一人の女性として!!」

その叫びは周囲に強く響き渡っていった。そして叫んだ千弘は彼女の両手を自身の両手で包み込み強く握り締めた。

「貴方の事を愛してます!!」

「…!」

その言葉を身に受けたネムは大きく目を開くと瞳を震わせる。そして瀾霊廷を照らす夕陽に照らされると共にネムは頬を緩ませ今まで見せた事がない程の満面な笑みを浮かべた。

「はい…!!」

その後。互いに両想いとなった千弘とネムは部屋に戻りいつものように夜を共に過ごしたのであった。

## 千年血戦編

### ザツクリと一年半が経過

それから数週間が経過した。千弘とネムが恋仲となった事はすっかりと瀨靈廷全体へと知れ渡り話題の的とされる事に。そしてもちろんマユリの耳にも入る。だが、本人は特に慌てる様子は見せておらず、

「ん？今更かネ？」

と言った。本人曰く千弘とネムがくっつけば彼は十二番隊にいざるをえなくなる為に恋仲となったのは好都合であつたらしい。

そんなある日の事であつた。

「お〜い。園原千弘はおらへんか〜？」

十二番隊隊舎に一人の隊長が訪ねてきた。その男は金髪のおかつぱ頭という独特な髪型を持つ細身の青年である。

「は〜い」

青年の声に反応した千弘はドタバタしながら出てくると、目の前に立っていたおかつぱ頭の男性を見て首をかしげる。

「えっと…どちら様で？」

「新しく五番隊隊長になった『平子 真子』や。ようやく会えたのう」  
「あ〜!!」

青年『平子真子』の言葉に千弘は手をポンと叩いて思い出した。彼は千弘が藍染を捕縛してからしばらく経った後に空席となった五番隊の隊長となった死神である。因みに彼は藍染の元上司であり彼の策略にはめられ一時は尸魂界を追われ現世にて身を潜めていたらしい。

「隊長でしたか。これは失礼」

「いや隊長は羽織見たら分かるやろお!？」

それから平子は気を持ち直すと千弘に向けて頭を下げる。

「園原千弘…いきなりだが礼…言わせてくれ。アンタが藍染をしょつ引いてくれたお陰で俺達の無罪が証明された…」



「あく。確か貴方を含め数人は破面化の実験体にされたらしいですね」

千弘は頷くと手を横に振る。

「まあ気になさらず。私はただあの眼鏡がムカついただけなので。お礼を言われるような程ではありません」

「そうかい。それでも礼だけは言わせてもらう。そうでもしないと気が晴れんしな」

そう言い平子は改めて千弘へと礼を言う。そんな中だった。平子は何かを思い出す。

「あ、あと、俺と同じ実験体にされた子で『矢桐丸 リサ』っちゅう下品な女がおるんけどな」

「はい」

「弟子にしてくれって」

「絶対に断ります」

――――

――――

――――

――

それからあつという間に一年半もの時間が流れていった。藍染は裁判の結果、最下層の牢獄『無間』にて10000年の刑に処され投獄された。その一方で、市丸ギンは藍染を殺すつもりであったとしても彼の側につき暗躍していたのは事実であるため、無間とは別の監獄にて400年の判決。同じく東仙も藍染に完全に加担していた為に彼と同じ監獄にて懲役600年という判決が出された。

そして彼らを捕縛した張本人はというと……

「はいはいはいはい!!」

相変わらず雑用に励んでいた。一年が経過してもなお昇進する事なく一般隊士のままであったのだ。今日も廷内の掃除を終わらせいつものように技術開発局へと赴いた。

門を潜り出会う研究員達と挨拶を交わしながらいつものようにマユリの研究室へと到着すると白衣を身に纏う。

「お待たせしました局長」

「全く遅いよ。さっさと持ち場につきな。グズは嫌いだヨ」

そしていつものように実験の助手の始まりだ。

そんな中だった。千弘が器具を運ぶ中、同じく研究員である久南ニコが何かを思い出したかの様に口にした。

「そう言えば千弘ちゃん。聞きましたか？最近、現世の本屋やDVD店に白い軍服を着た怪しい集団が見掛けられる様になったって」

「白い軍服？いわゆる『ゴすぷれいやー』じゃないですか？不安なら局長や阿近さんにでも相談してみるのが良いかと」

「うん…そうだよね」

それから勤務時間が終了して夜となると千弘はある場所へと向かうべく、技術開発局を飛び出した。

――――

――――

着いた場所は前まで沢山の秋刀魚草が植え付けられていた場所。だが、今はもう秋刀魚草だけではない。

タイ草 エビ草 鯖草 そしてマグロ草といった海の幸の身体が付けられた植物が風に揺られていた。もちろん大きさは普通よりも数倍のサイズはあり、個体によってはシッカリと身が付いていた。この一年半で秋刀魚以外の魚も植物化させる事に成功したのだ。余談だが。研究費用が高すぎた為に千弘の貯金は底をついてしまったらしい。

「さてネムさん！始めますか！」

「はい。千弘さん」

麦わら帽子を被った千弘は同じく麦わら帽子を被るネムへと声を掛ける。そこから二人の共同作業が始まるのだ。と言っても全ての植物に水をあげるだけなのだ。

作業を進める中、ネムは懐から注文用紙を取り出し千弘へと渡す。

「六番隊の朽木隊長から注文が入り特大サイズ一種類ずつ購入したいとのことですよ」

「分かりました！ええと…特大サイズ50000環を全種類だから、250000環ですね！」

「あともう一件。こちらは特大サイズをあるだけ全て…と書かれています」

「へえ。何番隊の方なんですか？」

千弘から尋ねられたネムは目を凝らしながら注文用紙の名前の欄を見る。

「…んん…零番隊…『曳舟桐生』と書かれています」

—————

—————

—————

—————

その同時刻。薄暗い空が広がる虚圏にて。

「ふむ。なんとも居心地の悪い所だな」

藍染達が占拠していた巨大な城『夜虚宮』から離れた場所にて白い軍服と黒いマントに身を包み立派な髭を持った謎の大男が現れた。

「陛下。差し出がましいようですが、今は読書はお控えを」

「すまん。やはり最近の現世の書物にはどうにも引き込まれてしま

う」  
更にその男に続くようにして、背後から金色の長髪を持つ男やモヒカンの様な髪を持った男といった次々と同じように軍服を纏った集団が現れる。金髪の男から注意された大男は読んでいた本『NARUTO』を閉じ懐に仕舞うと目の前に聳え立つ夜虚宮を睨みつけた。

「では我々の第一歩を踏み出そう。虚圏を制圧するのだ。」

千年血戰編 開幕。

## 零番隊 謁見そして襲撃

数日後。千弘は農場から出て零番隊の住まう霊王宮への行き方を尋ねるべく元柳斎の元を尋ねた。

「御大将。少しお時間よろしいですか？」

「うむ…要件は分かっている」

「いや、まだ何も言っていないんですけど…あくそれより現世で黒一さんが初代死神代行の一行とぶつかったって聞いたんですけど、彼は大丈夫なのでしょうか？」

「うむ。一悶着あったようじゃが、無事と聞いておる。それよりも話を戻すが、ここへ来た理由は…遂に隊長になる決心が――

「いい加減にしてください。頭磨いて街灯にしますよ」

それから千弘は自身の商売での注文があった零番隊の隊舎までの行き方を尋ねた。それを聞いた元柳斎は千弘の緊張感のなさに怒り眉間に皺を寄せようとしたが、ふと何かを考えすぐに落ち着かせると息を吐く。

「はあ…この非常時に…まあお主なら立ち入る資格など余裕にあるじやろう。霊王宮への行き方は零番隊がここへくる際に乗ってくる天柱輦と共に搭乗する、または零番隊の許可を得た上で花火師の大砲で打ち上げてもらう…しかないな」

「ふむ…なるほど」

元柳斎から行き方を教えてもらった千弘はそのまま隊舎を出ていった。

――

――

――

――

瀟霊廷のほぼ真上かつ遙か上空へ位置し、幾つもの巨大な円盤が浮かび上がる巨大な宮殿『霊王宮』そのうちの一つにて、ふくよかな体

型を持ち、肩にしやもじを掛けている女性と独特な髪とサングラスを掛けているファンキーな青年、更にリーゼントが特徴の男、着物を着用している女性、更に立派な巨大な髭を持つ初老の男性の計5人が集まっていた。

「ようやく奴に会えるのう！この時をどれほど待ったか」

そう言い立派な髭を持つ男『兵主部一兵衛』は千弘の顔が載せられた紙を見る。彼ら全員こそ、護廷十三隊全勢力を凌駕する力を持つ零番隊である。彼らは以前から千弘に目をつけており、今回の商売を聞いて、これを機に彼と邂逅しようと考えていたのだ。

「さてさて、会って早速わしの『黒』が効くかどうか試してみたいものよのう」

”まなこ和尚” 兵主部一兵衛

「流石にそれは無理があるんじゃないやねえのか？」

”泉湯鬼” 麒麟寺天示郎

「どうだろうねえ〜？」

”穀王” 曳舟桐生

「ちゃん僕が一番気になってるのは奴の斬魄刀だYOチャン僕の傑作と斬れ味勝負したいNEー！」

”刀神” 二枚屋王悦

「一度も始解も卍解もした事がない…か。まあこれから本人と会うのじゃ。そこで聞けば良い」

”大織守” 修多羅千手丸

以上の5名は千弘のいる瀨霊廷へ向かうべく、天柱輦へと乗り込もうとした。

その時であった。



そんな中で一兵衛は千弘を前にして別の事でも冷や汗を流していた。

「(やはりのう…此奴…とんでもない霊圧を秘めておる…しかもこの空間の空気にも何事もないかの様に順応しておるな…)」

一兵衛自身は感じ取っていたのだ。千弘の内に潜む強大な力に。内に眠る超高密度の霊圧をその身に感じた途端に、遂には自身が刀で一閃される光景さえも頭に思い浮かび上がって来ていた。

「……」

「およう？どうしたんですか？険しい顔をされて」

「んん…いや。気にせんでくれ。それよりもおんしにちと頼みがあるんじゃないが…」

「私にできる事でしたら何なりと！」

—————

—————

—————

それから30分後、要件を終えた千弘は霊王宮に最初に降り立った場所へと来ていた。

「では、私はこれで」

「う…うむ…いやはやまさか…能力も何もかも通じぬ上に掻き消されとは思ってもよらんかったわい…」

彼を見送るかの様に出てきていた零番隊の全員。だが、その内の一人である一兵衛は傷こそないものの、隊服の所々がボロボロであった。

「本調子では無かったからじゃないですか？能力も使い手の体調に左右されるので風邪や怪我など無ければ私は瞬殺されたと思いますよ」

そう言い千弘は一兵衛に返すと、零番隊の全員に手を振りながらその場から飛び降り霊王宮を後にしたのであった。

「では失礼します！」

その姿を見送っていた全員の表情はとてつもなく苦いものになっ



ていた。中でも頭目である一兵衛の額からは汗が流れている上に表情が暗くなっていた。因みに一兵衛自身が怪我や体調不良であるというのは本人の勝手な解釈であり一兵衛自身は完体である。

「本調子だったし…ていうか生まれてこの方一回も体調崩した事ないし…。」

—————

—————

———

その同時刻。瀨霊廷の一番隊隊舎にて。元柳齋は厳格な表情を浮かべていた。それは各地にて次々と異常な現象が起きているからだ。先日には虚の大量消滅、そして歪む空間。これは全隊員を総動員する程の事態へと進展していた。

「…」

総隊長である元柳齋は杖を持ちながら空を見上げていた。更に浮かぶ太陽が彼を照らし背後に悠々たるシルエットを模した影を作っていく。

因みにこんな非常事態の中、なぜ千弘を向かわせたのか、その理由は簡単だ。元柳齋は零番隊の皆と関わりがある為に彼らの性格をよく知っている。彼らが千弘と出会えば興味を抱き必ず勝負を挑むだろう。そして勝てば彼は今度こそ自身の強さに自覚を持ち隊長への就任を考え始める筈だ。

そんな確証もない浅はかな考えを彼は信じてしまい千弘を行かせてしまったのだ。

「——以上が十一番隊及び九番隊からの報告です」

そんな中で空を見上げていた元柳齋は伝令係による報告を耳にしていた。

その時であった。

「続いては十番だ——がはあ…！」

報告を続けようとした隊士の声が貫かれる音と共に途絶えた。その音を聞いた元柳斎は振り向く。

「お初に御目見する。護廷十三隊総隊長 山元 重國 元柳斎 殿とお見受けいたす…」

そこには白いローブに身を包み顔を黒い仮面で隠していた不気味な男達が立っていた。

だが、気配には気づいていたのか元柳斎は取り乱す事なく鋭い目を向けた。

「…何奴…」

「我々が何者なのか…それは推して知るべし。単刀直入に申し上げると…宣戦布告に参った。これより5日後…戸魂界は我ら『見えざる帝国（ヴァンデンライヒ）』に殲滅される」

「…」

その男の言葉に元柳斎は一才 驚きもせず、厳格な表情のまま杖を握る。

その時であった。

凄まじい衝撃音と共に何かが窓辺から飛び込み壁へと叩きつけられた。

「…！」

「丁度終わったようだな。ここへ来たのは我々だけではない。侵入した際に勇敢に立ちはだかる者達がいますね。その者らの相手をもう一部隊に任せていたのですよ」

その言葉と共に砂煙が晴れ飛び込んできた物体の正体が露わとなってくる。それと共にローブの男は飛び込んできた影へと目を向けた。

「讃えるべきであるだろう。我々に臆する事なく挑んだ彼を  
は？」

それを見た瞬間 ローブの男は腑抜けた声を漏らす。そこに横たわっていたのは彼らと同じ白いローブを身につける者であったのだ。

すると 倒れていた白いロープの男は震えながら手を動かし今にも消えそうな声をあげて喋り出した。

「お…お伝え…しま…す…我々の部隊は…ぜん…滅…空から現れた謎の…子供に…一瞬で…倒され…」

「な…!?!」

最後まで伝える事なくその男はそのまま意識を失ったのだった。それを見た白いロープの男達は動揺すると共に元柳斎は笑みを浮かべた。

—————

その同時刻。一番隊隊員が集い、先頭に立ちながら部隊を率いていた一番隊副隊長である雀部長次郎は目の前の光景を見ながら啞然としていた。更に彼の後ろでは精鋭中の精鋭とされる隊士達の殆どが同じく啞然としながら腰を抜かし地面に尻餅をついていたのだ。

目の前には

「此方もいきなり空から合間に割って入って申し訳ないとは思ってますけども、いきなり攻撃してくるとは何事ですか？普通まず互いの言葉を聞くのが常識ですよ？ねえ聞いているんですか?!ちよつと！人の話をちゃんと聞きなさいよお!!」

辺りに白いロープに身を包む不気味な集団が全員ボロボロになりながら倒れており、その内のリーダー格らしき男の胸倉を千弘が掴みあげながら往復ビンタする光景が広がっていた。

## 見えざる帝国 動く

その後、千弘に倒された上にマスクを剥がされ素顔を露わにされた集団はリーダー共々、一瞬の隙をつき逃亡、それと同じ時刻に元柳斎の元に現れた集団も姿を消した。

千弘が介入した事によりその場にいた隊士達には怪我はなく雀部も命拾いしたのであった。

「ありがとう…君のお陰で誰一人犠牲者を出す事なく済んだ…」

自身の命を助けてくれた千弘に雀部は部下達を総隊長の元へ向かわせると改めて千弘に向けて深く頭を下げた。それに対して千弘は慌てながら頷く。

「いえいえ…そんなお気になさらず！それよりも先程の方々は何なのですか？随分と荒れているお客様達でしたが」

そう言い千弘は先程、現れた仮面の集団について問い掛けると、雀部は言葉を詰まらせる。

「……」

「…あれ？どうしました？」

千弘が尋ねると雀部は首を横に振り答えた。

「…いや。なんでもない。この件については総隊長から聞かされるだろう…その時に分かるはずだ」

それから雀部は千弘と別れ自身も総隊長である元柳斎の元へと向かい報告するのだった。

「……………」

「……………」

「……………」

その後、隊主会が開かれ今回の騒動に関する報告や技術開発局の靈子濃度の観測により彼らの正体が滅却師である事が判明した。

更に元柳斎は相手側の余裕のあり方から向こうも此方と同じ規模の勢力を構えていると踏み皆へ今後は決して警戒を解く事なかれと

警告する。

それによつて警戒体制を敷いていた各隊の緊張は益々高まり全員が常時臨戦体制を取るようになっていった。それもそうだ。元柳斎でさえも気づかない内に門から堂々と侵入されたのだから。

――

「え？ 正体は滅却師？」

「ああ」

同じ知らせを阿近から聞いた千弘はようやくニコから聞いた話に納得する。

「成る程。現世で度々目撃されていたのも滅却師だったんですね」

「そう言う事だ。はあ…もつと早く気づいときや良かったな…」

技術開発局にて阿近は自身の不甲斐なさに肩を落とすが千弘はまあまあと宥める。

そんな中 地獄蝶が千弘の肩に止まった。

「ん？」

「何か指令じゃねえのか？ 『見えざる帝国』の本部を発見したから行ってボス共々退治してこいとか。まあお前さんならアツサリと終わらせるだろうがな」

「そんなく流石に身が重過ぎますよ」

阿近と軽く話しながら千弘は地獄蝶からの指令を受け指定された場所へと向かった。

――

――

――

それから千弘は用事を済ませると再び技術開発局へと戻ってきた。偶然にもすれ違った阿近は任務について尋ねた。

「もう終わったのか？」

「はい。なんでも更木ン隊長との決闘を命じられまして…取り敢えず戦ってきました。ただ…任務直後なのか酷く疲れている様子で最初は凄く動き回って刀も振り回してたんですが、何故か途中から倒れ

てしまったんですよね」

「へえ。それはそれは（スタミナ切れだろうな…。それにしても千弘の奴相手に疲れるまで立ち回れるって…：どんだけ強くなってるんだよ…）」

千弘の話を聞く中で阿近は更木のとてつもない成長スピードに内心驚くと共に引いていた。

「あ、そういえば局長は？」

「あゝ普通に実験に没頭してるぜ。前回の事もあるから俺もすぐ監視に戻るしな」

「ではそのまえに晩御飯と行きましょう！栄養補給は必須ですからね！良い酔が手に入ったので今夜はお寿司にしますよー！」

そう言い千弘は懐から高級そうな酔を取り出した。この緊急事態時にも関わらずブレない千弘を見て阿近はハアと息を吐く。

「この緊急事態下で呑気に飯食えるのはウチだけだよ…」

「……………」

「……………」

「それから数日が過ぎたある日の事であった。

瀨霊廷の警備は益々厳しい物へと発展していき廷内は緊迫した空気に包み込まれていた。

そんな中、阿近達がいつものように巨大なモニターを血眼にしながら観察していると、研究室から出てきたのか、マユリが現れた。

「おい、千弘とネムの姿が見えないのだが誰か知らないかネ？」

「ん？あゝ」

そう言いマユリは千弘とネムの所在について尋ねてくる。それに対して監視の勤務を鴨州達と共に行っていた阿近が答えた。

「今さつき二人で出掛けていきましたよ。まあすぐ戻ってくると思いますが」

「成る程。ならば私はしばし仮眠を取るヨ。二人が戻ってきたら報告書と技術開発局の研究予算案を提出しておく様に伝えておいてくれたまえ」

「うえ!?ちよつ…そんな呑気な!?!」

のんびりとしているマユリにニコは驚きの声をあげようとするが、マユリは耳を傾ける事なくそのまま再び自室へと戻っていったのだった。

—————

同時刻。

瀨靈廷のとある道に佇む建造物の影の中。何処までも黒く染まるその色の中心をくぐり抜けた先にある広大な砂丘には巨大な帝国が佇んでいた。

『見えざる帝国』

「陛下…虚圏の狩猟部隊より通達…正体不明の謎の男が黒崎一護並びに浦原喜助と共に現れ苦戦を強いられている模様…」

「ほう…?特記戦力の内の三人が不在か…」

その巨城の中にある巨大な玉座にて腰を下ろす一人の大男はコンピュータを操作しながら通達を受けた部下からの報告を耳にすると立ち上がる。

「力の9年間が終わるまで保留にしておいたが…またとない好機だ。ハッシュ・ヴァルト」

全身に纏うは雪のような白い軍服に加えて歴戦の猛者を思わせるかのような漆黒のマント。鋭い眼光を光らせながら男は金髪の長髪を持つ青年へ指令を下す。

『『星十字騎士団』へ伝えろ。これより我らは———

尸魂界へ侵攻する…!!」

見えざる帝国【皇帝】ユーハバツハ出撃———。

## 侵攻

封じられし滅却師の王は900年を経て鼓動を取り戻し――

90年を経て理知を取り戻し――

9年を経て力を取り戻し――

9日間を以て世界を取り戻す――。

――

宣戦布告を受けてより予告通りの当日。

廷内は正に一触即発の雰囲気となっていた。全死神隊員が廷内に召集され次々と指定された配置へとついていく。

前回の襲撃を参考に精鋭部隊の隊員達はそれぞれ四つの門の周辺にて待機する事となり、それ以外の者は廷内の路地などへと待機する事となった。

そんな中。待機していた隊員の中で比較的まだ幼く新人である死神『行木竜之介』は冷や汗を流しながら割り当てられた防衛場所にて身体を硬らせていた。

「そんなに気を張らなくていいよ。前回 敵が侵入してきた場所は黒龍門。つまり敵は門から侵入してくるといいう事だ。侵入した際は必ず四つの門の内の一つから連絡がある筈だよ」

「…はい…」

先輩でもある十三番隊第四席『可城丸秀朝』の言葉に竜之介は静かに頷いた。

その時であった。

「――ほう。成る程な。理に適っている」

『『『………!!!』』』



突如としてその場に聞き覚えのない男の声がこだます。その声を耳にした一同は驚きながら声が聞こえた方向である空へと目を向けた。

そこには白い軍服を着用しマントを羽織る大男が浮遊していた。何の前触れもなく現れたその大男に一同は言葉を失いたただ見る事しかできなかった。

それと同時に瀨霊廷の至る所から蒼色の霊子の火柱が立ち上がった。

「…!?!」

皆が驚愕する中、大男の付近から湧き上がった霊子の柱からもう一人 軍服を纏った青年が姿を表す。

「慄け死神共。これより星十字騎士団が貴様らを粛清する」

その男の一言と共に瀨霊廷の各地から次々と巨大な爆発音が轟き始めた。

—————

—————

—————

—————

それは本当に一瞬の出来事であった。1時間どころか半分の30分すら経っていない。経っていないにも関わらず護廷十三隊は壊滅に追い込まれた。

突如として現れた滅却師達によって隊員達の霊圧が1000以上も失われており副隊長はおろか、隊長達でさえも完膚なきまでに叩き潰されてしまった上に殆どが切り札である卍解を滅却師のメダリオンによって奪い取られてしまった。

その光景をユーハバツハは笑みを浮かべながらハツシユヴァルトと共に見つめていた。

周囲には戦いの余波によって廃墟と化した景色が広がっており、そ

れと共に彼に挑み敗れた隊士達が遺体となって倒れていた。

「辛いものだな。争いというのは」

その時であった。

「よう。テメエが大将か？」

「…ん？」

付近から足音が聞こえ、目を向けるとそこには血だらけの滅却師を3人も担ぐ更木の姿があった。

「な…：星十字騎士団が3人も…!？」

「ほう。流星は我が特記戦力の一人。推測通り力は未知数の様だな」

「ハッ。千弘に比べりゃコイツらなんざゴミ当然なんだよ。それは勿論テメエもな」

そう言い担いでいた滅却師の遺体を投げ捨てると更木は構える。その斬魄刀からは始解も卍解もしていないにも関わらず隊長格以上のもの霊圧を放っていた。

「俺とやりあおうや…!!」

—————

—————

—————

その後、辺りの風景は更に激しいものへと成り果てていた。ユーハバツハと更木の戦鬪の余波によつて周囲の建物は全て吹き飛ばし足元には巨大なクレーターが出来上がっていた。

だが、それでも更木がユーハバツハへと勝利する事は叶わなかった。

「がはあ…」

ユーハバツハの腕にはボロボロとなり気を失っている更木の姿があった。対してユーハバツハ自身も無事では無かったのか、軍服やマントが所々に破けており傷をつけられた肌が顔を見せていた。

「驚いたぞ…：まさか力を解放した私相手にここまでとはな。これ程の深傷を負わされたのは千年ぶりだ。だが、やはり私を倒すまでには至らなかつたようだな」

そう賞賛しながらもユーハバツハは掴み上げた更木の身体を投げ

捨てた。

その時であった。

ユーハバツハの身体を刀が貫いた。

「が……」

突如として刀が身体を貫いた事でユーハバツハは口元から血を吐き出す。

「陛下!!ぐっ!?!」

咄嗟にハツシユヴアルトは駆け寄ろうとするも突然と発生した衝撃波によつて後ろに吹き飛ばされる。

そんな中 身体を貫かれたユーハバツハは瞳を震わせながら背後へと向ける。

「ほう……まさか不意打ちとはな……山元重國……!」

そこには全身から炎の如き霊圧を放ちながら刀を持つ元柳斎の姿があつた。

「……千年ぶりよのう……ユーハバツハ」

—————

「あくあ。本当につまんない。ワンちゃんも弱かつたし。早く帰って寝たいなく」

所変わつて瀨霊廷の別の場所にて、軍服を着用した少女が周囲に倒れている死神達を見下ろしながらため息をついていた。

彼女の名は『バンビエッタ・バスターバイン』瀨霊廷へと攻めてきた星十字騎士団の一人である。

バンビエッタの目の前には隊長である粕村が血を流しながら倒れ臥していた。

そんな中 彼女はふと別の方向へと目を向ける。

「…ん？」

目を向けるとそこにはボロボロとなった畑があり幾つもの植物：いや、魚の形をした植物が地面に倒れ伏しながら生き絶えていた。恐らく同じ星十字騎士団の攻撃の巻き添えにでもあったのだろう。だが、単なる巻き添えのみであったのか、幾つかまだ元気に生えている個体があった。

それを見たバンビエツタは見たこともない不気味な植物な為に頬を引き攣らせ不快感を露わにする。

「なにこれ?! 気色悪! えい!」

そのまま手から霊子を放つと残っていた植物全てを爆散させていった。爆散された事によって辺りに魚達の肉片が飛び散っていく。「本当に死神って変なもの作るわね! 特にこんな気持ち悪いもの作った奴の顔が見てみたいわ!」

そんな時であった。

「わく!! だだ…大丈夫ですか!」

近くの破壊された壁から一人の小柄な少年が慌てながら現れた。更にその直後に身長の高い女性も少年の後を追う様に現れ、二人は周囲の倒れている死神達の身体へと手を当て始める。

見てみると現れた二人は死神に見られる『死覇装』を纏っておらず農家が着用する様な長袖長ズボンに加えて首にタオル、頭に麦わら帽子を被っており、とても死神には見えない者であった。

「ここでもたくさん人が倒れてるなんて! 早く助けないと!!」

「落ち着いてください。幸いにも診療所のある四番隊隊舎が近いので薬を投与して、後は焦らずに運びましょう」

もう一人の女性らしき人物が少年を落ち着かせると、少年は頷き懐から薬を取り出して次々と周囲の人々へと投与していった。

「(死神…? いや…黒い服を着てないから死人かな…? でも弱っちい

霊圧を感じるから死神かな…まあいいか」

突然の闖入者にバンビエツタは首を傾げながらも目を鋭くさせながら二人を睨みつけた。

「見る限り医療班みたいだからここで殺しちやおっと」

そう言いバンビエツタは右腕から青い霊子を生成すると二人の内、少年へと向ける。

「シヨタの方は持ち帰って楽しみたかったけど、ごめんね??」

その言葉と共に霊子が凄まじい速度と共に少年へと向かっていった。

その瞬間

向かっていった霊子が少年が手を横に払うと同時に塵となり空気へと消えていった。

「…あれ?」

その光景を目にしていたバンビエツタは目を点にし、その場に固まってしまった。

その一方で少年はまるで意に介していないのか、此方に振り向く事なく、隊士達へと薬を投与し終わると、不意に畑の方へと目を向けた。

その瞬間

「あああ〜!!!私の…私の畑がああ!!!」

「……はあ!?!」

その少年は泣き叫び大粒の涙を流しながら畑に駆け寄るとボロボロになった花や魚の破片を手に取った。

「そんなあ〜!!!全財産を叩いて育ててきたのに!!!それに注文が5件も来てたのにい〜!!!」

「え…ちよ…それ育てたのってアンタなの!?!」

不気味な植物の栽培主が少年であった事に驚きを隠さずバンビ

エツタが仰天の声を上げる中、少年は泣く事を止めるとゆっくりと起き上がり振り向いた。

「まさか…貴方がこれをやったのですか…?」

「え…!?!」

突如として此方に反応し、首を向けてきた事でバンビエツタは動揺する。

「い…いやいや！確かに残りの植物を爆破したけど全部は――

爆破した事を口にした時であった。

――  
瀧霊廷を超巨大な霊圧が覆った。

「ひ?!」

その巨大な霊圧を感じ取ったバンビエツタは言葉を詰まらせると冷や汗を流しながら一步後ずさった。

「ま…待ってよ何なのよこの霊圧…!?!な…なんで…アンタがここに…!?!」

「どうでもいいです。貴方の口ぶりからすると侵入してきた他の人達も犯人の様ですね…」

口元を震わせながら驚くも少年はそのまま此方に向かって歩いてくる。

「…お金で払うか!!?身体で払うか…どちらにしますか…?」

「いやあああああ  
!!!!!!!」

怒りの強者そして皆さんお待ちませ偉大なる先生のご  
帰還

星十字騎士団。それは滅却師の始祖であるユーハバツハが組織した精鋭部隊の名称である。ユーハバツハは生まれ持った『魂を分け与える能力』を応用し騎士団それぞれに世の理さえも破壊してしまう程の能力をアルファベット順になる様に授けている。

能力は個人差かつ能力差も存在し、威力の高いパワータイプのものであれば技術が必要で扱いにくいテクニカルタイプ、なども存在する。

その中でもバンビエツタ・バスターバインの持つ能力は最も派手かつ高威力のものであり、その名も『The Explosion』。文字通り爆発を操る能力である。この能力の内容は武器として扱う霊子を爆弾として使用すると捉えられがちだが、実際は違う。攻撃として扱う霊子を打ち込まれた相手が「爆弾」となり彼女の意思でいつでも爆発できるといふ防御無視かつ特攻を兼ね備えた超攻撃型の能力なのである。

――――  
そんな超攻撃型の能力を授かった彼女は頭にたんこぶが出来上がった状態で正座をさせられていた。

「あの…ごめんなさい…畑メチャクチャにしてごめんなさい…」

正座をしながらバンビエツタは頭を下げる。彼女の目の前には頬を膨らませながら涙を流す千弘の姿があった。

「泣いてどうにかなるのですか!?泣きたいのは此方なんですよ!ネムさん!残ってる花はありますか!?!」

「何一つ見当たりません」

「うわあああ!!!」

千弘が後ろで畑を見渡ししているネムへと尋ねると首を横に振り、それを聞いた千弘は滝の様に涙を流しながらバンビエツタの肩を掴み揺らし始めた。

「いくら注ぎ込んだと思ってるんですか!?数百万!数百万環ですよ!今まで血の滲む様な努力で手に入れたものがぜくんぶパーになつたんですよ!その中には実験費だつてありましたし!ああああ!!!おんぎゃああ!!!しばらく食事抜きだこれええええええ!!!ようやく安定した収入が得られそうだったのに!!!」

「ちよ?!揺らさないで!!分かった!分かったからああ!!!(ううう…何なのよこいつ…?!私の爆撃は効かないし霊子兵装の攻撃も全部弾き飛ばされるし…!爆風も斬ってくるし完聖体になつてもゲンコツで強制的に解除してくるし…最終的にはなんか子供みたいに泣きじやくるし…!もう完全に別の意味でバケモノじゃないの…!?!)」

揺さぶられる中、バンビエツタは困惑しながら目の前でワンワンと子供の様に泣きじやくる千弘に恐怖を感じていた。

自身らはようやく彼を心の底から舐めていた事を自覚したのだ。

すると

「千弘さん…安心してください」

後ろで待機していた女性死神であるネムが泣きじやくる千弘に歩み寄るとその身体を胸に抱き締めた。

「私が付いています。それにまだ僅かですが土壌も残っているので、やり直せますよ」

「うう…ネムさあん…」

抱き締められた千弘も甘えるかの様に彼女の背中に手を回し身を寄せた。

「よしよし…大丈夫ですよ」

そんな千弘を抱き締めたネムはそう囁きながら頭を撫でていき、その様子はバンビエツタの警戒心を更に掻き立てていった。

「(とういか何なのよこの女も…!さつきからずっと達観してたけど特記戦力筆頭のコイツとまるで対等の様に接してるし…:…いや待



てよ…まさかこの女が一番ヤバいとか!?)」

そんな中であった。

「(…あれ?よくよく考えてみればこれってもしかして…)」

その光景を見ていたバンビエツタの心の中にある一つの希望を見出した。

それは逃亡である。

「(……チャンス!!!)」

厄介な奴は目の前の死神に気を取られている。ならばその隙に少しでも遠くへと逃げて影の空間へと入ってしまった方がいい。いくら彼であろうとも影の空間を潜り抜けて追ってくる事など不可能だろう。「(いくらアイツでも飛廉脚さえ使っちゃえばこっちのものよ…!!!)」  
そしてバンビエツタは隙を見計らいその場から滅却師特有の能力である飛廉脚を使うべく立ち上がった。

ガシッ

「あの…何逃げようとしてるんですか…?」

「え…」

だがそれも全て千弘には筒抜けであった。動こうとしたバンビエツタの肩に手を置く形でその動きを静止させた。いや、筒抜けでなかったとしても使った瞬間に追いついていただろう。

もはや完全に希望が潰えたバンビエツタはブリキの人形の様になタガタと震えながら振り向いた。

そこには「何帰ろうとしてんだよ」的な表情を浮かべる千弘の姿があった。

「…」

試しにバンビエツタは指先から霊子を生み出し千弘に向けて放つてみる。だが、その霊子は握り潰され爆破する事なく無となった。

「え…えつとその…帰らせていただくことは…」

「できる訳ないでしょう」

「ですよね…」

それから数秒後、バンビエッタは千弘の縛道によってぐるぐる巻きにされた。

「取り敢えず、畑が元に戻るまでこちらで私達と共に働いてもらいます」

「うう…」

手をパンパンと払う千弘の裏ではバンビエッタは悔し涙を流していた。

その時であった。

「見つけたぜ。特記戦力筆頭…!!!」

「はい…?」

近くの瓦礫の山から猛々しい声と共に此方に向けて指を構えたモヒカンヘアアの滅却師が現れた。初めて見るその顔に千弘は名前を尋ねた。

「誰ですか? 貴方は」

『「バズビー」だ。いやあそれにしてもまさか虚圏にいるはずのお前がここにいるとは予想外だなあ。霊圧感じた時は本当に驚いちゃったよ」

千弘に尋ねられ、バズビーと名乗った男は千弘へ向けて片手を向けた。この男も滅却師の精鋭集団『星十字騎士団』の一人である。

「まあ取り敢えず…ちよいとここで死んでもらうぜ…!!!」

「え? いやいきなりなんですか?」

バズビーは千弘の声に耳を傾ける事なく腕を向けた。するとバズビーの腕が輝き出し炎を纏っていく。

バンビエッタと同様に彼もユーハバツハから力を分け与えられていたのだ。その能力の名は『The Heat』その名の通り熱…否、炎を操るといふバンビエッタと同様に超攻撃型の恐ろしき能力なのだ。

「初めから全開で行かせてもらうぜ? 悪く思うなよ!」

「ち!?ちよつとアンタ!そこから打ったら私も巻き添えになるじゃない!?」

「知るかよ。テメエが負けたのが悪いんだろが」

男が構える姿を見たバンビエツタは驚きながら叫ぶも男は構うことなくで姿勢を固める。

その時だった。バズビーの背後から一人、そして後方からもう二人の合計3人の滅却師達が現れた。

現れた四人の滅却師達はローブをたなびかせながら降り立つと不気味な笑みを浮かべながら千弘を見据えた。

「見ツケタ。特記戦力筆頭」

一人は目が虚な長髪の男。まるで人である事すらも疑わしくなってしまう程の不気味な風貌であった。

名は『エス・ノト』授かった能力は恐怖を司る『The Fear』

「ハアハッハッハ!抜け駆けは行かんぞ!」

もう一人は肩に小人のような男『ジェイムズ』を乗せたプロレスマスクを被り軍服がはち切れそうな程の筋骨隆々な肉体を持つ男『マスク・ド・マスキュリン』

授かった能力は『The Super Star』

「な!?テメエら邪魔すんなよ!」

「邪魔?違ウ」

その3人を目にしたバズビーは眉間に皺を寄せめくじらを立てるがエス・ノトはそれを否定し懐から針とメダリオンを取り出した。

「マダ君ノ獲物ニナツタ訳ジャナイヨ。タダノ奪イ合イ。名誉ハ僕ガ独り占メニスル」

「ハッハッハッその通り。食事に手を出す前と同じ事。そして今から手柄はワガハイ達が頂く!!!」

「ッ…」

エス・ノトの言葉に同調するかのようにはマスキュリンも拳を鳴らし

ながら千弘へと目を向けた。それに対してバズビーも言い返す事ができないのか舌打ちをすると再び指を向けた。

「いいぜ…なら…：3人の内、誰がアイツに最後の1撃を浴びせるかだ…ッ!!」

その言葉と同時にバズビーの両腕から炎が舞い上がり向けられた腕を中心に渦を形成すると千弘目掛けて放った。

『バーニング・フル・フィンガーズ』——!!!

『千本桜景厳』——ッ!!!

バズビーに続く様にエス・ノトは懐からメダリオンを取り出し、なんと白哉の卍解である千本桜景由に酷似した桜色の刃を形成させると同じく桜の渦巻きを発生させ、更にマスキュリンは両手を額に当てると金色の光線を生成し千弘達目掛けて放った。

3人の高威力の同時攻撃が轟音と暴風を巻き起こし地面を抉らせながら千弘に目掛けて向かっていく。その威力は正に一撃必殺に等しく死神の中でも群を抜く力を持つ隊長格のものであっても掠りでもすれば致命傷は避けられないだろう。

だが、3人はバンビエッタと同じく悔っていた。

——園原千弘という男の力を。

「はあ…」

3人の攻撃が迫る中 千弘は溜息をつくと細めた目を向けた。

「あの…倒れてる人達助けないといけないので邪魔するのやめてもらっていいですか?」

その一言と共に千弘の手が刀へと置かれた。

【連続普通斬り】

その直後 千弘の周辺の空気が歪み、放たれた炎と千本桜と光線がその空間へと触れると掻き消されるようにして空気へと消えていった。

そして千弘の目が啞然としている3人に向けられると、一瞬にして3人の背後を取った。

「取り敢えず静かにしててください」

「「グボアハア：!?!」」

「……………」

「……………」

「……………」

その後 一瞬にして3人は距離を詰められ千弘から腹パンをお見舞いされた。それによって3人の顔はハチに刺されたかの様に腫れあがると共に腹を押さえながら気絶してしまった。

「うう…」

その光景を見ていたバンビエツタはある程度は予想していたものの、やはり驚きを隠す事ができないのか、震えながら涙を流していた。そして自身の目の前では先程の攻撃を掻き消した千弘が死覇装についた埃を払いながら溜息をついていた。

「全く…『見えざる帝国』という危ない連中が攻めてくるかもしれないというのに…貴方方の様な賊軍に付き合ってる暇なんてないんですよ…」

「……………は?！」

そんな中 バンビエツタは千弘がふと溢した一言に涙を引っ込めると共に思わず驚きの声を溢してしまった。

「え…ち…ちよつと待って…アンタ…アタシ達のこと…何だと思っただの…!?!」

「え?…」

千弘の言葉が全く信じられなかったバンビエツタは瞳を震わせながら彼へと尋ねた。それに対して千弘は「何を言っているのだ?」的な表情を浮かべながら答えた。

「いや、貴方達って普通に護廷隊に不満がある賊軍の方達ですよね?」  
「…」

その一言を耳にした途端、もう何も言えなかった。この男は『見えざる帝国』の滅却師である事でさえ認識していなかったのだ。

「は…ハハ…マジでなんなの…それ…」

「はい? まあいいです。取り敢えずそこ動かないでくださいよ。後で作業場まで連れて行きますから」

それだけ言い残しバンビエツタから目を逸らした千弘は周辺で倒れている隊士達へと目を向けた。

「……さて、ネムさん。ここからは一気に皆さんを助けますよ」

「はい」

その瞬間 千弘とネムの姿がその場から消えた。それと同時に周辺で倒れていた隊士達の姿も次々と消えていく。

「…は!? 何が起こってんのよこれ!」

その現象にバンビエツタは何が何なのか理解が出来ず混乱していた。

—————

—————

—

その後、千弘とネムの奮闘によって次々と倒れていた隊士達が診療所へと担ぎ込まれていった。病室に限界があると思われるが何と千弘達が運ぶ際に打ち込んでいた薬がマユリの開発した霊圧を消費する代わりに致命傷さえも一瞬にして治してしまう『改良型回復薬』である為に隊士達は次々と回復しており、傷が癒えた死神達が医療のサポートや仲間の回収へと回り見事な治療サークルを形成していたのだ。

更に千弘が隊士達を運ぶ最中に攻撃してきた滅却師達を次々と撃破している為に診療所は被害を被るどころか傷ひとつついていなかった。

その知らせは当然 侵攻してきた滅却師達にも、元柳斎と対峙して



つかせていた。

「ハア…ハア…ハア…!!」

欠けたサングラスの下から見えるその目はまるで目の前の物へ恐怖心を抱き恐れているかの様に激しく震えていた。

「何なのでですか貴方は…?!?普通の霊子兵装どころか完聖体による私の霊子兵装も効かないとは…幾ら何でも可笑しい!!馬鹿げている!!」

キルゲはそう言いながら叫ぶ。彼の目の前には虚圏の砂煙が待っており、その砂煙の中に腰に手を当てる男のシルエットがあった。

「答えなさい!!貴方は一体何者なのですか!?!」

その瞬間。目の前を舞っていた砂煙が晴れたいきキルゲが恐れている男の正体が露わとなった。

「…フツ。何者か?見ての通りよ」

その男は笑みを浮かべる。

「私は悪っしき魂を浄化すべく地獄の底からやってきた――」

――地獄ホロウ教師『クールベー』――!!!!

「はあ?!?」

キルゲが仰天する中、男の正体である『クールホーン』はクルクルと回るとお仕置きポーズを決める。

「さあ滅却師の坊や。私の大事な生徒達をいたぶった罪を償いハリベルちゃんとスタークちゃんとヤミちゃんを返してもらおうよ…!!!」

千弘に続く二人目のイレギュラーであるクールホーンの進撃が始まるのだった。



## 最強の虚

その破面がなぜ生まれたのか。神の悪戯か？はたまた

――

――

――

――

それは一年以上前に遡る。護廷隊を裏切り虚圏へと拠点を移した藍染は崩玉を扱い次々と配下である破面を生み出していた。

だが、藍染が盗んでいたのは崩玉だけではない。もう一つは以前より目をつけていた『千弘細胞（せんげんさいぼう）』即ち千弘の細胞である。彼の未知数の力に興味を持っていた藍染はこの細胞を取り込む事ができれば少しでも彼に近づけるのではないのかと考え、裏切る数ヶ月も前に技術開発局に潜入し保管されていた細胞の一つの瓶を奪っていたのだ。

だが、それは容易に試すべきでない事も分かっていた。あれ程の強大な力を宿す身体を構成する細胞となれば、その分 デメリットも大きい。軽い気持ちで体内に注入してしまえば自身の細胞が耐えきれず壊死してしまう恐れがある。

そう考えていた藍染にとっては虚は最高の実験体であった。破面が誕生していく中、千弘細胞を注入していくものの、強さも霊圧も何もかも特筆すべき変化が起こることはなかった。

そんな中、藍染は次の虚へと目をつける。

「次は君の番だ……」

ゴリラの様な骨格を持つ虚を呼びよせると崩玉を扱い変化させる。そして

「君にも特別なプレゼントをあげよう」

「!?」

千弘細胞が入れられた注射器を変化していくその身体へと注入した。すると、変化していた虚の身体が発光し辺りを光に包み込んだ。

その瞬間

!!!!

とてつもない霊圧がその場を覆った。その霊圧の質は正に規格外であり冷静であった藍染は額から冷や汗を流し始めていた。

「藍染様……これ程の霊圧……方が一謀反でもされれば……」

「ああ。ただでは済まないだろう。だからここからは慎重にいくよ  
要」

そして 辺りを包み込んだ光が晴れた時であった。藍染は目の前の破面へと変化した虚に目を向けた。

「ほう……この様子だと成功し———— んん……!?!」

その姿を見た藍染は言葉を失った。

「シャルロット・クールホーン。貴方のために変身成功♡」

光が消えたその場所に立っていたのは筋骨隆々な身体を持ちボサボサの髪を後ろへと流したオカマであった。

「がぁ……!?!」

そのあまりにも巨大な霊圧と独特すぎる風貌にギンは冷や汗を流し東仙は口を開けながら啞然としていた。

その一方で冷静を保っていた藍染は立ち上がると破面へと変化した虚『クールホーン』へと歩み寄った。

「さて、君の望みはなにかな?」

「私の望み……それはただ一つ……!!」

そう尋ねるとクールホーンはクルクルと回りながら最後は跪く姿勢で答えた。

「この美しき世界を邪悪な者から守り抜く為です……!!」

「!?!」

その言葉遣いに更に藍染は違和感を覚えた。その仕草や先の行動の読みづらさやバカさ加減が明らかに千弘そっくり……否、正に千弘と同じであったのだ。恐らく細胞の影響をとてつもなく強く受け継いでしまったのだろう。

「(んん…何故だか無性に腹が立ってくるな…)」

ここへ来る寸前に藍染は千弘に頭頂部の髪を刈り取られていた為にいつのまにか憎悪が湧き出し、クールホーンをつい千弘と重ね敵視してしまいが、なんとか冷静に持ち直し手を差し出した。

「…そうか。私と共にくればその望みが叶う事を約束しよう」

すると、跪いたクールホーンは差し伸べられた手をクールホーンは握った。

「このクールホーン…世界を夜明けに導くべく貴方に尽くす事を誓います…!」

「(ほっ…)」

この日、過去未来において最強の虚が誕生したのであった。そして藍染は心の中で何とか調伏できた事に安堵の息を吐くのがあった。

これが後に過去、未来において最強の虚の誕生である。

—————

—————

—————

虚圏にてクールホーンと対峙していたキルゲはクールホーンの言動に耳を疑う。

「捕らえた破面の解放が目的ですか…？随分と仲間思いの虚ですね…」

「仲間？何言っているのかしら？そんな安っぽいものじゃないわ」

キルゲの言葉にクールホーンは首を横に振り否定すると人差し指を向ける。

「あの子達は掛け替えの無い大事な生徒達。守るのは当然よ」

「さつきから何を言っているんですか貴方は…!？」

「ええと…まさか…あたしらまで入ってる感じで…？」

「勿論よ浦原ちゃん」

そう言い付近の岩場で何か策を考えていた浦原に答えたクールホーンは近くで横たわる破面達へと目を向けた。倒れていたのは3名の女性型の破面でありハリベルの従属官であったアパッチ、ミラ・ローズ、スンスンだった。

「う…うう…」

「…？」

そんな中 倒れている3人のうち、アパッチが立ちあがろうと呻き声をあげた。それを耳にしたクールホーンは駆け寄ると抱き上げる。「かわいそうに…こんなにボロボロになって…」

「うう…ん…？」

そんな中 抱き上げられたアパッチは目を震わせながらもゆつくりと開いた。

「よく頑張ったわね。あとは私に任せなさい…うふ♡」

「え…」

その瞬間

「ギヤあああああ!!!」

急に悲鳴をあげると共に首を垂らす様にして気絶してしまった。その様子を見たクールホーンは眉間に皺を寄せるとキルゲへと目を向けた。

「貴方…：…よくも私の大事な生徒を叫んでしまう程まで追い詰めてくれたわね…!!!」

「はあ!?!どこからどう見ても!貴方の顔を見たのが原因でしょ――」

「嫌味か貴様ツ!!!」

「何が!?!」

キルゲへと怒声を上げたクールホーンは気絶したアパッチやスンスン、ミラ・ローズをそれぞれ担ぎあげると近くの岩場にて待機していた浦原の元へと運び、再びキルゲの前へと立つ。

「さて滅却師の坊や。私の生徒達をいたぶった罪は重いわよ。本当は後ろで待機してる子達に任せるつもりだったけど」

「…ん？」

クールホーンの言葉にキルゲは驚き背後へと目を向ける。そこには砂に突き刺さった障害物の上に立ちながら此方を見下ろしているグリムジョーとその障害物の根本で腕を組みながら立っているウルキオラの姿があった。どちらも敵意を剥き出しており身体から巨大な霊圧を放っていた。

「気付かないうちに集まってきましたか…まるで砂糖に群がる蟻の様ですね…」

「だけど私自ら貴方の相手をしてあげるって言ってるのよ」

そう言うときクールホーンは手を差し出しキルゲを招く。

「掛かってらっしゃい」

「く…!!」

宿敵である虚の挑発。それはキルゲのプライドと怒りを刺激させた。

「この…!!」

その挑発にキルゲは額に青筋を浮かび上がらせると全身の力を解放させる。

「虚如きがああああ!!!」

その叫びは虚圏全体へと響き渡ると共に周囲から次々と霊子を吸収していった。

滅却師特有の能力『聖隷』。それは周囲の霊子を分解して己に取り込む技だ。中でもキルゲの規模は一線を画しており頭部に再び聖隷を扱う為の絶対条件である光輪が現れ周囲一帯の霊子を己へと集めていた。

それによってキルゲの四肢は次々と膨張していくと共に上げていた叫びも人間性を失っていった。

そして 周囲の霊子を全て吸い付くした時にはその姿はもう人のものではなくなっていた。

「ソの醜イ姿を今すぐに消し飛ばシテ差シ上げマショウ…!!! 私のこの聖なる力だねえ…!!!」

生物が発するとは思えない様なノイズの掛かった声と共に全身から10本の腕を生やしそれぞれ剣を生成すると共に吸収した霊子を血管へと流し込み『血装』を発動させた。

滅却師が扱う『血装』は2種類あり攻撃力に特化した『動血装』防御力に特化した『静血装』に分けられている。

この時、キルゲはほぼ全ての霊子を血管へと流し込み超高密度の動血装を展開していたのだ。

——滅却師完聖体『神の正義』

キルゲは戦闘体制を整えるとクールホーンに向けてゆっくりと歩いていく。

そして 一気に仕留めるべく全身に力を込め脚を踏み込んだ。

「イキますヨッ——!!!」

その言葉と共にキルゲの身体がその場から消え去ると共に空気を突き抜けて行きながら音速を超えた速度でクールホーンに向けて飛び出していった。

その瞬間

「……遅いわよ」

「ガハア…!？」

肉を叩く巨大な打撃音と共に走っていたキルゲの身体が大きくなる”の字に曲がった。

その光景を見ていた浦原や一護達と同行してきた茶道と織姫は目を点にしていた。

「何なんすか…今の動き…全く…見えませんでしたよ…!?というかこの速度…まるで千弘さんじゃあないですか…!？」

浦原が冷や汗を流しながら驚いている一方で

キルゲの懐に入り込み巨大な拳を放ったクールホーンはよろけるキルゲに向けて再び拳を構えた。



「オラアッ  
!!!!」

そして

最後の一押しとなる拳を放つと共にクールホーンの身体がキルゲをすり抜けていった。

「が…!？」

クールホーンがすり抜けたキルゲの身体はその場に静止すると共に全身の至る所から亀裂が走り出す。そんな中、キルゲをすり抜けていきラツシュを終えたクールホーンは雄大な背中を向けながら言い放った。

「授業料と殺された生徒達の恨みよ。あの世に持っていきなさい」  
「!!!!」

その直後。亀裂の走っていたキルゲの身体が青く発光しながら爆発したのであった。

青い炎がガラスの様に割れ空に散っていく中、クールホーンは振り返り浦原へと目を向けた。

「あ…あの何すか…?」

「決まってるじゃない。捕まった子達を助けに行くのよ」



## 千年前の戦い

「はあ…はあ…くそ…!!!」

辺りが光る霊子によつて構成される空間の中、キルゲの能力によつて青い霊子の籠に閉じ込められた一護は必死に斬魄刀を振り回しその霊子の籠を破壊しようとしていた。

だが、いくら振り回してもその籠が壊れる気配は無かった。なぜ一護は焦っているのか――？

それは 現在、瀟霊廷にて起きた戦乱の悲鳴が聞こえているからだ。

—— うわあああ!!!

—— やめろ…やめろおお!!!

—— 何をしてる!? 逃げるな! 俺たちは護廷た…:…がはあ!

「…:…!!!」

次々と聞こえてくる傷付けられる悲鳴や息耐える声。それがまるで耳のそばで囁かれているかの様に側で聞こえてきていた。その生々しい悲鳴を聞いた一護はついに限界が来てしまった。

「うおおおおお!!!」

眉間に皺を寄せ必死に刀を振り回す。だが、金属音だけがその場に鳴り響くだけで何も変わらなかった。

「くそ…!!くそ!!くそ!!くそ!!くそ!!くそ!!」

急いでいかなければならない。皆が傷付き戦っているというのに自身はここへ立ち往生など絶対に嫌だ。守らなければならない。

何度も何度も心に訴えかけながら一護は刀を振り翳した。

—— その時であった。

パリン…:

「…え!?!」

目の前の空間に亀裂が走り、それと同時に巨大な霊圧を感じた。その霊圧は一護は感じた事があつたのか、即座に周囲を見回した。

「この…この霊圧は…『千弘』!?!」

感じたのは自身を知る中で最も奇怪な死神『園原千弘』の霊圧であつた。

「何処だ!?!千弘!…いるのか!?!」

一護が見回した時であつた。

——『黒一さくら!!』

「!?!」

何処からともなくトンネルに響く様なエコーが掛かったかかのよ  
うな千弘の声が聞こえてきた。

——『取り敢えず聞こえてる程で話します!…怪我人は私達が何とかしますのでそこから出て賊の相手をお願いします!』

「なんだこの余裕のある声!?!まあでもありがとよ…!!お陰で少し落ち  
着け…:て…:……」

パライイイイイイイイイイイ

「え…?」

その瞬間 目の前の空間がバラバラに砕け散り青い空が広がり始  
めた。

それと同時に自身を拘束していた霊子の籠も砕け散り一護の身体  
はそのままその場から落下し始める。

「うえええええええ!?!」

—————

場所は変わり瀨霊廷一番隊隊舎にて——。

「…」

元柳斎は目の前で倒れ臥す大男を見下ろしていた。

「随分と脆いのう…卍解を見せる事なく終わるとは」

目の前には大の字になりながら倒れるユーハバツハの姿があり、その目はどこまでも続く青い空を見上げていた。先程、背後からユーハバツハへと刀を突き刺した元柳斎はそのまま刀を引き抜き一撃で仕留めるべく始解をすると薙ぎ払い、その身を真つ二つに引き裂いたのだ。

それによって上半身と下半身が泣き別れとなってしまうたユーハバツハは立つ事もできないまま横たわっていた。

横たわるその姿を見ていた元柳斎は自身から少し離れた場所にて倒れている更木へと目を向ける。

「あ奴と戦った際の傷が深かったのが仇となったな…」

そんな中。倒れ臥したユーハバツハの口がゆっくりと動き出し今にも消えてしまいそうな声をあげる。

「やはり…私…では力…及ばず…か…『申し訳ありません』」  
「!?」

その言葉を耳にした元柳斎は驚愕しながら振り返る。

「(まで…頭領が誰に謝る…!?お主が自らの手で引き起こした戦争に…お主が敗けて誰に謝る…!!)」

その言葉の意味が理解できず困惑してしまう。だが、その合間にもユーハバツハは言葉を続ける。

「申し付けを果たさせませんでした…ユーハバツハ様…!」

その時であった。

背後に聳える一番隊隊舎が突如として噴き出した青い霊子の火柱に包み込まれた。

「ぬ…!?」

それを見た元柳斎はようやく気付くものの、既に遅かった。驚く元柳斎の横をゆっくりと黒い影が通り過ぎていった。

「まさか園原千弘がこの場にしようとはな…流石の私も驚いたぞ」

背後から聞こえた声に元柳斎は振り向く。そこには黒いマントをたなびかせながら地に伏せたユーハバツハと瓜二つの容姿を持つ大男が立っていた。その大男…否、本物の『ユーハバツハ』は自身であったものを見下ろすと指を向けた。

すると、ユーハバツハだった者の身体が歪みスキンヘッドが特徴的な吊り目の青年へと変わった。

「だが、私が戻るまでの時間稼ぎを…よくぞ成し遂げたな。星十字騎士団『R』のロイド・ロイド」

「名前を呼んでいただけるとは……光栄に……ごぎ」

その瞬間

ユーハバツハの指先から霊子が生み出され、輝くと共にロイドの身体は最後の言葉を言い終えることなく爆発した。

ロイドを葬ったユーハバツハは仲間を殺したというのに顔色ひとつ変える事なく元柳斎へと目を向けた。

「改めて千年ぶりだな山元重國…」

「……貴様……今まで……何処で何をしておった…!？」

元柳斎が震えながら尋ねるとユーハバツハは肩についたロイドの血を払いながら答える。

「一番隊隊舎の下にある監獄で…藍染惣右介に会ってきてな。特記戦力として我が麾下に入るよう命じたが…まあ案の定断りおった。良い判断と言える。なにせ…時間は永遠にあるのだからな」

そう言いながら血を払い終えたユーハバツハはその鋭い目を元柳斎へと向けた。

「さて…では千年前の続きといこうか…山元重國」

「…」

その言葉と共にユーハバツハは腰に掛けてある自身の得物を抜いた。それに対して元柳斎も目の色を変えると全身に力を込める。

「そうじゃのう…千弘が露払いしてくれたお陰で…儂も全力を出せそ

うじゃわい…!!」

元柳齋が己の斬魄刀である『流刃若火』を握り締めたその瞬間、尸魂界の水分が少しずつだが、蒸発を始めた。

それと同時に元柳齋自身の全身から炎の渦が巻き起こると共に右腕に握られた刀へと集まっていく。その様子を目の前で見ていたハツシユヴァルトは驚きの目を向けた

ユーハバツハとハツシユヴァルトの目の前に立っていた元柳齋の手に握られていたのは『漆黒に染まった刀』だった。

### 卍解【残火の太刀】

その刀は一護の卍解である天鎖斬月に酷似しているが、一般の刀と異なりなんと、刃が欠け、切先から水蒸気が噴き出していた。全身から放つ霊圧は千弘にはまだ程遠いものの、隊長である更木をしてさえも可愛く見えてしまう程まで強大なものであった。

そして全身から放たれる巨大な霊圧は……

—————

「あ…あれ？何だか急に肌が乾燥してきたような…」

「ふふ…珍しく女の子のような事を言いますね。…花瓶の水も少なくなってきたようです」

四番隊にて怪我人の治療へと当たっている勇音や卯ノ花、そしてその他の星十字騎士団達と交戦している京楽達といった、

瀕霊廷の各地へと影響を及ぼしていった。

—————

「…焼け焦げた…刀身…?」

「甘く見るなハツシユヴァルト。【残火の太刀】とは奴の炎を全て刀に込めた卍解…払ったが最後、斬ったもの全てを焼き尽くす劫火の剣だ…」

「ほう…確かお主には一度、見せておったな…じやが果たして千年前と同じかどうか…今一度、その身に喰らうてみよ…!!」

千年の時を超えて再び全力を出す事となった元柳斎は炎が揺らめく瞳を向けると刀を両手で掴む。

「往くぞ…!!」

【残火の太刀】 “東” 旭日刃

「ヌン…ッ!!」

「!?」

刀が振るわれた直後、ユーハバツハは何かを感じ取ったのか、横に避ける形でその大振りから逃れる。

「…まさかとは思っていたが…刀の先に炎を収縮させているのか」

「その通り…旭日刃は我が炎を刀へと収縮した技であり触れたものを全て燃やす事なく消し去る…」

「…ふむ。ならば間合いを詰めればよ…!!」

元柳斎の言葉を一瞬にして理解したユーハバツハは元柳斎の間合いへと入り刀剣を振り回そうとするが、突如として自身のマントが焼け焦げ始めた事ですぐさまその場から飛び退いた。

「…!!」

「阿呆めが。東もあれば “西” もある…!!」

【残火の太刀】 “西” 残日獄衣

ユーハバツハの目の前に立っていた元柳斎の全身には先程まで消えていた炎が再び燃え上がり衣服を形成するかのように全身を駆け巡りながら包み込んでいた。

「儂の霊圧を炎としその身に纏う…その温度は軽く1500万度…。儂に触れるとは即ち太陽に触れるという事じゃ…!!」

元柳斎は手を緩めない。刀を握り締めると腰に構える。

「仲間をも道具として最も容易く切り捨てられるお主には “南” は必要なからう…」

そして 構えた瞬間 先程の炎全てが再び焼き焦げた太刀へと吸

収められていった。

元柳斎の全身から発する巨大な霊圧は遂に限界値へと達していたのだ。全身全霊を込めた力を全て刀へと集結させており、それによって周囲を空間ごと軋めていった。

「後悔しておるな…？技を繰り出す前に卍解を奪わなかった事を…お主らの卍解を奪う御技は相手が扱う卍解を知り尽くさねばならぬ。じゃが、そんな隙など与えぬ…」

その言葉と共に身体へと吸収されていった炎が再び燃え盛り元柳斎の刀を完全に包み込んでいった。

「次の一撃で消し去ってくれよう…ツツツツ！！！！」

【残火の太刀】 “北” 天地灰尽

「望み通り今日が決着じゃ…さらばだ…！！ユーハバツハツ！！！！」

その一言と共に劫火を纏った刀がゆっくりと振り回された。振り回される最中、先程まで動揺していたユーハバツハは静かにその光景を見つめていた。

「これ程の力…認めよう。やはり貴様は我が特記戦力へと加えておくべきであった……………」

————— 千年前に使用していたならばな…！！！！

「…！？」

その瞬間 先程まで燃え盛っていた炎が一瞬にして消え去り、全てがユーハバツハの手に持つメダリオンへと吸収された。

「知り尽くさねば奪えない…誰が決めた？誰が話した？そんなものな

ど関係ない。我々が開発したメダリオンは問答無用に奪い去る。それに貴様の卍解は強すぎる故に私以外では御しきれぬ。故にロイド・ロイドには私が来るまで手は出すなど言っておいたが…まあいい」  
卍解を奪ったメダリオンを懐へとしまったユーハバツハは不気味な笑みを浮かべる。

「面白いものを見せてもらった上に剣を交えた好だ。一撃で葬ってくれよう…!!!」

「抜かせ…!!!」

ユーハバツハはトドメを刺そうとしていたが、元柳斎とてまだ諦めてなどいなかった。卍解が無理ならば始解を発動させる。

「万象一才…灰燼と化せ…流刃若…」

その瞬間 炎を纏う刀が粉々に砕かれた。目の前には刀剣を振るい腰に納めるユーハバツハの姿があった。

「ぬう…!?!」

「その往生際の悪さがお前の敗因だ」

見ればユーハバツハの手に握られていたのは焼け焦げた刀剣であった。奪つてすぐに発動させたのだ。ユーハバツハが発動した卍解によって刀を砕かれた元柳斎は手元から武器を失い丸腰となってしまう。

それでもまだ元柳斎は諦めたなどいなかった。刀が無ければ、あとは己の拳のみである。

だが、それすらもユーハバツハは見切っていた。動こうとしたその瞬間 元柳斎の両腕、両脚が斬り飛ばされた。

「…!?!」

四肢の欠損。それによって元柳斎の身体は着地する事すら出来ずその場にゆっくりと倒れた。

「無様なものだな…死神の長が蟻の様に地面に這いつくばる様は」

地面へと倒れた元柳斎の頭をユーハバツハは踏み付けると鋭い目を向けた。



「山元重國…お前は本当に弱くなった。千年前のお前は違った…誰一人とも容赦なく消し去る殺人集団である初代護廷十三隊を率いていたあの時のお前ならば…使える物なら何でも使い…私に勝っていただろう。なぜ、園原千弘に頼らなかつた?」

「…」

「奴をうまく使えば私を討ち取るなど造作もないだろう…なぜ、そうしなかつた?」

ユーハバツハが尋ねるも元柳斎は答える事は無かつた。無反応からユーハバツハは答えを予想したのか口にする。

「貴様特有の『責任』というやつか?千年前に私を討ち取る事ができなかつた自身に責任を感じた故に部外者である園原千弘には任せなかつた…と云つたところか。奴に頼る事もせず黒崎一護をも戦いから遠ざけるために多くのものを背負うとは…何とも緩くなつたものだな…つまらぬ」

その言葉と共にユーハバツハの焼け焦げたサーベルの切先が向けられる。

「まあいい。千年前の我が宿敵よ。最後は私自らの手で直々に葬つてやる…!」

するとユーハバツハの持っていた得物の刃がゆつくりと元の形へと戻っていった。そして元の形へと残つた得物を太陽に重ねる様にして振り上げた。

「さらばだ…山元重國…!!!」

その時であつた。

「全く…日番谷冬獅郎に続いて総隊長まで…なぜそれ程までセツカチなのかネ」

「……ん?」

付近の崩れた瓦礫の山の上から声が聞こえた。その声を耳にした



「テクマクマヤコン…テクマクマヤコン…」

「ん…?」

その瞬間

「お星様になあ〜れツ!!!」

「!?」

土煙の中から何か突然 青い軌跡を残しながら突っ込み、ユーハバツハの腹へと巨大な一撃を見舞った。

「ゴハア…!」

それによつてユーハバツハの身体は「ぐ」の字に曲がりながら、その場から吹き飛ばされていき、瓦礫の海をバウンドしながら飛んでいくと高く盛り上がっていた瓦礫の山へと突っ込んでいった。

その一方で、ユーハバツハを吹き飛ばしたその影は空中で回転するとその場に着地し、吹き飛んだユーハバツハへと指を向けた。

「貴方ですね!!!この騒ぎの原因は!!これはもうゲンコツだけじゃ済ましませんよ!!名前おしえてください!!ここまでした賠償責任 負つてもらいますからねえ!!!」

そこに立っていたのは——護廷十三隊 12番隊 雑用『園原千弘』であった。

「ほう…たった一撃で私にここまでダメージを与えとはな…!!」

瓦礫の山から起き上がったユーハバツハは全身に駆け巡る痛みに笑みを浮かべながら千弘を睨みつける。

「待っていたぞ…園原千弘…!!!」

「はい…?何言ってるんですか貴方…?はっ倒しますよ?」

## ユーハバツハとバカの対峙

### 『特記戦力』

それはユーハバツハが警戒する6名の実力者の総称である。

メンバーは『黒崎一護』『更木剣八』『浦原喜助』『藍染惣右介』『兵主部一兵衛』そして『園原千弘』であり、その6名全員は必ず未知数のステータスを持っていた。

中でも千弘は他のメンバーとは明らかに扱いが異なっていた。未知数とされているステータスは――戦闘力、霊圧、知能といった全てであり、その数値も他の5名とは桁違いである。出生、育ちが普通でありながらも正解をした元柳斎を刀身を見せずに一撃で下し、更に多数の破面や崩玉で強化された藍染を斬魄刀を使わずに体術だけで圧倒するというその規格外の身体能力から、『UNKNOWN』と呼ばれ、他の5名は発見次第、即排除が義務付けられているが、千弘に限っては上記に加えて逃走が許されていた。

――――

一番隊隊舎跡地。周囲が崩壊した風景の中、千弘によって殴り飛ばされたユーハバツハはゆっくり立ち上がりながら、ネムと共に麦わら帽子を被る農家の様な服を纏う千弘へと笑みを浮かべた。

「やつと会えたな…園原千弘」

「はい？何故私の名前を？まあいいです。それよりも…畑を滅茶苦茶にした修繕費を払ってもらいます……ってぎやあああ!!山元御大!!更木ン隊長!?!どうしたんですかその傷!!」

千弘は倒れている元柳斎と更木を見て驚きの声を上げると、即座に治療を始めた。

目の前で千弘が二人を治療をしている光景を見つめている中、ハツシユヴアルトは通信班からの通達を耳にし、それをユーハバツハへと伝える。

「陛下……たった今通達が…我々以外の侵入した星十字騎士団全員が

倒されたとのこと…」

「ほう…星十字騎士団でさえも奴の足止めにならぬか…」

「いえ…大半は園原千弘の仕業ですが…そのうちの二人…『ドリス  
コール・ベルチ』と『蒼都』は別の死神によって倒された模様…一人  
は『盲目の剣士』もう一人は『伸縮自在の斬魄刀を操る男』…との  
こと」

「囚人を解放するとはよほど手が足りていなかったか…だが…千弘が  
出てきた以上、今回の侵攻は失敗だ。通信班へ伝えろ。すぐに全員回  
収しろとな。奴らにはまだやってもらおうことがある」

「はい…では陛下も速やかに『見えざる帝国』へ…」

「いや」

ハツシユヴァルトが帰還を促すとユーハバツハは首を横に振る。

「私はしばし奴と話し、できれば直に力をみたい」

そう言うときユーハバツハは今もなお元柳斎を治療している千弘へ  
と目を向ける。

「園原千弘。私はお前に会える日を待っていた」

「あく申し訳ないんですが、今 手が離せないなので後でお願いします」

「……………我が名は『ユーハバツハ』。滅却師だ。私はお前の力に興味がある」

「はいはいく分かったので、すみませんけども、後でお願いします…  
えっと、後はここをこうしてつと…」

いくらユーハバツハが声を掛けても、千弘は返事だけしかせず、顔  
を向けようとはしなかった。今もなお元柳斎と更木の治療へと専念  
しており、その態度にハツシユヴァルトは怒りを露わにした。

「……………おい……………陛下の話を聞……………」

「うるっさいですよッ!!!後にしてって言ってるでしょッ!!!」

「貴様…!!!」

「よせハツシユヴァルト…迂闊に手を出すな」

いくらユーハバツハが声を掛けても適当にあしらいながら治療に  
専念する千弘にハツシユヴァルトは遂に腰に掛けてある刀へと手を

掛けるが、ユーハバツハはそれを制し、そのまま待つ事にした。

「がはあ…千弘…儂の事はいい…早く奴らを…ぐほえ!」

「怪我人はお静かにお願いします。ネムさん、両足を押さえておいてください」

「はい」

因みに目を覚ました元柳斎は千弘の腹パンによって気絶させられた。

—————

それから元柳斎の治療を終えた千弘は麦わら帽子を外して立ち上がると瓦礫の上で座りながら待っていたユーハバツハへと目を向けた。

「さてと…お待たせしました。それで、私に何の御用でしょうか？」

千弘が尋ねると待っていたかの様にユーハバツハは瓦礫から腰を上げ千弘に目を向けた。

「私はお前の力に興味が…。「あ、名前のところからお願ひします」  
……我が名は『ユーハバツハ』滅却師だ。私はお前の力に興味がある」

「あゝ！すいませんけども！もうちよつとこつち来てもらえませんか?!?どうも遠くて何言ってるのか分からないんです！」

「……（なぜだろうか…聞こえないのは分かるが…無性に腹が立つてくる…）」

次から次へと来る注文に流石の寛大?であるユーハバツハも限界が来たのか、額に青筋を浮かべるも、すぐさま冷静になり、彼らとの距離が数十メートル程度となる場所まで近づいた。

t a k e 2

「私はお前の力に興味がある」

「はいはいはい」

「山本重國だけでなく破面共も一撃で下し更に崩玉を手にした藍染さえも寄せ付けぬその強さは正に芸術といって言い。この世界のどこを探してもお前のような奴はいない。お前の肉体には神が宿ってい

るのだ」

「成る程…」

「我が『見えざる帝国（ヴァンデンライヒ）』の軍門に降り、持て余しているその力を振るってみる気はないか…？さすればお前とお前の選ぶ死神の命を約束し、十分な地位と力が振るえる場を与えよう…」

そう言いユーハバツハは手を差し出した。彼が行ったのは藍染惣右介へ行った事と同じ勧誘である。

「…ですって。どうします？」

千弘はユーハバツハからの提案に後ろに立っているマユリとネムへと尋ねた。それを見たユーハバツハは千弘が後ろの二人を選んだと見て声を掛ける。

「涅マユリとその娘か。園原千弘が此方に降るのならばお前達の身の安全を保障し独自の研究室や有能な部下を与えてやるぞ」

「はあ…？」

ユーハバツハから勧誘を受けたマユリは、迷う素振りどころか、逆に嫌そうな顔を浮かべると小指を鼻の穴に突っ込んだ。

「お断りに決まってるじゃないか。研究室など今ある設備で十分な上に必要ならば改良すれば良いし、そもそも私の部下など技術開発局にいる馬鹿どもで十分なのだヨ」

「マユリ様が行かないのであれば私もお断りします」

「…らしいので私もいいです。それに胡散臭いですし」

アツサリと拒否の返事をする千弘達にユーハバツハは予想はしていたのか、話を続けた。

「まあ結論を急ぐな。まず私の真の目的を聞

「そういうのって、後でしっぺ返しが来るマルチ商法みたいなものですよね？最初は甘〜い言葉で惑わせて入った途端に聞いてもない条件を提示したり法外な料金を請求したり不遇な対応しても文句を言わせない様にするんですよね？」

ぜ〜つたいに嫌ですよ！聞きたくないです！美味しい特典があっても聞きませんかね!!はいおしまい!!」

そう言い千弘は完全に拒否をする。もはや自身らを一介の詐欺集

団と認識している様だ。

「…そうか」

その様子から、今は交渉など無意味であることを悟るとユーハバツハは領きながら背を向ける。

「だが私はまた来るぞ。その時にまた良い返事を期待している」

それだけ言い残すとユーハバツハは目の前に影の領域を展開させるとハツシユヴァルトと共に向かった。千弘達に背を向けて去る中、後ろを歩いていたハツシユヴァルトは険しい表情を浮かべながら尋ねた。

「よろしいのですか…?」

「ああ…下手をすれば私でさえも危うい。故に時間をかけて引き込むのだ。そう焦る必要はない…。それに、そろそろ時間だろう。戻るぞ」

そう言いユーハバツハはハツシユヴァルトと共に影の領域へと戻ろうとした。

その時であった。

「…!!!」

背後から言葉で言い表せない程の霊圧が感じられた。その霊圧は元柳斎の霊圧の強さを二乗してもなお軽く上回る程のものであり、地面どころか空間さえも震わせていた。

その正体はわかっていった。千弘だ。振り向くとそこには怒りの表情を浮かべながら歩いてくる千弘の姿があった。

「何しれつと帰ろうとしてるんですか?まだこつちの話が終わってないんですよ…?」

「…!?!」

その瞬間 千弘から発せられる霊圧の強度が更に高まり、周囲を振動させるどころか地面を揺らし始めた。それによってユーハバツハとハツシユヴァルトの全身の身の毛がよだつ。



咄嗟にユーハバツハは滅却師の基礎の技である静血装の応用である『外殻静血装』を発動させた。すると、ユーハバツハとハツシユヴァルトを覆うかのようにユーハバツハの身体からサークル状のフィールドが形成された。

「…ん？…何ですかこれ」

『静血装』…本来ならば体内に構成し身体を硬質化させるが私はその力を応用し体外へ放出させる事で擬似的な結界を――

「えい」

パライイイン

その直後。千弘が拳を打ち付けると共にその結界は粉々に砕け散った。

「…!!」

「バカな…：陛下の血装を叩いただけで…!？」

ハツシユヴァルトが驚愕する中、ユーハバツハ自身も啞然としていたが、即座に立て直し両腕に霊子を収束させると、小さな弓矢を生成し、千弘に向けて放った。

「話し合いに何かご不満でも？…ご安心を。働くのであれば、勿論その分のお給料は出します…んん？」

すると 千弘の身体へと当たった弓矢が変形すると培養液の如く体積を拡大させ、千弘を包み込み檻の形へと変わった。

それを見たハツシユヴァルトは驚きの表情を浮かべる。

「この能力は…キルゲの the Jale…」

「ああ。先程、キルゲの力が私の中に戻ってきた。奴は死んだという事だ。だがまあ好都合だ。これに囚われれば最後…死神ならば私の意志で解除しなければ一生――

「よーっよー」

ガキイン…ッ!!

その瞬間 その場に巨大な金属音が響き渡った。その音を耳にしたユーハバツハは閉じていた目を即座に開き、目の前の状況を目にすると冷や汗を流した。

「なん…だと…!?!」

そこには拘束していた霊子の檻をまるで金属の様に折り曲げながら出てくる千弘の姿があった。自身の能力に多少の自信を持っていたユーハバツハはそれを破られた事で気を抜いてしまう。

それによつて影の領域へと入る隙を逃してしまい、千弘の接近を許してしまった。

「私を拘束しようとしてるようですが……」

「!?!」

気がつけば既に千弘の身体は目の前へと迫っていた。

「話し合いがそんなに嫌なのですかあ!!!このバカチンがあああ!!!!!!」

スパアアantz!!!

「グホエツ!?!」

その怒鳴り声と共に一瞬にしてユーハバツハへと接近した千弘の懐からハリセンが取り出され、ユーハバツハに向けて振り回された。振り回されたハリセンはユーハバツハの頬へと深く入り込むと共にその場から横へと殴り飛ばした。

殴り飛ばされたユーハバツハの身体はそのまま地面をバウンドし、近くにあった瓦礫の山へと砂煙を巻きながら突っ込んでいく。

「おい、ちゃんと装備品の原型はとどめておくんだヨ。卍解の取り返し方がまだ解析できてないのだからネ」

「了解ですよ局長…それに…死んでは困りますからねえ…ちゃんと弁償させないと…!!!」

—————

「…久方振りだな…自分の血を目にするのは…」

近くの瓦礫の山まで殴り飛ばされ、崩れる瓦礫の立ち込める砂煙の中でゆっくりと立ち上がったユーハバツハは鼻から流れる血を手でとり眺めていた。そして殴られた頬へとゆっくりと手を当てる。

「…!!」

感じられたのは、殴られた瞬間には感じられる事がなかった。痛みである。その痛みは無くなる事なく、その箇所へと残っていた。

「(やはりな…予想以上の威力だ…たった一発食らっただけでこの様とはな…一撃一撃が千年前の山本重國の卍解の数十倍はある…)」

すると 目の前に舞う砂煙の中から声が聞こえてきた。

「貴方…何で逃げようとするんですか…?」

「!?」

その声を耳にしたユーハバツハは咄嗟に目を向ける。すると、目の前の砂煙が晴れ、ハリセンを手中でペンの様に回しながら千弘が歩いてきていた。

「話しようとする前に…なに逃げようとしてんですかオイコラア…!! 言わせてもらいますがねえ!!こちとら収入源が無くなってイライラしてんですよ!?!お宅のとこの人達の所為で私はまたしばらく貧乏生活に逆戻りなんですよ!?!どう責任とつてくれるんですかあ!?!」

「ぐ!?!」

そう叫びながら千弘はハリセンを捨てると、立ちあがろうとしたユーハバツハの首を掴み上げた。咄嗟にユーハバツハは右手から高濃度に圧縮した霊子を数百発の弾丸へと変化させて放つが、千弘はそれを指先だけでキャッチし全て握り潰し、更に握った手を広げるとそのまま振り上げた。

「やられたらやり返す…倍返しだツ!!」

「ぬう…!!」

その動作を見たユーハバツハは今度は体内へと巡らせている血液

に靈子を送り込み限界まで活性化させ超高密度の静血装を発動させた。

だが

その静血装でさえも意味を成さなかった。

パアアアン…ツ  
!!!!

「ぶべらあ!?!」

その瞬間 綺麗な音と共に千弘の平手打ちがユーハバツハの頬へと放たれた。

限界まで強度を高め、もはやダイヤモンドでさえも及ばない程の超硬度なまでの身体が、そのビンタによって頬を歪ませながら再び吹き飛ばされていく。

「やはり貴様の力は素晴らしい…!!!だが…」

吹き飛ばされる中、ユーハバツハは気が昂ったのか歓喜の表情を浮かべると状態を立て直しながら着地し千弘に向けて手をかざした。

「だが私もやられたままでは終わらんぞ…!!」

すると、千弘の周囲が青く輝き出した。

聖域礼賛（ザンクト・ツヴィンガー）

滅却師が扱う極大防御呪術であり、散布した3箇所から光の柱を出現させ、その真ん中へと立っている者を神々しい光で切り裂くものであった。

「えい」

だが、その技も千弘が刀を振り回す事でアツサリと掻き消してしまおうが、その隙をユーハバツハは狙っていたのだ。

「山本重國…！お前の卍解…お前の率いる隊士を葬るために使わせてもらおうぞ…!!」

卍解『残火の太刀』

その言葉と共にユーハバツハの右手に握られた剣がメダリオンから溢れ出た炎につつまれると共に吸収され、その剣が焼け焦げる。ユーハバツハは先程、元柳斎から奪った卍解を発動させたのだ。

「又ウン…ッ!!!」

「ん？」

その場からユーハバツハは刀を振り上げる。炎を纏った劫火の一振りを千弘は受け止めるが、そのままユーハバツハは刀を振り上げ、千弘を空中へと突き飛ばした。

「更に大サービスだ…!!!」

そしてその場から飛び立ち千弘と同じ場所へと到達したユーハバツハは周囲の霊子と自身が集めた霊子を収束させると千弘の周囲に無数の剣や弓を生成した。

「それって御大将の…うお!？」

ユーハバツハは残火の太刀と化した刀剣を再び千弘に向けて振った。それを千弘は空中で身体を回しながらアツサリと躲す。

それを見たユーハバツハは笑みを浮かべると次々と焼け焦げた刃を振り回した。

すると、残火の太刀の特性である放射線状にあるすべての物体を消しとばしていく力によって千弘の周囲にあった瓦礫が消え去り、更にユーハバツハの周りから霊子で構成された無数の剣や弓が連動するかの様に放たれていき、まるで雨の如く千弘へと襲い掛かっていった。

「さあ千弘！私に見せてくれ！誰も彼も見ることが無いお前の力に耐えうる斬魄刀の姿を…!!!」

「…ムカツ」

千弘は額に青筋を浮かび上がると腰から鞘ごと抜いた斬魄刀で迫り来る剣技と霊子兵装の嵐をその場から一步も動く事なく鞘で悉く防いでいった。本来ならば、残火の太刀を一振りさえすれば並大抵の

者は一瞬にして消し飛ぶ。それはユーハバツハの達人さえも超越する剣術によつて更に強化されているが、それすらも真正面から対峙していた千弘には効いていなかった。それどころか隙間がない程まで生成され、四方八方から放たれてくる霊子の剣や弓矢さえも涼しい顔で防いでいた。

だが、やはり太陽の温度には耐えられないのか、千弘の額からは汗、そして受け止めた斬魄刀の鞘が形を変形させていった。

それでもユーハバツハを驚かせるには十分なものであり、今ある限界の力を振り絞っているにも関わらず未だに千弘の振るう斬魄刀の姿を捉える事は出来なかった。

すると

「あの…そろそろいい加減にして欲しいんですけど…」

迫り来る斬撃の嵐を防ぐ中、千弘がボソツと呟く。だがその言葉はユーハバツハに届いていたのか、更に剣を振るう速度が増していく。それはもはや千弘が剣を振るう速度に近づいており、遠目から見ているマユリの目にはもはやユーハバツハの振るう剣の姿さえも見えなくなっていた。

「どうした!?!速度が落ちてきているぞ…!!やはりスタミナが切れ――

その時であった。

「!?!」

千弘が突然、刀を腰へ仕舞うと、振り下ろされたユーハバツハの剣を握っていた腕を掴んだ。

「いい加減にしろつて……」

その直後――。

千弘が一瞬にしてユーハバツハの懐へと潜り込み、その腹部目掛けて拳を放った。

「言ってるでしょうがあああッ!!!※暴力反対パアアアアンチッ!!!」  
「!?」

※暴力反対と叫びながら相手を殴りつける千弘の必殺技である!!

「ガハア…ッ!!!」

その拳は空気を螺旋状に纏いながら突き抜けていき、ユーハバツハの腹へと脆い音を響き渡らせながら深々と突き刺さっていった。それによってユーハバツハは目を大きく開くと共に両頬を大きく膨らませると体内から押し出された空気を微量の胃液と共に吐き出した。

そして ユーハバツハの身体はくの字に曲がりながらそのまま背後にある瓦礫の山を次々と突き抜けていきながら地上へと叩き落とされていったのだった。

—————

近くの瓦礫の山まで殴り飛ばされたユーハバツハは体制を立て直し立ち上がるも腹から伝わってくる痛み能耐えきれずその場に片膝をついた。足元には空き出された血があり、その量からかなりのダメージを受けたと見れるだろう。

「ハア…ハア…ハア…!!」（肉弾戦のみでここまで傷を負わされるとは…やはりすぐに撤退すべきであったな…好奇心は猫を殺すとは正にこの事か…）」

推測通り園原千弘の力は予想外であった。今の自身はおろか…力を解放した自身でさえも倒す事は叶わないだろう。今後に予測できるのは完全なる一方試合のみである。改めてユーハバツハは目の前に立っている少年が全くの別次元の生物である事を認識した。

「陛下…!!」

すると 先程まで後方にて待機していたハツシユヴアルトが駆け寄ってくる、千弘を睨みながら耳打ちをする。

「撤退準備完了です…お早く…」

その言葉と共に背後に見えざる帝国への入り口となる影の領域が出現した。

「ああ…活動限界も今になってきたか…」

ハツシユヴアルトの言葉にユーハバツハは頷いた。これ以上戦えば間違はなく自身は倒されてしまふだろう。自身が荒い息を吐いているのにたいして、先程まで瀕霊廷中を駆け回りながら怪我人の救助に加えて星十字騎士団の殆どを倒し、更に先程の斬撃の嵐を防いでいた目の前にいる千弘は疲れる素振りを何一つ見せていなかった。

「やはり化け物だな…これ程の力をどうやって身につけたのかじっくりと調べてみたかったが…残念だ」

「陛下…差し出がましいようですが…“あれ”を取り込むまでは、まだ正面から闘うべきではないかと…」

「そうだな…」

ハツシユヴアルトに頷いたユーハバツハは即座に自身の背後に展開された影の領域へと後退する形で身を投じようとした。

その時であった。

「……んぐ!?!」

突然 喉元に何かが放り込まれ、驚いたユーハバツハは誤ってそれを飲み込んでしまう。

「陛下!?!」

「な…なんだこれは…?!何か玉の様なものが私の口に…!!貴様…!私に何を飲ませた!?!」

「はい?」

何かを飲み込んだユーハバツハは目の前で、振りかぶり後の姿勢で立っていた千弘を睨みつけた。すると、千弘は首を傾げながら答えた。

「いや、これ以上だと罫が開かないので、取り敢えず落ち着ける様に鎮静剤をカプセルに包んだ薬を投与しました…ってあれ?」

すると 千弘はポケットを弄ると、またもや錠剤を取り出すが、千弘はそれを見て驚いた。

「あゝ…すいません間違えました!それ別のやつです!鎮静剤はこつ







「なに…この状況…!？」

目の前に広がる奇想天外かつ多大なる情報量の光景に一護は戸惑うのであった。

## ユーハバツハの受難

「え…ええ…何これ…!？」

顔から炎を吐き出しながら転げ回るユーハバツハ、その男の傍らでは取っ組み合うマユリと、自身がガルガンダ内にいた際に感じた霊圧の主である千弘の姿があり、状況を一才把握できなかつた一護は千弘へと声を掛けようとした

「おい二人とも…！」

その時であつた。

「黒崎一護か…！」

「!？」

突如 自身の名前を呼ばれた。その声に一護は振り向くと、先程まで転げ回っていたユーハバツハがハツシユヴァルトに支えられながら立ち上がり此方へと目を向けていた。

「キルゲの監獄からよく脱出できたな…やはり貴様の中に流れる滅却師の血…いや、それを以つてしても早すぎる。千弘の霊圧も原因の一つか…まあ良い」

「…!？」

唐突に放たれたユーハバツハの一言に一護は驚きのあまり硬直する。

「滅却師の…血…!？」

「ほう…貴様は何も知らないのか…己の“母”の事さえも…」

「…！」

もう一言を耳にした瞬間 一護は大きく目を開かせると即座に目を鋭くさせ、ユーハバツハを睨みつける。

「どういう事だよ…！」

だが、その質問に答える事なく背を向けて影を展開した真つ黒な領域へと歩いていった。

「おい！待ちやがれ!!」

「悪いがもう時間なのでな。いずれまた迎えに来る…その時にまた教

えてやろう。さらばだ黒崎一護…闇に生まれし我が息子よ…！」  
「おい!!」

その瞬間

追いかけてしようとした一護の斬魄刀が真っ二つに折られた。

「!?」

卍解した刀の刀身がへし折られた一護はその脚を止めた。

見ればそこには先程までユーハバツハの後ろに立っていたハツシユヴァルトが腰に剣を戻しながらこちらを見つめていた。

「…!!」

それによって一護は追う手立てを失い、自身に向けて放たれた意味不明な言葉の真意を聞くことができないまま、呆然としながら二人が影の暗闇の中へと消えていく姿を見つめていた。

その時であった。

ガンツ…!!!

その場に金属を打ちつけた時に聞く巨大な衝撃音が響き渡った。その音を耳にした一護は咄嗟にその方向へと目を向けると、目を大きく開き震え出した。

「う…うそ……だろ…!?」

その一方で、

「……ん? 何だ今の音は……」

影の領域へと足を踏み入れ進んでいたユーハバツハもその音を耳にすると、立ち止まった。

「ま…まさか…!?」

その「まさか」であつた。冷や汗を流しながらユーハバツハが振り向くとそこには…

「なぐにカツコつけて退散しようとしてんですかあ〜!?」

決して掴む事ができない、かつ、今にも閉じようとしている影の領域の入り口を両手で掴み、なんと無理やりこじ開けようとする千弘の姿があつた…!!!

「そちらの方が話しやすいのですか〜? ならもつと早く仰ってくださいよ〜! 私もそちらに行くので向こうでちゃあ〜んと話し合いましようか〜!!!」

ギギギギギイ…!!!

すると 影の領域が金属を歪める音を響き渡らせながら次々と入り口を広げていった。それを見たユーハバツハは冷や汗を流し始めた。

「化け物め…まさか素手で空間さえも捻じ曲げる気か!」

素手で空間へと干渉する馬鹿げた力にユーハバツハは瞳を震わせると、咄嗟に両手を合わせる。すると、千弘が広げていった影の領域が元に戻っていく。

「なあ〜に勝手に閉めてんですか〜?」

ギギギギギイ…!!!

対する千弘もそれを良しとしないのか、腕に力を込め、更に入り口を強引に開き始めた。それによって周囲から軋む音が響き渡り始め、ユーハバツハ達のいる空間が揺れ始める。

「(まずい…! 空間が奴の力に耐えきれず今にも壊れようとしている…:…: そうなれば影の領域が破壊され銀架城が瀯霊廷に…:…: 今はまだ

その時ではない…かくなる上は!!!」

空間が破壊される事を危惧したユーハバツハは冷や汗を流しながら千弘を見つめると、最終手段を考え咄嗟に千弘の背後へと指を向けた。

「あーUFO!!」

「!?」

その声に横に立っていたハツシユヴァルトは驚きの目を向けた。長年 戸惑うことなく、威厳のある姿を保っていたユーハバツハが冷や汗を流しながら一生聞くこともない間の抜けた声をあげたのだ。

だが、相手は子供とはいえ最強の死神、こんな手立てが通用するわけ……

「ええ!?どいどいどい!?」

「(通じただと!?)」

その瞬間 空間を掴んでいた千弘の手が離れ、はしやぎながら空へと目を向けた。それを見ていたハツシユヴァルトとユーハバツハは意外だったのか更に目を開くとともに、ユーハバツハは笑みを浮かべると、すぐさま空間を閉じた。

「まさか信じるとは……」

「精神はまだ子供だな…バカめ…そんな空想上の遺物…この世に存在するわけ……」

「あーほんとだ!!!」

「何い!?!」

千弘が見上げた空には巨大な円盤型の飛行物体がとんでいたのだ。それを目にした千弘は心を震わせたのか手を叩きながらピョンピョ

ンと跳ね出した。更に心を震わせたのは千弘だけではない。

「おい千弘!! 貴重なサンプルだ!!! 絶対に逃すんじゃないヨ!!!」

「了解です局長!!!」

そしてそのまま此方に目を向ける事なく、一瞬にして飛行物体目掛けて飛び立って行ってしまった。

「……………」

二人はその光景を黙って見つめながらも、黒崎一護が此方を睨む光景に目を向けずにそのまま影の領域への入り口を閉じたのだった。

「……………」

「……………」

「……………」

その後、無事に銀架城へと到着したユーハバツハはおぼつかない足取りで玉座へと向かうと顔を手で覆いながら身を預けた。

「ハッシュヴァルト…しばらく私は休むぞ…肉体的にも精神的にも疲れた…卍解を奪った者には使いこなせる様に鍛錬を怠るなど伝えておけ…」

「御意…」

その命令にハッシュヴァルトは頷きながら一礼すると部屋を出ていった。たった一人の空間となると、ユーハバツハは大きな息を吐く。

「ふう…」

千弘との戦闘、タバスコ、更にたちまちと起こった奇想天外な展開にユーハバツハは頭と肉体の整理が追いついていないのか、未だに全身から疲れが抜けていなかったのだ。

その時であった。

——— 損害賠償、払っていただきますよ? ———

「!?!」



突然と肩に何者かの手が置かれると共に耳元で囁かれた。その声を耳にした瞬間 ユーハバツハは全身の身の毛を矢立たせると振り払うべく腕を振るった。

だが、そこには何者もいなかった。

「今…確かに奴の声が…まさか…!!!」

ユーハバツハはようやく気がついた。自身は「トラウマ」を植え付けられていた。自覚する事のない他者への恐怖感が千弘という手の届かない最強の存在によってその身に刻まれてしまったのだ。

それと共に監獄にて邂逅した藍染の言葉を思い出した。

—————

—————

——

『園原千弘には興味本位だけで手を出さない方がいい』

『なぜ、突然とそんな事が言える…?』

目の前で拘束されているスウェット（鏡花水月と書かれた）姿の藍染に対してユーハバツハはその言葉が出た意味を尋ねる。

『なぜか？今の園原千弘へ興味がある君の状況が、懐かしいと感じたからさ。この目には数刻後に君が園原千弘に完膚なきまでに叩きのめされ、悶絶しながら転がり、更にトラウマに苦しめられる景色が映っている。私の様に無様な醜態を公衆の面前で晒さぬ様に忠告してあげてるんだよ』

「……」

その言葉に濁りはない。だからこそ、藍染という特記戦力の一人があの様なのだ。納得せざるを得ないだろう。

『…フツ。戯言かと思っただけ聞いていたが、貴様のそのマヌケな様から見て、それでもなさそうだな』

——

—————

—————

藍染の言葉が正に現実となっていたのだ。

「(多少は覚悟はしていた…だがここまでとは…いや…それほどこま  
でに奴の力は強大…即ち細胞の力が強いと言う事か)」

そう考えた途端に先程までの怯えが少しずつ興奮へと変わって  
いった。

「(やはり興味が唆る…あの男の力…何としてでも手に入れねばな…  
!)」

あの男の力を取り込めば自身はどのような変化を遂げ目的を達成で  
きるのか、想像できぬ未来へと期待を膨らませていたのだ。

すると、それによつてゆつくりと心の振動や鼓動が落ち着きを取り  
戻し胸騒ぎも収まっていき、数分後にはようやく身体の寒気が引き、  
先程まで激しく鼓動していた心臓も落ち着きを取り戻した。

「ふう…(だが、今の段階”では手を出すべきでは無かったな…少  
なくとも力の9年間で終えるまだ待とう…)」

それから、千弘へと安易に手を出した自身に後悔しながらユーハ  
バツハはそのまま目を閉じたのだった。

その後 ユーハバツハは目を覚ました自身の手元に正確な金銭が  
記され、印鑑が付かれた紙と『1週間の間に支払いで返すか働いて返  
すか皆さんと決めておいてください』と書き残された紙が置かれてい  
た夢？を見て飛び起きたという。

## 残された傷跡。そして千弘の秘密

ネム「千弘さん…私と（バキューン）してください」

千弘「はひ!?」

—————

その後 各地にて倒れていた滅却師達が消えた事で闘いが終わり、本格的に復興作業と怪我人の搜索、治療が開始された。

滅却師達が現れてから7分で全隊員の三分の一である1000人が命の危機に晒されていたが、その点は千弘とネムの活躍によって解決されており、少なくとも500名以上の隊士達の生存が確認されていた。

だが、全員が助かったわけではない。中には胴体と首が泣き別れ若しくは遺体さえも残らず消し去られ回道による回復が不可能な者もいたので少なくとも数百名もの命が失われてしまった。

更に今回の襲撃で隊長の殆どが卍解を奪われてしまっており、現在、マユリが解析を行なっているものの、それが知れ渡ってしまった事が原因で隊の士気を多く低下させてしまう事となった。特に元柳斎の敗北と卍解の強奪は影響が大きく、それが知れ渡った事で各地から諦めの声が出始めてきていたのだった。

◆◆◆◆◆

雨が降り注ぎ多くの隊士達が運ばれていく中、一護も医療施設へと脚を踏み入れ、平子の案内のもとルキアと恋次の病室へと赴いていた。

「…」

一護の目の前には二つの寝台が置かれておりそこには顔の殆どを包帯で巻かれたルキアと恋次が横になっていた。

見るからに重傷である。それを見た一護は表情を暗くさせると共に己の不甲斐なさに肩を落とす。ルキアが目を覚まし、来てくれた事

に礼を言うものの、そもそも今回無事であったのは千弘がいたからであり、自身は何もできていなかった。

すると、病室の入り口から技術開発局の研究員が汗を流しながら顔を出した。

「く…黒崎一護様…涅隊長がお呼びです。至急 技術開発局まで…」

「え…あ、はい！」

—————

—————

—————

それから一護は職員に案内されるまま、技術開発局へと向かった。技術開発局へと到着し、呼び出したマユリがいる研究室へと入る。

なぜ一護がここへ来ているのか、それは折れた斬魄刀をマユリへ渡していたからだ。ハッシュヴアルトによってへし折られてしまい無残な姿となってしまった天鎖斬月をマユリならば治せるのではないかと一護は期待を抱いていたものの、それに対してマユリは首を横に振る。

「始解した斬魄刀ならば、持ち主の魂魄で再構成される。だが、卍解した斬魄刀は二度と戻る事はないのだヨ」

「そんな…嘘だろ!?!」

残酷な真実を打ち付けられた一護は頭を抱え始める。斬魄刀は唯一の対抗手段であるのにそれが無いとなればどうしようもない。

「クソ…どうすれば…」

唯一の武器である斬魄刀を失ってしまった一護は歯を噛み締める。

すると

「あ！黒一さん！いらしてたんですね！」

「千弘!?!」

後ろのドアが開き、千弘がネムに抱き抱えられながら入って来た。入って来た千弘は一護の顔を見るとその表情の暗さを疑問に思い首

を傾げた。

「どうしたんですか？顔色が悪いですよ」

「ああ……実はな……」

千弘から尋ねられた一護は自身の斬魄刀がへし折られ、元に戻らない事を話した。その話を聞いた千弘は「ふむふむ」と頷きながらも首を傾げる。

「それは大変ですね……ですが、私にはどうすればいいのか分かりません……申し訳ありません」

「そうか……いや、気にすんな。それよりもルキアや恋次達を助けてくれたんだよな？本当にありがとな……俺がもう少し早く出てこれれば……」

そう言い一護は自身を悔やむと共に親友であるルキア達を助けてくれた事に感謝しながら千弘に頭を下げた。それに対して千弘はいやいやと手を振る。

「いえいえ……そんな気にしないでください！役に立てて何よりです！それよりもお二人のご容態はどうでした？」

「何とか意識は回復した。それよりも、お前の方こそ大丈夫だったのか？」

「私は全然！変質者に襲われましたけども何とか切り抜けました！」

「変質者……？」

「そうなんですよ！いちいち救助の邪魔して来やがりましたね！」

千弘は一護に頷くと数時間前の事を話し出した。

—————

—————

—————

—————

数時間前

巨大な荷車を引きながら瀨霊廷を駆け回っていた千弘とネムはあ

る地点へと到達した。因みにネムがなぜ千弘と同等の速度で走れるのかは触れないでおこう。

「ここも被害件数が多い場所ですね。早く救出して送り届けましょう！眠（ねむり）さん！」

「はいー」

眠というのはネムのもう一つの名である『眠七號』から因んだ名前だ。ネムと親しくなった千弘は最近になって、彼女からこの名で読んでほしいと言われ、そうしているのだ。

眠と呼ばれたネムは応えると、彼と共に周辺にて倒れている隊士達を次々と横にさせ、技術開発局特製の回復薬を投与していった。

だが、中にはやはり助からなかった隊士達もあり、彼らを見つけた千弘は身体を横にさせ、静かに手を合わせた。

「助けられなくて申し訳ありません…必ず後で迎えに来ます。なのでもうしばらく待っていてくださいー」

荷車は乗せる人数に限りがある。故に千弘はまだ生きている隊士達を優先的に乗せていった。

その時であった。

「…あれはー」

ふと目を向けた先に一人の隊士が頭から血を流しながら倒れている。それは千弘がよく知る人物である。

「ルキさん!!!」

それは朽木白哉の妹である朽木ルキアであった。彼女は一護と交流を持ってから話す様になり、それなりの関わりがあった。そんな彼女が倒れていた姿を見つけた千弘は即座に駆け寄ると抱き起こした。

「ルキさん！お気を確かに!!!」

だが、何度揺すつても彼女が目を覚ます気配は無かった。

すると ネムが近づき胸元に耳を当てる。

「…鼓動が聞こえます。まだ間に合いますよ」

「よし…急いで運びましょう！」

その時であった。

背後から複数の影が現れると共に千弘の首に向けて剣を振り回した。

「特記戦力筆頭…その首貫った…!!!」

その振り回された剣が首筋へと届こうとした時。

「救助の邪魔しないでください」

「グボヘエラア…!?!」

寸前にその手を指で受け止めると共にもう一方の拳によってその影を殴り飛ばした。

「見いっつけ…!!!」

「はいはい」

「ガハア…!?!」

更に上空から巨大な瓦礫と共に降りてくる影に向けて千弘は拳を突き出した。それによって接近していた瓦礫を粉々に砕き桃色髪の滅却師を拳圧によって吹き飛ばし、気絶させた。

『グエナエル・リー』与えられた聖文字は“V” (vanishing point) 自身の存在を認知されなくなるという隠密に長けた能力であるが千弘の極限まで磨き上げられた感知能力には通じずそのまま殴り飛ばされ気絶。

『ミニーニヤ・マカロン』与えられた聖文字は“P” (the power) 超怪力を得て全身が筋肉の鎧と化すが、千弘には通じず拳圧だけで気絶。

それから千弘とネムは怪我人を届けると再び戦場に飛び出し、次々と怪我人達を回収していった。

—————

—————

—————

「…という事がありました。いやあ…本当に意味が分かりませんよね。なんで救出の邪魔なんてするんでしょう」

「いやいやいや!!!それ敵!それルキア達襲った奴ら!それ卍解奪った奴ら!!!」

あたかも流れ作業の様に自身らが苦戦していた相手を殴り飛ばしている話に一護はもう耐えきれないのか目を飛び出しながら色々ツツこんだ。

「あーお客さんが来てるにも関わらずお茶を忘れてしまうとは、ちよつと取つてきますね!」

「人の話を聞……行っちゃった……」

話も聞かずにそのままネムと共に研究室を出ていった千弘に一護はハアと溜息をつく。

そんな中、一護は千弘の相変わらず無自覚な様子を見てから、ずっと疑問に思っていた事を隊長であるマユリへと尋ねた。

「…なあ。なんでアイツ…隊長に抜擢されねえんだ? 頭はともかく強さならもうなつててもおかしくないだろ?」

「…ふむ」

一護から尋ねられたマユリは研究の手を止める事も振り返ろうともしなかったが無視する事なく答えた。

「まあ、君には教えておこう。奴の強さは見ての通り異次元。ユーハバツハなど羽虫に等しいだろう。君の言う通り隊長どころか総隊長になつていてもおかしくはない。だが、それによつて奴の強さが露わになつたら、隊士達はどう思うかね?」

マユリから尋ねられた一護は少しばかり考えながら答えた。

「え……と……追いつくために鍛錬を頑張る……とか?」

「バカかね」

一護の方から出た答えを聞いたマユリはそれを一蹴すると更に続けた。

「そんなもの一部の者だけに決まっているだろう。大抵の奴らは千弘の力を知つた途端に奴に頼り始める。『アイツがいれば全て終わる』『いざとなつたらアイツが終わらせる』『自分達はただ頑張る振りをすればいい』我々の様なただ相手に対抗できる程度ならば多少の鼓舞にはなるだろうが、奴の様な一瞬かつ一撃で倒せる力を持っているならば鼓舞とはならない。ただ依存するだけだ。奴に依存した護廷隊など、ただのグータラ集団だヨ」



そう言いマユリは頭の被り物を直す。

「奴の強さが明るみに出ると言う事は即ち護廷十三隊の崩壊を意味する。だから奴は目立たない様にするためにいつまで経っても平（ひら）止まりなのだヨ。まあ任務は隊長クラスのものばかりだがネ」

「へえ…」

マユリの説明を聞いた一護はようやく千弘がずっと平隊士である事を納得した。

そんな時であった。マユリの被り物から通信音が鳴る。

「…私だ。…………ツ…こんな時にか…黒崎一護、着いてきたまエ。零番隊様のお越しだヨ」

それからマユリは舌打ちをしながら通信を切ると一護を連れて瀧霊廷の入り口へと向かっていった。

—————

—————

—————

時を同じくして医療室。ユーハバツハによって全身を切り刻まれ、四肢を斬り飛ばされた元柳斎は医療機器に繋がれながら眠っていた。そんな中、彼は夢の中である景色を眺めていた。

それは 千年前、滅却師の始祖であるユーハバツハと尸魂界にて衝突した時である。

元柳斎は自身がユーハバツハの元へと向かっていた景色を眺めていた。覚える必要もない場面の記憶。今さらなぜこの記憶が呼び覚まされたのだろうか。

（これは…千年前の……ん？）

その時であった。

「あのすいません！流魂街から来た者ですが…死神の学院に…!!」

自身の元へどこからともなく一人の少年が現れ駆け寄って来た。

(…ツ!!!)

その姿を見た元柳斎は目を大きく開く。

その一方で目の前に立っていた千年前の自身はどこから侵入したのか問いただす事なく額に眉を顰めると共に一喝した。

「バカモンがああ!!!ここは戦場じゃアア!!はよ消え失せえツ!!!」

「は…はいいいい!!!し…失礼しましたあああ!!!」

それによつてその少年はそそくさとその場から走り去つていった。

(あの童…)

忘れていた記憶と今の記憶が重ね合わされた事によつてその少年の正体が自身のよく知る誰かと重なつたのだ。

(まさか…あ奴は…!!!)

記憶の中で現れた少年。その姿は自身が知る最強の死神である『園原千弘』と瓜二つであった。

## 思い出話

一太刀震えば粉微塵。更に振るえば塵も残らず――。  
その刀―― あまりの速さ故に誰も見えず。  
道ゆく人々、その者見ればこう読んだ。  
無双の劍豪――

『拔刀齋』――と。

千弘「なにそれダサイ」

――

その後 現れた零番隊は一護や重傷であるルキア、白哉達を連れて再び靈王宮へと戻っていき、残された者達は復旧作業を後回しにしそれぞれ個々の鍛錬へと身を投じていた。

だが、それと同時にある噂話が流れ始めていた。

「なあ知ってるか…？平隊士の中にとんでもねえ強い奴がいるってよ…？」

「マジか…？いや、でも所詮は平だろ？いくら強くても席管程度じゃねえか？」

「いや！それが今回攻めて来た滅却師共を怪我人を助けながら撃退したとか…！」

「嘘嘘…！そんなんあり得ないって…！総隊長が敵の大将の所に向かうついでに助けてくれたに決まってるって…！」

鍛錬の休憩がてら、回廊を歩きながら、素行の悪い11番隊隊士達は知らぬ間に耳に入ってきて来ていた噂話を談笑していた。  
すると

「いてえ!? テメエ! どこ見て歩いてんだあ!？」

目の前の曲がり角から歩いて来た少年死神とぶつかってしまふ。ぶつかつた隊士は声を荒げながらその少年死神へと怒鳴つた。

それに対してぶつかつた少年は即座に頭を下げる。

「す…すみません！私の不注意でした…」

「ケッ！テメエは十二番隊のとこのガキじゃねえか。気をつけろや万年平のガキが！」

それから隊士達は悪態をつきながら去っていった。各地で謎の強戦士である平隊士の噂が上げ始められるものの、皆はそれをデマとして真剣に受け止める事はなかつたという。

その後 その隊士達は偶然にもその場を見ていた卯ノ花に治療という名目で傷口に特製の辛子を塗られたらしい。

—————

一護達が霊王宮へと飛び立ち、数時間後。

「…あの、何でしょう？いきなり呼び出して」

千弘は、四肢を補肉剤によつて再生させ、今もなお身体の治療を受けている元柳斎に呼び出されていた。呼び出した元柳斎は机に置かれている一枚の絵へ指を向けた。

「お主に聞きたいことがある。この男に見覚えはあるか？」

そこには黒い髭を持ち頭を月代そして鬚を縫っている大柄な男性が書かれていた。それを見た千弘は何かを思い出し始めていく。

「これは…」

「あるのか？」

「はい。確かまだ死神どころか霊術院にも入っていない頃で、修行を終えてすぐさま学院への入学を申請する為に瀨霊廷を訪れたのですが、緊急時だったのかその人から門前払いを受けまして」

「……………何年前じゃ…？」

「数百年前じゃないですかね…？」

「ちがあああう！！千年前じゃあああ！！！！」

「ええ!？」

突然怒鳴られた千弘は驚くと共に目を大きく開き、元柳斎へと尋ね



近くの草むらが揺れると共に掻き分けながら一人の女性が現れたのです。

メガネを掛け、身長が165以上もありそうな長身の女性は何故か眼鏡をクイッとさせながら私をずっと見つめていました。

「あの…どうかなさいましたか?」

私が恐る恐る尋ねてみると、女性は眼鏡を輝かせながら更に此方を見つめて来まして……

「この霊圧…感じる力………」

その女性は突然と私に向けて大きく手を広げながら襲い掛かって来たんです…!!

—————

ドドドドドドドドド

私は駆け巡りました。ですがそれに追い縋るかのように女性は私の後を追いかけてきたのです。

「わあああああ!!何なんですか!?何なんですか貴方はあ!?!」

「逃げないで…話だけでも聞いて欲しいです…」

「うわああ!!怖い怖い!!!」

相手の女性は私を捕まえようとしているのか、次々と手を繰り出してきました。対して私も捕まらないように辺りの木々を利用して避けながら逃げました。

「ふん……」

ですが、避ける度に女性は感情が昂ったのか、笑いながら追いかけて来て…、その速度も格段に速くなっていききました…

「反射神経も良し…それどころか私の腕を土台にして避ける瞬発力…いいですよ…!!」

そして終いには…

「…!!!」

「いやあああ!!何すんですかあ!?!」

薙刀を振り回して来たんです。

「ふん……ふん……ふん……!!」

「わあ!?ちよ!?やめ…!!」

次々と辺りの木々を薙ぎ倒しながら迫ってくる薙刀を私は必死に避けていきました。

そして逃げていくうちに森を抜けて、遂には崖が聳える場所に出て来てしまいました。私は無我夢中に逃げていた為に目の前にある崖に気づく事なく女性に追い詰められてしまい…女性も手を唸らせながら近づいて来ました。

「もう逃げられませんよ…帰って私の屋敷で夜通したつぷりと…斬り合いましょう…!!その力を存分に私にぶつけて…!!!」

「ひいい〜!!!」

もはや、私は逃げる事は無理だと悟り、腰にある刀へと手を伸ばし構えました。

「ああもう!!これ返そうと思ってたのに!!貴方のせいですからね…

!!!

「ふふ…まさか此方からその気になってくれるとは…嬉しいですよ!!」

何が原因なのか、私が刀を持つと女性は頬を紅潮させると共に更に歓喜の表情を浮かべ、先程よりも勢いよく薙刀を振り回してきたのです…。

「…!!」

迫り来る薙刀を私は刀を振るう事で防ぎます。ですが相手は達人なのか、防いだ直後に次々とその刃を振り回し私に向けて放って来ました。

「…!?」

次々と迫り来る薙刀の切先は全て私のガラ空きの部分を狙い、時にはその態勢から防ぎにくい箇所も狙って来ました。何とか防げたものの、防ぐ度に攻撃が激しくなり、途中から防ぎたく無くなると時もありました。ですが私は死にたくないが為に必死に防いで行きました。

私が薙刀を次々と防いでいく中。ようやくその隙を見つけたのです。

「スウ…」

呼吸を整え準備すると、私は女性が振り回した薙刀の切先へ向けて刀を振り回しました。

「やあ!!」

「!?」

それによつて、その場に金属音が響き渡ると共に女性の手から薙刀が離され地面に突き刺さります。そこから更に女性の懐へと潜り込むと刀の柄を女性の腹へと突き出しました。

「が…!?」

それによつて女性は空気を吐き出しながらその場でよろけ、尻餅を ついてしまい地面へと座り込んでしまいました。

「ふう…つて…しまった!?だ…大丈夫ですか!」

女性が尻餅をついた事で私もようやくやく正気に戻りし、すぐさま力を入れすぎてその場に倒れ込ませてしまった女性へと駆け寄り手を差し出しました。

ただ、その行動が仇となったのです。

ガシツ…

「え…!?」

手を差し出した時には既にその手を掴まれていました。

「捕まえた♡」

「むぐう!?」

その瞬間 私はその女性に拘束されてしまいました。

「んぐう…!んぐんぐ!!」

「ふふ…先程の反射神経に斬魄刀を避ける瞬発力…私を吹き飛ばす程の腕力…貴方の事がもっと知りたくなってしまいました…この後は



私の屋敷に来て続きをしましょう…どちらかが血の海に沈むまで…」  
「んぐう!？」

その言葉と共に拘束する腕の力が更に強まり、呼吸ができず私の意識は朦朧とし始めました。

「この年でこれ程の瞬発力…それに剣術も私と渡り合えるなんて…」  
意識がだんだんと沈み込んでいく中、女性の声だけはハッキリと聞こえていました。その声はまるで私を捕まえた事がとても嬉しそうに……。

「……………」

そして、意識が途切れる一歩寸前。私は諦めながらもゆっくりと顔を見上げました。

そこにあった女性の瞳は……………

「はあ…♡強くなつた貴方とはどんな斬り合いができるんでしょう…!!」

私を獲物として見ていたのです。

「わ…わあああ!!!」

その顔を見た瞬間 沈みかけていた私の意識は一気に覚醒し、目を覚ましました。それによつて私は死に物狂いでもがき、女性の懐から脱出するとその場から振り返る事なく全力疾走しました。

「うわああああん!!!怖いよおおお!!!」

「あー待ってくださいよ…!!お茶とお菓子も出しますから私と……………」

女性の声が聞こえて来ますが、絶対に振り向く事はしませんでした。振り向いたらもう命はないと思つていたからです。

—————

「…あれから再びその周辺を離れて各地を周り心身ともに鍛え上げ、3回目の訪問を得て霊術院に入学できた訳です。ただ…、あの女性がトラウマになつてしまい野宿の際は寝る度に思い出してしまふんで

す」

「(鹿取いいい……)」

まさかの同僚が千弘と接触していたことに驚き元柳斎は額に手を当てる。

「いやあ…改めて来た時は色々建物などが変わっていてビックリしましたが、安心しましたよ！あのメガネの女性を見かけなくなりましてね。それから課程を終えて配属されて今……というようになります」

「そうか……」

千弘の説明にもはや何も言えなかった。この少年は自身らと滅却師との決戦からして少なくともほぼ800年以上の間、修行の旅をしていたというのだ。更に驚く事に数年の修行で最強と恐れられていた初代護廷十三隊の隊長と渡り合っていた。即ち彼は元々、今の力の欠片を持っていたという事になる。そうなる修行を少なくとも800年以上も続けていればあれ程の力が付いている事も容易に想像できる。

だが、たった数百年でこれ程までの力を身につける事などできるのだろうか。千弘の話を受けた元柳斎は今一度、彼の強さの原因を探るべく考えるものの、話のインパクトが強すぎる為なのか、もう諦めてしまった。

「はあ…もう戻って良い……」

「はい。あ、後でりんご送りますね」

それから千弘が去ると元柳斎は空を見上げ、ユーハバツハから告げられた言葉と1000年前のあの日の事を脳裏に思い浮かべるのであった。

## 二人の剣八あと卯ノ花さん怖い

滅却師襲撃から数日。傷が癒えた日番谷は卍解に頼り切り、疎かにしていた斬術の基礎を師範である隊士から学び直し基礎を固め終えると更なる強さを求めるべく千弘の元を訪ねていた。

技術開発局の門を叩くと阿近が顔を出す。

「おや？日番谷隊長じゃないですか。何かご用で？」

「ああ…来て早々悪いが…園原の手を借りたい…いるか…？」

「あく申し訳ないんですが、アイツは今留守でしてね…」

「留守…？何処かに出掛けたのか？」

「ええ。丁度先程、総隊長に呼び出され一番隊隊舎に」

—————

地下大監獄の最下層『無間』。そこでは次々と激しい金属音を響き渡らせながら剣を交える3人の姿があった。

「…!!!」

一人は猛々しい髪を後ろに流し揺らしながら剣を振るう護廷隊

長の中でも生粋の戦闘狂である『更木剣八』

「うおらあああ!!!」

護廷十三隊の中でも飛び抜けて恐ろしいその顔が己の好物である戦闘によって更に潤っているのかその顔は口角が釣り上がり、まさに怪物と呼ぶに相応しい物へと変貌していた。

そして もう一人 千弘へと剣を振るう影があった。

「…!!!」

流れるような長い髪に半開きの虚な瞳の不気味な女性。それはなんと四番隊隊長である『卯ノ花 烈』であった。その姿は以前の母の様な面影は何一つなく、あるのただ剣を振るう事を生き甲斐としている血に濡れた怪物としての姿であった。

だが、それが彼女の『素顔』である。彼女の本名は『卯ノ花 八千

流』1000年前から護廷隊へと所属していた元十一番隊隊長であり、今の血の気のある隊の風景を作り出したのも彼女である。

それ程の彼女がなぜ医療専門の四番隊隊長であり『回道』を極めているのか……

それは自身または相手との戦いを永遠に楽しむ為であった。自身が傷付けば自身を。自らを楽しませた相手が傷付けば相手を治療して永遠と闘いを続ける為に彼女は回道を極めたのだ。

修羅へと堕ちた彼女は自身の本気という本気を出しながら千弘へと剣を振るっていった。

その一方で

「お二人とも！冷静さを失っておられます！剣が見切られやすい動きになってますよ！落ち着いてください！」

3人のうち、最後の一人である千弘は二つの方向から振るわれてくる剣を全て防いでおり、珍しく彼らへと指摘までしていた。

なぜ、謙虚な彼がここまでするのか、それは二人から懇願されたからでた。最初は退院した総隊長である元柳斎から指南を申しつけられており、その際に千弘はもちろん断つたが、その直後に二人の行動を見て千弘は断ることが出来なくなったのだ。

卯ノ花は頭を下げ、更木に至っては土下座までもした。

普段の二人からは考えられないようなその姿勢に千弘は断る事すら出来なくなってしまう了承したのだ。

確かに二人は実践において卍解による特殊能力は使わず、ただ剣術のみで成り上がってきた者なので千弘以外の者とは鍛錬にはならないのだろう。

そして

「…!!!」



いった。

だが

千弘はそれすらも手を横で薙ぎ払う形で掻き消した。

斬撃を掻き消すと先程までの砂埃が晴れ再び目の前の景色が鮮明となった。それを見ていた更木は力に限界が来たのか、正気の抜けた白目に再び瞳が戻る。

「はあ…はあ…。ケツ…やっぱいくら強くなつてもテメエには勝てねえか……」

その一言と共に更木の身体が地面へと倒れようとした。それを見た千弘は彼の元へと一瞬で駆け寄ると地面へと倒れそうになっていた身体を支える。

「ふう…怪我が治っていないので無茶しないでくださいよ…」

更木を支えながらそう溢した千弘は卯ノ花へと目を向けた。

「ここまでにしましょう。あとお疲れのところ申し訳ないのですが更木ン隊長の治療もお願いしますよ『卯ノ花 烈』隊長」

「……………」

そう千弘から呼び掛けられた彼女は刀を鞘へと仕舞う。すると、先程までの恐ろしい霊圧や人相が内に潜み、いつもの優しい表情へと戻っていった。

「ええ…千弘くん」

それから治療を終えた更木は礼を言いながら戻っていった。去りに際に彼の連れている相棒であるやちるから「またしばらく一緒にいられる」とお礼を言われたが理解できずに千弘が首を傾げたのは別の話である。

—————

—————

———

それから闘いを終えて更木と別れた千弘は卯ノ花の誘いのもと、四

番隊隊舎へと招かれ茶菓子を振る舞われていた。

「千弘くん…先程だけでなく、前回お相手してくれた時も…泣きながら驚いていましたが、そんなに私の顔が恐ろしかったのですか?」

「……ゴクン……」

卯ノ花から尋ねられた千弘は即座にお菓子を飲み込むとお茶を一飲みし、息を整えながら申し訳なさそうに答えた。

「はい。冗談抜きで」

「……!!」

その言葉を聞いた瞬間 卯ノ花は目を限界まで血走らせながら接近した。

「どの辺りがですかあ…?」(八千流モード発動中)

「ぎゃああああ!!!その辺り!その辺り!!!怖い怖い怖い!!!目を血走らせないでええ!!!」

「…申し訳ありません…」(八千流モード解除)

そう言われた卯ノ花はそのまま彼から離れ少しばかり気を落としただのか肩を落とす。

「ただ…それが素顔だとしても私は好きですよ。母の様に優しく厳しいという感じがするので」

「え…?」

ふと溢した千弘の言葉に卯ノ花は驚き顔をあげた。

「それは……  
すると

「千弘さん…マユリ様がお呼びです」

「あ、はい!では失礼します!お茶ごちそうさまでした!」

ネムが現れ、彼女と共に千弘は隊舎を出ていった。

千弘が去っていき一人となった卯ノ花は自室に置かれている「被り物」へと目を向けた。

「……」

それは以前、やちるからプレゼントされた猫のカチューシャであ

る。戦いだけを好む以前の自身は全く興味を示さなかった為に置いていたが、今となつては少しだけ興味が湧いてしまった。

――――  
ササア―…

「卯ノ花隊長、診断結果をお持ちしました…  
ぎやあああああああああ  
!!!!!!」

その後 患者の診断結果を報告するべく部屋へと入ってきた勇音が八千流モードを発動しながら猫のカチューシャを被る卯ノ花の姿を見て気絶したのはまた別の話である。

――――  
――――  
――

あの後、ネムに抱き抱えられながら技術開発局へと戻った千弘はマユリのいる研究室へと向い、呼び出した理由を尋ねた。

「何ですか？用って」

「ふむ。君にある任務を任せようと思つてネ」

そう言いマユリは抱き抱えられながらネムに頬擦りされている千弘へと指を向けた。

「地獄で初代隊長達の霊子を取ってきて欲しい」

「はい？」



## 再び襲来する滅却師

「地獄へ？」

「うん」

「いけ？」

「うん」

……………

「うわあああん!!!局長のバカアアアア!!!」

「うるさいネえ。誰も堕ちろとは言っていないだろ。まあ堕ちてくれるなら此方としても願ったり叶ったりなんだがネー。私は連れて来いと言っているのだヨ。まあそんな話は後にして、まずはこれを見たまえ」

涙を流しながら出て行こうとする千弘をネムが抱き上げながら止める光景を横目に、マユリは光る服を見せて来た。その服の放つ光は尋常ではないもので研究室全体を昼のように照らしていた。

「眩しーこれって現世の子供達が着るパジャマによくある奴じゃないですか。なぜこんなものを？」

「奴らが撤退する際に黒い霧のような物へと消えていったらどろ？その時から私は奴らが潜む場所を粗方、突き止めていたのだヨ」

そう言うとマユリは自身の足元にある影を指差した。

「奴らが潜んでいるのはここ。『影』の中ダ。だが、我々のような死神の影ではない。仮にそうだとすれば背後からぶすりダ。ならどの影か？答えは簡単。瀨霊廷中の至る所にある建物の影ダ。奴らは霊子の扱いに長けているからそれを応用して空間でも作ったのだろう。まあ簡単な話、これがあれば侵入は防げるという事ダ」

「成る程」

「それともう一つ」

千弘が納得する中、マユリはある機器を手に持った。

「何ですか？それ」

「私が開発した霊子の働きを強制的に制御する装置だよ。奴らが固有の能力を持つてはいるのは知っているネ?」

マユリから尋ねられた千弘は自身に向けて霊子を応用した攻撃を向けてきたバンビエツタを思い出す。

「はい。特になんか、私の事をシヨタとかいじつてた人は爆弾を操る能力でしたね」

「そう。確かに厄介ダ。だが、根本的に考えればその霊子に当たらなければ問題ない。それでも避けるのが困難な技を使う奴らも中にはいる。そこでこれが役に立つという訳ダ。これがあれば霊子を応用した能力の発動を設定した時間遅らせる事ができる」

「成る程!では今日はその量産つて事ですか?」

「それもそうだが、別の機器の整備もある。この数日間の内に奴らが必ず攻めてくる筈だからネ」

「……」

それを聞いた千弘は身体を一時的に固まらせるが、その後、すぐに目を開き炎を宿した。その理由は簡単だ。前回の襲撃で自身から収入源を奪い去り逃げた者達が向こうから現れるのだから。

「おっしやあああ!!!今度こそ逃がさねえからなあ!!」

「一々うるさいんだヨ!!まだこれについて説明していないだろう!!」

雄叫びを上げた千弘を一喝したマユリは研究所の中でも一際巨大な装置へと指を向けた。

「これを見たまえ」

「ん?」

マユリに言われた通り千弘も目を向けると、驚いた。

「(……これは……!!!)」

それから千弘はマユリから機器を紹介されると了承し本来の仕事である機器の制作と整備へと移った。

—————

—————

——

「……ん?隊長は?」

数日が経過した頃。既に千弘の手によって復興を終えた技術開発局にて調査や監視を行っていた十二番隊第3席である阿近は見当たらないマユリとネムと千弘の所在について尋ねた。すると同じく局員で千弘やネムと比較的に交流が多いニコが不思議そうに答えた。

「それが…数日前から副隊長や千弘ちゃんと研究室に籠ったきり出てこないんですよ…」

「……」

不審に思った阿近はマユリの研究室兼隊首室へと目を向けるとその周囲に配置されている監視蟲へと目を向けた。

「妙だな…隊長が24時間以上も籠ってるつつうのに監視蟲が動いてねえ…こんな事は初めてだ…千弘がいるから大丈夫だとは思うが……」

阿近はその場からモニター付近のボードを操作すると、モニターを起動させる。

「ええ!?なんですかこれ…!?」

「隊首室に仕掛けた監視カメラだ」

「ちよ…そんな事していいんですか!?」

「黙ってる。映るぞ」

そう言いながら阿近が起動ボタンを押すとモニターに映像が映し出された。すると、そこに映ったのはややブレがありながらも背中を向けながら必死に何かを制作する3人の姿であった。

見る限り危険なものは製作していない。

だが、その3人の背後には…隊首室全体を埋め尽くす程の謎の装置が置かれており、千弘はマユリに指示を受けながら次々と部品を装着していった。

その光景をモニター越しで目の当たりにしていた阿近達は目を大きく開かせる。

「…な…なんだあの見た事もねえ妙な装置は…隊長は…一体何を作っているつもりなんだ…!?」

その時であった。

ピーピーピー

「!?」

機器からけたたましい程の異常発生を知らせるブザーが鳴り始めた。それを耳にした阿近達は即座に持ち場へと着き、機器を操作する。だが、いくら操作をしても機器が表す計測値が異常であり、原因も何もかも分からずパニックに陥り始めた。

そして その数値と横に取り付けられた映像を見た阿近は冷や汗を流しながら固まる。

「嘘だろ…? 瀧霊廷が…消えた…!!」

—————

そしてその同時刻。技術開発局と同じくして瀧霊廷全域がパニックへと陥っていた。

「うわあ!?なんだあ!」

「景色が…変わっていく!」

慌てふためく大衆達が目を向けた先には射魂膜が瀧霊廷の景色と共にまるで喰われていくかのように空へと消え去り、それに置き換わるかの様に白銀の西洋都市が現れる光景が広がっていた。

「なんだこの建物!?どうなってんだよ一体!!!」

突然と風景が変わり瀧霊廷が消え去った事で訓練や日常を過ごしていた隊士達は唐突な現実を受け入れられず、混乱していく。

そんな中。その光景を一際高い場所から見下ろし見物する影があった。

「侵攻完了だ」

そこには数日前に千弘にコテンパンにされた挙げ句の果てにタバスコを飲まされ大恥をかけた滅却師の始祖であるユーハバツハが二人の滅却師を連れながら立っていた。その顔からは千弘から受けた傷が完全に塞がっており既に完治しているように見える。

ユーハバツハは混乱する瀦靈廷 “だった” 場所を見つめながら雨竜へと問う。

「雨竜よ… 『聖帝頌歌』を知っているか？」

「はい… “封じられし滅却師の王は900年を得て鼓動を取り戻し90年を得て理知を取り戻し9年の時を得て力を取り戻す”」

「それにはまだ続きがある。 “9日間を持って世界を取り戻す” …とな」

その言葉と共にユーハバツハは腰に掛けてある新調された刀剣を取り出した。

「ゆくぞ雨竜、ハツシユヴァルト。世界の終わる9日間へ」

『卍解』【残火の太刀】

その瞬間 ユーハバツハの刀剣がメダリオンから現れた灼熱の劫火へと包まれていき焼け焦げた刃へと変化した。

そしてそのまま地面へと突き刺す。

「さて… 山本重國よ… 貴様から奪い取った卍解の力… ありがたく使わせてもらうぞ…!!!」

すると 突き刺した場所を起点に各地に亀裂が走り始めると共に砕け散り、クレーターを形成すると、その場から赤く染まった人骨が姿を現した。

———【残火の太刀】【火火十萬億死大葬陣】

元柳斎の卍解の見せ損ねた技であり卍解を奪い去った事でユーハバツハは発動させる事が可能となったのだ。

刀を担ぎながら現れた骸は群れをなし骨と骨が重なり合う事で鳴

る不気味な音を奏でながら進軍し始めた。それによつて周囲からは絶叫する声が飛び交い始めるが、それでもユーハバツハはまだ手を止める事は無かった。

「さて……これで土台は揃った。あとは……」

その光景を目にしたユーハバツハは手を勢いよく合わせる。するとユーハバツハの全身から収束されていた霊子が呼応するかの様に輝き出し彼の両手へと宿っていく。

「死神共よ。諸君らに私からプレゼントがある。擬似的ではあるが受け取るがいい……!!」

そして最大限の輝きへと到達するとユーハバツハは片膝をつき力を込めながら両腕を広げ地面へと叩き付ける。

「かつての仲間との再会だ……!」

その瞬間 ユーハバツハの両腕から放たれた霊子が光の経路を形成し、進軍する骸一つ一つへと繋がった。

すると その骸骨達の進軍する動きが止まり、足元から突如として発生した塵芥に包まれていった。

それは彼自身が熟読していた書物の世界にて禁忌とされていた秘術。

“穢土転生の術”

恐ろしき術そして最強よ ささらば

突如として現れた白銀の巨城『銀架城』それを取り囲む建物。見慣れない景色の中で護廷十三隊の隊士達は滅却師達と壮絶な戦いを繰り広げていた。

すると

彼らの前に数人の同じ死覇装を身に包んだ護廷隊が現れた。それは数年以上も前に戦死してしまつた彼らにとって同僚に当たる隊士達である。彼らを目にした護廷隊を目にした隊士は目を大きく開きながら驚いた。

「よお！お前ら久しぶりじゃねえかあ!!!」

「え…!?お…お前…死んだんじゃ…!!!」

「生き返つたんだよ！あ！後ろのお前も見ないうちに結構老けたなあ！」

「当たり前だろ…そりや…でも…何でお前…どうやって…!?」

突如として現れた旧友に隊士達は戸惑いを隠さず、持ち上げていた刀を下げてしまう。すると 蘇つた隊士は急に俯き出した。

「…お…おい!?どうした!?」

「なあ…親友のお前に…一っだけ頼みがあるんだ…」

「お…おう…なんだ!?」

その瞬間 俯いていた隊士達はゆっくりと刀を振り翳した。その目には大粒の涙を浮かべていた。

「俺達を…殺してくれ…ッ！」

「え…?」

—————

「誰かあ！俺を止めてくれえ!!!もう嫌だあ!!!」

「うわああああ!!!俺に近寄るなあ!!!」

各地から聞こえる悲鳴、それはもはや聞いているだけで心が傷んでしまう程のものであった。

「……これは一体……!!」

「何なんだろうね……見知った顔がちらほらと……まさか敵さん……死んだ隊士を甦らせる術でも身につけてたって訳かい……?」

隊士達が涙を流しながら味方の隊士達を襲う恐ろしい光景を見つめていた京楽と七緒は目の前の現実を受け入れきれず瞳を震わせていた。

すると

「その通りです」

二人の背後の暗闇から一人の滅却師が姿を現す。その姿を見た京楽は感じ取れた霊圧からその滅却師の強さを感じ取り表情を曇らせた。

「これはこれは……随分な色男が出てきたものだねえ」

「……星十字騎士団最高位「グランドマスター」ユーグラム・ハツシユヴァルト」

現れたのはユーハバツハの右腕的存在である『ユーグラム・ハツシユヴァルト』であった。

「……丁寧にどうも。護廷十三隊八番隊隊長『京楽秋水』だ。さてと……取り敢えず尋ねたいんだけど、これは一体何だい? 幾ら何でも滅却師の技とは思えないけど……」

京楽が恐る恐る尋ねるとハツシユヴァルトは答えた。

『『穢土転生』死者を蘇らせ使役する術です』

「え……?」

ハツシユヴァルトの口から出された見た事も聞いた事もない術の名前に七緒は目を震わせた。

「死者を蘇らせて使役するなんて……そんな術……聞いた事が……!!!」

「ない筈でしょう。この術は貴方方死神の鬼道でも我々の術でもない。現世の漫画という書物に現れる禁術です。本来ならば『チャクラ』なる身体エネルギーと甦らせる人物の最低限のDNAそして生身の人間が必要となりますが陛下は力を応用し対象のDNAを必要と



せず、そちらの総隊長殿の卍解により発生した傀儡を媒体に完成させたのです。今の彼らは陛下の兵士…陛下のご意志に従い進軍し続けるでしょう」

「そんな…!!」

ハツシユヴァルトの説明に七緒が絶句する中、京楽は冷静なまま目を細くさせる。

「これはこれは…デタラメな上に随分と陰気なことをしてくれるねえ…僕だったら耐えられないなあ…山爺もブチギレるだろうねえ。自分が作った技をこんな風に使われちゃってさ…」

「お気持ちお察します。ですがご安心を。そちらの総隊長殿も…自責の念に苦しむ前に…」

……………陛下に滅されるでしょうから」

その時であった。

外から見える一番隊隊舎が「あった」場所が巨大な爆発音と共に爆炎を巻き上げた。

「…!!!」

それを見た京楽は元柳斎の霊圧が徐々に減少している事に気づく。

「山爺…」

—————

そしてその同時刻。同じく景色が消えた技術開発局だった場所にも既に滅却師の姿があった。

「お前…一体どこから…!!」

「どこから？おいおい技術開発局って賢いのは名前だけか？」

星十字騎士団【The Death dealing】『アスキン・ナツクルヴァール』

「俺は元々ここにいたんだぜ？」

その時であつた。

「その通りダ。前回の襲撃から君らが影を応用しているという所まで推測できていた。だから私の研究室には影が一才できない様に予め細工しておいたのだヨ。全く……瀨靈廷にその景色を上書きするなど非常識極まりない」

すると 何も無い空間に一筋の切れ目が出来上がるとドアの如く両側に開き出し周囲を照らし出した。

「だが、非常識な事はア嫌いじゃないネ」

「な…!? た…隊長…!?」

「千弘ちゃんに副隊長も…その格好は…!?」

そこには眩い光を発するコートに全身を包んだマユリと同じく胸元を開けた光り輝くコートに帽子を被ったネム、そして恐竜の着ぐるみに身を包んだ千弘が立っていた。それを見た阿近やニコは啞然としてしまう。

その一方で、現れたマユリはアスキンへと金色の歯を剥き出しにしながら笑みを浮かべた。

「さて、『賢いのは名前だけ』かどうか確かめて帰ってもらおうじゃないカ!」

「……」

すると しばらく見つめたアスキンは両手を上げる。

「ん……やめだ! アンタは時間がかかりそうダ。それに陛下が警戒してる坊ちゃんもいるし尚更部が悪い。退散させてもらうぜ」

「ほう? これは驚いた。他の馬鹿共と同じく向かってくると思つていたヨ」

「俺は見た目に反して結構冷静なんだぜ? 分析こそ勝利の欠片つてな。そんじゃ」

そう言いアスキンは歩き出すと、コチラに振り向き警戒しているのか千弘へ目を向けた。

「追つてこないのかい? 特にその坊ちゃん。アンタなら俺をアツサリと捕まえられるだろうに」

「はい？」

アスキンに目を向けられた千弘は不服そうに睨みつける。

「勝手に過大評価はやめてください。それに…局員の皆さんがいるところで戦えば被害を被る可能性があります。なので追いませんよ」

「ヒュ〜…ソイツは助かるぜ」

「ただ…」

「ただ？」

不意に着ぐるみを脱いでいた千弘の言葉にアスキンは首を傾げながら復唱しながら尋ねる。

### その瞬間

「…!？」

彼の余裕を崩す程の超高密度の霊圧が周囲を覆い尽くした。その震源地である千弘は顔を俯かせながらゆっくりと顔をあげ、鷹の様に鋭くなった瞳を向けると刀へと手を掛けた。

「ここにいる人達に手を出そうものなら…今すぐその首掻っ切ります…よ？」

「…」

その殺気と霊圧を至近距離で感じ取ったアスキンは先程までの余裕の表情が完全に崩れ去り、直感した。『ゴイツはやばい』 『自身の能力など全く意味を成さない』と。冷や汗を流しながら大慌てで両手を振り回した。

「お…おう…!!分かった分かった！」

それからアスキンは冷や汗を流しながら暗闇の中へと消えていった。

「さてと…我々も動くのでしょうか。敵の妙な術も気になるからネ」

アスキンが去るとマユリは現在の状況に眉を顰め顎に手を当てて少し考えると、千弘へと目を向けた。

「千弘、お前はこの状況の元凶を探ってこい。恐らく頭目であるユーハバツハが怪しいだろう」

「了解です！あの髭のおっさんですね！」

マユリから指示を受けた千弘は技術開発局から出ると、ユーハバツハのいる場所へと駆け出していった。

—————

—————

—————

外へと駆け出した千弘は殺伐とした光景が広がる戦場のど真ん中を突っ切っていった。

だが、千弘の霊圧を感じた事によって周囲から次々と滅却師達が姿を現してくる。

「園原千弘おおお!!今度こそ我が正義の一撃のも…ブルアアアア!!」

星十字騎士団【英雄 (The Super Star)】『マスク・ド・マスキュリン』

「邪魔です」

「あれれ〜?まさか君の方から出てきてくれるなんて〜あ、僕に攻撃する事はオススメしないよう。なにせ僕の血を浴びたらゾン…ギヤフン!」

星十字騎士団【the Zombi e】『ジゼル・ジュエル』

「はいはい分かりました」

「テメエが園原千弘かあ!!あたしの雷で…ガハア!」

星十字騎士団【雷霆 (The Thunderbolt)】『キャンデイス・キャットニップ』

「そういうのは発電所でお願ひします」

「テメエはオレがくつ…辛あああ  
!!!!!!!」

星十字騎士団【食いしんぼう(THE GLUTTON)】『リルトツト・ランパード』

「天然物の直下ろし最高級わさび上げますからあっち行っててください」

次々と鉢合わせした星十字騎士団の滅却師達を千弘はまるで流れ作業の如く全て一撃の拳の元に下していた。千弘によって殴り飛ばされた滅却師達は腹を押さえながらその場に蹲ってしまい、千弘の通った後には大量の滅却師達が倒れる光景が広がっていた。

そんな光景を目にする事なく千弘は走り続けていき、今度は穢土転生によって蘇った隊士達と相對するも、縛道による這縄で迫り来る隊士達を全員縛り上げていった。

そんな中であつた。

「これは……御大将の靈圧が……!!!」

感じ取っていたユーハバツハの靈圧と同時に弱々しく滅つていく元柳斎の靈圧も感じ取れた。それを感じ取った千弘は目の色を変えると加速させる。

「な……!?君は……がハア!？」

星十字騎士団 【鋼鉄 (The Iron)】『蒼都』

「バーナーふい……くぼへえ!？」

星十字騎士団【灼熱 (The Heat)】『バズビー』

「退いてください!!」

加速した千弘はもはや音速さえも超えていき、道中に日番谷達と交戦していた星十字騎士団である蒼都、バズビー、をまるで障害物の如く周囲へと投げ飛ばしていった。

「すいません獅郎くん!お松副隊長!前、失礼します!!」

「お……おう……」

そして 一番隊隊舎だつた場所。即ちユーハバツハと元柳斎の靈圧を感じる箇所まで来た千弘は目の前の空いている箇所へと向けて

飛び立った。

「はあ…はあ…はあ…!!!」

元一番隊隊舎だった場所。そこは無数の柱が立ち並ぶ宮殿のような景色へと変わっており、その場にいた元柳斎は荒い息を吐いていた。

全身は傷がいくつもつけられ出血により自慢の髭も赤く染まり、身体を包む死覇装も破れていた。更に驚く事に左腕が肩の付け根から切り取られており、まさに満身創痍の状態へと陥っていた。だが、それでも元柳斎は倒れる事なく刀を杖代わりにして立っていた。

「儂の卍解をこんなくだらん事に使いおつて…悪知恵も働くようじやのう…」

「有効活用と言って欲しいものだな」

元柳斎が睨みつける目の前には彼自身の卍解である残火の太刀を解放したユーハバツハが立っており、彼の足元には元柳斎の切り取られた左腕が転がっていた。

「さあどうする？山本重國。身体はボロボロ、左腕も失い頼りとなる雀部も不在。卍解さえもできない貴様は次の一撃で死ぬぞ？運良く生き延びたとしても己の卍解によって次々と殺されていく仲間を見続ける事になるだろう」

「ほぞけ…ッ!!!」

ユーハバツハの言葉に元柳斎は激昂すると、そのまま流刃若炎の始解を発動させた。

「ほう…この状況でもなお足掻くか…」

いくら追い詰められようとも最後の最後まで足掻き続ける。ゾンビさえも凌駕するしぶとさにユーハバツハは笑みを浮かべると燃え盛る刀剣を構えた。

「ならば望み通り…一撃で葬ってくれよう…!!!」

その時であつた。

「ザ〜ウ〜ル〜ス〜……」

「…ん？」

その瞬間

「ローリングキイイイイイイイイイック  
「ガハアアツ!」  
!!!!!!!」

目の前の景色から一筋の光と共に螺旋状に空気を突き抜けながら流星の如きスピードで何かが飛来しユーハバツハへと激突した。それによつてユーハバツハは数日前以上もの呻き声を発しながら後ろの壁へと凄まじい破壊音と共に吹き飛ばされていった。

突然飛来してきた謎の人物を、砂煙の中、見た元柳斎は驚きの目を向けた。

「間に合いましたね御大将…!!」

砂煙が晴れ、そこに立っていたのはなんと千弘であつた。現れた千弘は元柳斎の身体に出来上がった傷や切り取られた腕を見て驚きの声を上げた。

「……ん!?なんて酷い傷…重傷じゃないですか!?すぐに運びますから  
ジツとし……」

千弘が元柳斎を運ぼうと手を出した時、彼はその手を振り払い、斬り飛ばされた腕の付け根へと流刃若炎を近づけると溢れ出る傷口を焼き無理やり止血した。だが、止血をしたとしても吹き飛ばされた

ユーハバツハの元へと向かう足取りは既にフラフラであった。

「ちょ…!!何やってるんですか!?止血もしてないですし!それ以上動いたら出血多量で死んでしまいますよ!」

「……………奴は…儂が始末せねばならぬのじゃ…千年前…儂が奴を始末せなんだ為に…多くの隊士が死んだ。じゃから儂が…命に変えても彼奴を討ち取らねばならんのじゃ…ッ!!!」

そう言い元柳斎は己の責任を果たすべく一歩一歩とユーハバツハの元へと歩いて行った。

その瞬間

「総隊長の……………」

「…………へ?」

「バカあああああ  
!!!!!!」

「グゴヘエアアアア!」

千弘の叫び声と共に元柳斎の頬へ向けて平手打ちが炸裂し、そのままユーハバツハの元へと吹き飛ばした。

「おのれ…………ちひ…ブフウ!」

それによって立ちあがろうとしたユーハバツハの顔面へと元柳斎の石頭が炸裂し巻き添えを喰らいそのまま一緒に再び奥へと吹き飛ばされていった。

「いいですか!たとえ責任だとしても貴方がここで死んだら誰が護廷隊をまとめるのですか!?我々にとつて貴方は希望なのですよ!」

そう言い千弘は瓦礫から胸ぐらを掴み上げ持ち上げると何度も何度もビンタを放つ。



—— パアンパアンパアンパアン

「目を覚ましてください!! 貴方は我々をまとめる総隊長です!! 決して敵を撃つためだけに命を落とす鉄砲玉ではありません! ねえ!? 聞いてるんですか!? 聞いてるんですか!? ね……………」

その瞬間 ビンタを放つ千弘の手が止まった。

「あ……………まずい……………」

よく見ると千弘が胸ぐらを掴み上げビンタを放っていた人物は元柳斎ではなく、彼の石頭によって同じく吹き飛ばされたユーハバツハであった。

その両頬はまるで漆によって被れた時以上なまでに腫れ上がっており、白目を剥いていた。それを見た千弘は流石にまずいと思ったのか、手を離し、近くで白目を剥きながら倒れていた元柳斎を担ぐと合掌しお辞儀をした。

「……………すみません……………間違えました……………」

「それだけで済むと思ったかああああ!!!!!!」

千弘の謝罪の言葉にユーハバツハは激昂の雄叫びをあげながら目を覚まし、千弘へ向けて超巨大な霊子の弓矢を形成する。

「大聖弓（ザンクト・ボーゲン）ツ!!!!」

「危ない?」

放たれた霊子の弓矢は超至近距離で千弘へ向けて放たれたが、千弘はそれをアツサリと見切っているかの様に脚を振り上げ上空へと蹴り飛ばした。

「いやあ……………危ない危ない……………」

「く……………やはり半端な技では届きませんか……………まさか真つ先に私の元へと来ようとは……………運が良いのか悪いのか……………」

自身の技が全く効かない事にユーハバツハは歯を噛み締める。

だが、その直後。それは笑みへと変わった。

「いや、運が良いと言えるな…!!」

その言葉と共にユーハバツハは周囲の霊子を再び両腕へと収縮させていった。その霊子が溜め込まれていくたびにユーハバツハの両腕が青く発光していき周囲を照らし始める。

「わあ!? な…何だこれっ!？」

ユーハバツハの両腕が地面に打ち付けられると千弘を取り囲むかのように円形状の切れ目が走ると共にサークルを形成しその中心が血の様な澱んだ色へと変化していった。

「さあ千弘…受け取ってくれ…地獄への片道切符を…ツ!!!!」

その瞬間

澱んだ色へと変化したそのサークルからは数十本の手が生え千弘の身体へと纏わりつき始めた。

【地獄門】開門

「な!？」

まるで池の中から現れたかのような手は千弘の身体へと纏わりつく、彼を引き摺り込むかの様に引っ張り始める。それによって千弘の身体は輝いた床へと沈んでいった

「何なんですかこれ!？」

「地獄への入り口だ」

千弘が慌てる中、立ち上がったユーハバツハは不気味な笑みを浮かべながら答えた。

「私は空間も自由に行き来できるのでな。現世や虚圏、果ては地獄にも移動ができる。まあ地獄は私にとつては毒ゆえに行く事はないがな。いや…死神とてそれは同じか。お前達にとつても地獄の瘴気は毒となるう」

「ちよ!?ちよつと待って!!外の我々の仲間を操ってる術についてまだ何も聞き出せていないのに!」

「穢土転生の術か?確かに解術する方法はある。だが貴様にとつて簡単すぎる故に話す訳にはいかんな」

「くう…」

ユーハバツハの言葉に千弘は歯を噛み締める。だが、そんなことをしている合間にも身体はみるみる沈んでいき、下半身は既に見えなくなっていた。

その時であった。

「総隊長殿!!」無事ですか!」

背後から副隊長である雀部が姿を現した。

現れた彼は目の前で千弘と彼に担がれている元柳斎が下へと引き摺り込まれていく現状を見て驚きの声を上げる。

「雀部副隊長!!」

「うおっ!」

そんな中、千弘は咄嗟に彼の名前を叫ぶとすぐさま担いでいた元柳斎を投げ渡した。

「早く御大将を連れて逃げてください!!!私なら大丈夫です!早く!!!」

「君は……………いや…分かった…!」

元柳斎を受け取った雀部は即座に千弘も助ける為に駆け寄ろうとしたが彼の言葉とその後ろにて立っていたユーハバツハを見て歯を

噛み締めるとその場から飛び降りた。

雀部が立ち去るとユーハバツハはそれを追うべく駆け出そうとした。

「ふん。逃すとおも……」

「旅は道連れ世は情けツ!!!!」

「ぐはあ!？」

だが、それを既に胸元あたりまで沈んでいた千弘が脚を掴む事によつて止めた。それによつてユーハバツハはその場に転倒し顔面を床へと叩きつけてしまう。

「貴様あ……!!!」

「ハツハー！御大将の首は取らせま……」

ユーハバツハが千弘の元へと振り返り睨みつけた時には既に千弘の口元が沈んでおり、言葉すら発せなくなっていた。

「ほう……？今のが最後の言葉の様だな」

それを見たユーハバツハは笑みを浮かべると立ち上がり、千弘が沈んでいく光景を見下ろす。

「……ふん。いくら貴様でもその拘束は解けぬか」

その光景にユーハバツハはようやくやく優位に立てたと思ったのか、沈んでいく千弘の頭を踏みつけた。

「……!!!……!!!……!!!」

「悪いな。何を言っているのかさっぱり分からん。そしてこの先、お前の行方を知るものは私以外誰一人としておらんだろう」

ブーツの下から睨みつける千弘にユーハバツハは笑みを浮かべながら沈んでいく千弘へと最後の言葉を送った。

「さらばだ園原千弘。生きてそのまま地獄を彷徨うがいい」

そしてその数秒後

千弘は完全に地獄の門へと引き摺り込まれていた。

尸魂界から千弘の霊圧は消失したのだった。

――  
――  
――

尸魂界とは別の世界。空が夕焼け色に染まっているものの、それ以外は何もない不思議な場所にて瓦礫の上に一人の影が座っていた。

「この霊圧は……」

その影は何かを感じ取ると上空を見上げながら不気味な笑みを浮かべた。

「ち・ひ・ろ・くん……!」

地獄へ堕ちます！そんなこんなでトラウマと再会？

千弘が地獄門へと飲み込まれて行くと、ユーハバッハはその場に膝をついた。

「が…はあ…はあ…はあ…!!」

感じるのは疲労。千弘との戦いによる痛みが今となって現れ身体機能を少し低下させたのだ。更にそれに加えて地獄門も発動したためにその反動は大きいものであった。

だが、その見返りも大きい。敵の最も危険な戦力を離脱させたのだから。

「(短時間に千弘の攻撃を受けすぎたか…だが…これで一番厄介な奴は潰せた…後は残りの死神共を殲滅するのみだな…)」

そしてユーハバッハはしばらく息を整えた後に即座に元の玉座へと戻っていった。

◆◆◆◆◆

千弘の霊圧が消失した。それは彼の实力を知る隊長、副隊長のみが認識しており、皆は一斉にして驚きの表情を浮かべていた。

千弘の消失により戦況が覆されようとしたが、それと同時に浦原喜助が卍解を取り戻す『浸影薬』を開発し、各隊長へと送られた事で巻き返されようとした戦況は再び一変し、卍解を取り戻した隊長格らは次々と敵を撃破していった。

だが、それでも彼の霊圧の消失が信じられないのか、緊急用の医療用テントにて待機していた勇音は瞳を震わせていた。

「隊長…千弘くんの霊圧が…!!!」

「狼狽えるのではありません勇音。どんな手を使われたかは分かりませんが、彼が簡単に倒される人ではない事を我々が一番よく知っている筈です」

滅却師の術により医療施設が消えた事で緊急用のテントがいくつも設置された治療場にて四番隊をまとめていた卯ノ花は彼の霊圧の消失により震え始めた勇音を叱責し彼女を宥めた。

「今はただ、我々にできる事だけを考えるのです」

「はい……」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして所変わり技術開発局にて。マユリや浦原達も千弘の霊圧が消失した事を感じ取っていた。

「奴の霊圧が消えた……となると、私の予想通りという訳か」

「いやあくさくすが涅さんっスね〜♪まさか地獄に墮とされた場合すらお見通しとは」

マユリの言葉に浦原自身も勘付いていたのか、わざとらしい笑みを浮かべる一方で、今度は本当に予想外であったかのような表情を浮かべた。

「それに『死人を生き返らせる』なんて私でも思い浮かびませんでしたよ」

「フンッ。その煽てる素振りをやめたまえヨ。奴と研究して行くうちに……私にも馬鹿げた思考が移ったのかもしれないネ……」

そんな中 浦原はある疑問をマユリへと尋ねた。

「それで、千弘さんが地獄から自力で戻れる確証はあるんすか？」

その問いに対してマユリは考えることもなく即座に答える。

「愚問だネ。そんなもの」

——考える必要もない」

浦原の疑問に答えたマユリはただ不気味な笑みを浮かべるだけであつた。

—————

その一方で ユーハバツハの術により地獄へと落とされた千弘は

……

「あんの野郎おおお!!!よくも顔踏んづけやがったなあおお!!!」  
地獄の空を落下していた。

因みに地獄とは死ぬ前に悪行を働いた人間が墮とされる場所であり何の秩序も存在せず、ただ定められた刑罰を定められた年数が経過するまで受け続けるという恐ろしい場所である。

千弘がいる場所は周囲が煮えたぎる溶岩が溢れ出る山とその周辺を取り囲む海がある階層であった。その場所では常人が吸えば数時間で死に至る毒素が蔓延しているが、その点は相変わらずであり、瘴気が蔓延しているというのに千弘は無病息災であった。

「あ、そうだ…まずは局長の指示通り初代隊長達を探さない…」  
落下する中、千弘は数日前の事を思い出す。

—————

—————

—————

それはマユリから装置などの説明を受けているときであった。

「それから、これを見たまえ」

マユリが指を向けた方向には半径が数メートルのカプセルがあり、周りの数本の管と繋がっていた。分かりやすく言えば○ラゴンポールに出てくるメディカルマシンの液体の無いバージョンである。

「これは…」

「隊長格である死神限定〔蘇生装置〕だよ。ここで君に一つ教えておいてあげよう。魂葬礼祭…というものは知っているかネ?」

「確か…隊長格が死んでから12年後に開かれる…」

【魂葬礼祭】それは護廷十三隊における儀式の一つであり隊長格の死神が死亡してから12年後に開かれる催しである。内容はその隊長の目の前で捕獲した虚を殺すという簡易的なものである。

だが、この催しにはとんでもない「裏」があった。

「亡くなった隊長の墓の前で虚を殺すんですね?」



「ああ。『表向き』はそうだろうネ。だが、それは建前にすぎない。本当の目的は…」

頷きながらもマユリは真実を口にした。

「死んだ隊長を地獄へと墮とすのだヨ」

「…！」

マユリの答えに千弘は目を大きく開かせる。

マユリの話によると死神の霊子は霊威という濃度によってランク付けされており、二十等、十九等と段々と上がってくる仕組みになっている。一番高いのが一等である。隊長格の死神となると三等以上で、三等以上の霊子は死してなお尸魂界の大地には還元されずそのまま残り続けてしまう。それを防ぐ為に何の秩序も存在しない地獄へと解き放つのだ。

「…つて事は…これまで隊長を、務めてきた方々は…」

「みくんな地獄にいるヨ。今頃最下層で退屈しているだろうネえ」

そう言いマユリは再び機器へと目を向けた。

「そこで、この機器の出番という訳サ。これを扱う事で遺伝子情報と精神を残した隊長の霊子を核に尸魂界にある大量の霊子によって肉体を再構成させ、この世に蘇らせる事ができる。構成度は本人の意思に依存して強ければ強い程 蘇った時の肉体の強度も全盛期と同じか近いものになる。これから来るユーハバツハとの決戦に向けて人手も欲しいからネ。それに…」

そんな中、マユリは機械から目を離し千弘へと指を向けた。

「ユーハバツハが何の対策も無しに攻めてくるとは考えられない。今度君に対してしっかりとした対策を練った上で攻めてくると思うヨ。例えば…君を地獄へ墮とすとかネ」

「はい？私一人の為にそんな手を…それにあのおっさん…つてそんな事も出来るんですね…」

「確証はない。だが、仮に奴が空間を自由に動けて出入りできるとなればここに加えて現世、虚圏、更に地獄の四つを行き来できる筈だ。滅却師が地獄の扉を開けるとは考えられないが、奴なら開けてもおおしくはないだろう。地獄以外の2つは必ず君が戻って来れると考え、

必然的に残りの地獄へと墮とすだろうネ。

話を戻すと私が与える任務はこうだ。君が仮に地獄へと墮とされた場合はすぐには戻らず、隊長達の霊子を連れて戻る事だ。向こうでは実体化しているから見つけやすいだろう」

「成る程…」

マユリの遙か先を見通した推測に千弘は納得するも、死人の蘇生に何やら抵抗があるようでマユリへと尋ねた。

「というか、そんな簡単に生き返らせちゃっていいんですか？何か色々引つ掛かりそうなんですが…」

それに対してマユリは鼻をほじりながら答えた。

「あく。まあ何かあったら君に全責任押し付けるから問題ないヨ」

「ごんの腐れ局長があ…」

千弘が腕をポキポキと鳴らす中、マユリは続けて答えた。

「ま、仮に責任なんてものはいくらなすり付けられようと痛くも痒くもないがネ。利用できるものなら何でも利用する…戦争というのはそういうものなんだヨ。一々そんな規則などを気にしている様ではまず勝てまい」

――

――

――

「……早く探して戻りますか…一応、名前も一通り覚えてたし」

目的を再び認識した千弘はその場から空気を蹴り、次々と階層を突き抜けていくと、一瞬にして最下層へと到達する。

「よつと…到着…」

千弘が霊圧を感じ、降り立った場所は空が夕焼けに染まり地面が蒼く光る美しい景色が広がっていた。だが、それ以外は何も無い。ここに落とされれば最初はその景色に魅入られるが次第に飽きてしまい、その後は無限の退屈に悩まされるだろう。

「ここが一番霊圧を多く感じる……ここに初代隊長達が……」  
その場に到達した千弘は周囲を見渡しながら歩き出した。だが、いくら探してもそれらしき人影が見当たらなかった。

その時であった。

ドドドドドドドドドドドド……

「ちくひくろくくん！」

「……え!?」

遠くの方から自身を呼ぶ声が聞こえ、振り向くと遠くの方から此方に向けて砂煙を巻き上げながら迫ってくる影があった。その影が近づいてくる度に霊圧も鮮明に感じ取れてくる。

「あ……あれ……? 何だろ? この感じ……」

すると、千弘の身の毛がよだち始めた。まるでその霊圧に身体が拒絶しているかのように。その寒気を感じ取った千弘の頭の中で1000年前の景色がフラッシュバックする。

その時、駆け寄ってきたその影はその場から飛び上がり此方に向けて両手を広げながら迫ってきた。

それによって暗くなっていった影が消えていき、姿が頭となり、それを見た千弘の顔からは大量の冷や汗が流れ始める。

「ま……まさか……!!!」

眼鏡にお下げ。そして自身を軽く越す背丈。

その正体はなんと――

――自身にトラウマを植え付けた女性であった。

「会いたかった〜!!!」

「ぎゃあああ!! 何で貴方がここにい!?!」

飛び降りてきた女性は背中に背負っていた薙刀をいきなり取り出すと千弘に向けて振り下ろした。

「……!!」

それを見た千弘は驚きながらも彼女でさえ見えない速度で刀へと手を掛け見えない抜刀術を発動させ、此方へとダイブしてきた女性の手に持っていた薙刀の刃を弾き、そのまま彼女を跳ね除けた。

「はあああ怖かった……」

「!?」

彼女を跳ね除けた千弘は顔から冷や汗を流していたが、対するその場に着地した女性は金属音と共に向けていた薙刀が弾かれた事に驚き、弾かれた刃を見つめながら瞳を震わせ始めた。

まるで何が起こったのかを推測するかの様に。

すると

「……」

「え……?」

女性の目が再び千弘へと向けられる。その目は先程のキラキラと輝いてた目とは異なりまるで鍛錬に打ち込む護廷隊のように鋭い目つきへと変わっていた。

そして彼女はその場から駆け出し再び薙刀を千弘に向けて振るった。

「ひい?」

振り回した薙刀を千弘が避けると女性は下がる事なく次々と先端を突き出していく。

「危な?」

迫り来る無数の連撃。それを一つでも受けてしまえば先端の刃によって胴体を真っ二つに割かれてしまうだろう。

だが、千弘はそれを見切っているかの様に次々と鞘で防いでいく。周囲にはとてつもない数の金属音が響き渡り火花を散らしていった。

「あの…すみませんが…」

「!?」

すると 千弘が鞘を腰へと収めると共に再び不可視の抜刀術が発動し、向かってきた女性の刃を弾き飛ばした。それによって薙刀は彼女の手から離れていくと空中で弧を描きながら地面へと突き刺さった。

更に千弘はその場から一瞬にして女性の懐へと潜り込むと斬魄刀の柄を彼女の腹へと突き出したのだった。

「少し落ち着いてください…!!!」

「がッ…!?!」

腹部から伝わってくる衝撃。それによって女性はそのまま空気を吐き出しながら二、三步後ろへ下がるとその場に膝をついた。

膝をついた彼女は以前の千弘と会った頃の事を思い出してデジャブを感じたのか、妙な笑みを浮かべ始めた。

「ふふ…懐かしいですね。1000年前もこの様に不意を突かれて貴方に負けてしまった…」

「こつちもトラウマが蘇ったじゃないですかこんチクショー…」

彼女へと柄を突き出した千弘は呆れながら斬魄刀を腰へと戻すと、彼女に手を差し出した。

「立てますか?」

「ええ。先程は申し訳ありません。つい…貴方の剣舞を確かめたいと思ひ自身を見失ってしまいました…」

「いや…別に良いのですが、それよりも、前にも会いましたが…貴方は一体何者なんですか?」

「そう言い千弘は立ち上がった女性へ名前を尋ねた。

「あ!前にお会いした時はまだ名乗っていませんでしたね」

千弘から名前を尋ねられた女性は姿勢を正し千弘へお辞儀をする



鹿取さんの急接近！そして登場！初代護廷隊の皆様！

――

――

――

――

その後、鹿取と再会した千弘は彼女が探していた隊長である事を確認すると自身がここへ来た経緯と尸魂界で滅却師が襲来し大混乱へと陥っている事を話した。

「…という訳で、今は傍迷惑な不審者が襲撃してきて大騒ぎという訳です」

「成る程。私達を取り逃した滅却師達が今になって現れたという事ですか…」

「そういう事……なんです……が!!!」

話を終えた千弘は語尾を強くさせながら顔を真っ赤に染め上げると身体をバタバタとさせ始めた。

「どうしました?」

「良い加減離してください…!! // // //」

「え?」

見れば千弘は鹿取に手を回され抱き締められていた。千弘は彼女と比べて身長はもちろん(差は約25センチ)、肩幅も圧倒的に負けているためにスッポリと彼女の懐に収まり、豊満な胸元に顔を押し付けられていた。

その一方で鹿取は表情を変える事なく答えた。

「嫌です」

「何故ですか!?!」

「好きだからです。正直、今すぐに式を上げたい程に」

「はい?！」

突如としての告白に千弘は驚きの声をあげるも彼女は表情を一切変化させる事なく更に抱き締める力を強めた。

「最初に会った時から貴方の姿も霊圧も…受けた痛みも忘れた事はありません…ここへ来てからもずっと…貴方の事を思い浮かべていました。そして今日…！」

「ひいえ!？」

その言葉と共に鹿取の両手が千弘の顔を挟み込み、自身の顔へと近づけた。千弘の目の前には頬を赤く染め上がらせた彼女の顔があり、口元からは白い息が漏れていた。

「貴方と再び刃を交えてからもう我慢できなくなりました!!貴方と夫婦めおとになりたいという衝動が…!!」

「ひいひいッ!!」

その顔はまさに狙った獲物を捉えた時の獣であった。目は鋭く、その中にある眼球には千弘以外は何一つ映っていないかった。そんな顔を至近距離で目の当たりにした千弘は恐怖のあまり全身を震わせる。

「ま…待ってください!私には…約束した人が!」

「では私は二人目の妻という事で。信念は固いので、たとえ重婚となっても貴方に添い遂げます」

「そんな横暴な!!」

「嫌でしたら今回の話は無かった事に」

「う…うう…(眠さん…ごめんなさい…)」

鹿取の言葉にもはやどうする事もできない千弘は心の中で自身が生涯を誓った相手であるネムに謝罪しながら血の涙を流すのであった。

その後 千弘が領いた事で尸魂界への同行について彼女はアッサリと了承し、千弘は仲間を一人得た。

「ふふ♪ちくひくろくくん!」

「…」

満面の笑みを浮かべる鹿取に抱き締められる中、千弘は彼女の蘇生



をやめようかと考えていたが、緊急時な故に我慢する事となった。

そんな中、千弘は話を戻すと彼女以外の初代護廷隊の皆がいる場所を尋ねた。

「そうだ…貴方以外の初代隊長方はどちらに…」

「あちらにいますよ。その前に…」

すると 鹿取の手が千弘のまとめ上げられた髪に触れる。

「へ!?ちよ…何を!?!」

—————

—————

↓

それから千弘は纏め上げられた長い髪を鹿取によって三つ編みにされた。お揃いの髪型がよっぽど嬉しいのか、彼女は鼻唄を歌い、ステップを踏みながら千弘を抱き抱え移動していた。

「♪」

「…」

更に何故か鹿取の頬がツヤツヤになり彼の表情がやつれ、唇が赤くなっているが触れないでおこう。

歩く事数分。先程の景色とは異なり、瓦礫が更に広がる景色へと変わった時であった。

「…この霊圧は…」

その場一体を複数の巨大な霊圧が覆った。鹿取の腕の中でその霊圧を感じ取った千弘はその霊圧を感じ取られた場所へと目を向けた。

「…!!」

見るとそこには巨大な岩場がいくつもあり、その変形した岩場の上や下には数人の死覇装を纏った剣士達の影があった。

すると

「おうおうおう！ソイツか鹿取？テメエが言つてたお婿さんつてのはようー！」

「随分と小さいせえじゃねえかあ！」

大柄な男やツインテールの死神の荒々しい口調と共に空からの光が影を照らし、その人物達の姿を露わにさせた。

「この方々が…」

「はい。私と同じ初代隊長を務めた方達です」

初代二番隊隊長

四楓院 千日

初代三番隊隊長

巖原 金勒

初代四番隊隊長

志島 知霧

初代五番隊隊長

尾花 弾児郎

初代六番隊隊長

齋藤 不老不死

初代七番隊隊長

執行 乃武綱

初代九番隊隊長

久面井 煙鉄

初代十番隊隊長

王途川 雨緒紀

初代十二番隊隊長

善定寺 有嬪

初代十三番隊隊長

逆骨 才蔵

「この方々が…初代隊長達…」

歴代最強と謳われた初代隊長達をこの目でまた千弘は驚きのあまり目を震わせた。どの人物も顔つきが鋭く歴戦の猛者の雰囲気醸し出している。それは現隊長達からは見られないものであった。

すると

「よく来たな抜刀齋！会いたかったぜ!!」

ピンク色の長髪をツインテールにしている剣士が岩から飛び降りてきた。

「あ…貴方は…」

「俺は元六番隊隊長だ。気軽に不老不死と呼べ！それにしてもこんな化け物みてえな乳もつ女を嫁に貰うなんざ、随分な変わり者だなあ

？」

「もうどうにでもなれ……」

斎藤 不老不死と名乗った死神は白い歯を見せながら笑みを浮かべていた。彼女？も同僚である鹿取が千弘に執着しているのを知っているのか茶化すが、千弘自身はもはや訂正する事を諦め鹿取の腕の中でゲンナリしていた。

そんな中、

「……ん？抜刀齋!？」

千弘は斎藤の言葉の中にあつた自身の渾名らしき単語に驚きの声を上げた。

突如として聞いたこともない自身のあだ名らしき名前を呼ばれた千弘は意味が分からず疑問の声を上げた。

「ち……ちよ……ツインテールの人！何ですかその怒られそうな名前は!？」

「おん？お前の二つ名に決まってるだろ？知らねえのか？どんな奴でも一太刀で仕留めるらしいからそう呼ばれるようになったんだぜ？いやあく死んで鹿取から聞いたが、まさか正体がお前だったとはなく！」

「……………」

斎藤は歯を見せながら笑うと鹿取に抱き抱えられている千弘の頭を撫でた。

その一方で、その話を聞いた千弘は「何か」を思い出したのか表情を暗くさせてしまう。

「ん？どうした？」

「いえ、なんでもありません」

「そうか。それで抜刀齋よ、どんな用だ？」

「せめて名前で呼んでくれませんかね!？」

「あ、私が代わりにお話しします」

斎藤が千弘へと来た理由を尋ねると、彼を抱き抱えていた鹿取が手を上げて代わりに話し始めた。

—————

――

「……という訳です」

鹿取の話に斎藤のみならず、岩場にて座っていた他の初代隊長達は興味深そうな声をあげていた。

中でも斎藤は舌で刀の刃を舐め取りながら闘争心を湧き上がらせていた。

「へえ…アタシらがぶっ殺した滅却師どもが復活ねえ。それで山本のジジイも危ねえと…面白えじゃねえかつ!!」

「では…同行してくれるのですね!？」

斎藤のみならず、闘争心を湧き上がらせていく初代隊長達を見た千弘は歓喜の声を上げる。

だが、

「いくら鹿取の旦那だろうと頼みだけじゃ無理じやのう。誠意を見せて貰わねば」

褐色の肌を持つ男『四楓院 千日』の一言と共に斎藤や皆が刀を持ち始めた。

「鹿取以外の儂ら全員のうち過半数に勝てたら同行してやろう」

「!!!」

その一言と共に全員の先程の闘争心に加えて巨大な殺気が溢れ出し千弘へと一極集中した。

「…」

「さあ、どうするっ…」

千日が刀を向けながら尋ねる中、俯いていた千弘は尸魂界での現状と残ってきてしまった技術開発局の皆に加えて卯ノ花や勇音、そして日番谷といった隊長達、そして自身の想い人でもあるネム あとついでに上司のマユリの顔を思い浮かべた。

「…初代隊長方を相手にする事は…幾ら何でも無理難題すぎます…」

「では、鹿取だけ連れていくのか？」

「いえ…!!」

千弘は先程のオロオロとした表情を一変させ、覚悟を決めた鋭い表情へと変えると斬魄刀へと手を掛けた。

「私には守らなければならない人がいます…なのでその申し出…心して受けて立ちましょう…ツ!!!」

鹿取「千弘くん…♡」

千弘「貴方じゃない!!!」

「ほう？いい覚悟じゃ…ならばそれに応えて…」

………全員で行かせてもらうぞ…ツ!!!!!!

その一言と共に鹿取を除いた初代隊長達が千弘へ向けて飛び出した。

-----

-----

-----

-----

数秒後。

「…」

傷一つ負うどころか死覇装にも傷一つ見当たらない千弘の目の前にはボロボロとなり倒れ臥す初代隊長達の姿があった。

「つ…つええ…何なんだよこの強さ…」

「始まった瞬間やられちゃったじやねえか…」

「俺達は…助っ人を頼まれたんだよな…?」

倒れ臥す隊長達が口々と文句や疑問の声を漏らす中、初代隊長全員を纏めてアツサリと瞬殺した千弘は今もなお斬魄刀に手を掛けていた。

「……（いや…これだけで倒されるような人ではない…恐らくこれは演技…警戒を解くな…）」

「待て待て待て!!終わりだ終わり!!俺らの負けだって!」

斎藤の言葉によって勝負は終了。千弘の勝利となった。

—————  
—————  
—————  
—————  
—————

「私の奇跡の勝利…と言う事で、同行してくれますよね?」

千弘の目の前であぐらを掻きながら座った初代隊長達。千弘は彼らに向けて再度問い掛けると、勝負を申し出た千日は頭をポリポリと掻きながらも立ち上がる。

「しよがない…約束は約束じゃ。儂らを連れて行け。久しぶりに暴れたいものじゃからのう!」

千日に続き斎藤も待っていたと言わんばかりの表情を浮かべながら立ち上がる。

「久々のシャバかあ。ワクワクするじゃねえか!早く俺も刀を振り回してえよ!!」

皆は次々と声を上げるが、中には勝負に勝つてもなお、同行を拒否する者もいた。久面井と志島と巖原は面倒という理由から拒否。

3名の助っ人を失ってしまった。だが、それでもそれ以外の人物達が付いてきてくれる事自体 心強い事には変わりはない。

「よー」

初代護廷十三隊という最強の戦力を手に入れた千弘はガッツポーズをすると地獄の空を見上げた。

「では…行きますよ!!」

「…ん？千弘くん。どうしたのですか？」

突如として訪れた沈黙に番傘を被った長髪の剣士である王途川雨緒紀はいつまで経っても動かない事を不思議に思い千弘へ尋ねた。すると千弘はブリキのようにガタガタと震えながら此方を振り向いた。

「どうやって…戻るんですっけ…？」

「「「はああああああああ!!?」「」「」

## 混沌なる戦場そして尸魂界崩壊の危機！

千弘が地獄へと落とされたその一方で 尸魂界の戦場は更に苛烈さを増して行った。

中でも特筆すべきは更木と星十字騎士団の一人であるグレミィ・トウミューとの戦闘である。グレミィは当初は自身の聖文字である『The Visionary』という想像を現実にするという規格外の能力によって圧倒していたものの、千弘との修行によって本来の力を更に進化させた更木は後半からその力を使用し、彼が発生させた隕石果ては宇宙空間でさえも切り伏せて見せたのだった。

その後、更木は無事にグレミィを撃破。

だが、流石にただでは済んでおらず、闘いの反動でボロボロであり、その隙をジゼル・ジユエル達に襲撃され重傷を負ってしまった。

彼らによって追い詰められ、もはやこれまでかと悟ってしまいそうな状況へと陥ってしまった。

そんな時。霊王宮にて修行と治療を終えると共に新たな斬魄刀を手にした一護が飛来し、更木を囲んでいた滅却師達を一掃すると共に彼の命を助けたのだった。

現れた一護は尸魂界が再び陥落の危機へと陥っている事と千弘が消された事を和尚から聞いたのか、皆を助けるとそのまま千弘を消し去った張本人であるユーハバツハの元へと進撃した。

だが、一護が霊王宮から降りて来たことによって本来は侵入を阻むための72層の膜が打ち破られており、それを利用してしまう形でユーハバツハ達はそのまま霊王宮へと向かって行ってしまった。

それでも一護達は諦めず、彼を倒すべく、友人である織姫や茶道の他数名を連れて霊王宮へと向かっていった。

その一方で、一護の進軍を見届けた皆は一護の首を取らんとした星十字騎士団と対峙する事となった。



皆が各地で応戦している中、マユリとネムは戦場へと出撃し二体の滅却師と交戦していた。

「眩しいんですけど…誰…？？」

「偉大な相手というのは輝いて見えるのだヨ」

一人は触覚のような跳ねた髪に長髪を持つ中性的な容姿を持った滅却師。名を『ジゼル・ジュエル』彼女…いや、彼の能力は『the zombi』。自身の血を浴びた者をゾンビ化させるという恐ろしい能力であった。

そしてもう一人。

彼女の隣には変わり果てたバンビエッタの姿があった。その姿は以前の活気ある威勢は失われており、全身は生氣のない灰色に染まり正気の失った目からは涙を流していた。なぜ彼女があのような姿になってしまったのか、それは粕村との闘いに敗れ、彼女が瀕死の重傷を負った際にジゼルによって止めを刺されると共に血を注入されたからである。

そんな彼女から不快感を露わにした目を向けられたマユリは不気味な笑みを浮かべながら発光するコートの光を消した。

「あれ？今度は見えるようになった…」

「光の尺度を調節したのだヨ。凡人であるキミらでも見られるようにネ」

「ん？よく見ればおじさん達…千弘っていう子の隊長さんじゃん？なんでそんな余裕そうなのかな？頼みの綱はとつくに消えたんだからサツサと死んじゃえばいいのに…」

「おや？」

ジゼルの言葉を耳にしたマユリは金歯を見せる程まで口角を釣り上げた。

「コイツは笑えるネ。まさか滅却師の思考力がそこまでないとは」

「…は？」

「キミらの首領であるユーハバツハが警戒する相手が『地獄に落ちた

程度”でやられたと思うのかい？もう少し頭を使って考えてみたまえヨ。想像できないまでの『もしも』の事を」

「へえ？随分と買ってるんだね、その子の事」

「買ってるも何も、園原千弘という1000年を生きる、未知の生物”の強さを誰よりも知り尽くしているから言えるのだヨ。奴はこのまま戻ってくる。私の指示を予想した時間通りにし終えて”ネ。まあ凡人であるキミらには理解できないだろう」

そう言いマユリは頭をつつくと、不気味な目を向ける。

「それにキミら程度ならば奴の手など必要ない……いや、寧ろ手を借りる方が屈辱的と思えるネ。こんな清掃作業に」

「あ”あ……？」

それを聞いたジゼルは不快感を露わにする。

「……まじでムカつくんですけど……バンビちゃん!!!」

「……!!!」

その瞬間、バンビエツタの周囲から数十個の霊子が生み出されマユリ達に目掛けて放たれた。

だが、それをマユリとネムはアツサリと回避し、空中へと飛び出したマユリはネムへと指示を出す。

「ネム、あれを」

「はい。時間は？」

「そうだね……3秒といったところか」

アタツシケースを取り出したネムは頷くとアタツシケースの中から取り出した機器へと入力していく。そして、マユリはネムの作業が終了した事を見計らうと、即座に胸元から数個の球状の機器を取り出し周囲へと放り投げた。

すると、その装置にバンビエツタの霊子が打ち込まれたが、打ち込まれたにも関わらず周囲の装置は何も反応を起こさず事はなかった。

それによって飛んでいたマユリとネムはその場を通過し、近くの瓦礫の上へと着地する。

「な……爆発しない……!？」

その一方でマユリ達を追う為に飛び出していたバンビエツタと彼

女の背中に捕まったジゼルの周囲に霊子が打ち込まれた装置が落ちてきた。

その瞬間

ピー

「!?」

周囲にあった機器が謎の機械音を放つと共に霊子が打ち込まれた装置が爆発を起こし彼女達を爆炎へと飲み込んだ。

煙が舞う中、その中からジゼルとバンビエツタは飛び出し、近くの瓦礫へと着地する。見ればジゼルは多少の火傷を負っているものの、バンビエツタは全身に傷を負っていた。

「なんなの今の…爆発が遅れてたけど？」

「凡人であるキミらでも理解できるように教えてあげよう。これは私が開発した霊子固定装置さ。これを扱う事で設定した時間内はキミらの霊子を用いた能力を制御できる。爆弾になるのが遅れたんじゃあない。爆弾になるまでの機能を3秒程停止させた…至極単純な仕組みだよ。そして、この単純な仕組みでその爆弾娘の力は封じた…」

そう言い機器を懐にしまったマユリは完全に厄介な能力を封じられ追い込まれた様に見える二人に目を向けた。

「あとはキミ達二人とも仲良く私のモルモットになってくれたまエ」

「ふくたくりりり？どの二人のこと？」

マユリの言葉に聞き返すかのようにジゼルは立ち上がると不気味な笑みを浮かべ始める。すると 周囲から青ざめた顔をした十一番隊の隊士達が現れた。

「見知った顔がちらほらあるね…」

「ああ…まさかゾンビにされちゃったとはな…」

それを見た斑目や弓親達は歯を噛み締めるものの、マユリは表情を変えざる事なく額に手を置いた。

「ふむ…どうしたのか…護廷十三隊の隊士達が相手とは…：慈愛という感情が骨や神経の隅々まで通っている私にとっては大変心苦しいものだネえ」

白々しい言葉と共にマユリは顎へと手を当てると、すぐさま指を鳴らした。

「まあここは一つ……」

……彼らに何の思い入れもない破面にでも任せようか」

その瞬間。マユリの背後に四人の破面が現れた。

「あの坊やはどこかね!？」

「私はあの滅却師のガキに用があるのよ!」

「あの…千弘さんはいませんか…：本当にいませんよね…?」

三人は一護達が会敵した破面。二人の破面は自身らと会敵した一護や雨竜を探す一方でもう一人の破面ルピは反膜にヒビを入れた千弘にトラウマを植え付けられていたのか震えながら周囲を見渡していた。

この三人は既に死亡しているものの、マユリの技術によってゾンビとして蘇ったのだ。

そして 更に続くかのようにもう一つの影が飛来した。

「…」

その影は戦場へと出ると大きく息を吸いながら戦場を見渡した。周囲には生き絶え倒れた死神や滅却師達の姿、そしてゾンビとなった隊士達。

戦場へと降り立ったその影は大きく息を吸い戦場の空気を鼻へと取り込んでいくと、

それを不味そうに表現するかのように表情を曇らせた。

「酷いものね……そこら中から悲しみと後悔……そして無念の臭いがするわ」

その戦場を、荒んだ瞳で見つめた影は大きく跳躍するとゾンビ達の前に現れた。

「こんな闘い……サツサと終わらせるわよ」

その影は景観を照らす月明かりの角度が変化する事によって次第に鮮明になっていく。

そして 姿が頭となった時、そこに立っていたのは――

――救世主『シャルロッテ・クールホーン』であった。

「しつかり着いてきなさい！アタシの可愛い生徒達！」

「誰がだ!?!」

クールホーンは宣言すると共にその場から戦場へと飛び降りると蔓延るゾンビ軍へ向けて飛び出していき、それに続くように蘇生された破面達も跡を追って行った。

「全く身勝手な行動をするヨ。アイツにも装置をつけておくべきだったネ。まあ……この三人でも事足りるか」

マユリはクールホーン達が向かっていった方向を睨みながら溜息をつくも、再び目の前の状況へと目を向けた。

いくら死体であろうとも、彼らの元々の戦闘能力はやはり別格なのか、ゾンビと化した隊士達を次々と葬っていた。

その時であった。

『涅隊長〜!!』

耳につけてある通信機から浦原の陽気な声が聞こえてきた。その声を耳にしたマユリは不快感を頭にしながらも応答する。

「……なんだネ? 私は今忙しいのだヨ」

『これは失礼。ですが報告だけはしておこうと思ひ連絡しました〜』

そう言う浦原は陽気な口調ではなくトーンの低い声で報告する。

『ようやく帰還しましたよ。貴方の部下が。指示通り装置を起動しておきました〜』

「…ほう？」

『…てな訳で……ってああ!?ちよ…やめ!?待って!!アタシは味方ですよ!?!ちよ!園原さん!どこ行くんす……』

プチン

その報告を聞き通信を切ったマユリは笑みを浮かべると目の前のクールホーンが次々と敵兵を葬っていく現場へと目を向けた。

「ならば此方も早く片付けようじゃないか」

—————

同時刻——— 診療所付近にて。そこでは髪を解き “死剣” と謳われていた頃へと戻った卯ノ花が侵攻してきた滅却師達から負傷した隊士達を守り抜くべく刀を振るっていた。診療所にて療養している死神の中にはユーハバツハによって傷を負った（大半は千弘の所為）元柳斎の姿もあり、ユーハバツハの指示なのか彼を討つべく多くの滅却師達が攻めてくるが、彼女は通さんが為に必死に守り抜いた。

「…」

その目からはいつもの優しき眼差しは消え失せており、あるのはただ光を失った眼球のみ。彼女の周囲には夥しい程の尸が転がっており、血溜まりを作っていた。その中には星十字騎士団の一人である『ロバート・アキュトロン』の姿もあった。

血溜まりの上に立つその姿に四番隊の皆は畏怖の念を抱くもの、自身らを守ってくれている心優しき彼女に変わりはない為に、必死になりながら治療に専念していた。

それは長く彼女の傍にいた勇音も同義である。

「隊長…少しお休みになられた方が…」

「…いえ……ここは戦場……いつ誰がどこから見ているのか分かりません。少しでも気を抜けばすぐに突破されてしまうでしょう…」

そう言い勇音の言葉を退けた卯ノ花は刀についた血を払うと周囲

に目をやった。

「私の心配をする暇があるのならば怪我人の回復に専念なさい」  
その言葉と共に敵の気配を察知した卯ノ花は刀を構える。

その時であった。

「…!!」

背後から殺気を感じ、咄嗟に卯ノ花は刀を振り回した。

すると 金属音が響き、自身の刀の刃には振り下ろされた刀が切先を向けながら向けられていた。

一体誰が自身の背後を取ったのか、自身の背後を取るなど半端な者では不可能だろう。

そう考えながら卯ノ花は自身へと刀を振り下ろした相手を見た。

「…!!」

その瞬間 卯ノ花は目を大きく開き驚きの目を向けた。

「…勇音…!?!」

「へ…!?!な…なんで…私…隊長に…!!」

自身に向けて刀を振り下ろしていた正体は先程まで話していた勇音であった。その光景を見た卯ノ花は驚きを隠せぬまま、彼女を拘束できず刀で受け止めてしまう。

その一方で彼女自身も己が何をしでかしたのか受け入れきれず動揺していた。

その時であった。

「ゲツゲツゲ…流石の初代剣八も堕ちたものネ。自分を斬ろうとした仲間を斬らないなんて」

「…!!」

不快感を表すような歯切れの悪い笑い声が聞こえて来た。振り向くと死体の上に乗りながら此方を達観する小柄な老人の姿があった。

「貴方の仕業ですか…?」

「そのとおくり!!ミィは『ペペ・ワキャプラーダ』!陛下から与えられた能力は『the Love』!ミィの攻撃を受けた子はみくんな!ミィに惚れて下僕となるのです!つまりその長身モデルガールはミィの完全なお人形という事です!」

「…」

癪に触るようなステップを踏みながらの自己紹介に卯ノ花は再び目を細める。

すると 勇音の刀が再び自身へと迫って来た。

「…」

自身へと振り下ろされた刀を卯ノ花は何の迷いもなく受け止める。

その一方で、彼女達が剣を交える様を見物していたペペは頬を釣り上がらせると共に紅潮させると気味の悪い笑みを浮かべながら絶頂した。

「ゲツゲツゲ!見苦しいねえ!可哀想だねえ!!部下を斬らざるを得ないなんて〜!まるで…ミィを奪い合ってるみたい〜♪ ヤメテ〜!ミィのために争わないでえ〜♪」

「…」

その動きや言動に流石の卯ノ花も堪忍袋の尾が切れたのか、眉間に皺を寄せながらペペを睨みつけた。

その一方でペペは敵軍の中でも厄介な卯ノ花を足止め成功に高揚感を得たのか、更に陽気なステップを踏んでいた。

「味方同士の争い程 醜いモノはないねえ♡そう言えば園原千弘も仲間を斬れないって聞くよね〜!!だったらこの能力を使ってあの子の側にいる涅ネムって子もミィの下僕にしちやおつかなく!!そうすれば彼ももう手も足もでなくなるねえ!!まあ地獄に堕ちたから必要ないと思うけどお〜!!」

そう言いペペは気を舞い上がらせたのか、ステップを踏みながら再び残酷な事を口にした。敵味方を不自然なく争わせる能力となれば確実に厄介なものとなるだろう。

「く…自身では手を下さずに他人を扱うとは下劣なモノですね



……」

だが、この時 ペペは考えもせずには発言をしてしまった為にとんでもない事をしてかしてしまった。

「涅ネムを下僕にする」

この発言によって尸魂界へと――

――崩壊を招いてしまったのだ。

「今なんて言いました?」

「…へ?」

すると 高笑いするペペの肩に手が置かれた。その声に高笑いしていたペペは笑いを止めるとゆっくりと振り向いた。

その瞬間

「ひ…ひいいい!?!」

先程まであった威勢が嘘のように消え失せると共にその場から腰を抜かした。まるでバケモノを見たかのように。

そしてそれは卯ノ花と、能力が解除され彼女に介抱されていた勇音の目にも映っていた。

ペペの背後へと立ち、今まさに自身らの目の前に立っていたのは――

――光を失った瞳を向ける千弘であった。

「今なんて言いました…?」



## 抜刀齋

### 『抜刀齋』

なぜ千弘がその様に呼ばれる様になったのか。不老不死曰く、それは見えない抜刀術による敵の瞬殺する姿からである。

だが、それは一つの理由に過ぎなかった。もう一つ、そう呼ばれている由縁があった。

それは

—————

突如として発生した超巨大な霊圧。それは瀕霊廷のみならず霊王宮どころか尸魂界全域を襲った。

「何だ…この霊圧は…？」

霊王宮へと降り立ち零番隊である天示郎と会敵していたユーハバツハは突然の振動によって霊王宮が揺れたことに驚き、周囲を見渡していた。

感じられるのは数時間前に地獄へと落とした千弘の得体の知れない霊圧。即ち今下の方から感じ取れるこの霊圧も千弘のものと断定できるだろう。地獄から戻ってきたという事だ。

その点に関してはユーハバツハはある程度は予想していた。

だが、その霊圧の質と量が今までの比では無かったのだ。

尸魂界全てを揺るがす霊圧によって空中に浮いていた霊王宮がゆらゆらと揺れていき今にも制御を失い落下してしまいそうな勢いであつた。

その揺れにユーハバツハを除いたハツシユヴァルト、雨竜に加えて精鋭中の精鋭である『親衛隊』に抜擢された四人の滅却師達は状況を受け入れきれず動揺していた。

「千弘のやつ…派手にやりやがって…まあいい」

その一方で天示郎はその状況下で動揺こそしたものの、持ち前の胆力によってそれ程までに慌てる様子はなく、改めて侵入者であるユーハバツハ達へ意識と自身の得物を向けた。

「テメエラを張り倒すには代わりねえぜ……！」

「東方神将 麒麟寺天示郎……貴様如きがこの私を止められると思うなよ？」

それに対してユーハバツハも目の前の敵へと意識を戻すと笑みを浮かべるのであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして場所が変わり瀟霊廷にて。此方では生き残った隊長達が滅却師と戦闘していたが、発生した霊圧の暴風によりその戦いは中断を余儀なくされていた。

「な……なんだよこの霊圧は……！」

「これが園原千弘の霊圧だったのか!? こんなの本当のバケモンじゃねえかあ!!」

日番谷達と交戦していたバズビーやリルトット、そして残りの隊長、副隊長の皆も身体を震わせながら霊圧が感じる方向へと目を向けていた。

そんな中 二人だけ震えもせずその方向を見つめていた。

「随分と懐かしいネ。これ程の霊圧……お前を殴りつけようとした時以来じゃないか?」

「はい……マユリ様」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

霊圧の発生源である千弘の周囲にはそれ以上の現象が発生していた。千弘の周囲からは霊圧と思わしき黒いオーラが溢れ出し、周囲の瓦礫は四散、建物は崩壊。その足元は殺された滅却師達の死体の山がペシャンコになりながらクレーターを形成していた。

「……」

荒れ狂う霊圧の嵐の中心地。即ち台風の目となる黒いオーラの中

から覗く赤い瞳が目の前で腰を抜かしていたペペへと向けられた。それに見つめられたペペは腰を抜かしたまま動く事が出来なかった。

すると

—— 周囲へと溢れていたオーラの放出が一瞬にして止まった。

それによって先程まで尸魂界を襲っていた嵐が止み、空を覆っていた暗雲が晴れ快晴となった。更に周囲の振動も収まり瀟霊廷の崩壊が止まる。

「貴方…」

「ひい?!」

霊圧の嵐が止んだというのに未だ戻らない虚な瞳を持った千弘はその不気味な目をペペへと向ける。

「貴方今…眠さんを下僕にする…。」と言いましたか?」

「…!!!」

その問いにペペは頷くことも首を横に振ることもできなかった。仮に正直に答えたら何をされるのか、若しくは嘘をつき首を振ったらどうなってしまうのか。

先程の霊圧の嵐によって生まれてしまった千弘への恐怖感からどころも行いう事が出来なかった。

「い…いやそれは…。」

「まあいいです。普通に聞いてたんで」

「!？」

その言葉と共に突然と殺気が解かれ、千弘は背を向けた。それによってペペは驚きながらも、その直後に僅かながらの安心を得た。

「ほ…ほっ…。」

背を向けたという事は見逃してくれるという事なのだろう。情報によれば彼は無闇に人を傷つけない。故に威嚇のみで済ませただ

ろう。

だが、そんな淡い期待は今の千弘には全く通じなかった。

すると

——ポトツ

「…ん？」

懐から何かが溢れ落ちる音が聞こえた。その音を耳にしたペペはすぐさま自身の腹部へと目を向ける。

「……!!!」

それを見た瞬間 ペペの全身が凍りつくと共に震え出した。何と零れ落ちた音の正体は

——自身の臓器であった。いつ切られたのかわからない腹の裂け目から重力に従うと共に血が混じり生臭い臭いを放ちながら溢れ出ていた臓器は地面へと接触すると、まだ滑りのある表面が砂を付着させながら広がっていった。

「ひ……ひい!？」

それを認識した瞬間に感じた事もない程の痛みが襲い始めた。

「うぎゃああああ!!!」

凄まじい叫び声を上げたペペはその場に腹を押さえながら倒れ始める。

「あああ!!!何だよこれえ!?!いてえ!!いてえヨオ!!!」

「あら、痛そうですね」

切り傷でも打撲でも骨折でも感じた事のない痛覚によって苦しむ中、彼の腹を裂いた犯人である千弘はその様子を見ると告げた。

「切腹つて…なんで介錯人がいるか知ってますか？切腹するとすぐに意識は失わずしばらくは残るみたいで痛い痛みが伝わってくるんです。それを感じずに楽にさせる為に介錯人がいるんですよ。介錯人と言えば、山田浅右衛門とかが有名でしたね」

そう言い千弘は痛みにも悶絶し苦しむペペへと笑みを浮かべると、なんと溢れ出た彼の臓器を踏み潰しながら迫っていった。

「貴方が悪いのですよ？冗談であつたとしても私の大切な人を汚すような事を言つたんですから」

踏み潰した臓器が地面と擦れ合いながら聞こえてくる生々しい音と共に迫っていく。千弘が近づくにつれてペペの全身からは血液と共に流れる汗の量が増していき、さらなる恐怖へと襲われていった。

「来るな!!!来るなあああ!!!」

腹を裂かれ臓物を流出させたにも関わらず、ペペは何度も何度も叫びながら周囲の瓦礫を投げつけた。だが、それは千弘の身体に当たりはしたものの、彼の接近を止める事はなかった。

そして 千弘の迫る足が止まった時には、既にその身体は目の前で来ていた。

「あ…あ…あ…!!!」

ペペを見つめる千弘の瞳には何も映っていない。耐える事のない痛みにも苦しんでいたにも関わらず、千弘の姿を見て涙を流していたペペは身体を震わせ始める。その痛みよりも目の前に立つ千弘への恐怖心が勝っていたからだ。

「やめ…やめて…!!謝ります…!!謝りますから!!た…たたたす…たたた

すけ……たすけて……!!」

彼がいればその恐怖心に。だが彼が離れば臓物の流出による痛覚に襲われる。もはや逃げ道などどこにも存在しなかった。故にペペは藁にもすがる思いで途切れ途切れになりながらも千弘へと必死に命乞いをし始める。

だが、

「嫌です」

それを千弘はアツサリと跳ね除け、倒れていた聖兵の腰からサーベルを引き抜き振り上げた。此方を見つめる目は何もないただの虚な瞳であった。

「貴方は医療にだけ徹する勇音副隊長を操り怪我人を守る為に闘っていた卯ノ花隊長と殺し合わせたのみならず私の大切な人を侮辱しました。私は貴方を絶対に許さない。故に極限なまでに苦しめて殺します」

そして

「さようなら」

その一言を終えると共に千弘の手に握られていたサーベルが振り下ろされた。

その瞬間 肉を断つ音が響き渡ると共に血を吐き出しながら、悲鳴を上げる事なくペペの身体だった肉の塊は地面へと倒れた。

「…」

肉の塊が地面へと崩れ落ちると、千弘はそれを見つめながら静かに合掌するのであった。

—————

—————

——

突如として現れ、尸魂界を揺るがす程の霊圧を放つだけでなくペペ



を残酷な方法で殺害した千弘の姿に卯ノ花と勇音は瞳を震わせていた。

「卯ノ花隊長…あれは千弘くん…なのでしょうか…？いつもと雰囲気  
が…」

「……」

勇音から問われた卯ノ花は彼を見つめていた。肉片へと合掌している姿からいつもの彼に見えるが、先程の敵の苦しむ様子を見ていたあの時の目はまるで別人のようであった。

「ちひ……」

「お待ちを」

卯ノ花が彼に呼び掛けようと名前を口にした時であった。千弘は即座に手を出し、彼女を制すると後ろへ目を向けた。

その時であった。

「撃て!!!」

その掛け声と共に瓦礫の影から蒼い極太のレーザーが放たれ此方へと向かってきた。

「な!?あ…あれは…!!!」

その極太のレーザーをよく見ると一本一本が滅却師の用いる霊子兵装の際に放たれる弓矢であった。それが数千もの束となりながら此方へと向かってきたのだ。

「あ…あぶない!!」

「…」

勇音が千弘に向けて思わず声を上げる中、千弘は向かってくる矢の大群を睨みつけると誰にも見えないどころか認識できない程の速度で抜刀し、矢の大群へ向けて振り回した。

すると千弘の振り回した事によって発生した巨大な斬撃が此方へと向かってきた矢を全て掻き消していき、空気へと溶けて消えていった。

「お怪我はありませんか？お二人とも」

「は…はい…ありがとうございます…」

勇音が礼を言う中、卯ノ花と千弘は警戒を解かず再度目の前へと目を向けた。

すると

「見つけたぞ…!!ここが死神共の医療場だツ!!指示通り山本重國を仕留めよ!!」

「…!!」

弓の放たれた瓦礫の影から号令と共に多数の滅却師達が姿を現した。その数は尋常ではなく、少なくとも数百名はいた。恐らく重傷を負った元柳斎を葬る為に大量に動員されたのだろう。

「…!!」

「落ち着きなさい勇音」

突如として現れた滅却師の大群に動揺する勇音を宥めると卯ノ花は立ち上がり刀を手に持つ。

「貴方は早くお戻りなさい」

「…!!わ…わかりました…!!」

その言葉に、動揺しながらも勇音は頷くと立ち上がりその場から医療現場へと戻っていった。

その姿を見届けると卯ノ花は振り返り自身の役目を全うするべく千弘へも目を向けた。

「千弘くん。先程の事についてお尋ねしたい所ですが…今は私に任せ  
て早く苦戦している皆さんの所へ向かってください」

「黙っててください」

「…!?!」

その時であった。

目の前に立っていた滅却師の大群のうち、前衛の数十人がバラバラに切り刻まれた。

突如として起こった惨劇と千弘から発せられた言葉に卯ノ花は驚きのあまり瞳を震わせながら硬直してしまふ。見ると目の前には彼らに対して刀を振り回していた千弘の姿があった。

「申し訳ないのですが、攻撃してきた以上、この人達は生きては返しませんよ」

「……………」

その後、目の前の景色は惨状から地獄絵図へと変わった。

「…!!」

目の前の惨劇を目にしていた卯ノ花はただ立っただまま直視する事しかできなかつた。

「うわああ!!!やめ…やめろ…!!がはあ!？」

「た…たすけ…!」

「いた…いたい…!!やめ…!!」

周囲に現れた大量の聖兵と滅却師の一般兵士。彼らは自身らの同胞がバラバラに切り刻まれた事により戦意を失い、我先へと逃げ惑っていた。そんな彼らを千弘が次々と襲っていたのだ。刀身は見えないものの、逃げ惑う兵達を次々と追いかけて、衣服を掴んで引き寄せては首を刎ね、身体を真っ二つに裂き、果ては頭部をも切り裂いていた。次。また次。千弘が駆け出す度に滅却師達の血が吹き出し血の雨を降らせていく。

それによって周囲は惨殺された滅却師達の血と肉に塗れ血の海を形成していた。

「…」

そんな血の海の上で無表情のまま滅却師達を次々と斬り殺す千弘からはもはやかつての純粹無垢な面影は見られなかつた。あるのはただ目の前の敵となる者全てを斬り殺す初代護廷隊隊長達に似たものであつた。

いや 下手をすればその残虐性は――

――最も血の気の多かつた初代護廷隊を遥かに上回るだろう。

血溜まりの上で敵を惨殺していくその姿を目にしていた卯ノ花はまだ十一番隊にいた頃、流魂街にて噂されていた話を思い出した。

『流魂街にはとてつもなく強い剣士がいる。』

一 太刀震えば粉微塵。更に振るえば塵も残らず――。

その刀を振るわばあまりの速さ故に誰も見えぬ。

人の命を奪う事を厭わぬ残虐性と不可視の抜刀術を持つ無双の劍豪。その名も『抜刀齋』と。

この御伽話は当時の瀨霊廷を騒がせ、我先に見つけ勝負しようと考えた者達が多発し、血眼になって探し回るようになった。

特に同僚である『鹿取 抜雲齋』の勢いは凄まじく、毎晩毎晩探し回っていた。だが、いくら探そうともそれらしき人物は見つからず、いつしかその噂話は嘘または御伽話へと変わってしまってしまい、聞いても誰も反応を示さなくなってしまうた。

そんな者がいるわけない。どんなに探しても見つからなかったのだから。

「ずっと……疑問に思っていました」

卯ノ花自身も信じなくなった部類であったが、彼と対面してからは疑い始め、今となってはようやくそれが真実であると確信した。

「やはり貴方が……『抜刀齋』だったのですね……」

彼こそが瀨霊廷を騒がせた張本人『抜刀齋』であったのだ。

目に見えない程の抜刀術に加え、怒り時に自身に攻撃してきた者達

を無差別に斬り殺す恐ろしい残虐性。それこそが、千弘が【抜刀齋】と呼ばれる由縁なのだ。

千弘のもう一つの姿を見た卯ノ花は虚な瞳の彼をただ見つめる事しかできなかつた。

「ふう…」

それからしばらくして、叫び声が聞こえなくなった血の海の上で千弘は静かに息を吐くと合掌したのであつた。

—————

—————

———

その後、敵兵が攻めてくる気配がなくなつた為に千弘は卯ノ花と合流した。

「隊長、先程は無礼な言動をしましてしまい大変申し訳ありません…お怪我はありませんか？」

「心配ご無用です。それよりも…数時間前に一度霊圧が消えたのですが…何があつたのですか？それに懐かしい霊圧も感じるのですが…」

「あくその事については……」

その時であつた。

—————  
ピー

「ちよつとお待ちを」

千弘の腕に付けられていたブレスレットから謎の通信音が鳴り始めた。それを聞いた千弘はブレスレットを押すと顔を近づけた。

「はいもしもし。此方 千弘です」

『私だ。今すぐ卯ノ花隊長を連れて私の研究室に来たまえ。お前が連れて来た奴らと破面もいる』

「分かりました」

通信機からのマユリの指示を聞いた千弘は通信を切ると卯ノ花へと目を向けた。

「行きましよう。研究室にて局長と先生と“初代隊長達”がお待ちです」

「……は？」

## 作戦会議（隊長抜き）

同時刻 霊王宮にて次々と零番隊の隊員を下していたユーハバツハは突如として感じられた霊圧に驚く。

「この霊圧は…まさか…!!」

頭の中に蘇るのは千年前、自身らを壊滅寸前まで追い詰めた恐ろしき集団の影。

「（あの時は千弘の霊圧で感じられなかったが…まさか千弘… 奴ら… さえも連れて戻ってきたと言うのか…?）」

ユーハバツハは千弘のみならず自身らを苦しめていた者達さえも連れて戻ってきた事を悟ると眉間に皺を寄せるのであった。

――――

――――

瀟霊廷であつた場所にて。

卯ノ花と共に研究室に戻り皆と合流した千弘はマユリからネチネチと嫌味を言われていた。

「全く。地獄から戻るのに何時間掛かっているのかネ？ 君ならば普通は数十分で戻ってくるものだろう」

「し…：しようがないじゃないですか！ 戻り方が分からなかったんですから！」

「おや？ その『通信機』を使えば私の隣にいるネムに伝わりすぐに戻れた筈だが？ 現に地獄への入り口を開ける装置も用意してあつたんだヨ？」

そう言いマユリから腕につけられているブレスレットを指差されると、千弘は顔を逸らし始めた。このブレスレットは一年前に現世にて初めて浦原と出会った際に貰ったものである。このブレスレットには、なんと強力な磁場さえも無効にしてしまう程の通信が可能になる機能が備わっており、たとえどこにいても同じ物を持っているネムとは通信ができるのである。

「それは……」

「まさか便利な機能が備わっているにも関わらず忘れたというのかネ？本当に君は相変わらず『バカ』で『アホ』で『チビ』だネ」

「チビ……？」

バカとアホなら分かるが、その後が続いたチビという悪口の三拍子を聞いた事によつて千弘は額に青筋を浮かび上がらせブチギレた。

「あんだとコラア!!!こちとら戻れずずっと大泣きしてたんですよお!!一生あそこで暮らすと思つちやつたんですよお!?!少しは地獄に取り残された側の気持ちも考えなさいやああ!!!心配してくれたついででしょうがああ!!!」

「だけれがお前の心配などするものカ。お前を気にかけるくらいなら踏み潰された蟻の方を心配するヨ」

「ふんぎやああ!!!」

マユリの言葉に彼の胸ぐらを両手で掴んでいた千弘は遂に涙を流しながら胸ぐらを前後に揺らし始めるが、当のマユリは相変わらず涼しい顔どころか、千弘の泣いている顔を見て日頃の恨みを晴らしたのか嫌らしい笑みを浮かべていた。

「うるさい奴だネ。ネム」

パチン

「はいマユリ様」

「むぐう!?!」

マユリが指を鳴らすと、千弘の背後にネムが現れ、マユリに訴えていた千弘を抱き上げる形で引き剥がした。

「千弘さん、あちらで良い子にしましょう」

「~!!!」

そう言いネムはいい歳こいて子供みたいに泣いている千弘の頭を胸に抱き締め撫でながら下がっていった。

「ぷはあ!このバカ上司!腐れ局長!!」

「んく?何か言ったかネエ?残念ながら私の耳は特別性でねえく。負け犬の遠吠えは聞こえないノイズキャンセリング付きなのだヨオく♪」



「うぎやああ!!!」

そして彼を心底からかったマユリは前を向いた。

「さて、役者も揃った所で、さっさと作戦を話したまえヨ」

「り…了解ツス…」

—————

—————

—————

—————

—————

それから浦原が司会のもと、現状と今後についての推測を話す。その一方で甦った初代隊長達は齋藤や乃武綱など血の気の多い者が最初は真面目に聞かずにいたものの、途中から興味を持ち始めたのか、真面目に聞く様になった。

「以上が現状ツス。即ち霊王宮が陥落するのも時間の問題…何としても阻止しなければなりません。取り敢えずここまでの状況を分かっていただけましたかな…?」

そう言い浦原は確認を取るべく振り返った。歴代最強と謳われる護廷十三隊。それは敵どころか味方にも容赦なく、戦いの最中とあれば邪魔となれば味方さえも斬り捨てる程の非情を持ち合わせていた。そんな彼らが今の現状を聞きどの様に捉えているのだろうか。

そう気になりつつ浦原が振り返ると

—————  
何故か乃武綱と卯ノ花が睨み合っていた。

「それにしても随分と変わりやがったなあ? 最初見た時は誰かと思っちゃまったぞ。『八千流』。まさか初代剣八が医療専門の隊長たあ…腑抜けたモンだなあオイ」

「相変わらず口の悪さだけはご健在の様ですね…では…腑抜けたものかどうか…この場で確かめてみますか…?」

「上等だよコラア…!!」

そしてその傍らでは。

「おこうやれやれく!!!それにしても酒はもうねえのかあ?」

「およしなさいな斉藤さん。今は飲む時じゃあないでしょうに」

「ああ?いいだろ逆骨のじいさん!何百年も飲んでねえんだからよお!なあ有嬪!」

「たりめえだろうがツ!おいその白衣着た眼鏡の女!!スピリタスでもいいから持つてこいよお!」

いつのまにか残りの初代隊長達も談笑し始めており、卯ノ花と乃武綱の睨み合いに野次を飛ばしていた。明らかに此方の話など聞いていないご様子であったのだ。

「皆さアアん!!さつきからアタシの話聞いてたんですかああ!」

「「「え?」」」

浦原が大声で呼び掛けると、全員は振り向き首を傾げた。まるで「あれ?まだ話続いていたの?」と思っっているかの様に。

「ちよつとおお!!!何なんスかその表情!?そろそろアタシ泣いちやいますよお!?キヤラ崩壊する程泣きますよお!?園原さああん!貴方からも何か言つてあげてくださいああい!」

そう言い浦原はギャン泣きしながら頼みの綱である千弘へと目を向けた。

だが、

「…あり?」

そこにはすでに千弘の姿がなく、見れば数分前までいたネムや鹿取、クールホーンの姿も無くなっていた。

モヤ…

周囲にクリーミーな香りが漂い始める。その香りを嗅いだ浦原は臭いが漂う方向へと目を向けた。

「ふんふんふくん♪そんな話は飯の後々!」

そこにはエプロンに三角頭巾を被った千弘が鼻歌を口ずさみながらシチューを作っていた。更にその隣では同じくエプロンと三角頭巾を被ったネムが巨大な炊飯器で米を炊いていた。(なぜ電気が通っているのかは伏せておく)

「そつちもそつちでこんな時に何やってンスかああ!?」

「見れば分かるでしょ。炊き出しです。因みに献立はシチュー♪」

「いやいやいや!!!だからって緊張感なさすぎっスよお!?ていうかそれどつから持ってきたンスかあ!?!」

「ここへ来る途中に食糧庫を見つけたので漁って持ってきました。

あ、眠さん、塩胡椒ってありましたっけ?」

「はい。此方に」

すると 研究室の入り口から姿を消していたクールホーンと鹿取も姿を現した。

「千弘!!また食糧庫見つけたから持ってきたわよ!」

「パンもありました!」

「あ、先生、鹿取さん、ありがとうございます!では皆さんご飯ですよ!皿もって並んでくたさ!い!」

「ええええええええええ!?!」

千弘が呼び掛けると初代隊長達(卯ノ花を除く)は元気よく返事しながらシチューの皿を取り並び始めた。その光景に浦原のみならず阿近やニコも啞然としていた。

「ちよちよちよ!!!こんな時くらい真面目に……」

「何を言っているのだネ?戦の前に栄養補給など常識中の常識じゃないカ。おい、秋刀魚でないのが心苦しいが私にも一皿盛りたまえ」

「涅さんまでえ!?!」

—————

それから食事を終えようやく雰囲気が大人数になると浦原は自身が考案した作戦を伝えた。内容は別働隊として霊王宮へと侵入し、後から来る護廷隊達とは別ルートから攻めていくというものであった。

他の特筆すべき点はなく、ただシンプルなものであり、隊長達もす

ぐに納得し異論が上がる事はなかった。

そして、浦原は会議を終えると千弘へと目を向けた。

「では、園原さん。皆さんをちよいと別室に案内してください」

「了解です」

「はあ？」

浦原から出てきた言葉に齋藤や皆は首を傾げる。

「おい、浦原とかいう奴。どう言う事だ？顔合わせとかねえのか？」

「…」

齋藤から説明を求められた浦原は被り物の先を摘むと微量の冷や汗を流しながらも答えた。

「正直なところ、今回のこの行動は我々の独断ツス。地獄へ干渉した上に靈子を奪い蘇生させる事は厳しく禁じられてる事なんで、万が一誰かに報告されれば規則第一の四十六室がうるさいンスよ。故に貴方方の行動には少しばかり制限をつけさせていただきたいんです」

「ツ…めんどくせえな」

浦原の理由に対して初代の隊長達は納得したのか舌打ちをしながらも頷いたのであった。

その様子を見て浦原は安堵するのであった。因みに浦原が初代隊長達を現隊長達と会わせない為の理由は別にあつた。

それは仮に現在の護廷十三隊の面々と会った際に初代隊長達と揉み合いになる可能性があつたからだ。彼らは千年前に滅却師を退ける一方で、自身らは千弘による援護があるものの相打ち程度。そうなれば戦闘におけるエキスパートである彼らは今の護廷隊に対して嫌悪感を露わにし彼らと対立してしまうだろう。

戦闘前のイザコザは何とか回避したい。その考えより浦原は抑止力である千弘の到着を待つと共に彼らを別地点へと移動させ出来るだけ接触は避けようと考えたのだ。

それから初代隊長の皆は千弘の案内の元、別の地点へと案内された。

## 新年のご挨拶そして霊王宮への到達

その後 霊王宮への門を開けるために隊長達に加えて夜一の弟である夕四郎や仮面の軍勢である皆が集結し、何とか離れた場所にて待機している初代隊長達がいる事はバレないまま、門の制作が進められた。

だが、その直後に事態は急変を迎えるのであった。

突如として尸魂界が激しい揺れに襲われた。それは千弘の霊圧とは別のもので、まるで世界全体が揺れている様であった。その現象は浦原曰く『霊王が死亡した』という事であった。霊王とは尸魂界、虚圏、地獄の3界を繋ぎ取る為の禊の様な物であり、それが殺されてしまったと言うことは3界のバランスが崩れ、崩壊してしまうと言うのだ。

「う〜ん……ん？」

崩壊が進む中、マユリは何かを思い出したのか、小声で千弘へと尋ねた。

「おい、前に霊王宮へ行った事があったネ…その時はどうやって行った…？」

「え？ジャンプして行きました」

「成る程…」

千弘の答えを聞いたマユリは顎に手を当てると、皆に聞こえない様な声で静かに千弘へ耳打ちした。

その一方で、皆は地震のみならず地鳴りの音さえも聞こえる事に驚き慌て始めていた。

「不味いっすね……このままじゃ霊王宮へ攻め入る前に尸魂界ごと我々もペシャンコになっちゃうツス…」

「おい！何とかならないのか!？」

碎蜂が浦原へ対策案を急かす。そんな時であった。

「……は…俺に任せてもらおう…」

皆よりも遅れて研究室へと到着した浮竹が上半身の服を脱ぎ捨て、何やら呪詛の様な物を唱え始めた。すると、浮竹の全身から黒い霊子が湧き始めた。その霊子はまるで生きているかの様にうねり浮竹の背中へと収縮していく。

「俺は二つの頃に肺病を患い…死ぬ筈だった…だが、俺の父母がその地に祀られている土着神『ミミハギ』様へ何度も念じた事によって今まで生きながらえる事ができた…」

その言葉と共に背中へと収縮された黒い霊子は形を変えていくと、右腕へと変わっていき、更にその掌らしき箇所には不気味な一つ目が開いた。それを見た浦原は驚きの目を向けた。

「ミミハギ様…確か尸魂街に祀られている…」

「ああ……そしてその『ミミハギ様』…それは遙か昔…地上へと落ちてきた…『霊王の右腕』を祀った物だと伝えられている…」

そして浮竹は唱える。

「ミミハギ様——ミミハギ様——御眼を開き給え——。」

我が腑に埋めし御眼の力を我が腑を見放し開き給え——。

ミミハギ様——ミミハギ様——御眼を開き給え——。

我が腑に埋めし御眼の力を我が腑を見放し開き給え——。 ”

瀨霊廷を離れている間、浮竹が行っていたのは「神掛」己の命を長らえる為に一部の臓器に喰らい付いていた力を全ての臓腑へ広げる為の儀式だ。己の身を捧げる事で霊王の右腕そのものへと成ろうとしているのだ。

そして、その詠唱と共に湧き上がった黒い腕は一瞬にして天へと昇っていく。すると、しばらくして尸魂界の崩壊が止まった。

「振動が……止まった…」

「ふむ……」

尸魂界の崩壊が止まり、浦原が状況を整理する中、マユリは神掛を

行った浮竹へと目を向けた。見れば彼は身体をのけ反らせながら膝から崩れ落ち、目や口からは黒い霊子が天井へと向かって湧き上がっていた。それを見たマユリは推測する。

「成る程。これは…奴の命が持つまで…という事か」

「!?!」

マユリの推測に皆は驚き、浦原へと目を向けるが、彼もその悲しき推測に同意に等しい意見を言った。

「そうかもしれないツスね…命綱であつた土着神を解放すれば命を削るのも当たり前…」

浦原は時間があまり残されていない事を推測すると、すぐさま門の作成へと意識を向ける。

「今のうちに門を作りましょう…。園原さん！申し訳ないですが、手を貸して…：…つてあれ？園原さんは…」

門の作成のための霊圧を千弘へと頼むべく浦原が振り返ると、そこには先程まで立っていた千弘の姿がなくなっていたのだった。

—————

それと同時刻——にて。霊王宮の中でも最も高い位置にあり尸魂界の王である霊王の棲家となる宮殿では侵攻していたユーハバツハ、そして彼と対峙する織姫、茶籐、ガンジユ、そして一護の姿があつた。

戦っていく中、力の9年を終え本来の力を発動させたユーハバツハは次々と零番隊達を葬りながら霊王宮を進み遂に目的地である霊王の御前へと到達し、彼の胸元を刀剣で貫いたのだ。だが、それでも霊王は死ぬ事はなく結晶の中で輝き続けていたが、追いついてきた一護の体内に眠る滅却師の力を利用して彼を介して霊王を結晶ごと真つ二つに切断し殺害してしまった。

衝撃に駆られる一護を嘲笑うかの様にユーハバツハは崩壊する景色を眺めながら歓喜の表情を浮かび上がる。

だが、その直後にその笑みは途絶えた。

「…!!」

両断された霊王。だが、突如として足元から黒い「何か」が現れ、その胴体を繋ぎ止めんとするかの様に接着し始めた。

「何だこれは…?!まさか…貴様霊王自身か…?!」

ユーハバツハが問いただす中、その黒い「何か」から浮き出てきた目はユーハバツハを見て笑うかの様に三日月型となる。

「…崩壊する尸魂界に情でも湧いたか…?!まあ良い…ならば貴様を…!!!」

ユーハバツハが霊王へ絡みついた物体へと手を掛けようとした時であった。一護が前へと回り込み、その手を掴む。

「どけ…一護」

「断る。俺はお前を止めに来たんだ」

「“止めに来た”…だど?母の仇であるこの私を“殺す”とさえも言い切れぬか。それが貴様の弱さだ…!!」

その時であった。

「…!!!」

ユーハバツハは何かを感じ取る。それは一護も同じである。

「来たか…」

「…この霊圧は…?!」

感じられるのは死神の中でも最も得体の知れない霊圧。その者は既に、その場に到達していた親衛隊達の背後に立っていた。



「「?!」」

ユーハバツハの言葉を耳にしてから数秒。ようやく彼らも気がつき、その場から飛び退いた。

そしてその者の姿を見たユーハバツハは笑みを浮かべると共に目の中に蠢く不気味な三つの赤い瞳を向けた。

「ちひ」

その瞬間

「ぐぼうへええええ!!!」

ユーハバツハの頬が歪むと共に殴り飛ばされた。それによってユーハバツハの身体は霊王の横を通り過ぎ、背後にある壁へと巨大な破壊音を響き渡らせながら叩きつけられた。

「陛下!!」

ハッシュユヴァルトが声を上げる中、その場にいた一同はユーハバツハを殴り飛ばした影へと目を向けた。

揺らめく煙が薄れて行き、その中に立つ影の正体が露わとなっていく。

「新年のぐ挨拶です」

その一言と共に砂煙が晴れた。

「あけましておめでとうございます」

そこには 死覇装の上にハートのアップリケが付けられたエプロンと三角頭巾をつけた千弘が立っていた。

## 到着そして合流

突如として現れた千弘。その奇想天外な状況にユーハバツハの親衛隊と一護達は目を点にしながら唾然としていた。

「千弘…って…なにその格好!？」

「ん？あ、黒一さんどうも〜」

一護は千弘の闖入よりも、あまりにも立場違いな服装に驚き、それについて突っ込むと千弘は笑みを浮かべながら手を振る。

「お主は…」

「猫一さんもこんにちは。お久しぶりですね」

「ね…猫一!?!変な覚え方じゃな!」

独特な覚え方をされて驚く一方で、夜一は千弘がなぜこの場にいるのか尋ねた。

「なぜ主がここに…? 儂らと同じ空鶴に打ち上げてもらったのか?」

「え? 誰ですかそれ?」

「え…知らんのか? お主をここまで吹っ飛ばした奴じゃ。それか喜助の門でも潜って来たのか?」

「吹っ飛ばした? 潜って来た? どういう事ですか?」

「……………え?」

千弘の様子を見た夜一は固まってしまった。ここへ来る方法は彼女によって打ち上げてもらおう他ない。

だが、千弘はそれすら知らないかのように途端に首を傾げ始めた。ならばどうやって来たのか、恐る恐る尋ねてみる。

「お…お主…どうやってここまで来たんじや…?」

「いや普通に… ”JUMP” してきましたけど」

「……………は…」

その答えを聞いた瞬間――

「「はあああああああ!!」」

その場に一護、夜一、織姫、岩鷲の驚嘆する声が響き渡った。

「待て待て待て待て！ジャンプじゃと!」

「ここまで何キロあると思ってるんだよ!」

「そんな事どうでもいいです。みんなやってる事なので。それより……ん!」

驚く夜一と一護を横目に千弘は再びユーハバッハへと目を向けたが、それとは別の人物を見て驚きの声を上げた。

「貴方は……「うーさん」!!」

「……」

それは一護達が旅禍として瀨霊廷へ侵入した時に初めて会敵し、一発KOした相手である石田雨竜であった。因みにうーさんとは千弘が雨竜を呼ぶときの名前である。

「なぜ貴方がこんな迷惑集団と一緒に!?一護さんと仲睦まじく親密な関係である貴方がなぜ!」

「誤解を招く言い方をするな!!なぜかだと……?それは僕がく……」

「ま、いいです。取り敢えず後で聞くので」

「最後まで聞け!!」

石田をアツサリと見放した千弘は最後に自身が殴り飛ばしたユーハバッハへと目を向けた。

「さてさてさくてユー何とかさん、前はよくも顔面踏ん付けてくれましたね……?あ、あと周りの人もそのまま止まっててください」

「「!?!」」

その声が聞こえたと同時に周囲に散っていた滅却師達の足場に一筋の斬撃が走り出した。見ればその斬られた溝はその滅却師よりやや0.1ミリ離れた場所にできており、まるでその線を超えぬ事を示唆しているかのようであった。それによって千弘へと攻撃を仕掛けるようとしていた滅却師達の動きが一瞬にして止まる。

だが、一名のみ止まらない人物がいた。

「…」

やや濃い肌を持つ滅却師 リジエ・バロ。ユーハバツハから“X”の文字を与えられた滅却師だ。そんな彼の能力は「万物貫通」彼の銃口から発射された霊子は弾丸の数百倍の速度に加えて、例え幾千もの障害に阻まれようとも全て貫通し最果てまで飛んでいくという恐ろしいものであった。

千弘の視界から外れていた彼はユーハバツハから与えられていた聖文字の威力の自信により、その静止に耳を貸す事なく、武器である銃の銃口を向け、引き金を引いた。

!!!

音もなく放たれた銃弾。それによって周囲の滅却師達の緊張も解け、鼓舞されるかのように、発砲したりジエ・バロに続き千弘に向けて攻撃を仕掛けようとする。

その直後

「止まっててくださいって…言いましたよね？」

「…!!」

千弘の目が向けられると共に全てを貫く霊子の弾丸がその手で掴まれ粉々に砕かれた。

「なに?」

更に彼が驚いたと同時に、霊子兵装によって作り出された銃に亀裂が走り、弾丸と同様に粉々に破壊された。

「止まって…言ってるのが聞こえないのですか…?」

「…!?…あ…あの…その…」

向けられるその視線によってリジエ・バロの全身に超高密度の重圧がのし掛かり彼の冷静なる心を掻き乱していく。

そして彼と目線が合った瞬間にある考えが本能的に脳内に浮かび

上がった。

「答えなければ殺される」と。

「もう一度お尋ねします。聞こえないのですか？」

「き…聞こえます…」

「よろしい」

千弘の目線が逸れるとリジェ・バロだけでなく他の親衛隊達までもがその場に膝をつく。先程まで零番隊を倒して優越感と高揚感に浸っていた彼らからは一瞬にしてその感情が取り除かれたのだった。

その一方で、この場の空間を一瞬にして制した千弘は再び目の前へと目を向ける。

すると 巻き上がる煙の向こう側から声が聞こえて来た。

「…やはり来たか千弘…一体どうやって地獄を抜け出てきた？」

「そんな事どうでもいいでしょう？それよりも…」

貴方はなんと私を怒らせれば気が済むのですか!?私の農場を部下を使って焼き払うのみならず…顔面まで踏みつけるとは!!マジでいい加減にしてくださいませんかねえ!」

そう言い千弘は次々と今までユーハバツハとその部下による悪行を愚痴り始める。だが、それをユーハバツハは鼻で笑う。

「フツ。記憶にないなあそんなもの。それに話さぬのならば良い」

その声と共に煙の中にある影がゆっくりと立ち上がった。

その瞬間

一瞬にして千弘の目の前に刀剣を振り回す姿勢のまま現れた。

「今はお前に構っている時間はないのでな。悪いが一時退場してもらおう」

「…えっ？」

その直後。その刀剣の振り回しが千弘へと直撃し、彼の身体を宮殿から外へむけて吹き飛ばした。

「千弘!!」

「更にサービスだ。受け取れ」

一護が叫ぶ中、吹き飛ぶ千弘に向けてユーハバツハが手を掲げると千弘の頭上に超巨大な霊子の弓矢が形成され千弘に向けて放たれた。

「大聖弓」——ッ!!!

それによって放物線運動をしていた千弘の身体はそのまま霊子の弓矢によって垂直に落とされて行った。

「なんのお!!バレリーナキイックって……あああああ〜!!!」

下から千弘の声が響くと共に放たれた霊子の弓矢が全て蹴り飛ばされ上空へと上がっていくも、千弘の身体はそのまま落下していった。

「嘘だろ…アイツが…!?!」

一護は何が起こったのか理解出来なかった。ユーハバツハは先程まで自身達から離れていたにも関わらず突然と自身らの前へと現れた。それに一番驚いていたのはあの千弘が反応できない程の速度で迫っていた事だ。いつもならば千弘は反応してカウンターを浴びせる筈だがそれすらもさせずに彼を吹き飛ばしたのだ。

そしてもう一つ。なんとユーハバツハが千弘に殴られたにも関わらず傷一つ負っていないのだ。

すると そんな一護の思考を読み取るかのようにユーハバツハは笑みを浮かべながら答える。

「気になるか一護。なぜ千弘に “気づかれる事なく接近できたのか” なぜ “反応される事なく攻撃できたのか”。ここへ来た時にも言った筈だ。 “全て視えている” と…」

「!?!」

その一言が向けられた瞬間 再びユーハバツハが目の前に迫り自身に向けて手を向けた。

するとそれによって一護の身体も千弘と同様に外へと吹き飛ばされてしまった。

更に石田も矢を放ち織姫達がいる足場を破壊した。

皆が落下していく中、一護は石田に向けて叫ぶものの、彼がその声に答える事は無かった。

――

――

――

――

その後 一護達は先に着地していた夜一と千弘によって救助され、近くの離殿へと着地した。

「さて、反撃と行こうか」

「え？ いや……ここからだど結構距離があるぞ？ 井上の三点結盾で上がったとしても狙い撃ちされちまうし……」

「ふむふむ……」

唐突に放たれた夜一の言葉に一護達は疑問の声を上げるが、千弘は頷き、上を見上げた。その先には自身らが先程までいた霊王の離殿が浮かんでいた。

「成る程。ジャンプして戻るって事ですね」

「断じて違う」

千弘の肩を叩きながら首を振ると夜一は何も無い空間へと目を向けた。

「開けてくれ！」

すると

ギギギギギイ

目の前の空間が短冊上に亀裂が走り左右に開き始める。その開き方は正に破面が空間を行き来する黒腔そのものであった。

そしてその奥から一人の人影が見えてくる。それを目にした一護と千弘は驚きの目を向けた。

「お…お前は…!!」

「貴方は…!!」

水色の髪にワイルドなりーゼント、獣のような鋭い瞳。その男は一護を目にすると笑みを浮かべた。

「久しぶりだなア…黒さ…」

「グリムジョーさん!!」

「……」

ギギギギイ…（ゆっくりと閉める音）

ガンツ!!!!（千弘が黒腔の門を掴む音）

黒腔を掴み無理やり開いた千弘は顔を覗かせる。

「久しぶりですね〜グリムジョーさん!」

「ぎやあああああ!!!この化け物があああ!!!」



## 涅マユリの秘密兵器

その後、グリムジョーの頭にゲンコツを見舞った千弘は彼に頼み、再び開けてもらおう事となった。

そして現在は……………

「いやあすみませんねえ私までお邪魔させてもらって」

「いや…成り行きで入れたけど取り敢えずアンタ誰よ…というかその格好なに!?!」

一護との知り合いらしき謎の少女『毒ヶ峰 リルカ』と同じく謎の少年『雪緒』によって作られた異空間に保護されていた。一護によると彼女らは少しばかり前に現世にて敵対していた『Xcutiion』という組織のメンバーで『完現術』という超能力を持つ者達である。即ち千弘達を匿っているこの異空間も彼女らの完現術の力という訳だ。

因みに一護自身も彼らの登場に驚きだったのか、夜一から説明を受けていた。

「入れてもらって早速ですが煉獄さん」

「リルカよ!!最初に名乗ったでしょ!?!」

「失礼いたしましたレヴィさん」

「だからリルカ!!次間違えたら張つ倒すわよ!?!」

リルカからお叱りを受けた千弘は失敬失敬と頭を下げると続けた。因みにその際に遠くから『うるせえな』と呟いたグリムジョーに向けて千弘がどこから取り出したのか分からないオタマをぶん投げたのは別の話である。

「取り敢えずここから出してもらえますか?..」

「は?..なんでよ」

「ユー何とかさんをぶっ飛ばしにくいので。もう【毛根死滅】と【特大下痢】くらいさせないと気が済みません」

そう言い千弘が拳を鳴らすと夜一が止める。

「まあ待て園原。お主、さっきの奴の動きを見たじやろ？」

「さっき…？…ああ」

夜一に言われた千弘は先程、自身の目の前まで一瞬にして迫ってきたユーハバツハの動きを思い出す。

「変な動きでしたね。姿形がブレて空気に消えたかと思ったら突然目の前に歪みながら現れて…びっくりして凝視してしまいましたよ。いやあ…怖かったあ…」

「そんな正確に見えるお前の動体視力の方が怖いわ」

「はあ…取り敢えず話すぞ…聞け」

一護が突っ込むと夜一はため息を吐きながらも説明をした。

彼女によると自身らのいる空間は既にユーハバツハ達のいる場所へと向かっているらしいのだ。この空間に入る前に彼女はその場所へと特殊な道具を打ち込む形でマーキングを行っていたらしい。即ち外へ出る必要は無いというわけだ。

すると ちょうど到着したのか、先程まで上昇していた空間の移動がピタリと止まり、ゆっくりと開き始めた。

「着いたようじゃ…：…な…!？」

だが、目の前に広がって来たその景色を目にした瞬間 夜一や千弘を除いた皆は驚愕するのであった。

そこに広がっていたのは瀰霊廷を覆っていた見えざる帝国と同じ景観であった。

「あれ…？先程とは随分と景観が変わった様な…」

千弘が首を傾げる中、夜一は衝撃が強すぎた為なのか、冷や汗を流しながらも口にした。

「ユーハバツハめ…：…霊王宮を自分自身のものに作り変えおったか…!!」

そんな中であつた。

ピピ…

千弘のブレスレットが電子音と共に光だす。

「…ん？眠さんから呼び出した。すいません、ちよつと失礼します」

「…は!?」

そう言い千弘はその場から外へと出ると、走り出す。

「おい！待てよおい！」

一護が呼び止めようとするも、既に千弘の姿は見えなくなっていた。これから決戦であると言うのに千弘という戦力を見失った皆は肩を落とすのであった。

—————

同時刻。

「さて、我々も向かうとするか」

千弘達のいる地点から数十キロ以上もの離れた場所にはマユリやネム、鹿取そして更木などおよそ十数名の姿があった。

周囲を見ると彼以外の姿が見えない様であるが、それはマユリの作業である。

本来ならば、しばらく経ってから続くように門を潜ると浦原と口裏を合わせていたが、マユリは本人に断りもなく策を大幅に修正。なんと彼らを通った直後に門の開く場所の座標を変えて乗り込んだのだ。

「まさか霊王宮まで落ちるとは…いよいよ零番隊様もウチに文句が言えなくなるネエ〜」

「ハッ面白えじゃねえか。それほど斬り甲斐があるってことだろ？」

なあ「野晒」

マユリの言葉に続き、不老不死に頭を噛みつかれている更木は闘争心を剥き出しにしながら己の斬魄刀へと問い掛ける。ちなみになぜ、更木に加えて弓親、斑目、そして四番隊の山田花太郎までいるのか？それは簡単だ。四人ともトイレに行っており、来た時には既に皆が門を通った後で途方に暮れているところ、マユリが再び開け、それに着いて行った為である。

「へえ。テメエが八千流の話してた今代の剣八か？後で斬り合ってくれよ」

「上等だよ。なんならラスボス前のウォーミングアップってことで、ここでやり合ってもいいんだぜ？」

「おいおい仲間はずれたあ寂しいじゃねえか。俺も混ぜろや……！」  
「儂も仲間に入れて欲しいものよのう〜」

同行していた初代隊長達も更木自身を相当な実力者であると認識しているのか、不老不死、乃武綱に千日と続き、次々と絡んでいた。それもそうだ。彼本来の実力は初代隊長の一人であり、初代剣八である卯ノ花を凌駕しているのだから。そんな光景を未だに現実として受け入れきれないのか、弓親、斑目、山田は肩を狭くしながら遠目で見つめていた。

「バカは放っておいて、おい、ネム」

「はい」

マユリから指示を受けたネムは背負っていた巨大なカプセルをその場に降ろすとともに機器を取り出した。

「おい！そこで言い合いしてるバカのうちの一人！初代十二番隊長！持つて来たモノを全て並べたまえ！」

「ケツ！人使いの荒え野郎だ！」

頷いたネムはコンピュータを操作していき、舌打ちをした善正寺も引つ張っていたボックススケースの中から巨大な機器を取り出して展開させていった。

そしてしばらくして――。

「起動します」

ネムがキーボードを押すと共に並べられた巨大な機器が起動する電子音を鳴らすと共に輝き出した。

――

皇帝の玉座にて――。そこには以前よりも禍々しい姿に変貌したユーハバツハの姿があった。長く無造作に伸びた黒い髪と一体化するかの様に不気味な模様が顔の上半面を覆い、そこから流れる様に金色の斑目模様が輝いていた。いや、よく見ればその斑目模様はまるで目玉の様であった。

時は数刻前に遡る。

千弘達を靈王の御前から追い出した後にユーハバツハは、靈王を完全に吸収して力を我がものとする。と靈王宮の所有権を手にした。さらに、瀟靈廷を覆った見えざる帝国の景色を靈王宮へと移動させ、それを更に自分好みの城へと組み直したのだ。彼の望む新たなる世界の礎となる事から、この空間は彼曰く『真世界城』と呼ばれる事となった。

そんな真世界城にて、親衛隊へと命令を下したユーハバツハは玉座にてどの様な猛者が初めに来るのか、今か今かと待ち構えていた。

その時であった。

「…ん？」

何かが此方へと近づいて来た。その気配を感じ取ったユーハバツハは己の聖文字である「全知全能」を発動させ未来を見る。

そこに映っていたのは爆破される自身であった。

「…くだらぬ」

その映像を目にしたユーハバツハは即座に現実へと切り替えると靈子によって己の刀剣を生成する。

その直後――。

ドガアアアアン…!!!

天井が破壊された。周囲に瓦礫が落ちていく中、巻き起こる煙の中から「巨大な靈子の光線」がユーハバツハ目掛けて迫って来ていた。「向こうも中々面白いものを作るな。だが…」

そして ユーハバツハは玉座にて居座ったまま 靈子の刀剣を振り回した。

それによって向かって来た光線全てが空中で真っ二つに両断され

ると共にユーハバツハに届く事なくその場で爆発した。

「この程度で私を葬れると思ってい……んん!?」

その直後——ユーハバツハは目を大きく開かせながら驚いた。

見れば先程の光線が雨の如く無数に降り注いできたのだ。

「な……何だこれは……!?!」

その瞬間 その場一体を爆炎に包み込んだ。

—————

—————

—————

—————

「……………」

ユーハバツハが叫んでいたその同時刻。その砲撃を打ち込んでいた場所には驚くべき光景が広がっており、斑目、弓親、四番隊である山田花太郎の三人は唾然としていた。

目の前には巨大な銃が横された砲台が横一列に等間隔に5台、さらにその隙間から見える様な後ろの位置に5台設置されており、その砲口から次々と光線が放たれ、目の前に聳える巨大な城へと打ち込まれていったのだ。

その光線の威力はまさに“規格外”と呼ぶに相応しく、目の前の巨城を次々と破壊していき、火の海へと変えていった。

「な……何だこりヤアアアア!!?!?!」

その光景に驚きのあまり斑目が叫ぶとマユリは鼻をほじりながら答えた。

「見てわからないのかい? SF映画でよくある“光線銃”だよ。前に千弘が墜落させた宇宙船の中から見つけてネエ。それを解析し、この様に砲台として発射できる様にしたという訳だ。動力源は千弘の細胞だから……うん。あと数時間はこのペースでいけるネ」

「宇宙船!? 光線銃!? いくらなんでも無茶苦茶すぎんでしょ!? というかよく短時間でこんなモン作れましたね!」

「技術開発局を舐めてもらっちゃ困るヨ。…ん? おや、我々の霊圧を感じ取ったのか、早速来た様だネ」

「!?!」

マユリの言葉に全員は臨戦体制へと入る。見ると目の前の街中の奥へと続く街道には小柄な体躯の滅却師が立っていた。

その滅却師はユーハバツハが選別した滅却師の中でも精鋭中の精鋭である親衛隊の一人『ペルニダ・パルンガジャス』

更にそれだけではない。後からなんと顔面が崩壊し目が垂れ落ちていたり、片腕が損失していたりと悍ましい姿をした滅却師の兵達が続いていた。その数はもはや1000人はくだらない。

「な…なんて数だ!」

「しかも見る限りゾンビ…あの女男に似た能力だけどアイツも使えるなんてね…」

「ひいいいい!!!」

見るからに悍ましいゾンビの大群に、十一番隊の中でも実力のある斑目や弓親すら冷や汗を流し、山田に至っては彼らの背後に周り怯えきっていた。

すると

「ハッ。なにビビってんだ? 全員ぶった斬ればいい話じゃねえか」

そんな彼らを鼓舞するかのように猛々しい言葉を言い放ちながら更木が前へと出た。

「最高だぜ剣八イ、ますますオメエが気に入っちゃった♪」

「八千流はいい後継者を見つけた様じゃのう。それじゃあ誰が一番斬れるか競争と行こうか」

「ヒツヒツヒ…喉を潰す役目は要らない様だねえ」

「…死体ですからね」

更に剣八に続き不老不死と千日、そして逆骨に王途川と残りの初代隊長達も次々と前へと出た。

「く……やってやろうじゃねえか弓親ア！ここでビビってたんじゃあ更木隊長の顔に泥ぬっちゃまうぜえ!!」

「だね。僕も腐つても十一番隊……ここは美しく暴れてやろうじゃなさいのさ」

それを見た斑目と弓親も自身が更木の部下である誇りを無駄にしない為に覚悟を決め大きく息を吸い込むと前へと立った。

その時であった。

「全員退きたまえヨ」

『『『ああ……?』』』

そんな空気を打ち破るかの様にマユリの淡々と言い放つ声が響いた。

それによつて更木に加えて初代隊長達の内、数人が刺激され、頭に来たのか巨大な殺気と鋭い目を浮かべながら振り向いた。

そんな彼らの殺気をもともせずマユリは斬魄刀を引き抜く。

「せっかくこれほどお客人在るんだ。私の研究発表会に丁度良い」  
その一言と共にマユリは不気味な笑みを浮かべながら己の解号を唱えた。

卍解

金色足削地蔵



〃【無双】千手観音形態〃

その言葉と共に斬魄刀が光出すと変形しマユリ達だけでなく目の前に立ち塞がるゾンビ兵達と謎の滅却師の全員を影で覆った。

「さてお披露目といこう。研究によって進化した私の新たなる卍解の力を……!」

その言葉が言い終わると同時にマユリの背後には――

全長100メートルもの超巨大な千手観音像が

現れた。

「二二で…でけええええええ!!!」

それを見た更木や不老不死達は驚きと興奮の声をあげる。

それもそうだ。その大きさは全斬魄刀の中でも最大級である狛村の黒縄天元明王の十倍はあり、更にその背後には胴体の大きさを超す程の千本の腕が生えて更にその大きさを際立てていたのだから。

「な…何なんすかこれえ!」

【無双】千手観音形態…金色足削地蔵の新形態の一つでネ。真髓である毒を使わないに對して圧倒的な質量と手数によって押し潰すという超攻撃型の姿だヨ

斑目へと説明を終えたマユリはその場から飛び上がると腕、肩、と飛び、最後は金色足削地蔵の頭上へと到達した。

「さて、では行こうか」

ギューイイイイイン。

マユリの言葉に反応するかのように金色足削地蔵の不気味な目が光出すと、動き出しゆつくりとペルニダ達へと顔を向けた。

「…!!」

それに対してペルニダは己の聖文字を解放した。すると、彼の黒い影の部分から赤く細い糸が出現し、激しい勢いで金色足削地蔵へと迫っていくと胸元へと突き刺さった。

だが、それだけであとは何も起こる事はなかった。

それを見たペルニダは信じられないのか全身が震え始める。ここで彼の能力を説明しておこう。彼の能力は “強制執行 (The Compulsory)” 己の体内から発生させた神経を相手へと打ち込む事でその者をいのままに操ったり、身体を強制的に捻り殺害する事ができるのだ。神経を表に出す分、弱点を晒しているようなものでもあるが、一度打ち込まればペルニダの操り人形となるため、厄介な能力に変わりはない。

そんな恐ろしい力が目の前に聳え立つ金色足削地蔵には一切効く事はなかった。

「ウソ…ウソ…!!我…しゆ…シユリフト…通ジナイ…!!」

「おや？もう其方の発表は終わりかい？」

そんな狼狽始める滅却師の様子を嘲笑うかの様に足削地蔵の頭上へと座っていたマユリは笑みを浮かべると人差し指を向けた。

「ならば今度は此方の番だ。やれ」

その一言と共に巨大な影が動き出し、千本の拳の雨がペルニダ達へと降り注いだのであった。

## 積年の恨み

マユリの一言と共に振り下ろされた巨大な拳は周辺一体をペルニダとゾンビ兵士ごと吹き飛ばした。それによってその場に凄まじい破壊音と共に風圧が発生し周囲の建物や瓦礫、そしてゾンビ兵士達も蜘蛛の子を散らす様に周囲へと吹き飛ばされていった。

それから時間が経ち――。

「さて、どうかな？」

風圧が収まるとマユリは手をあげ、打ちつけた拳を退かせる様に足削地蔵へと命令した。すると、それに従うかのように足削地蔵は打ち付けられた巨大な拳を退ける。

拳が退かされたそこには――

「ゆゆぬ…ゆ…ユユ許サナ…いい!!!  
!!!殺ス…!!殺す殺す!!」

全身をペシヤンコにされながらもまだ息があるペルニダの姿があった。あれ程の巨大な拳で撃たれてもなお生きているとは、そのタフネスは流石だとしか言えないだろう。

すると

「殺す…!!コロスコロスコロス…!!!」

空気に浸透するかのような恨めしい声、全身から黒く湧き上がり具現化された殺意と共にその姿がゆっくりと変形していき、今まで体表を隠していたローブが脱げた。

「…!!!」

露わとなったペルニダの姿。それを見た皆は驚きの表情を浮かべ



その一言と共に最後の一押しであるかの様に拳が打ち付けられ、真  
世界城全体を轟かせる破壊音と共に親衛隊の一人であるペルニダの  
命は呆気なく潰えたのであった。

――

――

――

――

「はあ。呆気ないものだネ」

「「よ…容赦ねえ…」」

あれ程の芸当を見せたにも関わらずアツサリとしているマユリに  
斑目や弓親は勿論だが、更木や初代隊長達でさえも引いていた。

「さてと…そろそろ残りの滅却師共も殲滅と行こう。全員、乗りたま  
……ん？」

その時であった。

「お〜い！局長〜！眠さ〜ん！皆さ〜ん!!」

遠くから誰かが手を振りながら此方へと走ってくる姿が見えた。

見るとそれは先に送り込んでいた千弘であった。それを見た鹿取  
は目を輝かせながら手を振った。

「千弘く〜ん！さあこつちにいらっしや〜い♪」

「嫌です。眠さ〜ん!!」

そう言いながら千弘は手を広げながら迎えてくる鹿取を拒否する  
とネムの方へと走っていく。

そんな中、千弘を何度か見ているものの、正体を知らない弓親と斑  
目はなぜ平隊士の彼が一人にいるのか気になり更木へと尋ねていた。

「あ…あの隊長…アイツって一体何者なんすか…？何か破面の時も突  
然現れて今もそうですし…ただの平隊士には見えねえんですが」

「あ？そうか、オメエらは知らねえんだったな。アイツは…」

斑目から尋ねられた更木は口外禁止とされているにも関わらず千  
弘の隠し持つ実力について話そうとした。

その時であった。

「……」

頭から降りようとしていたマユリが再び頭上へと登っていた。

皆が不思議に思う一方で、千弘が走ってくる姿を見ていたマユリの頭の中には「昔の記憶が蘇っていた」

『おい誰だ！私の顔に落書きをしたのは!?』

『あ、すいません。メイクが少しズレたので一から施そうと思いまして笑』

寝ている合間に顔面に落書きをされ、

『局長！砂糖とミルク入りコーヒーですよ♪』

『糖尿にさせる気かネ!?』

甘さ180%のコーヒーを用意され、

『おい、私の書いた報告書はちゃんと提出したのかネ?』

『あ、イライラしてたので紙飛行機で全部飛ばしちゃいました』

せっかく書いた報告書をおもちゃにされ、

『素振りが捗るための新しいサンドバッグを作りました!』

『私の全身写真を貼りつけるとはどういうつもりかネ!?』

『局長：隊士の皆さんの力をつけるためにですよ！どんな方法であろうと実行しないと!』

『だからと言って私の写真を痛めつけるなど不愉快極まりないヨ!!』

自分自身をネタに勝手に商品を開発され、

『おい!!休暇を与えたのだから良い加減に消えたまえ！鬱陶しいんだ

ヨ!!』

『だって落ち着かないんですもん。はいこれ糖尿コーヒー』

『当たり前前のように出さずんじやないヨ!!』

休暇を与えても目の前から消えずにウロチヨロされ、

終いには――

『あ、それ局長の料理に仕込もうとした改良型タバスコでした』

影で自身に恥をかかせようと暗躍していたり——と。

今までありとあらゆる千弘の悪戯と腹黒によって苦しめられた日々が頭の中へと蘇り、マユリの頭の中に積もっていた彼への恨みが膨れ上がってきた。

「…」

そして、それを思い出したマユリはゆっくりと口角を釣り上げる。

「おやおや…これは驚いた」

すると——足削地蔵の拳がゆっくりと此方に走ってくる千弘に目掛けて振り上げられた。

「まさか姿形だけでなく霊圧も仕草も真似られる滅却師がいたとはネ  
〜」

「…えっ？き…局長!？」

—————

—————

—————

—————

真世界城はユーハバツハの凄む中心の城がある地点と、それを囲むかのように東西南北それぞれに親衛隊の一人が待ち構えている地点が存在している。

ここは千弘が先程まで夜一達と一緒にいた地点であり、そこにはペルニダと同じ親衛隊である『アスキン・ナツクルヴァール』が千弘と別れた一護達と交戦していた。

「ヒュ〜…最初は千弘までいて致命的な状況だったが遠くに行つてくれてラッキーだったぜえ〜」

「だからと言って逃すわけねえだろうが…!!」

「うおっとお!？」

現在の状況に手を焼くかの様に額に手を当てながら走っていたアスキンは背後から俊敏な動きで追ってきていたグリムジョーの攻撃を回避し、遠くの建物へと着地した。





ると目を大きく開きながら驚き、すぐさま走り出した。

「うおおおおお!!!」

「テメエ!!何なんだよあの不気味な像は!？」

「俺が聞きてえよおー」

問いただしてくるグリムジョーに感情的に返したアスキン。二人は互いに必死になりながら街中を走るもの、追ってくる千手観音像は勢いを止める事なく次々と真世界城の町を破壊しながら接近してきていた。

「ちくしょおおお!!!誰だこんなもん持ってきやがったのはああ!!!」

そんな中であつた。

「ううおおおおお局長てめえこの野郎おおお!!!」

凄まじい勢いで叫びながら自身らに追いつき、並走する影があつた。それはなんと本来アスキンと戦う予定であつた千弘だつたのだ。突然と千弘が現れたことに二人は驚くと即座にアスキンが叫びながら聞き出した。

「おいアンタあ!!アンタの仕業かあ!?!いくらなんでもメチャクチャすぎるだろうがああ!!!」

「違いますよあれ局長です!!呼び出されて行ったらいきなり襲い掛かってきたんですよ!!!」

そう言い千弘も叫んだ時であつた。

「逃がさないヨ〜」

背後の千手観音像の頭から声が聞こえて、振り向きながら見ると、千弘達の逃げ惑う姿を歯を剥き出しにするほど満面な笑みで見下ろすマユリの姿があつた。

「局長テメエこらああ!!いきなり『偽物だ』とか言つて殴りかかつてくるとはどういう事ですかああ!!!」

「しかも俺らまで巻き込みやがってよおお!!!俺敵だけどアンタに何もしてねえだろ〜!？」

「偽物と滅却師が口を利くんじやないヨ」

そう言うマユリの言葉に反応するかの様に千弘達を追う千手観

音像口元が開くと光り始めた。

その瞬間

その口から光線が発射され、周囲一体を薙ぎ払うかのように走ると大爆発を起こした。

ピュイーン

ドオオオオオオオオオオ

「ぎやあああああああああ!!!」

それによって逃げ惑っていた三人は爆炎へと飲み込まれていった。だが、巻き上がる煙の中、なんとか切り抜けたのか三人は叫びながら煙から出ると再び走り出す。

「おや?やるじゃないカ」

それを見たマユリは更に千弘達を追いかけた。

ドドドドドドドドドド!!!

その言葉と共に足削地蔵は凄まじい勢いで三人へと接近し、次々と建物を破壊していった。

「おおい園原てめえ!!何とかしろやコラアアア!!!」

「何とかって言われても無理ですよおお!!!斬り倒そうとしたら眠さんの写真ちらつかせてくるからあ!!」

「んなくだらねえ理由でかあ!?!」

「くだらないとは何ですか!?!眠さんという最愛の人をいくら写真であらうとも斬りつける事など…」

「んな事言ってる暇あったら何か考えろやコラアアアア!!!」

グリムジョーが千弘のバカさ加減に呆れ返り怒鳴る中であつた。

「フッフッフ：お二人さん、俺あ致命的に良い案を思いついたぜ」  
「!?」

その言葉を耳にしたグリムジョーと千弘はアスキンへと目を向ける。すると彼は顎に手を当ててラテン系のイケメン顔を輝かせながら答えた。

「それは……二手に別れる…!!」

そう言いながらアスキンは目の前にあった二手の別れ道のうち、左へと向かおうとした。

だが、それを逃す千弘ではない。

「ハツハツハツ！また会おうぜ……って!?何 手え掴んでんだあ!?」

「フハハハ!!みすみす逃すわけないじゃないですかあ!!貴方も道連れですよ!!」

「こんのおおお!!!」

その後、三人は逃げ続けていき、遂には――

――先に靈王宮へと突入している皆が集まっている地点にまで来てしまった。

「うおい何やあれえ!?みんな逃げるでえ!!!」

「うわあああ!!!ていうかよく見れば乗ってるの涅さんじゃないっすかあ!?!何やつてるんすかああ!!!」

「待て貴様らあ!!おいアスキン・ナツクルヴァール!!貴様まで何を逃がっている!?!」

「アンタも人のこと言えねえだろうがああ!!!」

平子や浦原、そして他の皆も絶叫しながら逃げる中、親衛隊である筋骨隆々の滅却師『ジェラルド・ヴァルキリー』もアスキンにブーメラン発言をしながら走っており、もはや先程まで争っていた皆が共に足削地蔵から逃げる構図へとなっていた。

「フハハハ!!日頃の恨み日頃の恨みイ!!!」

「おい!!日頃の恨みと言われておるぞ園原千弘お!普段からどんな仕打ちをしとればこんな事になるのだあ!」

「そんなもの全く心当たりがありませんよお!!ただあの人の顔貼ったサンドバッグや木で素振りや体術の練習したり顔に落書きしただけですよお!!」

「ありまくりだろうがあああ!!」

ジェラルドとアスキンが突っ込む中、ジェラルドはその場に立ち止まりマユリを睨みつける。

「己えええ!!我を侮るなあ!!我が能力は【the miracle】!傷ついた箇所を神の尺……ぐぼへえ!」

「邪魔だヨ」

だが、説明する間もなく足削地蔵の巨大な拳が、立ち向かおうとしたジェラルドをぶっ飛ばした。

「あくもう!淫さああん!!良い加減にしてくださいああい!!」

「だったら退けば良い話だ口?別に私は君らではなく滅却師を追っているんだから」

浦原の叫びに対してマユリが返した言葉を先頭を走る千弘以外の皆が聞くと、その場に一齐にして左右に散った。

すると そのまま巨大な足削地蔵は、左右に避難した皆は勿論だが、なんとアスキンさえも無視していき、未だ逃げる千弘の方へと走っていった。

「あ…やっぱり園原さん狙ってたんスね…とほほ…」

作戦がグチャグチャになった事で浦原は帽子で顔を隠しながら落ち込むのであった。

その一方で、足削地蔵は街の外観を破壊しながら千弘を追いかけていき、そのまま中心の巨城へと向かっていった。

—————  
—————  
—————

――  
――  
――

真世界城の中央にある玉座にて。

「ようやく収まったか…」

マユリの作成した連続光線銃を防いでいたユーハバツハは、もう向かってくる気配がない事を感じ取ると玉座に腰を下ろした。先程まで向かってくる光線銃を全て撃ち落としていたのか、周囲には焼け焦げた跡と、天井が崩れ瓦礫が周囲に四散している悲惨な光景が広がっていた。

その時であった。

ドドドドドドドドドド…。

「…ん？」

扉の向こうから何やら凄まじい勢いで向かってくる足音が聞こえてきた。その音を不審に思ったユーハバツハは己の能力を発動させて未来を見る。

「…！」

その目に映ったのは、崩壊し瓦礫の海とかした真世界城であった。一体何が起こったのか？ユーハバツハは更にその直前に起こった出来事を見ようとした。

その瞬間

ドン!!!

「!?」

目の前の扉が開く事なく吹き飛ばされると、そこから砂煙をあげながら千弘、石田、ハツシユヴァルトが並びながら走ってきた。

「「うおおおおお!!!」」

「な…貴様ら…なぜここに…」

「貴方も逃げてください!!早く!!」

「陛下!!今すぐお逃げを!!!」

そう言いながら問い掛けに答える事なく千弘とハツシユヴァルト達は横を通り過ぎていった。一体何があつたのか？ユーハバツハは千弘の動作を見て状況を確かめるべく目の前の光景を目にした。

「な…!!」

その目に映つたのは――

「あ…あれはまさか…!!」

――空中で超巨大な千手観音像が此方に向けてドロップキックの体勢を取っている光景であつた。

「くたばれ千弘おおおおおおお  
!!!!!!」

「やっぱり分かつてたんだろおが腐れ局長おおおおお!!!」

その瞬間 ドロップキックが炸裂し中心に聳える超巨大な城『真世界城』は崩壊したのだつた。

## クールホーン先生の恐ろしき力

その後 足削地蔵のドロップキックによつて真世界城はユーハバツハごと完全に崩壊し埃だけが舞う瓦礫の山と化した。ドロップキックが炸裂する寸前に千弘はハツシユヴァルトと石田を担ぎながら空中に飛び出してジャンプしていた為になんとかその崩壊に巻き込まれる事はなかった。

――――

――――

――

――

「局長テメエこの野郎お!!! さっきのワザとだろ!? 絶対ワザとだろお!!」

それから地上へと降り立った千弘は真っ先に卍解を解いたマユリの元へと向かうと胸ぐらを掴み上げ前後に振り回していた。その一方で当の本人は100%分かりやすく笑いながら、しらを切っていた。

「おやおや、本物じゃないか。今まで何処に行つてたんだネ?」

「さつきまでテメエに追いかけてたんですよお!!! アンタ途中で日頃の恨み連呼してたでしょうがああ!!!」

「はて? 記憶にないねそんなもの。私が追いかけていたのは君に擬態していた滅却師の筈だが? 何処にも姿が見えないネ」

そう言いマユリは額に手を当てながら辺りを見回すが、当然ながら最初からそんな滅却師など存在しない。

「白々しいんだよ腐れ局長コラアア!!!」

「うるさい奴だネ。おい、ネムにメガネ女」

「はい」

マユリが指を鳴らすと、ネムのみならずいつの間にか仲良くなったのか鹿取も現れ、マユリの胸ぐらを掴んで揺らしていた千弘を抱き上げた。

「むぐうううう!!!んぐぐぐぐ…!んぐうー!! (離してくださいああ!!!あの野郎今すぐしばかないと!!!)」

「落ち着いてください…よしよし」

「はあ…♡子供みたいにあやされてる千弘くん可愛い…」

そう言いながら彼女達は暴れる千弘をあやしなから後ろへ引き下がっていったのだった。

「さて、うるさいのがなくなったところで、さつさと…ん?」

そんな中であつた。マユリは背後から巨大な霊圧を感じ取り振り返る。

「おや、これはこれは」

そこには先程吹き飛ばしたジェラード・ヴァルキリーが自身の正解とほぼ同等の大きさまで巨大化していた。

あれ程の大きさとなれば、彼本人の実力によって現隊長では対処できない可能性があるだろう。

だが、マユリはそんな心配など一切していない。

すると、眺めていたその景色に突如として巨大な爆発が巻き起こった。その爆発を巻き起こした原因の者らしき霊圧を感じ取っているのか、マユリはゆっくりと笑みを浮かべる。

「思ったよりも早く終わりそうだね♪」

そして、千弘と鹿取におもちゃにされていた千弘もその霊圧を感じ取り空を見上げた。

「先生…!!!」

—————

千弘がマユリに追いかけられ、それによって真世界城が崩壊していく光景を遠方からリジェ・バロと交戦していたクールホーンは領きながら見ていた。

「さすが私の生徒第一号だわ…マユリちゃんを誘き寄せて本拠地を落とすなんて満点よ」

「いつから生徒だったんですか…」



先程の千弘が足削地蔵を真世界城へ誘導していく様子を頭に思い浮かべながらクールホーンは感嘆し、下の場所で京楽と共に待機していた七緒は突っ込む。

すると

「ふざけるな…!!」

先程までクールホーンに一発も攻撃を当てられないどころか、使う事が許されない切り札さえも5回も使わせられてしまったリジェ・バロは額に青筋を浮かび上がらせながらクールホーンを睨み付けた。

「僕が…陛下から最初に聖文字を与えられ陛下の最高傑作であるこの僕が…お前なんか5度も両目を開けるなんて…!!」

「貴方、さつきからずっと言ってるけど、自分で言ってる恥ずかしくないのかしら? 他人に作られた自分を長く着飾って…そんな人生でいいの?」

「黙れツ!! 貴様ら虚如きが僕ら滅却師に人道を解くなあ!!!」

その言葉と共に霊子兵装によって生み出したライフルの銃口を向けるが、クールホーンには何の傷も穴も見られなかった。

「ふん。何かしたかしら?」

「なぜだ…なぜ園原千弘にも…コイツにも僕の万物貫通が効かないんだ…!」

「…確かに千弘は貫通するには小さすぎるわ。あんなんじゃないやネムちゃんや鹿取ちゃん…卯ノ花ちゃん達との間に子供ができるかどうか心配…。私も大きすぎてビックかミニか微妙なラインだからヤミーちゃんやミラ・ローズちゃんに自信が持てないのよ…」

「な…何を言っている…?」

「でも…見る限り貴方は “big and long boy” じゃない。もっと自信持ちなさいよー」

「本当に何を言っているんだ貴様はあ!」

「なんであの虚さつきから股間の事しか言っていないんだらうねえ…ま、僕のは…」

「こんな緊急時に何やってるんですか隊長おお／／／／」

クールホーンの下ネタに呆れながらも確認しようとする京楽に七

緒は顔を真っ赤にする一方で、完全に乗せられていたリジエはすぐさま正気を取り戻すと自身の身体中からエネルギーを収縮させる。それによって彼の身体は少しずつ蒼く輝き始めた。

「もういい……まさか虚である貴様如きに見せるとはな……!!」

「え？見せるってなに？こか——」

「違うツ!!僕の“完聖体”だ……!!」

「いや私、アンタの“性感帯”になんか興味ないし……まさか自分もカミングアウトするから私もしろって訳？バカにするのもいい加減にして頂戴!!」

「こっちのセリフだあ!!なぜ貴様は終始 卑猥な事しか頭にないんだ!?!」

その言葉と共にリジエの身体を覆っていた光が消えると、先程まで人であった姿がまるで機械生命体の様な凹凸のないシンプルなものへと変化した。

「もう……終わりだ」

その姿となつたりジエバロは空を見上げながら己の真の姿の名を口にす。

「この姿になつたからには……君は僕に触れる事は敵わないよ……。これこそ僕の完聖体——」

——『神の裁き』

「興味無し」

「取り消したああ!?!」

その瞬間 なぜかその文字に何処からともなく斜め線が引かれ、それを見た京楽と七緒が驚きのあまり叫ぶ中、何故かりジエは膝から崩れ落ちた。

「ガハア……なんだこの胸の内を抉るかのような感覚は……」

リジエが膝から崩れ落ちる中、クールホーンは2度3度ほど、その場でマッスルポーズを決める。

そして――

「さあ。他の生徒を助けたいから、そろそろフィニッシュと行かせてもらおうよ」

――月の光に照らされた人差し指を向ける。

その指を向けたクールホーンはその場から態勢を低くさせると、一気に駆け出す。

「はあッ!!」

「な!?!速――ガハア!?!」

その瞬間 クールホーンの身体がリジエが気付かないほどの速度で一瞬にして迫ると、触れることが出来ないはずのリジエの身体の中央を捉え、拳が深く突き刺さった。それによって彼の身体を構成していた白い鎧が一瞬にして碎け散り、全裸となる。

「な!?!僕の完聖体が…がはあ!?!」

全裸となり驚いている暇も与えることなくクールホーンはすぐさま背後から手を回す様にしてその身体にしがみ付くと、その場から一気に空中へと飛び上がった。

「行くわよオオオオオ!!!」

「うわああああ!!!」

その瞬間 二人の身体は月をバックにし、真世界城全域が見渡す事ができる高度にまで達する。

そして、空中にて最高点へと達した二人の身体はそのまま螺旋状の空気を纏いながら――

――アスキンやジェラルドと交戦している浦原達の元へと落下していった。





## 激怒2回目

その後、リジエを撃破したクールホーンの介入によって戦局は一転。アスキンは浦原達が相手をしている一方で防戦一方となっていたジエラルドと対峙する隊長達にクールホーンが加勢し、優勢となっていた。

その一方で――。

涅槃別動隊vsユーハバツハにて。

真世界城を破壊したマユリは、目の前にて此方を睨みつけるハツシユヴァルトに加えて、瓦礫から顔を出したユーハバツハと対峙していた。

ユーハバツハ自身は先程の卍解がやはり応えていたのか、マユリの斬魄刀を睨み続けていた。

「貴様の卍解がこれ程のものとはな…お前のお陰で新たなる世界の礎となる城が台無しだ」

「おや？荒んだ君らの心と比べると寧ろ良くなったんじゃないかね？」

「貴様が言えたことか」

マユリがユーハバツハへ向けて返すものの、ユーハバツハの言う通り明らかにテメエが言えることかという話である。

その一方で、変貌したユーハバツハは霊子を収縮させると刀剣を生み出し、その切先を向けた。

「さあ涅槃マユリ…これ程の事をしてくれたのだ。それ相応の痛みは覚悟してもらわねばな…。あれ程の威力の卍解だ、発動までに時間を要する事など目に見えているぞ」

そう言いユーハバツハは切先から発せられる殺気と共に既に見通している足削地蔵の弱点をも口にした。だが、弱点を見破られているにも関わらずマユリの顔からは余裕が消え去る事は無く、それどころ

か更に笑みを浮かべた。

「うくんまいったネ。まさか見透かされているとは」

「その反応だとこの状況すらもお見通しの様だな。ならば……コイツは予想できていたか？」

マユリに尋ねながらユーハバツハは懐に手を入れると、何かを取り出してマユリ目掛けて投げつけた。

「おや？なんだねそれは……ん？」

投げつけられたその物体は光り輝いており、マユリは目を離さずにいたが、その物体はマユリではなく、彼を横切ると何と後ろの瓦礫にて鹿取やネムに撫で回されている千弘に向かっていったのだ。

「まさか……あれは……!!」

それを見たマユリは一年前の虚圏にて帰還したネムと千弘からの報告を思い出す。

だが、思い出した時にはもう遅かった。

「千弘さん動かないでください……まだ撫で回したりません……」

「私ももう少し！特に下の部分のこ……」

「ちよつと二人ともいい加減にしてください……え？」

その瞬間 光り輝く物体は更に激しく輝くとその光によって3人を包み込んだ。

そして

光が収まった時。そこにいた3人の姿は跡形もなく消え去っていた。

「これは……まさか」

「反膜の匪（カハ・ネガシオン）……ハリベルを捕らえた時に没収したものだ。没収して勿論 改良も施してある。一度 拘束されればどんな者でさえも数ヶ月は身動きが取れぬ。まさかこんな時に役に立つとはな……まあこれで3人ともしばらく異空間の中だ。その間に貴様

ら全員を始末し私の悲願を達成させてもらおうとしよう」

そう言い肩の骨を鳴らし終えたユーハバツハの黒く染まった頭部から再び目の様な斑目模様が流れ始める。

まさに絶体絶命。完全なる希望が絶たれた状況下であった。だが、これ程の状況下であるにも関わらず、まだマユリの顔からは余裕が消える事は無かった。

「確かに千弘さえも拘束してしまうとは驚いたヨ。でもねえ、虚圏が制圧されたと聞いた時から使ってくるとは思っていたんだ」

マユリは全く焦る事もなく、まるでこの状況すらも計算の内であるかの様に笑みを浮かべると、指を鳴らした。

——パチン。

「ここは一つ。君に因縁のある彼らにでも任せようか」

すると

彼の指の音を合図に周囲に鹿取、卯ノ花、元柳斎を除き、千弘に同行してきた初代隊長達が次々と現れた。

「久しいのうユーハバツハ。1000年間会えず寂しかったぞお？随分と老けたものじゃのう」

「千年前の続きといこうじゃねえかあ。前みてえに逃げるんじゃねえぞお!!」

現れた隊長達の中でも特に凶暴な千日、齋藤は歯を剥き出しにしながら笑うと刀を取り出しユーハバツハへと向けた。

勿論だが、彼らだけではない。

「ソイツらだけじゃねえ。俺もリベンジに来たぜえ」

更木もその中に姿を現す。(因みに斑目と弓親と山田は日番谷達の元に向かわせました)

周囲から次々と現れる護廷隊の最高戦力達。それは今現在、親衛隊達と戦っている部隊全員よりも上だろう。

その一方で



「逃げる…か。過去の私ならばそうしていただろう」

千年ぶりにその顔を見るユーハバツハはその頃の景色を脳内に思い浮かべながら笑みを浮かべる一方で、余裕を崩す事はなかった。

周囲に現れた初代隊長達を目にしたユーハバツハは千年前の日と今の自身の目の前に広がる光景を見比べると笑みを浮かべた。

「だが今の私にとって…貴様らなど恐るるに足らんツ…!!」

その言葉と共に彼の身体を蠢く斑目模様が光り出した。

「全員まとめて相手をしてやろう」

—————

—————

—————

ユーハバツハが投げた反膜の匪。それは特定の相手を別次元へと幽閉する拘束道具だ。それは人数に制限はない。

だが、あくまで一人を拘束するために作られているため、本当に無理をして二人が入れる程度だ。それが3人一緒となると、その空間は

めちやくちや狭い。

「( )は……」

「どうやら別空間に閉じ込められてしまったようです。空気は大丈夫ですが…二人でこれほどとなると…かなり狭い…」

そう言いながら向かい合う姿勢で閉じ込められたネムと鹿取は周囲を見回す。その空間は白い上にまるで掃除用具入れの様に狭く、二人は向かい合った姿勢のまま動く事ができなかった。

「…ん？千弘さんのお姿が見えないようですが…」

「そういえばさつきまで聞こえていた声が突然と……」

そう言い彼女らは先程から姿が見えない上に声も聞こえない千弘を呼びかけ探すも、一向に見つからなかった。

そんな彼女らの胸元では。

「むわあああくるしいイイ!!!潰れるく!!!たずげでえええー!」

今にも死にそうな千弘の姿があった。

その後は何とか二人に気づいてもらい、柔らかい山脈の間から脱出したはいいものの、未だにこの空間から脱出する目処が立たなかったという。

—————

—————

—————

—————

一方で、外では悲惨な光景が広がっていた。

「ふん。この程度か?」

ユーハバツハの周囲には全身から血を流しながら倒れている齋藤や更木の姿があった。

あの後、初代護廷隊に加えて更木達が一斉にユーハバツハへ向かっていくものの悲しくも惨敗してしまった。

我先へと向かっていった不老不死や千日、そして更木達はユーハバツハの能力によって刀が届く前に砕かれると共にその身体を殴り飛ばされ一撃で戦闘不能へ陥ってしまったのだ。

更にその場から一瞬にして残りの隊長達の元へと瞬間移動をする拳一つ打ち込むだけで次々と撃破していった。

歴代最強と謳われた護廷隊をもってしても霊王を吸収したユーハバツハには歯が立たなかったのだ。唯一傷を与え食いついた更木でさえも倒すまでには至らなかった。

「千年前の威勢はどうした?私を倒すのでは無かったのか?」

ユーハバツハが挑発気味に周囲に倒れている初代隊長達へと呼び

かけるものの、ダメージが激しいのか、傷を付けられた皆は起き上がる事ができなかった。

そんな中であつた。齋藤、千日、善正寺が突然と起き上がるとユーハバツハ目掛けて飛び掛かつた。

「ヒヤツハアア!!!」

「ホワツタアアア!!!」

「ウラアアアアッ!!!」

「邪魔だ」

だが、それも一撃すら与えられる事なく虚しく終わってしまう。

吹き飛ばされたにも関わらず獣の様に奇声を発しながら再び飛び出してきた不老不死や千日を吹き飛ばし、善正寺を霊子の刀剣で刺し貫き止めを刺したユーハバツハは再びマユリへと目を向けた。

「過去の遺物たる貴様らは後で始末してやろう。その前にまずは貴様だ。涅マユリ」

「おやおやおや。更木だけでなく初代隊長達をこうもアツサリと…いやはや霊王を吸収しただけはあるネ」

「当然だ。千年前の護廷隊など今の私には羽虫に等しい…今度こそ貴様の息の根を止めてや……ん?」

その時であつた。

———  
パリン。

近くの空間に亀裂が走り、穴が出来るとその穴の中から、なんと先程閉じ込められたばかりのネムが出てきた。

「出られましたよ」

「良かった〜!千弘くん大丈夫ですか?お〜い!出れましたよ〜!しっかりしてください〜い!」

更に彼女に続くように目を回しながらグツタリとしている千弘に

続き、彼を抱き抱えながら鹿取が出てきた。

「う…うう…：本当に死ぬかと思いました…」

「ごめんね！まさかあんなに狭い空間の中で私達の間挟まってたなんて気付かなくて…」

「もう良いですから下ろしてください…（涙目）」

「あ、服が乱れてますよ」

千弘が泣きながら鹿取から降りると、ネムは彼の乱れていた服装を新妻の様に正し始めた。

「…」

その様子を見ていたユーハバツハは、咄嗟に邪魔であろうネム及び鹿取を始末するべく能力を発動しようと試みた。

だが、それは一瞬にして中止となる。それは何故か？二人に向けて能力を発動させようとした瞬間 脳内に命令が下されたのだ。

「やめろ。いま手を出せば殺される」と。

生物としての本能が能力を扱う事を制止したのだ。その本能による抑制には流石のユーハバツハ自身も無視ができないのか、そのまま彼らの出方を待つ事となった。

「……………」

それからしばらくして、死覇装を着直した千弘は仕上げに袴の部分の埃を払うようにパンパンと叩いた。

「ようしと…」

「随分と早かったな」

「ん？…：…ああ!!」

そんな中、千弘は突然と聞こえてきたユーハバツハの声に反応すると、彼の元へ振り返り、ああ！と指を差した。

「貴方！きつき私達にむけて何かポイ捨てしましたね!?!と言う事は私達を閉じ込めたのも貴方ですか!?!お陰であと少しで死ぬところだったんですよ!?!」

「気づいていたならば避ければ良いものを。それよりもどうやって抜

け出してきた？あれは新たな次元を作り出し拘束するもの：如何なる者であれ、数時間は抜け出す事は叶わぬ筈だ」

そう言いユーハバツハは千弘が死にかけた事に興味を持ちながらも脱出について尋ねる。すると彼は閉じ込められていた時の光景を思い出したのか、息苦しくそうにしながらも答えた。

「え？いや…そんなこと言われても…殴ったら出れましたよ」  
「なに…!？」

まるでさも普通かのように千弘から放たれた言葉にユーハバツハは一瞬ながら放心してしまう。

だが、千弘の強さを身に染みているからこそ、その言葉の意味をすぐに理解し、平常心を取り戻した。

「成る程…次元さえもお前を縛れぬ…ということか。ならば私の能力で正面から迎え撃つしかなさそうだな…」

「それよりもおじさん。私の畑をメチャクチャにした件なんですけど……ん？」

そんな時であった。ユーハバツハへと詰め寄ろうとした千弘は後頭部から違和感を覚え、手を回した。見れば自身の長い髪を三つ編みでまとめ上げていたゴムが無くなり、髪が解けていたのだ。

「あれ？ゴムが…」

「探し物はこれか？」

すると、ユーハバツハは何かを掴みながら前に出した。見るとそれは一つのヘアゴムであり、それを見た千弘は何か見覚えがあるのか、凝視し始める。

「そ…それは…!？」

間違いない。それは最愛の相手であるネムが自身のために編み込んだヘアゴムであったのだ。

「あのすいません！拾ってくれたのはありがたいのですが、そのヘアゴム…返してもら」

その瞬間

ユーハバツハが摘んでいたヘアゴムが彼のオーラに包まれた。

どこまでも黒く不気味な黒いオーラは炎の様に燃え盛りながらゴムを包み込むと分解していく。それから数秒が経ちユーハバツハの指の先に集まった黒いオーラが消えると……そこにあつたヘアゴムは使い物にならない程までボロボロとなっていた。

そしてユーハバツハはそのヘアゴムの破片を地面へと捨てるのと右足で踏み潰した。

「…あの…そのゴム…眠さんからもらった大事なものなんです…」  
「そうか。ならば取られてしまった己の不甲斐なさを恨むしかないな」

「……は？」  
踏みつけるその脚を見つめながら千弘が静かに言い放つものの、ユーハバツハは謝罪も、申し訳なく思うような言動も、何一つ見せることなく淡々と告げた。

その結果

「……人の私物だけでなく…宝物まで焼いといて…」

再び千弘の怒りを呼び起こしてしまった。

「謝罪の言葉一つなしとはどう言うことですかああああああ  
!!!!!!」

その瞬間 その場を激しい霊圧の嵐が襲い真世界城全域を震わせると共に周囲の瓦礫を吹き飛ばしていった。

「(さあ来い千弘…お前の動きは全て視えているぞ…!!)」

迫り来るその強力な風圧にユーハバツハは余裕を持ち身に受けてはいるものの、側近であるハツシュヴァルトと石田はやはり耐えきれなかったのか、そのまま離れた場所まで吹き飛ばされてしまった。

荒れ狂う霊圧の嵐の中 千弘は目の前に立つユーハバツハへ指を向けた。

「いいですよ…そちらがその気でしたら…私も浦原さんから預かった“これ”で貴方をはっ倒します!!」

全身から怒りのオーラを放っていた千弘は懐から“光り輝く何か”を取り出すと握り締めて叫んだ。

それを見た瞬間

「…ん？」

ユーハバツハの目には“ある空間の景色”が映り込んできた。それは青い空に周囲にはおもちゃのロケットや実験器具。更に足元には“すごろく”で出てくるマス目が広がる何とも異様な光景であった。

「なんだ…これは…!？」

「お願いします崩玉さあぁん!!私考案の――

面白すぎるくワアアアアルドツ!!!

「な…崩玉だと!?!…うお!？」

その瞬間 周囲の景色が歪み始めると月が照らす真世界城の景色が消えていき、光り輝く青空と足元にはマスが描かれた景色が作られ始めていった。

「な…なんだ…これは…!?!一体なんなのだこれはあ!?!」

先程とは全く違う景色にユーハバツハが動揺していると、崩玉を握り締めていた千弘はユーハバツハへと指を向けた。

「ここは私のお願いを聞いた崩玉さんによって作られたフィールド。さあ〜!!楽しい楽しいすごろくの始まりですよ〜!!!」

開幕！千弘のおもしろすぎるく！！ユーハバツハ覚醒の兆し！

千弘の叫び声と共に現れたその空間は周囲もろとも包み込み変えてしまった。その景色を目にしたユーハバツハは周囲を見渡す中、即座に打ち破ろうと能力を発動させる。

「ぬん…!!」

だが、その能力が発動する事はなかった。

「バカな…力が使えない…!?!」

「この世界では変な能力は使えません。それは正解も同じです」  
「く…」

ユーハバツハが歯を噛み締めると、千弘は空に向けて叫んだ。

「先生！お願いしまあああす!!!」

「うお!?!」

千弘が叫ぶと、上空から黒いものが落下しユーハバツハの肩へと降り立つ。なんとそれはクールホーンであった。

「な…なんだコイツは!?!」

ユーハバツハの肩へと抱きついたクールホーンは嫌らしい鼻息を鳴らしながら彼の髪の毛の臭いを嗅いでいく。

「クンクン…若干ながら親父臭い…けど意外と良いシャンプーも使ってるわねえ。爽やかさと男臭さが合わさってジエントルって感じがして素敵♡ベロベロベロ♪」

「ひいッ…!!は…離れろ気色悪いッ!!」

ユーハバツハが嫌悪感丸出しの怯えた声を発しながら即座にクールホーンの顔を掴み離そうとするものの、彼は離れる事は無かった。

「それは貴方へのリスクです。しがみついた先生はこのすごろくをクリアするまで絶対に離れません!」

「リスクだど?随分と軽いな…この程度のリスクがついたところで私には痛くも痒くも…ん?何だこの臭いは…はあ!?!」



ユーハバツハが千弘へと返そうとした時であった。頭の上から焦げる臭いがし、見ると頭上ではクールホーンがガスコンロを置き炒飯を作っていた。

「なによ！この程度って酷いじゃない！」

「き…貴様あ！人の頭の上で何を!？」

「お腹空いたからご飯の支度に決まっているじゃない！あ、火が弱いわね」

ボオオオオオオオオオオオ!!

「や…やめろお!!髪が！私の髪が燃えるう!!」

ユーハバツハがクールホーンに夢中になっている合間にも既に準備は進んでいた。

「現状を理解できたかこのストコドツコおおおおイツ!!!」

その場から千弘は飛び上がるとネムからヘルメットを受け取り、何故か近くに置かれていた張り手の付いたブルドーザーへと乗り込んだ。

「先生を肩から外したかったら…：：：ゴール目指してえええ

あ、進め進め進めエエエツ  
!!!!!!

ドドドドドドドドドド  
ツ  
!!!!!!

「な…なんだ！この進み方はああああ!？」

遂に始まったスゴロク。

ユーハバツハとクールホーンもろとも砂埃を巻き上げ、ドスコイしながら走り出したブルドーザーはマスの目関係なく突き進んで行った。

「オララララ!!進め進めえ!!あ、ドスコイドスコイ!!ほおくら最初のマスですよオラア！」

バシイイイン

「がはあ!?!」

そのまま二人とも強い張り手によって目の前のマスへと叩き付けられる。

「く……お……おのれ……!!」

ユーハバツハが口元を拭いながらゆっくりと立ち上がる中、前を見るとそこには看板が立てられており、『お化け屋敷』と書かれていた。

『おめでとう〜!お化け屋敷に止まった君には――』

その瞬間 二人の倒れている場所が影で覆われた。それを見たユーハバツハが振り向くとそこには超巨大な岩石が迫っていた。

『隕石プレゼントツ!!』

「ゴハアアアアツ!?!」

ドガシヤアアアアンツ

「突入ッ!!」

そのまま二人は目の前に建てられていたお化け屋敷へと突っ込んでいった。

――

ヒュ〜ドロドロドロドロ…

隕石によってユーハバツハ達が投げ入れられたお化け屋敷の中は薄暗く、地面には草むらが生えている場所であった。

その中央で倒れていたユーハバツハはゆっくりと起き上がる。

「く……お……のれ……ちひ……ガハア!?!」

「あああ!!バカバカバカアア!!アンタ何やってんのよ!お化け屋敷に入っちゃったじゃない!お化けが出るわよお化けが出るわよお化けが出るわよオオオオオオオオオオ!!!」

そう言いクールホーンがユーハバツハの髪を掴み地面へと叩きつ

けながら悲鳴を上げた時であった。

「でないよ☆」

ガス噴射するランドセルを背負いながら飛行するグレイ型宇宙人が現れた。

そうです。なぜならここは宇宙基地だからです♪

—————

—————

———

「よっしやアア!!!では続いでのマスヘレッツツゴーオオ!!!!」

「な…なんだ今のはあ!?!」

その言葉と共に場面は変わり、ユーハバツハとクールホーンのみならず現れた宇宙人までドスコイしながらスゴロクは再開した。

「ふざけるな!こんなものがスゴロクな訳ないだろ!やらせるならちゃんとしたサイコロで進ませろツ!!」

「ダメです♪」

「なに!?!」

ドドドドドドドドドツ!!

「オラオラオラ!進め進めえ!あドスコイドスコイ!続いでのマスは…」

そう言い次に見えてきたのは煙突が立ち、【湯】と書かれた暖簾がぶら下がる建物であった。千弘の運転するどすこいブルドーザーはそのまま突っ込んでいく。

ドガシヤアアアアアツ!!

「動物銭湯だあ!!」

「ガハア!？」

壁が破壊されると共に中へと吹き飛ばされたユーハバツハは目の前に広がる湯船へとダイブした。

「ぶはあ……何だここは……風呂……!？」

湯船で全身ずぶ濡れになりながらもユーハバツハは湯船から顔を出し立ち上がった。彼が飛び込んだ場所はなんと動物達が二足歩行で談笑しながら背中などを洗う風景であった。

そんな中であつた。一匹の動物から声が掛かる。

「おいおっさん」

「あ……?」

「背中洗えや……♪」

そこには何故か二足歩行の豚が背中を向けながらスタンバツていた。

「……このブタめ……!!」

その豚の態度にユーハバツハが青筋を浮かべていると、背後からシャンプーを持った千弘とクルルホーンの手が置かれた。

「いいから……洗いなさ……い!」

そう言い彼らはユーハバツハの長い髪どころか頭全体が隠れるほどまで掻き始める。

「はい お湯!」

バシヤアアン!

「そしてドライヤー!!」

ブワアアアン

流してすぐの超温風ドライヤーによってユーハバツハの髪は先程よりもボサボサになってしまった。

—————

—————

—————

—————

「サツパリしたところで次行きますヨオオオオ!!!」

「待て！今の間は何だったのだああ！！」

そして再びドスコイブルドーザーの旅が始まった。勢いは先程よりも更に凄まじく、マスや障害物さえも蹴散らしていった。すると 遠くの方から次の地点が見えてくる。

「さあ〜続いているのマスは〜！！」

見えてきたのは立派に建てられ、『十二番隊系列 旅館』と書かれた建物であった。

「旅館だあああー！！」

ドガシヤアアアアンツ！！

「ガハアツ！！」

旅館へと突っ込んだ千弘はすぐさま目の前に敷かれていた布団へとユーハバツハを案内した。

「さあ寝なさい！」

「ふざけるなあ！！誰が寝るかあ！！」

「ならばあ…」

ユーハバツハが拒否すると分かると千弘はねんねこを羽織り巨大なカラカラを振り回した。

「ねくんねくんこ〜ろりヨツ！！」

「ゴハア!?」

振り回したカラカラが見事にユーハバツハへ直撃すると彼の身体を布団へと吹き飛ばした。

「さあユーハバツハちゃん！いらっしやく〜グベエ！」

そして吹き飛ばした先にスタンバっていたクールホーンの顔面へと直撃すると二人共々揃って布団へとダイブしたのだった。

「さて、眠っていたらだいてなんですが……」

ガチャガチャガチャガチャ—— 千リリリ。

千弘がポーズを取ると暗くなっていた景色が一瞬にして明るくなり、目覚まし時計と共に朝日がやってくる……

「朝だああああー!!!しゅっぱあああああつツ!!!」

「コイツさつきからやりたい放題だああ!!!」

そして再びドスコイブルドーザーを起動して二人をドスコイしながら突き進んでいった。

「オラオラオラ!!次行きますよ次いい!!!」

ドドドドドドドドドツ!!!

ユーハバツハが悲痛な叫びを上げていく中、彼をドスコイしながら突き進んでいたブルドーザーは遂にはマスどころか建物さえも関係なくぶち破りながら突き進んでいった。

すると 次の建物が見えてくる。それは『安らぎ（技術開発局）の館』と書かれたものであり、それを見た千弘は額に手を当てた。

「あくしまった…次は体力回復のマスだな…」

千弘から溢れた言葉を、ブルドーザーでゴロゴロと転がされていたユーハバツハは耳にすると笑みを浮かべる。

「…!（丁度いい…ここで体力を全開し形成を逆転してやる…!）」

そう言い全く根拠も希望もない期待を抱きながら、次なる到着点へと再び飛び込んだ。

ドガシヤアアアアン

「ここは安らぎの館です♪」

「おのれまたこんな放り込みを…だがまあいい…これで体力が…」

体力を回復できる事を期待していたユーハバツハが目を向けるとそこには――

「ようこそ。私の安らぎの館へ…♪」

――手術台と大量の実験器具を両手にスタンバツているマユリが待っていた。

それを見た千弘は叫びながらユーハバツハを殴り飛ばした。

ドゴオオオオオンツ!!

「どこが安らぎだあああー!!!」

「私のセリフだああ!!!」

そのまま千弘に殴り飛ばされたユーハバツハはその場から壁を突き破りながら吹き飛ぶと、外でスタンバっていたクールホーンに抱き止められた。

「ゴハア…」

「さくまた一緒にブルドーザーの旅に出かけましょ♪」

その時であった。

ブオオオオオオオン

空の彼方から炎を纏った宇宙衛星に捕まりながら千弘が二人に目掛けてダイブしてきた。

「ブルドーザーアアアア!!!到着うううう!!!」

ドガアアアアアンツ

「グハアアアあああああああ!!!」

その瞬間 その場が大爆発し巨大な煙が舞った。

—————  
—————  
—————

その後 すぐろく空間は消滅し、再び元の世界の景色へと戻った。千弘の目の前では全身がボロボロとなったユーハバツハが片膝をついていた。

「ハア…ハア…ハア…!!」

全身から流れ落ちる汗に加えて、疲れている事が一目瞭然な荒い息。見るからに肉体的にも精神的にも疲れているご様子であった。そんな中でユーハバツハは呼吸を整えながら目の前でネムに抱き抱えられている千弘へと目を向けた。

「なぜ…貴様が崩玉を持っている…!?!」

「ここへ来る前に浦原さんから預かって欲しいと頼まれたのです。私ならば大丈夫だろうって。不安なので断ろうかと思いましたが壹万環出すと言われて断れず受け取りました」

「金の亡者め…」

千弘は崩玉を懐に仕舞うとユーハバツハを睨む。

「さて…貴方をもつとボコボコにしたい所ですが…あいにく私は殺生が嫌いなのでここでやめておきます。ただ、捕縛はさせていただきますよ?」

そう言う千弘は手を合わせて縛道を唱えようとする。すると、それを制止するかの様にマユリが手を出して止めた。

「待て。縛道程度じゃ奴は捕えられんヨ」

「じゃあどうします?」

「簡単ダ」

千弘を下がらせるとマユリは懐から一つのカプセルを取り出すとユーハバツハ目掛けて投げた。

すると、投げ出されたカプセルが音を立てて破裂すると、ユーハバツハを中心に赤い正方形の結界が形成され彼を閉じ込めた。

「なんだこれは…!」

「なにつて、千弘細胞で作られた結界だヨ。千弘本人…もしくは奴の細胞を取り込んだオカマ破面や私の正解でなければ壊すことは不可能だ。勿論君程度の霊子兵装じゃぜくっ対に無理」

「く…ならば」

マユリの説明を聞いたユーハバツハは即座に己の影を展開しようとするが。

「取り込む気かい?やるなら止めないヨ」

「!」

自身の考えを見透かされていた事にユーハバツハは驚き、結界に触れようとしていた手を止めマユリを睨んだ。

「何か仕組んでいるな…」

「勿論」

頷いたマユリは懐から幾つかの瓶を取り出した。



「この結界には触っただけで『凄まじい倦怠感と全身が引き裂かれる程の痛みを襲われる毒』に加えて体内に取り込んだ瞬間に『全身麻痺を引き起こす毒』そして全身の筋肉が痺れ少しでも動かなくなると『吐き気』『咳』『超高熱』が作用する仕組みになっている。まあ、君にはもつとサービスしてあげたかったんだが、時間がなかったものだから悪く思わないでくれたまえ」

「確かに恐ろしいな…目先の宝が手に入らぬ気分だ…だが…!!!」

ユーハバツハは歯を食いしばるものの、すぐさま笑みを浮かべながら結界へと手を伸ばす。

「そんなものでこの私が諦めると思ったか!? 幼き頃に味わった三重の苦しみに比べれば緩いモノだ…!!!」

フラフラとしながらも立ち上がり、ユーハバツハが結界へと手を伸ばした瞬間だった。

「ぐうああああ!!!」

ユーハバツハの全身に電撃が走ると共に節々から痛みが現れ、立っている事すらもままならなくなってしまう。マユリの言葉どおり倦怠感と痛みを襲われたユーハバツハは苦しみの声を上げながらその場に膝をついた。

その痛々しい光景を見つめていたマユリは意外にも耐えている様子に驚いていた。

「ふくむ。やはり毒がイマイチだったか。どうせなら感覚を狂わせる毒や脳からの信号をシャットアウトする毒も入れておくべきだったネ」

そう言いマユリが顎に手を当てながら分析するものの、今もなお、ユーハバツハは苦しみながらも結界から手を離さなかった。全身を駆け巡るその痛みはもはや精神が崩壊してもおかしくない程だ。だが、凄まじい生への執念なのか、結界からは手を離さなかった。

いや、それどころか自身を囲う結界を腕に展開した影の中へと次々と吸収し始めた。

「ん？おいしい。それ以上吸収してしまえば容量を超え」

そして。全ての結界を己の影に吸い込み終えた直後。

「ガハア…!!」

「おや、遅かったようだね」

ユーハバツハの口から血が吹き出した。マユリの宣言通り体内に取り込んだ千弘細胞にユーハバツハの身体が耐えられず、臓器が破壊されてしまったのだ。

「本来なら豆粒程度でいい千弘細胞をその結界には大きじ5杯分入れたんだ。いくら君の身体でも過剰摂取した千弘細胞には適合ができなかったようだね。ま、安心したまえ。君の遺体は今後の為に有効活用してあげるヨ」

その言葉が言い終わる頃には

ユーハバツハの身体は大地に伏しており、その目からは光が消え去っておりまるで中身のない虚のように口元を開けていた。

尸魂界を蹂躪するべく立ち上がった滅却師の始祖は今、目の前の死神達によって倒されたのであった。

「局長…どうですか…?」

「ふむ。どうやら終わったようだね」

マユリはユーハバツハの元に近づき様子を確認すると死亡した事を知らせた。それに対して千弘は少し表情を暗くさせながらも静かに彼へと合掌するのであった。

—————  
—————  
—————

――  
――

その後、千弘達は周囲に倒れている更木や初代隊長達を回収し、日番谷達と合流するべく霊圧が感じられる方向へと首を向けた。

「さて、とつとと帰るヨ。それと残りの滅却師も聖文字とやらの力が切れて倒しやすくなる筈ダ」

マユリの言葉と共に皆はユーハバツハへ背を向けて歩きだしたのだった。

そんな中である。

「どうしました？千弘くん」

ふと鹿取の前を歩いていた千弘が立ち止まった。不思議に思った彼女は尋ねると、千弘はボソツと呟いた。

「何か…来る」

「「「？」」」

その言葉に全員が疑問を持ち始めた時であった。

「お前達にはまだ教えていなかったな」

背後からユーハバツハの声が聞こえた。その声を耳にしたマユリ達はすぐさま振り向くと、見れば地面に広がる黒い影の中心で倒れていた筈のユーハバツハの影が動き出し始めていた。しかも聞こえたその声は以前よりも高くなっていた。

「私が率いる星十字騎士団にはそれぞれ能力の頭文字を添えた『聖文字』が与えられている。無論私にもだ。私の聖文字は『A』the

All mighty」

「それが何だというんだネ？」

「まだ分からぬか？貴様の仕込んだ毒によって本来なら私は毒で苦し

み、千弘の細胞に適合できず死ぬ筈だった。だが、全て視えていた上でそれを書き換えた。『適合できず毒に苦しめられながら死ぬ』未来を『毒を克服し細胞に適合する』未来へ」

そして その言葉と共に蹲っていた影が再び立ち上がった。

「the allmightyは未来を見る力ではない」

未来を改変する力だ」

その言葉を聞いた時には、既にその声は先程よりも一段と高く、少年の様に若々しい声へと変わっていた。更に変わったのは声だけではない。

影の中から立ち上がったその姿を見た一同は驚愕する。

目の前に立っていたユーハバツハ。それは以前の大柄で貫禄のある姿とは異なり幼い少年の姿へと変化していたのだ。

覚醒ユーハバツハ【千弘細胞完全適合】

## 別次元の戦い

ああ…変わっていく…私自身が生まれ変わっていく…人間という  
隔絶された世界から…別の存在へ…

この感覚はまるで…物心がついたまま母親の胎盤から出て来るよ  
うだ…。

そうか千弘…これがお前の見ていた景色か…実に孤独なものだな。

—————

—————

—————

—————

千弘の細胞を吸収し進化したユーハバツハ。その姿は子供となつたが、死神の細胞を取り込んだ為なのか、身体中からは凄まじい霊圧を放っていた。

そんな中であつた。未来を改変すると言う力に千弘と鹿取、クールホーンは首を傾げていた。

「未来を…?」

「視る?」

「改変する?」

「そうだ。私の目は貴様らのこれから来る全ての未来を見通す事ができ、同時にその先に広がる無数の事象へと干渉できるのだ」

そう言いユーハバツハは己の目を触りながら3人へと説明した。それを聞いた3人は顔を真っ赤にさせる。

「ちよ…ちよつとおお!!それって私の私生活も丸見えつて事ですよね?!眠さんという時とかも見られてるって事ですよね?!覗きですよ覗き!!悪趣味なツ!!」

「…と言う事は私がネムちゃんと一緒に千弘君を押し倒して夜な夜な布団の中であんな事やこんな事をしている場面も…////」

「アタシがヤミちゃんやミラちゃんにチョメチョメされてるところも…!? アンタあ!! 大層なのは名前だけで中身はただの覗きじゃない!!! ふざけんじやないわよお!! こんなのもうプライバシーの侵害よ! 弁護士! 誰か弁護士呼んでちょうだい!!」

「勘違いも甚だしいぞ貴様らッ—— は!? なぜ私はこの程度の事に…!?」

騒ぎ立てる3人に怒鳴りながら返したユーハバツハは自身でさえも理解できなかった己の反応に驚いた。

「なぜだ…なぜ奴に…ん?」

ユーハバツハが自身の両手を見ながら驚くその一方で、千弘達は何と舞台までご丁寧に用意した寸劇へと発展していた。

見れば割烹着を着たクールホーンがセーラー服を着たネムと鹿取、そして彼女達の間で学ランを着て座る千弘とちやぶ台を挟んで向かい合っていた。

お母さん(クールホーン)「ちよつとアンタ達! 姉妹揃って同じ男の子を好きになるってどう言う事かしら!? お母さんはそんな不純な関係絶対に認めませんからねッ!!」

妹(ネム)「そんな…! お母様…私達の彼への愛は本物なんです…!」

姉(鹿取)「それにデキ婚のお母さんに不純だのとやかく言われたくありません!」

お母さん(クールホーン)「なんですってえ!? この子達ったら…いつからこんな風になってしまったのかしらあ!? もう…お父さんから何か言っただけでございませぬ!」

お父さん(ユーハバツハ)「まあまあ母さん…! そう興奮するな。まず二人の話を——」

「なあああ!!!??」

いつの間にか自身までスーツにネクタイ、付け髭までして寸劇に参加してしまった事にユーハバツハは気づくと頭を掻きむしりパニッ

クに陥ってしまった。

「く…なんなんだこれは…?!気づけばその場に…一体これは…?!」

いつもの自身を見失ってしまう事態にユーハバツハは地面に顔を擦り付けてしまう。一心不乱に原因を頭の中で模索する中、ある考えが彼の頭をよぎった。

「(ま…まさか…!!奴の細胞を取り込んだ事で思考までもが反映されていると言うのか…?!?)」

辿り着いたその答えにユーハバツハは最初は疑念を抱いていたものの、先程の2回に渡る自身の様子を思い返して、それが真実であると確信する。

「ふう…(慌てるな…落ち着かせろ。思考を一つに絞れ…)」

そして ユーハバツハは己の慌てる心を落ち着かせると散乱していた思考を一点へと絞る。

千弘を殺す。

すると 全身から青い炎が溢れ出し彼の身体を覆い始めた。思考を統一させた事でユーハバツハは自身本来の冷静な思考を完全に取り戻したのだ。

その一方で、その様子を人差し指と親指で輪を作り覗きながら観察していたマユリとクールホーンは驚いていた。

「ふくむ。コイツは驚いた…取り込んだ千弘細胞を強制的に分裂させたのか、身体の99%が千弘の細胞に成り代わっている。しかも今もまだ分裂を繰り返しているじゃないか」

「その通りだ涅マユリ」

己の身体の具合を調べるかのように何度も腕を握り締めていたユーハバツハは頷くとマユリへと目を向けた。

「感謝するぞ…貴様ら死神に近づいた事に不満があるが…お陰で私は新たなる境地へと辿り着けた…これでもう力が散る事も…幼き頃へ戻る心配もない…」

そう言うとユーハバツハは空へと手を向ける。

「もはや私に…我が子たる星十字騎士団さえも必要ない…!!」

その一言と共に掲げられた掌から青い霊子の光線が真世界城の4地点へと降り注いだ。

### 『聖別』

ユーハバツハが不要と判断した滅却師から力を奪い、他の者へと譲渡する技だ。だが、もはや選別とは言えずそれはただ力を奪い去る“没収”でしかなかった。

自身の親衛隊であるリジエ、アスキン、ジエラルド、そしてハツシユバルトから奪い取った能力と力が彼の元へと収束していった。

そして 全ての滅却師の能力を吸収したユーハバツハの目は先程と異なり蒼く輝き始めた。

だが、ユーハバツハはまだ手を止めなかった。聖別を終えてもなお手を下ろす事なく、その手を天へと掲げていた。

「次は掃除だ。邪魔な者達には消えてもらおう」

### その瞬間

掌が輝き出すと青い霊子が吹き出し無数の槍へと変形すると地上へと降り注いだ。

その霊子の槍は誰も認識できない程の速度で溢れ出ると地上へ向かっていき、皆を貫こうと迫っていく。

ここで一つ。この霊子の槍には更に恐ろしい点が存在していた。それはこの降り注ぐ霊子の槍一つ一つが下に立っている死神、滅却師、虚全てを的確に捉えている事だ。

千弘の細胞を取り込んだ事によりユーハバツハは完璧な感知能力を手にして自身以外の死神、虚、滅却師果ては動植物達の位置までも全て把握していたのだった。

だが、そんな業を彼が見過ぐす筈が無い。



「よっ」

最初に放たれた槍が地面へと直撃する寸前に、千弘が刀を引き抜く音と共に消えた。その直後に全てのユーハバツハ以外へと降り注ぐうとした何千何万ものある霊子の槍全てが千弘の斬魄刀による斬撃で纏めて掻き消された。

その光景を目にしたユーハバツハは視ていたのか、笑みを浮かべる。

「…やはり防ぐか」

「あの、迷惑なんでこういうのやめてもらえませんか？」

その目線の先には刀を鞘に納め、既に元いた位置に戻っていた千弘が立っていた。尸魂全域へと降り注ぐうとしたその霊子の槍を全て防いでいてもなお疲れる様子は見せていない。

それに対してユーハバツハは己の覚悟を決めると霊子の炎を右手から溢れさせた。

「貴様のスピードとならばもはや改変など役に立たぬな…故に力でねじ伏せるしか無さそうだ」

その言葉と共に、霊子の剣を生成するとその切先を向ける。

「さあ千弘…いや、剣聖『抜刀斎』よ…。ここで決着をつけようじゃないか」

「…」

刃を向けられた千弘は難しい表情を浮かべるとそれを隠すかのようには顔を手で覆った。

「どうした？私と闘うことに迷いが生じているのか？戦いを嫌うお前にとっては酷だろうな」

「いや…普通にストーカーみたいにしつこくて呆れてるだけです…」

「……」

その言葉にユーハバツハは額に青筋を浮かび上がらせるとその場から千弘目掛けて飛び立った。

「ならばさっさと終わらせるぞ…!!」

そう叫ぶと共にユーハバツハの音速に達する刀剣の一振りが千弘目掛けて放たれた。それは千弘の細胞を取り込んだ事で更に強化さ

れており、なんと初速から光と同等の速度へと達していた。

「めんどくさいし危ないなあ!」

対する千弘もめんどくさがりながらも斬魄刀を鞘ごと引き抜くと、その一撃を難なく受け止める。

——キイイインツ

互いの刀と鞘が衝突した瞬間 巨大な金属音と共に周囲に衝撃波が発生し瓦礫を吹き飛ばしていった。

「局長に眠さん達!危ないから下がっててください!」

「ふむ。では終わったら呼んでくれたまえヨ。それまで我々は向こうで休憩しているからね」

そう言い千弘から避難を言い渡されたマユリは皆を連れて離れた場所へと移動していった。

その一方で衝撃波の中心地となった深いクレーターの中で互いに剣を交えた二人の身体は青と白のオーラに包まれるとその場から空中へと飛び立ち、衝撃によつて空に舞い上がった無数の瓦礫を足場にしながら再びぶつかり合った。

—————

力を抜き取られた事により白骨化したジェラルドの骨の上から見上げていた白哉や、復活して途中から参戦した日番谷、そして他の隊長達はあまりにも神秘的な光景に目を奪われていた。

彼らが見上げた空には

——空全体を覆尽くす程の広大な幾何学的構造体が輝きながら広がっていたのだ。

「これは…一体…」

「さっき一瞬光り出したかとおもたら今度はなんやねん…!?これは誰か…闘うとるとでも言うんか…!?」

白哉や平子は勿論、その場に居合わせた卯ノ花を除いた皆はその光景に目を奪われていた。

その神秘的な光景の正体が神速の域へと達した二人の超人の闘いで作り出された軌跡である事は、彼の力を深く知る関係者達以外知る由も無い。

その時であった。

「…ん？なんや…!？」

空中に何かを見つけたのか、平子はある一点を見つめる。見るとその幾何学的構造から何やら黒い塊が落下し、離れた場所へと着弾した。

—————

「ほっ！」

空中にて再び刀を衝突させる中、千弘の力によって吹き飛ばされたユーハバツハは宙を舞うも、すぐさま態勢を整える。

「これが細胞の力か…前の姿では致命傷になりかねなかったその蹴りも今では何の痛みも感じぬ…」

すると ユーハバツハは人差し指を向けた。

「どれ、一つ試してみるか。—————

—————  
//破道の九十〃黒棺…ツ!!!

「…ん？」

その瞬間 千弘を取り囲むかのように黒い棺が形成された。しかもその構成速度は藍染を遥かに凌いでいた。

「おっと」

対する千弘は構成し終える前に一瞬で脱出すると空気を蹴りユーハバツハから距離を取った。

だが、ユーハバツハは手を緩めない。

「まだだ。〃黒棺〃」

再び千弘に向けて手を向ける。すると、千弘の周囲に、またもや黒

棺が形成され、千弘を包み込もうとしてきた。

「おわ!？」

それを千弘は驚きながらも全て目を向ける事なく避けていくが、彼の動きが停止する場所を先読みしているかのように千弘が停止するとすぐに新たな黒棺が形成されていた。

「藍染隊長が愛用してた鬼道ですか!?!同類になってしまいますよ!いいんですかあ!？」

「その慢心が仇となるぞ:!!！」

ユーハバツハは無詠唱でありながらも次々と黒棺を作り出している、それを千弘は空気を蹴りながら次々と避けていった。

そして

その動きが10回に到達しようとした時であった。ユーハバツハはタイミングを見計らっていたのか、両手を合わせる。

「メン:!!！」

すると千弘の周囲に展開していた黒棺が形状を変化させて液状化すると千弘へと襲い掛かり、0.1秒待たずして包み込み収縮すると、小型の黒棺へと変貌した。

一見無詠唱時の形に見え、威力は控えめだと感じ取れるが、それはとんでもなく大間違いだ。先程の周囲の黒棺を凝縮して作られた黒棺は本来ならば宇宙から視認可能な程の大きさを誇る。

それ程の大きさの黒棺を無理やり収縮させたのがあの形状であるのだ。それはつまりどういうことか？

ただでさえ即死級の威力を誇る次元の奔流があの小さな空間に無理矢理押し込まれているのだ。即ちあの中は隙間も何も無い超高濃度の重圧の奔流で満たされているという事である。それ程の威力ならば例え零番隊を纏める和尚でさえも塵一つ残らないだろう。

「:…」

その黒棺の前にユーハバツハは握っていた手を下ろした。

「どうだ千弘。初めて鬼道とやらを使ってみたが:だがまあ、この程

度では終わらんか」

そう口にした時であった。

「よつと」

目の前に形成された黒棺が、突然と走り出した青い亀裂によってバラバラに破壊された。破片が舞い散る中、刀を鞘に戻していた千弘はその場からクルクルと回りながら着地すると、ユーハバツハへと目を向けた。

「まだやりますか…？」

「当然だ」

その一言と共にユーハバツハは再び鬼道を発動させる。

『破道の九十九 五龍転滅』：ツ!!!

すると 周囲から霊王宮とほぼ同じ大きさの頭部を持つ超巨大な青い龍が五匹ではなく数十匹現れ周囲を取り囲んだ。ユーハバツハは龍達へと指示を下すかのように手を向ける。

「やれ」

「ええ!? 勘弁してくださいよお!!!」

その瞬間 周囲に出現した龍がアツサリと千弘に掻き消されると共にユーハバツハと千弘は再びぶつかり合った。

!!

!!

!!

青と白のオーラへと身を包んだ二人は空中を飛び交いながら何度も何度もぶつかり合っていく。

時には刀。時には拳。その巨大な力の衝突はもはや大気と大気がぶつかり合っているかの様に尸魂界全域を激しく振動させていた。

そしてぶつかり合う二人はその場から高く高く飛び上がっていく

—— 遂には大気圏へと突入する。

「千弘オオオオ!!!」

「うるっさいですよ！近所迷惑でしようがああ!!」

ユーハバツハの霊子の剣の一振りを千弘は受け止めてへし折ると  
ビンタを放つ。

「ほいさッ!!」

「痒いぞッ!!!」

「あくどっせいッ!!」

そのビンタをユーハバツハは腕で受け止めるともう片方の拳を千  
弘目掛けて放つが、その一撃を千弘は蹴り上げる形で防ぐ。

そして離れた二人は互いに武器の柄へと手を掛けると再び接近し、  
姿が消えると共に斬り合いとなる。

—— ツツ!!!

—— ツツツ!!!

—— ツツツツ  
ツツツツツ!!!

互いに飛び交うその一撃一撃の威力は衰えるどころか、寧ろ進化し  
続けており、速度はもはや光さえも超えそうになっていた。二人の超  
人による撃ち合いは周囲に多大なる影響を与えており、遂には余波に  
よって周囲に飛び散る小惑星さえも粉微塵となっていた。

「貴様と渡り合えている今だからこそ言える!!やはり貴様の剣技は素  
晴らしいぞ!!千年の時を修練へと費やした貴様は卍解に頼る一介の  
死神共とは全く違うな!!」

「何言ってるんですか!?卍解できる隊長達の方が凄いに決まっている  
でしょうがッ!!過大評価も大概にしてくださいよッ!!」

そんな時であった。

「しまった!?鞆が!」

度重なる刀の撃ち合いによって千弘の鞘に亀裂が走り始めていった。その鞘は亀裂が走り始めてから刀を打ちつけるたびに次々と新しい亀裂が走り出していくと共に壊れていった。

「ヌン…!!」

「おわ!？」

そして 今の衝突によって

千弘の斬魄刀を覆っていた鞘が粉々に碎け散り、刀身が露わとなった。

自身が知りたがっていた園原千弘という男が所有する斬魄刀の正体を目にしたユーハバツハは笑みを浮かべるとその場から後退し、その刀を見つめる。

「それが貴様の斬魄刀か…斬魄刀は始解や卍解によって変形すると聞いていたが…貴様はそのような変形は無いようだな」

「うあああ!!!!どうしよう!!!!また給料から天引きされるううう!!!!」

彼が見つめる千弘の斬魄刀はただの『浅打』であった。誰もが持っている初期状態の斬魄刀に他ならない。その刀には特徴的な部分は何一つ見当たらなかった。

だが、そんな浅打でも他の皆とは違う点が存在していた。

見れば刀身全体から白く輝く気が溢れ出ていたのだ。その刀は気を絶え間なく発し続けており、それはまるで今まで外の空気を吸えずに溜め込んでいた物を吐き出す生き物のようであった。

すると、粉々になった鞘を見つめながら泣いていた千弘がゆっくりと顔を上げる。

「まあいいです。話し合いで解決したかったです…貴方がその気

なら、私も覚悟を決めましょう…」

「…!!」

その目は今までの子供のような無邪気さを感じさせる物ではなかった。目の前に立っているユーハバツハ自身をただ一人の倒すべき敵として認識している「剣士」としての眼であったのだ。

その眼を向けると共に握られた神秘なる美しき斬魄刀から溢れ出る気の勢いが更に増していった。

「いきますよ、日輪さん。この訳わかんない展開をさっさと終わらせましょう」



## 決着 安らかに眠れ

覚醒したユーハバツハにはもう一つ特別な力がある。それは己の命を二つに分ける能力だ。

簡単に言えば自身の細胞を分裂させる事でもう一人の自身を作り出す事ができる。細胞の数によって強さと優劣が変わり、仮に分裂する側の細胞が多ければ分裂した元の身体の身分が下となってしまふ。

千弘と空中で闘っていたユーハバツハは僅かな隙をつき、自身の膨大にある細胞のうち、たった100個を分身体として真世界城へと産み落としていたのだ。

その100個という全体の1%にも満たない数の細胞で作られた分身体でも強さは覚醒する前とは大差がない上に聖文字である *the all mighty* も扱えるために厄介である事は変わりない。

本体から生み出された分身体は地上へと降り立つと姿を変え、覚醒する前のユーハバツハへと変化していった。

そしてそのユーハバツハと対峙していたのが一護であった。

!!  
!!

周囲に金属音を響き渡らせながらユーハバツハと剣を交えていた一護はユーハバツハの剣術に対応しその動きについて行っていた。一護自身も千弘の戦いを何度も目にしてきた為か、動体視力が鍛え上げられていたのだ。だが、それでも一筋縄ではいかない。相手は分身体とはいえユーハバツハ本人であり剣術の心得は勿論だが影を用いた拘束や罠も仕掛けて来ていた。

「ほう…？初めて刃を交えたが…ここまでとはな」

「当たり前だ…それよりもお前…どうやって千弘から逃げてきたんだ？」

「逃げてきた…か。酷い間違いだ。私は奴から逃げも隠れもしていない。〴〵今もなお戦い続けている」

「…は…!?!? どういう…」

その時であった。

ツ!!

その場にいた二人を超巨大な霊圧が襲う。その霊圧を感じた両者はすぐさま戦いを中断すると離れ、上を見上げた。

「この霊圧は…千弘と…誰だ…!?!」

感じられるのは全てを覆い尽くすかのように放たれる千弘とそんな彼に対向するかのように発せられるドス黒い霊圧であった。

その霊圧を感じ取り、一護が驚く一方でユーハバツハは笑みを浮かべた。

「…どうやら決着が着きそうだな」

—————

『日輪』

その名を口にしたと同時に千弘の身体からは今までにない程の霊圧が溢れ出した。その霊圧の強さは過去最高であり周囲の空間を振動させると共に歪め始めていった。

対して千弘の霊圧を身に受けながらも平然としていたユーハバツハは斬魄刀を構えるその姿に口元を震わせていた。

「日輪…それが貴様の斬魄刀の名か…」

「ええ。結構前に夢で変な人が現れて教えてくれました」

目の前で刀を向ける千弘に対してユーハバツハは過去最高の笑みを浮かべる。その理由はなぜか？刀を構え自身を敵として認識された事でようやく彼と対等の立場に立てたからであった。

「ようやくだ…私はお前を待っていた…!!」

笑みを浮かべ絶頂に達していたユーハバツハも霊子の剣を構えりと全身に力を込め、力を最大限に解放した。

すると ユーハバツハの全身へと周囲の霊子が集められていく。その霊子は全て彼の両手に握る刀剣へと吸収されていった。今の彼の身体に宿る細胞はほぼ千弘の細胞である。それは即ち本来の力に加えて千弘の力を得たも同然な状態であった。

彼の全身から放たれる超巨大な霊圧によって周囲の空気が振動し始める。

「ここからは私もフルパワーでいかせてもらうぞ…!!決して油断などするなッ!!」

「…ええ」

ユーハバツハの宣言に頷いた千弘は死覇装の上側を脱ぎ上半身を露出させる。死覇装の下から現れたのは細身でありながらも極限まで鍛え上げられた肉体であった。身体の所々には傷があり、歴戦を潜り抜けてきた印象を与える。

上着を脱ぎ捨てた千弘はユーハバツハの言葉を受け取ると共に自身も本気になる事を宣言する。

「私も全力でお相手しますので御覚悟を」

互いに全力を出すと誓い合った二人は睨み合いながら己の心の奥底にある闘志を燃え上がらせていく。二人の間の空間は互いに発せられる超高密度の霊圧によって歪み始めて行った。

そして 一筋の風が吹き両者の頬を撫でた時であった。その感触がゴングとなり互いは己の得物へと手を掛ける。

「ゆくぞ…!!!」

先手を取ったのはユーハバツハであった。そのまま剣を構えて千弘目掛けて振り回して行った。

対して千弘も剣を振るった。両者の剣が交わり金属音を響き渡ら

せると周囲の空間が次々と歪み始めていく。

!!  
!!!  
!!!  
!!!  
!!!  
!!!

何度も何度も両者の剣が重なる。それは側から見て二人が剣を交えていない間もだ。両者はただ一言もはつする事なく剣をぶつけ合った。

そして、ある一撃と共に刀が大きく衝突し周囲の空間を歪め始めた時、互いに後方へと跳躍すると、遂に千弘から本格的に動き出した。「:!!!」

後退した直後に日輪を構えた千弘はユーハバツハ目掛けて空気を突き抜けながら飛び出していく。対してそれを見たユーハバツハは笑みを浮かべながら叫んだ。

「言った筈だ千弘…油断はするなと…!!!」

### その瞬間

景色が変わり千弘の背後へとユーハバツハが現れた。事前に the all might を発動させ、最初に映り込んできた未来を改変し、千弘の目の前にいた自身を背後に立つように改変したのだ。

「さらばだ千弘!!お前の事は決して忘れぬぞッ!!」

背後を捉えたユーハバツハは全身全霊の力を込めると、千弘目掛けて刀剣を振り回した。振り回された刀剣は蓄えられたエネルギーを全て吐き出すかのように神々しい光を放ちながら千弘へと向かっていく。

その後。

「…なに?」

ユーハバツハの手から剣が溢れ落ち空気へと溶けていくかのよう  
に消滅した。それと同時に全身から力が抜けていくかのような感覚  
に陥っていく。

「何が……起こっ——まさか!」

力が抜けていく中、ユーハバツハは自身の身体を見ると目を大きく  
開いた。見ればいつの間にか胴体が真っ二つに切断されていたのだ。  
下半身はそのまま直立している一方で上半身は空中へと投げ出され  
ていた。

「なぜ私の体が…!」

突如として自身が真っ二つになっている事に驚きをかくせなかつ  
たユーハバツハは0.1秒前の自身が千弘の背後に立った時を思い  
出した。その時、微量ながらも彼の腕が動いていたことを。

自身が背後を取り攻撃へと移った たった0.01秒。森羅万象  
の生物が反応する事が不可能な領域である。その時間の中で既に千  
弘の刃が自身を斬っていたのだ。

「あの一瞬で…私が気づかない程の速度で斬魄刀を…!」

ユーハバツハが自身の胴体を見て驚く中、千弘へと目を向けると千  
弘は手に持っていた刀を下ろしていた。

「何を言っているのか分かりませんが、隙だらけだったので攻撃させ  
ていただきました」

「…ッ!」

その一言でようやくユーハバツハは理解した。全身全霊に力を込  
めた上に彼の細胞を取り込んだ自身でさえも 本気となった彼に全  
く敵わなかったことを。

ユーハバツハは the almighty を発動し現状を打  
破するべく未来を見る。だが、どの未来を見通しても全て千弘に倒さ  
れる未来へと行き着いてしまう。

己の身体を再生すれば即座に両断され、先程の斬撃が届く様に改変しても目立つ傷は与えられない上に再び両断される。

そこからばら撒かれた砂の様に一粒一粒に未来が記されるが、それらも全ては必ず「千弘に斬り伏せられる未来」へと繋がっていった。

幾千もの未来全てにおいて自身はどのみち彼に倒される定めであったのだ。どんな未来を改変しようとも必ず新たなる未来にて千弘に斬り飛ばされる。それは即ちどういう事か？

もはや the all mighty など無意味なのだ。

「…もはや成す術なし…か」

全てを出し切った滅却師の王は満足そうな笑みを浮かべると自身をここまで追い詰めた死神へと目を向けた。

「千弘」

「…ん？」

もはや何かを考えることさえ馬鹿らしくなってしまったのか、ユーハバツハは抵抗することなく、自身の死を悟りながらも千弘へと目を向けた。数千年を生きる自身に唯一無傷で勝利した男へ。

「私の目的は霊王の力を取り込み…三界を融合させ…人間を死の恐怖から解放する事だった。貴様に敗れた事でそれはもう叶わん。だが…貴様とのこの闘い…死しても忘れはせんぞ…」

己の悲願も達成できず、千弘にも敵わなかった事を無念に思うかのように口に零ながらも、ユーハバツハは満足気に笑みを浮かべながらゆっくりと目を閉じて息を引き取った。それと同時に宙を舞っていた上半身はゆっくりと落ちていった。

「…貴方も強かったですよ」

落下していくその身体を千弘はしっかりと受け止めるのだった。

一方で、同時刻の瀨靈廷にて。

「終わりだ何もかもッ!!現世も尸魂界も…我が力の前に一つとなるッ!!」

全身が黒色へと染まったユーハバツハが自身の影を瀨靈廷全域へと巡らせて飲み込もうとしていた。

真世界城にて一護達と交戦していたユーハバツハは一度、一護を退けると尸魂界へと降り立った。だが、そこにはなんと幽閉されていた藍染ならびに市丸や東仙そして回復した元柳斎が待ち伏せていたのだ。当初は藍染と東仙の斬魄刀による鏡花水月や閻魔香爐による感覚を狂わせられる共に元柳斎の残火の太刀や市丸の神殺槍による猛攻に押されていたが、the allmightyによって4名の斬魄刀を破壊し途中から圧倒した。

それによって藍染を残した皆はその場に力尽いてしまったものの、直後に一護と恋次が現れた事で再び戦いが始まった。

一護と恋次、藍染の3人が共闘し鏡花水月などを駆使して攪乱した結果、遂に一護の刃が彼を貫いたのだった。

それによってユーハバツハの身体はゆっくりと大地に倒れ瀨靈廷を飲み込もうとした影も動きを止めた。

これで全てが終わった。誰もがそう思っていた。だが

まだ終わってなどいなかった。なんとユーハバツハはthe allmightyによって自身が死ぬ未来さえも書き換えたのだ。それによって飲み込もうとしていた影も再び動き出し藍染や恋次達を拘束してしまったのだ。

ユーハバツハの不気味な高笑う声が響くと共に瀨靈廷の建物が次々と崩壊して地盤も天変地異の如く崩れていく。

その時であった。

「ガ…!？」

背後から一筋の白銀の矢が放たれ、ユーハバツハを貫いた。それによって撃たれた箇所から電撃のような青い模様が広がるとユーハバツハの身体を覆っていた影を押さえ込むかのように収縮させていった。

「(…)これは…!？」

ユーハバツハが振り向くとそこには弓矢を構えた石田の姿があった。そしてすぐさま自身の胸元へと手を当てる。そこにはなんと一つの銀色の矢が突き刺さっていた。それは「静止の銀」と呼ばれるものであった。

「静止の銀」とはユーハバツハの聖別を受けた物の体内から採取できる銀をユーハバツハの血と混ぜた矢であり、これを打ち込めばユーハバツハの持つ能力をほんの一瞬だけ無効化させる事ができるのだ。

それを打ち込まれた事でユーハバツハの全身から発動させていた力が抜け落ちていき頭部を覆っていた影も消え鋭い目が見えてきた。

「そうか…『静止の銀』か…雨竜め…。だが…私の力を止めたからなんだッ!!!」

そう叫んだユーハバツハは風を切りながら此方へと向かってくる一護へ向けて手を伸ばす。

「たとえば力を止めたとして負傷した貴様の剣など私の身には

そう言いユーハバツハは一護へ向けて霊子の矢を放とうとした。

だが、それを許さない正義を司る虚がいた。

チン。



ユーハバツハの股下から剛腕が伸び彼の股間を鷲掴みにする。それによってユーハバツハの顔からは笑みが消えて、代わりに大量の冷や汗を流し始めた。

そんな彼の背後には筋骨隆々の美しい肉体を持つ影があった。

「知っているかしら？ やんちゃな死神も滅却師も去勢をすると猫と同じく大人しくなるのよ……？」

ユーハバツハの背後に立ち股間を掴んでいた救世主は何とクールホーンであったのだ。

「き……貴様……!!」

「あら、納得してない様子ね。なら試してみようかしら」

「ま……待て！ 金的は――」

グシャアアアア

「うぎやあああああああああ!!!!!!」

クールホーンによって去勢された事によりその場にユーハバツハの痛ましい悲鳴が響き渡る。それによって周囲を飲み込もうとしていた影の勢いが更に弱まると共に一護も無事に目の前まで接近できた。

「今よ！ 一護ちゃん！」

「やれ!! 黒崎!!!」

クールホーンと石田の声に応えるかのように立ち上がった一護は一瞬にしてユーハバツハへと迫ると剣を振り回した。

「ヴオオオオオオオオ!!!」

雄叫びと共に放たれたその一閃はユーハバツハの身体を斬り――

—— 彼へトドメをさしたのであった。

かくして。一護達の活躍によってユーハバツハが倒され、多くの犠牲が出た滅却師達との戦いは幕を閉じたのであった。

千弘がもう一人のユーハバツハを倒し世界を救った事は特定の者以外は知る由もない。

## 後始末

その後。滅却師との闘いは無事に終わりを迎えて霊王宮にいた隊長達も無事に瀨霊廷へと帰還したのだった。

――

――

――

広がる青い空。晴天に恵まれ、眩しい陽の光が差す中、まだ復興が終えていない無惨な姿となり、今もなお復興作業が続く瀨霊廷を京楽と、千弘とマユリによつて助命された浮竹（マツチヨ）は静かに見つめていた。

「いやあ…あの戦いから数週間ぐらい経つけども、まだ昨日の事のように思えるよ」

「そうだな京楽。こうして俺たちが再び会って話せるのも全て一護くんや千弘くん達のお陰だよ」

「あの子達には本当に返せない程の恩ができちゃったねえ…だけでもまあ…まだ問題は山積みだろうねえ…」

「そうだな」

そう言い二人は再建設真っ最中の一番隊隊舎へと目を向ける。

――

――

――

――

一番隊隊舎では厳格な空気が流れていた。

「さて…呼ばれた理由は分かっておるな…？」

「いえ…全く」

隊長の職務のための机にて座っていた元柳斎は細い目を目の前に

立つ髪を下ろした千弘へと向けながら尋ねると、千弘は首を横に振る。

「では…手短に話そう」

そう言い元柳斎は一度咳払いをすると話し始めた。

「お主を呼んだ理由は主に二つ…一つ目は聞いておきたい事がある…お主が霊王宮から戻ってくる前に…誰と戦っていた？」

「…え？」

元柳斎の質問に千弘は不思議に思いながらも答えた。

「ユーハバツハさんですけど…」

「…!!!」

その答えを聞いた瞬間 元柳斎は閉じていた目を大きく開かせながら驚く。それもそうだ。自身らが戦っていたユーハバツハが分身体であると知らなかったのだから。

「どうしました？」

「いや…気にするな(あの様子では嘘ではないな…となると、奴と戦っていたユーハバツハが本体…儂らは分身体を相手にしていたという訳か…)」

元柳斎は千弘の答える様子から嘘ではない上に、戦っていた相手が分身であることを気づかなかった自身の不甲斐なさを悔やむ。

それから元柳斎は改めて二つ目の質問をしようとする中、ここで空気が変わった。

「んん…さて…本題は二つ目じゃが」

パンツ!!!

「此奴らをどうするんじやあああッ!!!」

机を叩きながら怒鳴り始めた元柳斎が指を向けた方向を見るとそこには更木と意気投合し酒を飲み散らかしながらどんちゃん騒ぎしている初代隊長達の姿があった。ユーハバツハとの戦いで重傷であったものの、彼らも医療班によって治療されたのか生存していたらしい。

だが、中にはユーハバツハと戦った際にはその圧倒的な一撃に耐え切れず死亡した者も中にはおり、逆骨、善正寺の2名の姿は無かった。因みに現在の隊長である皆とは顔を合わせてはいるが、初代の殆どが更木しか興味がない為に特にイザコザなどは起こる事はなく、現在も関係は良くもないし悪くもない。

「そして其奴もじゃー！」

そう言い元柳齋が向けた先には先程から千弘の横から何度も何度も薙刀を振り回す鹿取の姿があつた。

「…!!」

鹿取はまるで何かに取り付かれたかのように手に握る薙刀を千弘へと振り回していったが、千弘は目を向ける事なく全て片手で振るっている刀で防いでいた。

それから突然と槍の振り回しを止めると千弘へと抱きついた。

「ちゝひろくゝんー！」

「ふぎゃ…!？」

因みに彼女は現在千弘の部屋に棲み着いており、他の隊長達も同じく、齋藤、千日、乃武綱、は更木に気に入られ十一番隊隊舎へ。それ以外は一番隊隊舎に上がり込んでいた。

千弘へと抱きついた鹿取は眼鏡をクイツと上げて答える。

「総隊長…私の方はご心配なく…既に千弘さんの部屋でお世話になっているので」

「キメ顔で何言ってるんですか!? もう離れてください!!…それより山本御大…今更 地獄に戻すのもどうかと…」

そう言い千弘が困惑しながら返答すると元柳齋は更に眉間に皺を寄せると机をバンバンと叩いた。

「そもそも蘇生すること自体おかしいのじゃぞ!? お主はユーハバツハの仕業とはいえ地獄に墮とされたが、霊子を持ち帰るという前代未聞の罪を犯した! 地獄へ過剰に干渉した事に変わりない!! 今回の件で儂が上からどれほど物を言われたか分かっておるのか!？」

「元柳齋殿…落ち着いて…」

雀部がオロオロとしながら宥めるものの、こんな事態になるとは思わず本人も混乱しているのか元柳斎はもう止まらなかつた。

「此奴らの大半が尸魂界の歴史上きつての大罪人！それを再び世に放つ事がどれほど危険なものか分かつておるのか!?」

「それは申し訳ないです…ですがどうすれば」

「ならば貴様に命令じゃッ!!!此奴らをどうにかせい!!少なくとも儂の隊舎で居眠りこかせないまでな!!夜うるさくて眠れないんじゃ!!!さもなくば給料は大幅カットじゃぞ!!!」

「えええええええ!!そ…そんなあ!!研究費用とかでこっちは借金する寸前なんですよ〜!!!」

「知らん！ほらサツサと行け！」

そう言い元柳斎は鹿取へと指を向けると彼女は千弘を抱き上げた。

「千弘く〜ん。一緒にいこうね〜」

「ちくしょおおお!!あの腐れ局長おお!!私に全責任おしつけやがってええええ!!!」

—————

—————

—————

—————

それから一番隊隊舎を後にした千弘は更木の所に上がり込んでいる3名を除き、残りの初代隊長達を各隊に預かってもらおうと試みた。

その後、何とか残りの隊長達である王途川、尾花を十三番隊、八番隊とそれぞれ引き取ってもらう事に成功したのだった。

これで万事解決—————と思いきや。

あと一名残っていた。

◆◆◆◆◆

「獅郎くんお願いします!!鹿取さんをどうか!!!」

そう言いながら千弘は最後の1人である鹿取を引き取ってもらう為に日番谷へと土下座をしていた。対する彼は当然のことながら首

を横に振る。

「いや…無理だ。これ以上ウチに女性隊員を増やしでもしたら松本が定期的に女子会とか開いてサボっちゃう…」

「そこをなんとかあ!!もう獅郎くんしか頼る人がいないんです!!」

そう言い千弘は何度も何度も土下座をし、遂には額から血が流れ始める。それに対して日番谷は頭をひと搔きすると、千弘の耳元に近寄り鹿取に聞こえない様に囁いた。

「別に引き取ってもいい…だが、考えてみる…!!ここで引き取ったとしても確実にお前から離れる保障はあるのか…!?!」

「え…」

千弘はゆっくりと後ろを振り向く。そこには相変わらず笑みを浮かべている彼女の姿があった。

「……………」

心の中で確信する。

「絶対はない」と。

「ねえだろ?分かったら諦めろ…」

「そ…そんなあゝ!!うぐ!!」

すると 千弘の身体がゆっくりと抱き上げられる。千弘が恐る恐る振り向くとそこには頬を染め上げながら満面の笑みを浮かべる彼女の顔があった。

「これでずっと一緒だね…ち・ひ・ろ・くん…♪」

「いやあああああああ!!!」

その後。

残った鹿取は誰も引き取る様子もなく(了承しても鹿取本人が千弘から離れない)仕方なく千弘が引き取る事となったのだった。

それによって鹿取は新たな十二番隊隊士として招かれる事となった。そして彼女の住む家は当然の様に千弘の部屋となったしまった。

勿論、千弘はマユリへと泣きついた。

バアアン!!

「局長おおお!!!!どうにかあの人を別の部屋に!!お願いします!.....: というか何で責任なすりつけてるんですかおんどりやああ!!!!」

研究室の扉を乱暴に開けながら入ると、実験真つ最中のマユリは「はて?」とまるで千弘がいる事を不思議に思いながら首を傾げた。

「おやおや懲役刑にならなかつたのかイ?参ったねく君が閉じ込められてる間にあの部屋をネムとメガネ女の物にするつもりで、そう決めたんだがネく」

「局長いい加減にしないとそろそろ私泣きますよお!!!」

「うるさい奴だネ。今更ネムの他にもう1人増えたって問題ないじゃないカ。それにそれ以上 私の判断に口を挟むなら、減給を考えてもいいんだヨ?そもそも、お前の不満申し出を受け入れるだなんてそんな勿体無い事するわけないじゃないカ。君は正真正銘の「バカ」なのかネ?」

「ちくしよおおお!!」

結局、マユリには受け入れてもらえず、千弘の部屋にはネムだけでなく鹿取も住む様になった。

「ふむ...そろそろ現地調査と行こう。おい滑稽な様子を見せつけて私を愉快にするのはその辺にしたまエ。さつさと情報網を張るための現地調査に向かうヨ」

「はあい.....」

そう言われた千弘は立ち上がり、マユリやネムと新たに加わった鹿取そして技術開発局の調査班の皆と共に向かつて行ったのだった。



## 最終話：お腹が空いたしお金も稼ぎたい

雲ひとつなく満天の星空が輝く夜空のもと。静まる夜の瀨霊廷にて、建て直したばかりである一番隊隊舎では、京楽が酒を、元柳齋が茶を飲みながら復興作業を終え新たな姿に生まれ変わった景色を見渡していた。

「いや、山爺と飲むのは本当に久しぶりだね。でもあいかわらず酒は苦手かい？」

「……フン。未だ復興を終えてもおらんこんな時に酒盛りとは呑気なものよ。儂は酒など滅多な時以外は口にせんと決めておるんじゃ……」  
「相変わらず頑固な事で〜」

そんな風に談笑する中、京楽は酒を飲む手を止め、元柳齋へとある事を尋ねた。

「ねえ山爺。今更だけでも、不思議とは思わないかい？」

「何がじゃ……？」

「10年前の滅却師による虚の大量消滅、千弘君の初代隊長達の連行、千弘君と彼の力を宿したユーハバツハの衝突、どう考えても魂魄のバランスが狂って世界が崩壊してもおかしくなかったよね〜」

「……」

京楽の言葉に同じ疑問を抱いていたのか、同意するかの様に元柳齋は頷き、湯呑みに入れられた茶を一口啜る。

「ふむ……確かにそうじゃな。じゃが、それも全て千弘の霊圧によって保たれておる……どのような状況であれ……奴の存在が大きい……と言えるのう」

「だとしたらいずれ来るのかな〜」

彼を『投獄もしくは抹殺せよ』とかいう指令は「

……………」

京楽の言葉に元柳齋は湯呑みの手を止める。仮に千弘の存在が世

界の害と判断されれば中央四十六室という頭が悪く賢者という肩書きにふんぞり返り何でもかんでも否定する頭の硬いジジイ共は迷いなく千弘の捕縛もしくは抹殺を言い渡すだろう。

いくら彼らであろうとも中央四十六室の判断には意を唱えることは不可能である。そうなれば千弘との対立といった最悪の状況の出来上がりだ。

その重大な未来に対して、元柳斎は頷くことも、首を横に振ることも無く、静かに再び茶を啜った。

「…来たとすればその時はその時じゃ…。じゃが、いくら四十六室のバカどもも…そんな指令は下さん筈じゃろう」

「そうありたいもんだねえ」  
すると

「隊長！まだ仕事が残っているというのにお酒とは何事ですか!？」

背後から副隊長である七緒の声が聞こえ、その声を耳にした京楽は全身をビクリと震わせた。

「げえ!?見つかっちゃった!？」

「見つかっちゃったじゃありません！ほらさっさと仕事に戻りますよ！」

「分かったって…そんなに怒らないでよ！」

額に怒りマークを浮かべる七緒を宥めながら京楽は仕事へと戻っていった。

未だ護廷隊が抱える不安が解消されることはない様だ――。

そして――

――あつという間に10年の月日が流れた。

――

――

――

――

十二番隊隊舎及び技術開発局。ここは瀨霊廷における電子機器類

を全て生産かつ研究している場所であり、10年前の滅却師の侵攻以降、新たなデザインや警備強化のもと、再建設されていた。

そんな技術開発局の研究所内では、相変わらずマユリは研究へと没頭していたのだった。

「ん〜いいネえ〜。これで千弘を4ヶ月間は下痢にできそうだ。試しに藍染にでも投与してみようか」

そう言いながらマユリは自身の指先に挟まれたフラスコの中身の変化を観察していた。

すると

「失礼します」

研究室の扉が開き報告書を手を持った阿近が入ってきた。

「報告します。西五十五区の再建が終了したとのこと」

「ようやくか。全くモタモタ待たせてくれる…」

その報告を耳にしたマユリは待っていたかの様に応えると、手に持っていたフラスコを専用の台に立て掛ける。

「だがまあこれでようやく瀟霊廷全域に秘裏条網を敷けるネ。早速現地調査と行こうか」

そう言うとマユリは手を叩く。

「付いてこい。『眠七號』」  
すると

——— 近くの扉が開き、そこから三つ編みにした長い髪を肩に掛けたネムが姿を現した。

彼女はマユリから自身の最も好きな名前を呼んでくれたことが心の底から嬉しいのか、頬を緩ませながら頷く。

「はい！とう…マユリ様」

ネムが登場するとマユリはもう一人の名前を呼ぶ。

「それと…、『鹿取』君も来たまえ」

「分かりました」

そう名前を呼ぶと、近くで書類を整理していたメガネを掛けた女性『鹿取拔雲斎』が振り向き、メガネを掛け直しながら頷いた。



「どうした？」

「…靈圧の乱れが起きたようです…しかも異常に激しい…この波長：10年前のユーハバツハと同じものです…」

「へえ。では奴にはここに来るついでにそれを消してきてもらおうとしよう」

—————

瀨靈廷のまだ復興が終えていない地区にて。そこには今もなお総隊長を務めている元柳斎を筆頭に朽木白哉、日番谷冬獅郎、京楽春水、卯ノ花烈といった、隊長格の中でも名だたる実力者がいた。

阿近の報告が回ってもいないのになぜここにいるのか？それは皆も不審な靈圧を感じ取っていたからだ。

「報告にあつたのはこのようじゃな…さて、鬼が出るか邪が出るか…」

目の前の空間を見つめながら元柳斎は新しく縫い付けられた左腕に握られる刀の塚を握り締め臨戦体制へと入った。

そして彼に続く様に日番谷や卯ノ花達も同じく臨戦態勢へと入り目の前の空間を凝視する。

すると

!!!!

目の前の空間の1箇所だけが黒ずんだかと思えば一瞬にして広がり巨大な黒い影となった。しかもその黒い影には黄金の目玉の様な斑目模様が走っており、まさに10年前の靈王を吸収したユーハバツハを彷彿とさせるものであった。

それはまさに死してなお、この世に残り続けている『ユーハバツハの力の残滓』であった。

現れた力の残滓は元柳斎達を見つけたかと思うとその黒い影を更に展開させて襲い掛かってくる。

それを見た元柳斎は全員に向けて叫んだ。



だが、

その中で、卯ノ花はただ笑みを浮かべていた。

「(相変わらず…貴方はお強いですね…)」

—————

一方で、何の自覚もなくユーハバツハの力の残滓を消し去った人物は大泣きしていた。

「ちくしょおおお!!!まだお昼食べても無いのに任務だなんて〜!!!」

そう泣き叫びながら走るのは、身長が150にも満たない非常に小柄な死神隊士であった。手足や胴体は一般の女性隊士と同等程度のもので、顔も幼さを残しており、髪も長く三つ編みにしているために一見すれば少女と間違えう程のものであった。

すると

『ほれほれ、あと10秒以内につかないと滅給待たなすだヨ〜はい1、2』

「数数えるんじゃねえぞ腐れ局長!!!今行くから待ってなさいや!!!いや待っててくださいいお願いしまああす!!!」

そう言いながら泣き叫んだ隊士『園原千弘』は通信越しに催促してくるマユリに泣き叫びながら更に加速させていき、技術開発局へと続く広大な漕霊廷の道を駆け抜けていったのだった。

—————  
尸魂界を救った真の英雄。

過去未来において現れることのない歴史に名を刻まれるであろう最強の死神。

そんな彼は自身の強さを自覚する事なく、今日も日銭を稼ぐべく任務に励むのであった。

—————  
ぐううう〜

「ア”ア”ア”ア!!!お腹空いたあああ!!!」

## 番外く滅却師達の道く

霊王宮の中で、穀王と記される桐生の住まう豚殿の中にある広大な畑。そこは数ヶ月も前にユーハバツハを打ち取った千弘に明け渡された敷地であり、今は彼のビジネスの為に使われている。

そんな農地のど真ん中にて、農業用装備を着用した1人の少女が鋤を振り上げながら広大な農地を耕していた。

「ハア…ハア…ハア…!!」

背丈は156と平均的でありながらも身体は鍛え上げられているためか肉付きは良く、重い鋤を易々と扱っていた。そんな畑を耕していた少女は一旦その手を止めると、額から流れ出ている汗を拭き、太陽が輝く空を見上げながら一言呟いた。

「……………何やってんだろ…アタシ…」

—————

—————

—————

—————

時は遡る事 1週間前。ユーハバツハが一護に倒された直後であつた。

ジゼルによってゾンビ化された上に、その血を吸われて再び死亡したバンビエツタは暗い闇の中を彷徨っていた。

感じるのはこれまでの人生の中で自身の思い通りにならなかった事や裏切った仲間達に対する苛立ち。

なんで自分はこうなった?どうしてこんなに苦しい思いをしなければならない?

生前では考える事がなかった為に、死んでからはその様な疑問が頭の中を横切っていた。



その時であった。  
彷徨っていた闇の中に突然と光が差し込み、その場を照らし出した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……んん……」

差し込んだ光によって目を閉じたと同時に身体がとても暖かく感じ、その温もりに目を覚ました。

「あ……アタシは……」

「あ、目覚めましたか」

「ギヤア”ア”ア”ア”ア”ア!!!」

目の前に映り込んできた顔を見た途端にまだ自身が人間であった頃のトラウマが再び蘇り、額から大量の汗が流れると共にその場から飛び起きてしまった。

「あ……あアンタは……!!園原千弘……!!」

「いや、なにもそこまで驚く事はないでしょ」

そこに立っていたのはユーハバツハが最も警戒していた死神である園原千弘であった。見れば彼1人だけで無く、彼の両脇には金髪のおかつぱ少女と、長い髪とゴキブリのようなアホ毛が特徴的な少女が抱えられていた。

「これ、貴方の仲間ですよね？」

そう言いながら千弘は抱き抱えていたかつての同胞であるリルトットやジゼルをその場に寝かせる。1人は自身を見限り、もう1人は自身を殺してゾンビにさせたものであるために特に何も感情は湧かなかったが、死神である彼が自身らを助けた事が不思議で仕方がなかった。

「なんの……つもりよ……？」

「いや特になにも。貴方方の組織の取締役が亡くなったから社員の貴方達に責任を取ってもらおうと思ひまして」

「……はっ？」

ふと口にした千弘の言葉に理解ができず思わず声が出てしまった。驚いている合間にも千弘は一瞬だけ姿を消すと、再び数人の滅却師を担いで戻ってきた。見ればそれは自身が率いるチームにいたキャンデイスとミニーニヤに加えて、アスキン・ナツクルヴァール、ユーグラム・ハツシユヴァルトであった。2人とも自身よりも強い上に胡散臭いために毛嫌いしていたが、この2人までもが倒されたとなるとようやく自身らが敗北した事を悟った。

2人を運んできた千弘は彼らも静かにその場に寝かせる。

「取り敢えず今のところは貴方含めて…えつと…7人ですか。これぐらいいれば…」

「ちよつと待ちなさいよ!!」

「はい?」

納得ができなかった。確かに彼らの同胞は殺したがそれは全てユーハバツハの命令であり、更に生き抜くためであった。彼に対する恐怖を知らない相手から責任という一方的な押し付けをされる筋合いなどない。

「責任ってなに?!まさかアンタらの仲間を殺したからそれを償えつての?!言つとくけどね…アタシらだって殺されないために――

「黙らっしやい!!!」

バシイイイン

「ひびく?」

千弘のビンタがバンビエツタの頬へと炸裂し、彼女の頬を大きく腫れ上がらせる。

「いつ…:か…:か弱いレディに何すんのよ!!」

「あ、ごめんなさい眠さん以外の女性はレディとして認識していないので。あと男女関係なく殴る上に蹴ります。差別はよくありませんからね」

「前後で圧倒的に矛盾してんじやないの!!」

「嫌味か貴様ツ!!」

「なにが!？」

赤く腫れ上がる頬を抑えながら反抗すると、千弘は淡々と告げる。

「あと言わせて頂きますよ！どんな言い訳があろうと、貴方達が命を踏み荒らした事に変わりありません！殺されない為？だから殺戮を正当化しても良いと言うんですか!?そんなんでしたら我々も十分に正当化できますよ!？」

「そ…それは…」

その言葉にバンビエツタは返す言葉がなかった。ゾンビ化の影響で弱腰になり言い返せないのもあるが、彼の言葉も、ご最中である。自身らも陛下であるユーハバツハに肅清されない為とは言え、それで彼らを殺した事を正当化したとすれば死神である彼もここで今、自身を殺す事さえも “今後の尸魂界の為” という名目で正当化が可能となる。

「はあ…まあ…そう言ってしまうえば水掛け論。我々も同じである事を重々承知しております。私もこの手で貴方の仲間を数百人ぐらいは殺めてしまいましたからね」

そう言うのと千弘はブレスレッドに付けられているボタンを押すと誰かと連絡を取り始めた。

ピピ

「あ、局長、倒れてた滅却師達がいたんですけど、どうします?」

『そんな奴らもう興味ないヨ。君の好きにするといい。ゾンビ娘からは血液を大量に採取しておいてくれたまエ。奴の血液を解析すればノールスクの解毒剤が作れるかもしれないからね』

「了解です」

連絡を終えた千弘は次々と倒れている自身のかつての仲間を回復型の鬼道である回道を用いて治療し始めた。

「ちよ…ちよつと待ちなさいよ!!私達をどうする気なの!？」

「決まっているでしょう。貴方…私の畑を焼き払った現行犯じゃないですかあ。キツチリと身体で払ってもらいますからね?」

「ひびき!」

—————

—————

—————

その後、自身らは拘束されて特殊な足枷（マユリ特製の少しでもその場所を離れたら半壊数十メートルを消し飛ばす程の威力を持つ爆発を起こす）を装着させられた。

周囲の景色が次々と直り修復されていく中、これからの人生の希望を見出す事ができず、ただその場に座っていることしか出来なかった。

その時であった。

「はいカレー」

生きる希望も何もかも失い、この先の未来を見出せない自身らに、いきなり食事を差し出してきた。

「何のつもりよ？」

「食べないとこの後の作業に支障が出ますからね。まあ食料があまりなくて具はありませんが」

「…いらない」

今は全く食欲などない。寧ろ湧いている方がおかしくらいだ。自身の仲間であったリルトットは横でガッツいているがそれが不思議で仕方がない。

その一方で、拒否された千弘はそのまま彼女の前に食事を置くと、残りの皆へと食事を配っていった。

「……………」

彼の言葉を受けてから、バンビエッタは今まで癩癩によって殺めた人々の事を思い浮かべた。殺されたくないから自身らは死神を殺したが、それまで自身の娯楽によって奪ってきた命はどうなのだろうか。それを思い浮かべる度に頭の中が混乱してしまう。

「はあ…」

すると

「ほら！口開けてくださいー！」

「……」

向こうからハツシユヴァルトに食事を与えようとする声が聞こえてくる。千弘が何としてでも食べさせようとしているが、彼は生真面目な為めに敵が作った料理を口にする事はまずないだろう。

「もう！ちゃんと食べないと倒れてしまいますよ!?!」

「いらんと言っているだろう。誰が貴様の作った食事など易々と口に  
するも――」

「じゃあ無理矢理にでも食べさせます。誰か容器のご用意を！」

「どんな手を使おうと貴様の拵えた料理など……ん？待て!!」

「注入ッ!!」

「ぐほお!?――むおおお!?ふぐおおお!?ふぐおおおおおおおおお  
!!!」

突然と聞こえてきた彼の苦しむ声に驚き、目を向けるとそこにはウイダーゼリーの容器を手を持った千弘が容器を握りつぶし、入っていたカレーを無理矢理、ハツシユヴァルトの口内へと押し込んでいた姿があった。

「ぐ……ふ……」

ドサツ――。

すると 強引にねじ込まれた食事をそのまま飲み込んだハツシユヴァルトは涙目になりながらその場に倒れた。

「次は……」

「へえ!?!ち……ちよつと待って！僕は……」

「問答無用!!」

「むぐおおおおおおおおおおお!!?!」

そして次は隣にいたジゼルが餌食となった。無理矢理ねじ込まれた事で彼もハツシユヴァルトと同様に苦しみの声を上げながら、飲み込むとそのまま涙目で倒れた。

「「「「……」」」」

リルトットを除いた残りの皆は黙然としながら2人の残骸を見つめていた。

すると、千弘の目が自身らへと向けられる。

「さて、残りの皆さんは」

「「「いただきまあす!!!」」」

彼から目を向けられた途端にバンビエツタを含め食事に手をつけなかった皆も食事をかき込んだのであった。

—————

—————

—————

それから翌日。無事に霊王宮は元の姿を取り戻し、和尚の手によって零番隊の皆も復活すると共に一護が倒したユーハバツハの遺体は新たなる霊王として世界の禊となった。

その間にバンビエツタは敵対組織である零番隊の1人『麒麟寺 天示郎』の拵えた血の池地獄という風呂によって血液を入れ替えられ、ゾンビから元の人間へと戻る事に成功したのだった。

それから数日が経過し、千弘と接触してから1週間が経過した日の朝であった。

「さ、元気にいきますよお!!」

場所は完全に修復した霊王宮の中でも空に浮かぶ宮殿の一つにある広大な畑。そこでは農作業の装備をフルに装着している千弘がおり、彼の目の前では同じく農作業用の装備をしたバンビエツタ達が一列に並ぶように立っていた。

そんな中で状況が飲み込めないバンビエツタはなぜこんな格好とこんな場所にいるのか尋ねた。

「なによこれ…」

「え?作業服ですが?」

「何でこんな服着るのよ!?!」

「うるさいぞバンビエツタ・バスターバイン。作業において専用の装

備を着用するのは当たり前だろう」

「アンタもアンタでなに普通に着てんのよ!?!」

隣に立っていたハツシユヴァルトもなぜか当たり前かのように作業服を着ていた。見ればユーハバツハと瓜二つの髪型も切ってスッキリさせたのかギリギリ肩に掛からない程度にまで短くなっていた。

「園原千弘、少しキツイのだが」

「あくズボンの紐を締めすぎてますね。もう少し緩めにしましょう。軍手のサイズは問題ないですか?」

「ああ」

「(え…うそ…何でアイツ普通にしゃべってんの…?なぜかやる気もまんまんだし…)」

いつの間にか陛下第一である彼までもが千弘の言いなりになっていた事に理解ができず頭が混乱してしまう。  
すると

「なあ…これ暑いから脱いでいいか?」

「僕も…それに可愛くないし…」

「確かに致命的にだせえなく」

自身の隣に立っていたキャンデイスやジゼル、アスキンが次々と文句を口にしながら身に纏っていた手袋などを地面へと脱ぎ捨てた。

「はあ…私も」

それを見ていると、何だが自身も馬鹿馬鹿しく思い始め、装着している軍手に手を掛ける。

その瞬間

「……おい。何脱いでんですかテメェら…」

『『?!?』』

地の底から響く様なドスの効いた声がすると共にその場を超巨大

な霊圧が包み込む。発生源は間違いなく千弘だ。彼の身体から発せられた高密度の霊圧がこの場を支配し、周辺にある建物を大きく揺らしていく。

それから鋭い目を作業服を脱いだ2人へと向けながら、地面に脱ぎ捨てられた手袋を拾うと差し出した。

「作業服は絶対に脱がないでください。怪我したらどうすんです?」

「は…はい…」

3人を萎縮させると、その目は今度は自身へと向けられた。

「…で? 貴方は」

「つ…付けければ良いんでしょ!?!」

「よろしい。では取り敢えず、この畑を耕してもらいます。あちらを貴方、ここを――」

それから千弘の指示の元、それぞれ分担する場所を耕す事となった。

――

――

――

――

そして今に至る。

特別な機械は使わずに全て手作業である上に初めての経験であったので、その作業は困難を極めた。

「ハア…ハア…ハア…!! あああー!!! もうむかつく!!! なんでアタシがこんな事しなきゃいけないのよお!!」

なぜ自身がこんな作業をしなければいけないのか。今の状況に疑問しか湧き上がらない為に馬鹿馬鹿しく思い、耕していた手を止めてその場に倒れ込んだ。

その時であった。

「何をやっている? そんな所で寝ていては熱中症になるぞ?」



目の前に浮かぶ太陽を遮るかのようにハツシユヴァルトの影が自身を見下ろしながら映り込んできた。

「……別にアタシの勝手でしょ？それに…なんの用よ」

「園原千弘から差し入れだ」

彼に來た理由を尋ねると、水の入っているペットボトルを渡された。それを受け取ると、腹の中に溜まっている鬱憤を晴らすかのように一気に飲み干した。

「ぶはあ!!……ねえ、聞きたいんだけど」

「なんだ？」

水を飲み終えると、同じく水分を補給しているハツシユヴァルトに先程から気になっていた事について尋ねた。

「陛下大好きなアンタがなんであんな奴の言いなりになってんのよ？」

「…言いなりか…」

気になって仕方がなかった。なぜ、彼がこれほどまでになってしまったのか。ただ興味本位のまま、彼に問い掛けると、ハツシユヴァルトは俯きながらも答えた。

「……私も一時は命を断とうとした。仕えるべき陛下亡き世に…残す事はなにもない。だが、その時に奴に叱咤されたのだ」

そう言いハツシユヴァルトは自害しようとした時に千弘から掛けられた言葉を思い出した。

『そこまであのオッサンを思うのであれば、その人の分生き抜けば良いじゃないですか。貴方がそれほど慕っているのであれば、その人からも大切に扱われていたと思いますよ、そうなれば貴方の早死は望んでいないと思いますよ。まあ、それでも死にたいのであれば止めませんが』

「…私が生涯を果たす事を陛下が望んでいるのかは分からない…だが、再び選択を迫られた時…この身を終わらせてしまう事に迷いが生じたのだ」

「迷い…？」

「ああ…。まるで剣を向けた途端に聴き慣れた声で来るなど怒鳴られるかのような…」

そう言いながらハツシユヴァルトは自身の腕に付けてある髑髏のイラストが彫られたリストバンドを握り締めた。それはかつて同じ星十字騎士団に所属していたバズビーの持っていた物であった。

「陛下が亡くなった事でリンクが切れ…今の私にはそれ程の力は残っていない。故に【陛下の側近としてのユーグラム・ハツシユヴァルト】は死に…【ただのユーグラム・ハツシユヴァルト】となった。1人の人間に戻った今…先程の迷いがなくなるまで…私は生き抜く事に決めたのだ。たとえばどんな形になろうとな…」

「それで何でこんな作業してんの…？」

「今の瀋霊廷は食糧危機に陥っている。それを緩和する為に園原千弘は自身が開発した植物を大量に育てて支給品として贈るそうだ。

私は何百人もの命を奪ってきたが…自身の行いに後悔などしていない…だが、罪のない死神も殺した事は事実…園原千弘が散って行った滅却師達を労い黙祷したならば…私も彼に答え…自身の責任を果たし報いる為にこの道を選んだのだ」

そう言い終えるとハツシユヴァルトはタオルで汗を拭き取り、再び作業へと戻っていった。

「報いる…か」

それからしばらくその場に佇みながら、これまでの自身の行いを振り返ると共に思いだした。

勝手にバンビーズと名乗り、リーダーを気取ったまま前へと出ていた事に加えて趣味で殺めてきた相手の事や、焼き払った際の千弘の表情を。

「……………」

罪悪感などは湧かない。だが、思い出せば思い出すほど何故だかそれを正しい事とは思えず、何だか馬鹿馬鹿しい上に恥ずかしく思えてきてしまった。

「（私って…………まじで何やってたんだろ…………）」

そう考え込んでいるうちに、自然と両手がクワを持ち、再び耕し始めたのだった。

……そうか…アイツ……これに気づかせる為にやらせてたのね…

—————

それから1日の終わりが来たのか、辺りは夕暮れ時となっていた。太陽が雲の下へと消えて行こうとしており、周囲はオレンジ色の光に照らされていた。

「ふう…」

それと同時に、畑仕事もようやく指定された範囲が終わり、鍬を地面に突き刺すと、背伸びをしながら周囲を見渡した。見れば先程まで草が生え放題であった場所は見事に土が掘り返され、茶色に染まっていた。

「ようやく終わったわ…」

息を吐いていると、遠くの方から千弘が向かってくる。

「お疲れ様です。今日はもう休んでもらって大丈夫ですよ。宿は桐生さんが貸してくれるとの事なので」

「あら、そう」

その言葉を聞いた途端に今まで溜め込まれていた疲れが一気に吹き出すと共に、手に持っていた桑を押し付けるように地面に倒した。

「はあ…やっと休めるわ」

「いや〜ありがとうございますね〜助かりましたよ〜♪」

「マジで腹立つわその笑顔…!!」

そう言いながら嫌味つたらしく千弘に吐き捨てるも、千弘も千弘で言い返すかのように悪い笑みを浮かべていた。

「……ねえ」

「はい？」

そんな中。自然と足が止まり、自身が気付いたことに対して彼に尋ねた。

「アンタの目的…ようやく分かったわ…あたしが今までやってきた事がどれほどダサかったのか。それを気づかせる為にアンタは畑仕事をさせたんでしょ？」

そう言うとは彼は目を大きく開きながら固まった。それもそうだろう。話してもいない目的を看破されたのだから。自身はバカだろうと思っっているのかもしれないが、少し考える時間をもらえればこれぐらいは分かる。

「前はこんなに深く考えた事無かったから色んなことをすぐ放り出してたけどさ…畑仕事してるうちに気づけたのよ。礼だけは言っておくわ…」

少々自慢気にもなりながらも感謝を込めながらそれを伝えた。すると千弘は――

「え？なにそれ」

――首を傾げた。

「……へ？」

突然と彼の間の抜けた声を耳にした事で、驚きのあまり自身も間の抜けた声を漏らしてしまう。

「いやあ…別に畑荒らしたからその分働いてもらおうと思っただけですよ？改心を促そうだなんて考えてません…」

「……」

話し方や目元から見ると限り、隠し通しているようには見えない。いや、本当に自分の発言に驚いている様子だった。

「いや〜びつくりした〜…いきなり真剣な顔で「ようやく分かった」って言われて、え？なに？と思っただ直後に自信満々に「〜ということよ

ね?」って…」

「／／／／／／／／／／」

そう言われた途端、バンビエツタは自慢気に話していた自分の姿を思い出してしまい、顔がりんごのように赤く染め上がった。

「いやあくそこまで考えられるとは予想外でし——ぐへえ!?」

「キィー!!!真面目に考えたのがバカみたいじゃない!アタシの考えた時間返しなさいよおー!!!」

顔を真っ赤に染め上がらせたバンビエツタは泣き叫びながら千弘の首を掴みながら左右に揺らしたのだった。

その後、千弘はまた明日来ると言い残して去って行ったのだった。

「くうう…!!」

残されたバンビエツタは悔しさのあまり歯を噛みしめながら地団駄すると共に——

「(惚れちやったじゃないの…／／／／／)」

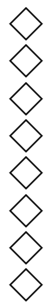
なぜか惚れてしまった。

それから7人の滅却師達が育てた秋刀魚草やマグロ草といった不気味な植物がユーハバツハの力の影響によって食糧難となっていた尸魂界を救ったのはまた別の話である。



を吐き出すかの様に叫んだ。

人の喉から発せられたとは思えないほどの悲しき咆哮は空気を振動させながら暗い牢獄へと響き渡ったのであった。



ユーハバツハ率いる滅却師との戦いより半年後。今もなお復興の真っ最中であり、倒壊した建物を建て直す音が周囲から響き渡っていた。

その一方で、瀟霊廷の遙か上空に浮かぶ霊王宮。そこはいつもと雰囲気異なっており、刀を打ち付ける音も料理の音が聞こえず、酷く鎮まりかえっていた。

「いしいいいんじいいだああいうおおわああくおおおのみるああいうおおいしいええくうああい」

「ちよつと変な歌やめなさいよ!!」

「……じゅううううくあえとうえ………え？」

突如として響いた千弘の歌声に耳を塞いだバンビエッタの叫び声が響き渡る。

※千弘が何の歌を歌ったか分かるかな？

「いや、暗い雰囲気だったので歌って場を盛り上げようかと」

「その汚い音程とリズムで盛り上げるところか盛り下がってんのよ!! ほら耳元で歌ったからハツシユヴァルトが白目剥いてるじゃない!!」

「いや〜失礼失礼」

「それよりも……これどうにかしなさいよ……!!」

「……ん？」

何やら震えた声で今にも泣きそうなバンビエッタが指をさす方向へと目を向けるとそこには――

「滅却師殺す… 滅却師殺す… 滅却師殺す…」

全身から呪詛の様なドス黒いオーラを巻き上げらせながらバンビエッタの腕に包帯を巻く鹿取の姿があった。半開きとなった目が視線を逸らそうとする彼女の目と重なり合うべく何度も何度も目を合わせてくる為にバンビエッタの身体はガタガタに震えていた。

「コイツどうにかしなさいよ!!怖いのよさつきから!!」

「見苦しいぞバンビエッタ・バスター・バイン。治療してくれているのだぞ。感謝ぐらいしたらどうなんだ?」

「殺す殺すって連呼しながら治療する奴のどこに感謝しろっていうのよポテト!警戒しかできないわよ!!」

霊王宮を鹿取と共に訪ねていた千弘は☒豚殿の一室で応急器具を用いながら全身から血を垂れ流し深手を負ったハツシユヴァルトとナツクルヴァールを治療していたのだった。更に彼らだけでなくバンビエッタや一緒にいたキャンデイスやマカロン達も怪我を負っていた。

一体彼らの身に何が起こったというのか?周囲の建物などもいくつか倒壊しており、何者かによって荒らされた事が分かる。

「一体何があったのですか?着いた時には少しばかり霊圧などが乱れていましたが。鳳凰殿なんてボロボロでしたよ?」

「…」

包帯を巻きながら千弘が尋ねると、ハツシユヴァルトは答えた。

「…お前がくる前に…1人の死神がここに現れた。目的は不明だが…奴は現れると直ぐに鳳凰殿に向かい二枚屋王悦の斬魄刀達を斬り伏せていった…」

「俺たちを見つけた途端に襲いかかってなく。応戦したんだが、装備が薄着でアツサリやられちゃった。その後、奴はアンタの霊圧を感じ取ったのか俺らにとどめを刺さず刀を奪って逃げたってという訳さ」



「刀を持って逃げた…？死神が…？一体何故…それに誰が…」

ハッシュユヴァルトとアスキンの話を聞いた千弘は顎に手を当てて首を傾げる。

すると

「犯人は恐らく『綱彌代 時灘』だよ」

医務室の扉が開き、そこから不機嫌な表情を浮かべた王悦が入ってきた。ちなみに彼は一度、能力を行使したアスキンによって瀕死にされ、今この様に普通に対面しているのは少し違和感があるとは思うが、彼が千弘にキャラメルクラッチやバックドロップされている場面を見てそれを写真に収めた事で許したそうだ。(軽すぎ)

「つなやしろ…確か四大貴族の一つでしたよねオーエツさん」

「よんだいきぞく？何それ？」

首を傾げるバンビエツタを横目に犯人が最高位の貴族である事に疑問を隠しきれず不思議そうにしながら千弘が尋ねると王悦はうんうんと頷いた。

「ソウソウ。チャン僕ンとこの斬魄刀達もやられたみたいでねえ。それどころか封印していた『巳巳巳巳』まで奪われちゃってマジ気分はダウンでアングリョ〜」

「ええ!？」

王悦は相変わらずの口調であるが、自身の不甲斐なきに対して腹を立てるかの様に近くのソファアに座る。その話を聞いた千弘は慌て始めた。

「いやー封印された物が持ち出されたって大変ですよ!?!すぐに山本御大に連絡しないと!!」

「いや、やめといた方が良いヨロシちー君(ぶつちやけチミの斬魄刀の方がもっと危ないけどね…)」

千弘が慌てて、すぐさまネムを通じてマユリに連絡を取ろうとすると、それを王悦は止めた。

「決定的な証拠が nothing。チャン僕が進言すれば何とかなる

けどもく現場にいなかったから説得力なし。被害者のメラちゃん達は斬魄刀。証言があつても貴族第一の四十六室だから聞き入れてくれないだろうNe…」

「成る程…」

その時であつた。

——ピロリン。

腕にはめられていたブレスレットが光り出した。同じ物を持つネムからの着信だろう。

「あれ？眠さんからだ…：…どうしました？」

『千弘さんに明後日の正午に…面会希望との事…』

「ええ？一体誰が…」

『元9番隊隊長「東仙要」です』

その後 霊王宮から鹿取と共に飛び降りた千弘は一瞬にして瀨霊廷へと帰還し、数日を経て約束の時刻になると、ネムに言われた通り東仙との面会を行うべく彼の収容されている監獄へと向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「…おい。希望通り 面会の時間だ」

「…」

看守の声に暗い部屋の中で座ったまま蹲っていた影はおぼつかない足取りでゆっくりと立ち上がると前に進んだ。

そして 暗い道を進み、面会様に用意された部屋の入り口の前に差し掛かると 看守の手によって扉が開けられた。

「入れ」

「…」

看守の指示と共に開かれた扉の中に入るとそこには——

「あ、お久しぶりです東仙隊長」

「…」

自身の道を妨害し無理やり生きながらえさせた者がガラス越しの部屋で座りながら待っていた。

「園原千弘…私との『約束』を覚えているだろうな…?」

「ええ?は…はあ」

東仙の言葉に千弘は少しばかり虚空を見つめると、思い出したのか頷いた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

それは一年以上も遡り、千弘が藍染を捕縛した後の事であった。裁判によって市丸と同じく収監された東仙の元に面会希望者が現れた。それはなんと、マユリと千弘であったのだ。

「久しぶりだねえ〜元9番隊隊長 東仙要」

「…」

マユリは相変わらず悪どい笑みを浮かべながらガラス越しに見つめるが、当時の東仙は己の正義も貫けぬまま生きながらえてしまい、絶望の淵に立っていた為に黙り込んだまま下を向いていた。

「おやおや?返事がないネ〜。聞こえなかったのなら私がマイクを持って耳元でもう一度告げてやろうかね?」

「局長は黙っててください」

そんな中、煽りに煽ろうとしたマユリを押し除けながら、今度は千弘が当然の前に立ち問い掛けた。

「東仙隊長…なぜ貴方は私達の元から去っていったのですか…?」

問い掛けた千弘の瞳は少し震えており、まるで彼と対立した事を嘆いているかの様であった。

「お願いです…教えてください。何も事情がないまま藍染隊長に着い



の様にして立ち上がるのか考えないのですか!? そんな考えもせず死に急ぐなど、不利になったら『自殺する!!』とか喚き散らす現世の自己中人と一緒にですよ!!」

「黙れッ!!!」

千弘は何度も何度も東仙の首を揺らし訴えかけるが、その言葉を投げ掛けられた東仙はその手を払い除けた。

「貴様に何が分かる…!! 愛する親友を手に掛けられた上に復讐すらできず…親友を殺めた者の犯した罪が安寧という何の意味も持たない偽りの言葉のみで有耶無耶にされ…守るべき世界に見限られたこの私の気持ちがお前には理解できるのかッ!!!」

そう叫んだ東仙の瞳からは既に涙が流れ出ていた。今まで黙り込んでいた彼は千弘に詰められた事でようやく自身の本当の意思を吐露したのだ。それを話す事自体が彼にとっては苦痛なのか、声は震え、流れ出ている涙は頬を伝いながら冷たい地面に流れ落ちていた。「頼む…どんな方法でもいいから…私を…殺してくれ…!!! これ以上生き永らえ…腐敗した死神の世界を受け入れてしまえば…私の成してきた今までの行いが全て殺戮になってしまう…!!!」

「東仙隊長…」

彼の吐露した言葉によって千弘はようやく彼が裏切った理由を知った。それは『復讐』己の親友を殺めた存在と、その者を裁かない世界そのものへの復讐の為に東仙は離反したのだ。

「どうしますか? 局長…」

「ふむ…」

千弘は困り果てると、後ろで待機していたマユリへと目を向ける。すると、今まで黙っていたマユリは立ち上がると東仙の元に近づいた。

「東仙要。私は君の過去になど興味はないし、何があったのか知った事ではない。正直殺して欲しいのならば今ここで殺してもいい。だ

が、その恨みを原動力に培って来た力は千弘には及ばないが本物だろう。その力をこのままにしておくのは私にとっても尸魂界にとつても少し惜しい」

「だからなんだ…」

マユリは東仙に向けてニヤリと笑みを浮かべる。

「君の復讐の手伝いをしてやろうじゃないか。恨む相手が我々に些細な事でも危害を加えたときは四十六室の介入が来る前にここにいる千弘が始末しよう」

「はい!?ちよつと局長!!私にそんな無理難だ——」

「その代わり…今後もし…『尸魂界の存亡を掛ける程の戦い』が起こつた時や、何か人手が必要になつた時は文句ひとつ漏らさず私に従う事を約束してもらおうヨ?」

「……」

その言葉に東仙は口元を噛み締めると、白い目をマユリに向ける。

「本当にできるのか?」

「勿論。まあ、君の恨む存在が我々に損害を与えた時限定だがネ」

「……」

その後、東仙はマユリの提案を受け入れて交渉は成立した。それによつて後に起こる滅却師による襲撃の際に彼は約束通り皆とは違う場所でありながらも侵攻を食い止めるべく市丸と共に闘っていたのだ。

—————

—————

—————

そして今に至る。その話を切り出された千弘は思い出すと共に額から汗を流した。

「ええ。覚えてますが…つてあれは局長が勝手に約束した事ですよね!?」

「理由はどうかあれ、私は貴様らの要求の通りに闘つた…筋は通してもらうぞ…!!」

そう言いガラス越しでありながらも東仙の鋭い白い瞳が千弘に向

けられ、ガラスも少しばかりか亀裂が走った。

「うう……霊王宮を襲撃する程の死神に私が勝てるかどうか……」

千弘は相変わらず怖気付くも、その霊王宮を占拠した上に霊王を吸収した滅却師の王であるユーハバツハを倒した奴が何を言っているんだと皆は思うだろう。

そんな中、後ろで待機していたネムは何か連絡を聞いたのか2人に話した。

「その時灘という男ですが……今、一番隊隊舎に来ているとのこと……」

「ええ!？」

ネムから話を聞いた千弘は一番隊隊舎へと足を運ぶのであった。

## 新当主の訪問

ドドドドドドドドド

一番隊隊舎へと続く道を千弘とネムは土煙を巻き上げながら駆け抜けていった。

「これはまたとないチャンス!!今すぐにでも会って事情を聞き出さないと!!」

「現在はまだ隊首室にいらっしやるかと…。では私はこの辺で失礼します。マユリ様の実験の補助があるので」

「了解です」

ネムと別れた千弘は加速して一番隊隊舎へと向かうが

「ハッハー!!俺もいくぜ抜刀齋!!新当主様の顔を拝めるなんざ滅多にねえんだからよお!!弱かったら速攻ぶっ殺してやらあ!!」

齋藤不老不死

初代六番隊隊長。隊長格の中でも血の気が多く生粋の戦闘狂である。更にその剣の動きは初代剣八である卯ノ花にも劣らず、振り回すその姿は正に肉を食い散らす凶暴な獣であり1000年前は滅却師達をバラバラになるまで斬り刻み周囲を血の海へと変えたらしい。

「カッカッカッ!最近、現世のテレビなるものをみて北斗〇拳とやらを習得してきたんじや。実験台には丁度良いわいのう!!」

四楓院千日

初代二番隊隊長。四大貴族である四楓院家において歴代最強の当主とされており、斬術は勿論、武術である白打や瞬歩においては威力も素早さも夜一とは桁違いで右に出る者はいないとまで言わ締めた達人である。型がなく、動きが読めないその動きから繰り出される蹴りや拳の一撃は正に兵器であり、1000年前はその武術で滅却師達を蹂躪し尽くしたらしい。

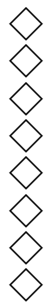
彼は今の四大貴族の出立であるが、もう家に戻る気はないらしい。

この二人は話を盗み聞きしていたのか、付いてきてしまった様



だ。

「なんでこの2人まで…」



一番隊隊舎——。そこでは巨大なテーブルを境にして互いに睨み合う死神の姿があった。

「就任して間もなくおめでたい時にこんな薄汚い隊舎に何用かな？」

1人は白く長い髭を伸ばし至る所から皺が目立つものの、全てを威圧する鋭い眼球が特徴的な護廷十三隊 総隊長『山本元柳斎重國』

そしてもう1人は 彼と対峙するかの様に向かい側の席に座りながら出された茶を啜っていた。

「いやあなに、ただの再会の挨拶と別件ですよ山本重國殿……。それにしても、貴方は数百年前とも変わらず凄まじい霊圧ですね。滅却師との戦いの途中に退場したにも関わらず今でも隊士から厚い信頼が寄せられるその姿勢：重々恐れいるよ」

そう言い元柳斎の目の前に座る青年は軽く彼に対して皮肉を交えた言葉を取りながら出された茶を啜る。

そんな勇敢な青年の名は——

四大貴族 綱彌代家当主 『綱彌代 時灘』

最近になって死亡した前当主に変わり、分家から成り上がったキレ者である。

彼の飄々とした態度に、その空間の中に立っていた雀部は既に頭に来ていたのか鋭い目を向けていた。

そんな中 茶を飲み終えた時灘は閉じられていた瞳を元柳斎から離し、壁際に立っていた京楽と浮竹へと向ける。

「久しいな春水、浮竹。私が蛆虫の巢に収監されかけて以来かな？」

「そうなるねえ〜」

「あれから数百年は軟禁されたと聞いていたが…相変わらずのようだな」

同期である時灘から声を掛けられた京楽は相変わらず楽な声色で

返事をするものの、その目はまるで時灘の裏を読もうとしているかの様に鋭いものであり、浮竹も彼と同様に時灘へ鋭い目を向けていた。「愚かな話しだよ。本家の連中は私に罪を背負わせるのを恥とし、存在自体を無かった事にしようとしたのだからな。そんな真似をするぐらいなら私を正式に搦き処刑なり追放なりするべきだった。その結果どうだ？その罪人にこうして全てを奪われてしまった」

そう言い時灘は今回の自身の当主襲名について自傷気味に語り出した。それを聞いた元柳斎は閉じていた目を開き彼へと向ける。

「ほう？それは…此度の当主暗殺の件…犯人は貴殿である…と受け取って良いのかな…？」

「お戯れを。ただの皮肉に決まっているでしょう。ですが、受け取るのも取らないのも貴方の自由ですよ山本重國殿。ただ…」

その視線を向けられても時灘は意に介す事はなく、アツサリと彼らから視線を逸らし目の前の元柳斎へと目を向けた。

「今の私は当主だ。仮にそうだとしても揉み消すことなど容易だよ。たかだか護廷隊の総隊長『ごとき』に私の動きにどうこう言えるとは思わない事だ」

「…」

その言葉に元柳斎は何も言い返す事はなかった。五大貴族は霊王宮とさほど変わらぬ権力があり、それどころか綱彌代家は今現在において五つの家の中で最も影響力と権力がある。それは裁判官である中央四十六室よりも上であるために尸魂界のいち自警団組織ではない護廷十三隊では彼の言葉に無闇に口を出す事は不可能なのだ。

特に元柳斎は立場を厳守している故にタチが悪い。

そんな中で、彼を軟禁まで追い詰めた京楽が口を入れる。

「思う思わない以前に…キミには前科があるでしょうよ？」

「あの時のことをまだ覚えていたか。私も予想外だったよ。まさかいつも女の尻ばかり追いかけていた君がああもキレ者だったとはな。見事に私の罪を暴いてくれたものだ」

「僕は何も暴いちゃいないさ。『口論の末、親友を殺し、咎めた妻をも殺した』…そういう結論にしか出来なかった時点で全て藪の中だよ」

そう言い京樂が淡々と返すと時灘は表情を変える事なく元柳斎へと目を向けた。

「……まあいい。それよりも総隊長殿：聞きましたよ？随分と優柔不断なご決断ですな。まさか敵方の勢力の残党を始末もせず生かすどころか霊王宮へ住まわせるとは」

「…おや、既に耳に入っておったか」

その言葉に元柳斎は目立った反応を見せず、ただ湯呑みに入った茶を啜る。現在、霊王宮には霊王護神大戦時の敵方の勢力の数人が住み着いているのだ。本来ならばとらえて死刑または幽閉が当たり前であるものの、彼らを捕縛した千弘に判断を任せているために元柳斎は特に指示を出していないのだ。

「ええ。聞いた当初は私も耳を疑いましたよ。剣の鬼として恐れられ、今でこそ落ち着かれてはいるものの、それでも目的を果たすためには隊士どころか自らの命も顧みない性格であった貴方が、『1人の隊士』に処遇を任せただのですから」

時灘の言葉に元柳斎は返す言葉が無いのか、茶を啜る。その一方で、時灘は市丸よりも一層に不気味な狐の様な笑みを浮かべながら続ける。

「その様子ですと…そろそろ交代の時期：でしょうかね？」

その言葉は周囲の皆は勿論だが、元柳斎を尊敬していた雀部の逆鱗に触れてしまった。

「貴様…」

「やめよ長次郎」

雀部が前に立ち斬魄刀へと手を掛けようとする、元柳斎はそれを収め、下がらせると彼に答えた。

「霊王宮への滞在を認める権利は儂にはない。全て零番隊の許可が降りたからこそ故。そもそも…此方に奴らの処遇を決める筋合いはない。あれば迷わず処刑しとるわい」

「なるほど…では、全て『園原千弘』に任せていると」

時灘の先を読んだかのような言葉に元柳斎の細い目が再び開く。彼の名と実力は一般隊士達の間では御伽話のようになってはいるが、

彼ら隊長や貴族の当主そして四十六室の数人には伝わっており、時灘自身も多少なりとも知っていた。

「やはり総隊長殿もあの子を気に入ってらっしゃるご様子ですね。確かに彼を無闇に罰つせれば肝心な時に頼りの綱にならない。賢明なご判断と改めるべきでしょう」

「おや？ 毎度毎度、嫌味を言うキミにしては珍しいじゃないの」  
「嫌味とは失礼な春水。それに私も彼には興味がある」

京楽の言葉に笑みを崩さずに答えると時灘は元柳斎へと目を向け千弘について話出した。

「『逆賊』 藍染惣右介を単騎で撃破した上に霊王護神大戦の時は敵の手によって地獄に落とされたにも関わらず初代の隊長方を数人連れて生還し黒崎一護をサポートしたとか……いやあく前代未聞のバーゲンセールですねぇ」

そう言い時灘は千弘が霊王護神大戦時に成し遂げた偉業を次々と話し始めていった。それについて元柳斎は額に眉を顰める。特に千弘が数人の初代隊長達の霊子を奪い取り浦原とマユリが蘇生させた事は尸魂界を震撼させた大ニュースとなり、四十六室がパニックに陥る大事件となったのだ。

「ぐう……」

だが、それを耳にした元柳斎は眉を顰め、額に手を当てる。初代隊長達の殆どが尸魂界の歴史に名を残す程の大罪人であるためにそれを再び世へと解き放つ危険性や制御できず謀反を起こされる可能性を危惧した四十六室からこっぴどく責め立てられた事で、元柳斎にとってそれは最も酷な記憶として残っていた。

「左様……。確かにバカをしでかしたのはしたが、奴の力によって世界の安寧が保たれている事もまた事実」

「確かにそれは言えますねえ。使える物は何でも使う……園原千弘は言わば霊王に続く世界の均衡を保つための鎖……貴方らしいお考えだ。その決断がいままでのような『裏目』に出ない事を祈りますよ。例えば逆賊に踊らされ1人の死神の処刑を執行しそれを止めた教え子2人に牙を剥いた時の様にね」

「…」

その言葉に元柳斎は何も言葉を返さなかった。確かに彼は藍染によって乗っ取られた四十六室に命じられるがまま、ルキアの処刑を執行し、それを妨害しようとした教え子達に剣を抜いた過去がある。それは紛う事なき己の人生における大失態といえるだろう。

そんな中、その緊迫した空気を打ち破る浮竹の声が入った。

「お前は今回…何のために来たのだ…？先生や京楽に対する嫌味を言うためか…？」

「ん？あく忘れていたよ。それもあるし、もう一つある」

そんな緊迫した空気を作り出した張本人は悪びれる事もなく話を続けた。

「私と同じ現四大貴族…いや、元貴族である夜一に連絡を頼みたい」

『四楓院夜一』100年前に二番隊隊長を担っていた女性であり、四楓院家において初の女性当主である。今の彼女は過去の罪は全て帳消しになっているものの、尸魂界にはあまり訪れず、現世にある『浦原商店』にて居候していた。

「彼女とは貴族の連絡網では連絡がつかなくてね。其方ならあのじやじゃ馬との連絡の付け方ぐらい知っているだろう？」

時灘の言葉に元柳斎達は納得する。彼女は貴族ではあるものの、もう当主ではないために限られた間柄でしか連絡が取れない貴族の連絡網では繋がるのが不可能なのだ。

だが、ここで元柳斎は勿論だが、京楽や浮竹もある疑問を抱いた。それはなぜ現当主『夕四郎』すなわち彼女の弟ではなく、前当主である彼女へ連絡をつける必要があるかだ。

「彼女はもう弟の夕四郎君に当主の座を譲ってるけども…何を企んでいるんだい？」

「別に何も。私はただ真つ当な提案をしようと思っただけさ。現世や尸魂界を含む全ての世界の調和のために…ね」

「…ふむ」

その申し出を元柳斎は受け入れることに決めたのか、ゆつくりと頷



「そんなこと出来るわけないでしょう!?!ほら、着きましたよ!!」

齋藤の言葉に言い返しながらも、隊首室前へと到着した千弘は、その入り口を閉める扉の両脇に手を掛ける。

「待ってください皆さん!!ここは今…」

「邪魔じゃペタ子」

「下がつとれペツタン子」

「ペ…ペタ子!?!ペツタン子!?!」

残っていた七緒を千日と齋藤が軽く流すと、千弘が扉へと手を掛ける。

そして――

――  
バアアアアン

思いつきり両手で開いた。それによってその場に凄まじい音が響き渡った。

「失礼しますッ!!」

「しゃああ!!!」

「ホワツタアアア!!!」

目の前の扉を勢いよく開けた千弘は挨拶しながら齋藤、千日と共に中へと飛び入る。

「な…千弘くん…!?!」

「こりやまあ随分と派手な登場だねえ…」

突然と千弘が登場した事で中にいた浮竹や京楽、そして周囲の皆全員が千弘の登場に驚きを隠しきれず唾然とする。そんな中、部屋の真ん中で此方に身体を向けて座っていた元柳齋の鋭い視線が千弘へと向けられた。

「何用じゃ…?」

「決まっただらお糞爺!!新当主様をぶちころ…ふがあ!?!」

「しいー!!!」

思わず齋藤が本音を吐いてしまうのを口を塞ぐ形で防いだ千弘は

来た理由を話す。

「ここに来ていらつしやる綱彌代家の新当主殿にご挨拶とお話をお聞かせ願いたく参りました」

「ぶはあ。その通りだあ!!おいおい新当主様はどこダア!?この齋藤不老不死様が名誉ある五大貴族に相応しいかどうか試してやろうじやねえかあ!!!あ?今は四大貴族だけか...どっちでもいい!!」

「ほおら出てこんかいのう〜!!」

「少し黙っててください!!!」

初代隊長である齋藤や千日も一緒であり、3人は中へ入ると周囲を見渡した。だが、それらしき人物は見当たらなかった。

「あれ?いない...霊圧はまだ感じるのですが...」

「逃げたか...?よし追うぞ抜刀齋!!」

「いちいちその名前で呼ばないでください!」

そう言いながら3人は扉をそのままにしながら走り去っていった。

そして 無理矢理開かれた扉がゆっくりと動き出し元の位置に戻ると

そこには壁にめり込む時灘の姿があった。

「あ...ああ...」

壁に叩きつけられた時灘は腕をピクピクさせながらそのままゆっくりと地面に崩れ落ちていったのだった。

「じゃから危ないと申したというのに」

その後、時灘は立ち上がれない程の重傷をおったのか部下によって担架で運ばれていったらしい。

そしてその翌日。事態はとんでもない方向へと進んでいくのだった。



## 騒動の幕開け

「己え…園原千弘おお!!」

あれから部下達によつて担架で運ばれ屋敷へと帰還した時灘は、自室の中で怒り狂っていた。

「貴族であるこの私に恥をかかせるとは…!!」

その顔からは一番隊隊舎で見せていた余裕な表情は消え失せており、代わりに余裕も冷静さもない怒りに満ちていた。彼はこれまで何度も苦難に見舞われてきたものの、あれ程の仕打ちをされたのは初めてであったのだ。その上に、現在の彼は貴族の当主であり、あの仕打ちには彼の肉体のみならずプライドにも大きな傷を残したのだ。

「…今一度…君には立場というものを弁えてもらわなければな」

そして時灘は書物をしたためると共に部下を呼び出す。

そんな中であつた。時灘は何かを思い出したのか額に手を当てる。

「……ん? そういえば彦禰の奴は随分と遅いな…一体何をやってるんだ…?」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

虚圏。それは虚のみが暮らす別の世界。

ユーハバツハが倒されて以来、滅却師が退散した為に虚圏にも再び平和が訪れたのであつた。

「行くわよおお!! 今日も美しくエレガントに!!」

「…はい! 先生ツ!!」

そんな虚圏の砂原の上では異形な虚達がクールホーンと共にポーズを決めていた。

「ほらそこ!! お!! もつと脚を上げなさい! 美しさといわば完璧な肉体…それを得るためなら、訓練での一ミリのズレも許されないのよ!!」

「…はい! 先生!!」

クールホーンのお叱りに虚達は声を合わせながら答えると再びポーズを取っていく。

その中には…ネルの姿も。

そんな景色を虚夜宮の窓から見ていたハリベルは………まさにそれについての苦情を部下であるアパッチから受けていた。

「ハリベル様！本当に『アイツら』何とかできないんですか!?!」

「…」

彼女の言葉を聞いたハリベルは冷や汗を流しながら外の景色を見る。

そこには外の砂丘にて、多くの異形な虚達が列をなしながらクールホーンと同じポーズをとっていた。その雰囲気はマジで暑苦しく、見ているこっちも暑くなってくる程のものであった。

「無理を言うなアパッチ…できたらとつくにしている…それにクールホーンは井上織姫と同じく…私やスタークを救ってくれた恩人だ。あまり強く言えん…」

そう言いハリベルは頭を抱えながら返す。因みにクールホーンの行動には毎度毎度、頭を悩ませており頭痛の種となっている。因みに前もグリムジョーやウルキオラ達を体操に強制参加させており共に汗を流していたようだ。

「…あと、奴のストレッチは少し気持ち良いからな…(ボソッ)」

「ハリベル様あ!?!」

ハリベルもまた彼の生徒となっていたのだ。

その時であった。

「…!!!」

突然と妙な寒気が背中を襲った。

「なんだ…この不気味な霊圧は…!?!」

感じられるのは破面でも滅却師でも、ましてや死神でもない『異質な霊圧』。それはアパッチや周囲の破面そして、外にいた破面達も感

じ取っており警戒していた。

「出るぞ」

「はいー」

「————」

外へと出たハリベル達は先程感じられた霊圧を再び探り、出所を探し出す。

すると

突然とその正体は現れた。

「な…!!」

驚くハリベルや破面達の目の前には空に開いた巨大な黒腔。そこから小さな影が飛び出して先程の霊圧を撒き散らせながら凄まじい勢いで地上へと落下して数百メートルもの巨大な砂煙を立ち上がらせた。

「何だありや…?」

「ただの子供…には見えませんね。感じられるのは我々と同じ破面…いえ、それどころか滅却師や死神の霊圧も混ざっております」

「…アパッチ達の混獣神と似ているな」

同じく外へと出てきたグリムジョーとクールホーンのストレッチに参加していたルドボーンもその子供に対して警戒心を露わにしており、彼らの言葉を耳にしたハリベルも改めて現れた存在から感じ取れる混沌とした気に警戒を更に高めた。

すると

「あいたたたた…砂って飛び込むと硬くなるんですね。なるほど勉強になりました!」

緊迫した空気を打ち壊すかのような軽快な声と共に砂煙の中から死覇装とは異なった衣服を身に纏った少年が顔を出した。

体格や身長は日番谷と同程度であり、美形というよりかは幼さを残した中性的な顔立ちをしていた。

現れた少年は目の前のハリベル達を見つけると頷き周囲を見回した。

「うん！時灘さまの言う通り破面がたくさんいますね!!これなら命令が実行できそうです！」

相変わらず緊張感のない少年。純粹無垢な仕草から警戒する必要はないように思えるものの、皆は決して油断も警戒も解くことはなかった。何故ならば、先ほどの異質な霊圧を放った正体がこの少年なのだから。

「生まれ…お前は一体何者だ…？」

「ハイ！自分はヒコネ。産絹彦禰 と申します！」

ハリベルの質問に現れた少年『彦禰』は元氣よく答えるが、その姿を見ていたグリムジョーは嫌悪感を持ち始めた。

「何なんだあのガキ…目が全然笑ってねえ…」

「それに死神や滅却師の気配まで…どうして…？」

ネルも得体の知れないその風貌や気配に警戒する中、彦禰 はそのまま言葉が続けた。

「ええと破面の皆さんに時灘様から贈り物があります！」

「贈り物…？」

聞いたこともない名前にハリベル達は更に困惑するも、彦禰 は続ける。

「バラガンさんと言う方と藍染さんと言う方がいなくなってこの世界には王様がいなくなったと聞きました。ですので、時灘様はこのヒコネをこの王様にもして下さるそうです！良かったですねえ！いい王様になれるように頑張ります!!」

そう言いながら彦禰 はペコリと頭を下げるが、その言動と仕草に破面達は更に警戒を強めた。

そんな中であつた。その言葉によって警戒よりも、藍染に対する侮辱として受け取ったのか、ルドボーンが能力を解放しながら前へと出た。

「不敬極まりない。あの『白い衣を茶色に染めた』下痢の王である藍染様に成り代わろうなど…」

「不敬なのはお前だ」

ルドボーンの皮肉混じりの言葉にハリベルは突っ込むがそれを気にせずルドボーンは自身の能力を発動させ周囲から骸骨の戦士達を呼び覚ます。

「行け」

ルドボーンの指示によって現れた骸骨兵士達の刃が彦禰へと振り下ろされるも、その刃は彼に傷を負わせることなく、身体へと当たった瞬間に砕け散った。

「あれは…鋼皮…!?!」

ネリエルが驚きの声を上げる。自身らの技をなぜあのような虚とも死神とも取れないような子供が扱えるのか、そんな疑念を抱く皆の前で彦禰は笑みを浮かべた。

「やはり時灘様の言う通り誰も納得しませんね!その場合は…:納得するまで、心を折るまで、打ちのめせ…:だそうです!」

そして彦禰は背中に背負った刀へと手を掛けると唱えたのだった。

「星を巡れ——『己己己巴…!!!』」

その時であった。刀を掴んだ彼の手を巨大な拳が優しく包み込んだ。

「可哀想な坊やね…まだこんなに幼いのに大人の手駒にされるなんて…」

「……へ？」

その巨大な拳と突然と感じられた超巨大な霊圧によって、彦禰の顔からは先程まで見せていた異質な雰囲気が一瞬にして消え去り、驚きながらゆっくりと上を見上げた。

そこには……彦禰を見つめる筋骨隆々なオカマ破面『クールホーン先生』の姿があつた。

「安心なさい…私達大人はあなたの味方よ♡」

その言葉と共に彦禰の刀に亀裂が走り出す。

「うわあああ!!!時灘さま助けてえええ!!!」

—————

—————

——

時灘の訪問から一夜明け、瀨霊廷では貴族に就任した時灘の話題でもちきりであり、檜佐木が編集長を務める瀨霊廷通信にも大きく掲載されていた。

だが、一部の者は興味を示すことなくいつも通りに過ごしていた。それは勿論……十二番隊の皆も……。

「よいしょ…と」

千弘はマユリの指示によって院内にある技術開発局の新たなる私有地に呼ばれていた。

「何なんですか一体？」

「普段頑張っている君に不本意だが、プレゼントをと思つてネ。持つ

てきたモノをここへおきたまえ」

「プレゼント……？」

マユリの言葉に首を傾げながら千弘が持つてくるように指示を出されていた『ロケット』を発射台に置く。千弘が持つてきたのは、高さがおよそ5メートルで幅が3メートル程の小型のロケットであった。

発射台に置かれたロケットをマユリが点検する中、千弘は彼の先程の言葉について尋ねた。

「あの……プレゼントっていったいなんですか？」

「ん？ 決まっているだろう。」

—————  
ネムとの旅行さ

「……………え？…え?!?い…いまなんと…!」

千弘は訳が分からず耳を疑いながらももう一度尋ねるとマユリは答えた。

「だからネムとの旅行と言っているだろう。普段頑張っている君には偶には褒美を与えようと思つてネ」

「…!!!」

その言葉に千弘は一瞬ながら驚くものの、即座に顔を赤く染め上げながら笑みを浮かべた。

「やったあああ!!!」

初めてだった。彼からこれほどまで喜ばしい程の報酬は。恐らくかつてないものであるだろう。

「ありがとうございます局長〜!!!」

「いちいちうるさいヨ。一応、これを持ち物として扱おうと思ってるが、まだ試作品なのだヨ。それに試乗してもらうために呼んだのだ」

その言葉を耳にした途端、最近のマユリの忙しさをようやく理解すると共に心の中で唾を吐き捨てるほど嫌っていた彼の印象を改めた。

この男は一見、人を食ったかのような口ぶりではあるものの、内面ではとても気にかけていてくれたのだ。

「局長…!!」

「ほら、さっさと手伝いたまえ」

「はいー」

それから千弘は満面の笑みを浮かべながらロケットの整備を手伝っていき、いよいよ整備が終わり発射スタンバイが完了し飛ぶ時が来たのであった。

「発射準備完了。いつでもカウントダウンOKです!」

「よし。では早速乗ってもらおう」

部下からの合図にマユリはロープを取り出すと、発射台に設置されたロケットへと千弘を縛りつけた。

「あれ?何ですかこれ…?」

縛り付けられた千弘は不思議に思いながらマユリへと尋ねるとマユリは懐から一台のS w O t c hコントローラーを取り出しながら答えた。

「言い忘れていたが、これは遠隔操作機能が付いていてネ。この装置を操作することで自由に操縦できるのだヨ。一応、縛り付けているのは事故防止のためさ」

「成る程」

千弘はマユリからコントローラーを受け取るといつでも飛べるように心の準備をする。



「よし。ではカウントダウンと行こう」

マユリの指示と共に班員達が次々と機器を操作していくと、次々とロケットの噴射口に青い靈子のエネルギーが充填され始めていったのだった。

それによってカウントダウンも始まる。

5

4

3

2

1

発射。

その瞬間 千弘の縛り付けられたロケットは空高く飛び上がっていった。

ドオオオオオオオオンツ

凄まじい音と共に噴射口から靈子を溢れ出しながら千弘を乗せたロケットは次々とスピードを上げていきながら上へ上へと上つていく。その音や後に残る煙の後は瀟々たる注目を集めており、全死神達の視線がロケットへと向けられた。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「わぁ…すごい…!!!」

飛び上がったロケットは遂に瀨霊廷が一望できるほどの高度にまで達した。広大な瀨霊廷の景色を目にした千弘は感動の声をこぼしながらも、先程のマユリから渡されたコントローラーを取り出して操作を試みる。

「よし…そろそろ………あれ？」

だが、

いくらリモコンを操作してみてもロケットの軌道が変わる事は無かった。おかしいと思いつつも千弘は何度も何度もコントローラーを動かすものの状況が変わることはなかった。

いや、それどころか霊子の噴出が終わり今度は先端部分を下に向けてながら落下し始めていったのだ。

それをみた千弘は更に焦り始めながらコントローラーを操作するが、相変わらずうんともすんとも言わなかった。

「あれ…ちよつとあれ!?ええ!?操作できないですけど……ん?」

すると そのコントローラーが突然 変形すると一枚のスクリーン画面を搭載した通信端末へと変形し、そのスクリーンに2頭身のマユリの絵と共に文字が投影された。

『バーカ』

「え…?」

そのロケットは空気をつけ抜けていきながらグングンと加速して

いき

「さて…奴をどうしてやろうか…涅マユリや初代隊長共と同じ反乱因子の疑いをかけてしばらくは無間に……ん？なんだこの音は――」

―― 貴族街にある綱彌代家へと墜落したのだった。

ドガアアアアアアアン

「局長テメエこのやろおおおおおおおおおお!!!」

――

――

――

煙が巻き上がる景色を見ながらマユリは頬をポリポリと搔く。

「ロケットが操縦できる訳ないだろ」

## 獄中生活

綱彌代家にマユリお手製のロケットが着弾した後日。

六番隊副隊長である恋次はルキアと六番対隊舎を歩きながら現世にて生活している一護や織姫の事を思い浮かべていた。

「たまには一護のどこにも顔出すか？」

「ああ。そうだな。千弘も誘ってみるか？ 奴には何度か世話になったし一護も喜ぶだろう」

「おうーんじや、早速 十二番隊に行くか！」

ルキアの提案に恋次は頷くと、そのまま回廊を進んで行った。

すると 目の前から白哉が歩いてくる姿が見え、思わず驚きの声をあげてしまう。

「あれ…隊長!？」

「兄様!？」

「恋次とルキアか。なにをそんなに驚いている？」

「いやあ…隊長、確か今日予定があるとか言ってたんで…」

「それは延期となった。見よ」

「…ん？」

白哉が取り出したのは緊急で創刊された瀨霊廷通信の記事であった。それを見ると――

「なになに……」

『綱彌代家 十二番隊隊士の試作品によって半壊。新当主は全治1ヶ月の重傷』

えええええー!？」

「な…なんですかこの記事!？」

二人の驚きの声に白哉は予想はしていたのか、ため息をつきながら答えた。

「驚くのも無理はない。文字通り綱彌代家に正体不明の飛行物体が墜落したのだ。疑わしい涅マユリが言うには…部下の試作品が原因で

あるらしいが……まあ、それでも貴族の家を焼き払った事に変わりはない故に責任は重いだろぅがな」

「どんな兵器作ったらこんなになるんすか!？」

「私に聞かれても分からん。しばし疲れた。しばらく休んでくる」

そう言い白哉は通り過ぎていった。

その姿を見送った恋次は改めて記事を見直す。

「明らかにこれ……犯人 涅隊長だよな……？」

「う……うむ……」

恋次の呟きにルキアは頷くのであった。

—————

—————

—————

その後、予想通りだが、瀧霊廷は大騒ぎとなった。それもそうだ。五大貴族である綱彌代家に向けてロケットがぶち込まれたのだから。それは瀧霊廷通信にも見事にネタとして上がり大反響を呼んだ。

そしてその知らせは藍染や市丸は勿論だが、東仙の元へも届いていた。

「……」

面会室にて、檜佐木からその知らせを聞いた東仙は何も表情を変化させる事はなかった。

「なぜ死んでいない？」

「いやあ……俺に聞かれても……」

—————

その後、事態は収束するかと思いきや、ますます大きくなっていった。十二番隊が引き起こした事故は、中央四十六室に総隊長の管理不足と受け取られる事となり元柳斎は中央四十六室から大目玉をくらってしまった。

そして、元柳斎はマユリが犯人である事を見抜いていた為に、即座に彼を隊舎へと呼びつける。

「くおおおらああ!!お主は何をやっておるんじやああああ!!」

一番隊隊舎にて。元柳斎が瀨霊廷に響き渡る程の怒号を上げるが、そんな怒りを露わにする彼の前ではマユリは平然と立っており、余裕丸出しなのか、表情を全く変化させなかった。

「いきなり呼び出された上に、何をそんなに怒鳴っているのやら」

「しらばっくれても無駄じゃ!!これは貴様の仕業であろうッ!!」

そう言い元柳斎は今朝の瀨霊廷通信を取り出すとパンパンと叩きマユリへと見せた。

「おやく?その記事でしたか。それは私の部下がしでかした事です  
よ」

「惚けるなあ!!こんなカラクリなどお主の十八番であろう!!」

「まあ確かに作り方を教えたのは私です。ですがこれも護廷隊のためを思ってしまったこと…。製作者の目的は次に旅禍が侵入してきた際は誰の血も流れる事なくこの弾道型ミサイルによって爆撃し撃退もしくは捕縛する…今回はその実験に私が付き添ったに過ぎません。それに、尸魂界を守る為ならば、たとえ実験であろうとも犠牲者が出る事は厭わない…事故を起こしながらも新たな開発を。貴方の掲げた流儀に近いではありませんか」

「だからといって貴族の屋敷を吹き飛ばす馬鹿がおるかああ!!」

その後、元柳斎の説教は1時間近くに渡ったものの、マユリが悪びれる様子はなく、アツサリと終わってしまった。

それを隊主室前で聞いていた京楽と浮竹は記事を見ながら苦笑していた。

「これはまた…とんでもない事をしでかしたな。いくら涅隊長や千弘くんに借りがあつても…俺達では庇い切れないよ…」

「ハハハ。まあ、取り敢えず出来る限り彼のフォローに回ってあげよ。

相変わらず十二番隊は此方の予想を遥かに裏切ってくるね」

「そうは言うがな京楽…涅隊長はともかく…千弘君はどうする…?」

「それは今僕も考えてるところだよ…」

そう言い京樂は番傘の束をつまみながら苦笑するのだった。

ここで補足をしておこう。犯人は勿論 マユリ様である。

ロケットの着弾によつて巨大な屋敷はほぼ半壊、時灘自身も全治1カ月の重傷を負う事となつたために製作者や搭乗者には慰謝料込みの超高額な金額が請求される事となつた。

だが、そこはマユリの十八番である責任転嫁。あの手この手を使い全ての責任をロケットへと巻き付けられた千弘へとすりつけるように工作しており、豪邸が10軒も建てられるほどの高額な慰謝料に加えて刑罰は全て千弘に降り掛かり、十二番隊は少量の責任を負うだけで済むようになったのだった。

ではその責任を負わされた千弘はどうなったのか？簡単である。

見事に重罪人となり、借金を背負うと共に四大貴族殺人未遂によつて無間へと投獄された。

◆◆◆◆◆

拝啓、涅槃七號様。

お元気ででしょうか？借金まみれで貴方と離れて3日が経ちました。貴方に会えず寂しさのあまり…私は…私は…!!

「もう死にそうですぅぅく!!!」

「どうしました千弘くん？」

真央地下大監獄【無間】にて、鹿取に抱き抱えられていた千弘の悲  
痛な叫び声が響くのであった。



## 持て余す暇と藍染との再会

その後、千弘が無間へと収監された事実は隊長達の間で広まって行った。

千弘の強さを知っている殆どの隊長達は驚く者もいれば、一部はただ彼の自業自得であると冷静に受け止める者もあり、碎蜂に至っては千弘を快く思っていなかったのか、嘲笑うかのような笑みを浮かべていた。

因みになぜ碎蜂が千弘を嫌っているのか、それは単純に先の戦いで捕らえた敵の残党を生かしたからだ。

甘さというのを未だに捨てきれない彼に碎蜂は怒りを露わにし、彼に対しては嫌悪感を抱くようになってしまった。

その一方で、四番隊の卯ノ花は相変わらずの彼らの破天荒ぶりに呆れ果てており、特に心配はしてはいなかったが、勇音は千弘が収監された事にショックを受けてしばらくは落ち着かなかつたらしい。

――

――

――

――

そんな中で、今回の被害者である時灘を最もよく理解している京楽は元柳斎へと掛け合っていた。

「山爺くどうにかなんないのかい？ 確かに今回は千弘くんや涅隊長に非があるとは思うけども。零番隊の王悦殿から連絡が来て、斬魄刀が盗まれたっていうじゃない？ そのの方がまずいでしょ」

一番隊隊舎では背を向けながら座る元柳斎に向けて京楽が進言していたが、元柳斎はそれを一蹴する。

「それとこれとは話が別じゃ。それに、奴の投獄を決めたのは四十六室…儂ではどうにもならん」

そう言い元柳斎は冷たく言い放ちながら茶を啜る。だが、千弘の処

分について冷たく言い放ったとは別に、鋭い目を開きながらただ一言口にした。

「じゃが…それもまた機会と言えよう。千弘が動けない今…邪魔者はいないと判断した奴はいずれ尻尾を出すじゃろうな」

「さつすが山爺！」

その言葉に京楽は笑みを浮かべたのであった。

だが、その直後に元柳斎の鋭い目が開かれる。

「そのためには…：…奴らも目立ちすぎる…ッ！」

—————

その一方で、貴族御用達の治療室で治療を受け終え、屋敷へと戻っていた時灘は天井に向かって高笑いしていた。

「ふははははは!!ぎまみろ園原千弘！」

自身の野望の最大の壁である千弘が取り除かれた事で、もはや邪魔者となる者は誰一人としていないために時灘は全身に負った傷の痛みさえも忘れてしまう程の快感に包まれる。

更に入ってきた情報によれば、元柳斎と卯ノ花を除く初代の隊長たちも収監されたという。

千弘のみならず、厄介な力を持つ初代隊長も不在となった今、彼にとつて最大の好機と見れるだろう。

故に時灘は行動を開始する。

そんな時であった。

「ふえええ…：…めんなさい時灘さまあ…遅くなりました…：…」

付近の空間が歪むと、全身がボロボロという無惨な姿となった彦禰が現れた。

「彦禰 か。随分と遅かったな」

「申し訳ありません…：変な破面に捕まって色々と説教されたりしてました…：…」

「ほう。それはご苦労だったねえ。まあ計画実行まで時間があるからゆっくり休むといい」

頭を下げる彦禰 に時灘は労いの言葉を掛けながら頭を撫でる。

「お前は靈王になるのだからな」

—————

—————

———

一方で、

地下大監獄最下層『無間』では——。

「はいダウト〜!!!」

「ふがああああ!!!」

収監された千弘は、何故か一緒にいた初代隊長の皆とダウトを嗜んでいた。

千弘にダウトと叫ばれ、出したランプのカードが間違っていた斎藤はそれまで出されていたカードを受け取ることになり、悔しさのあまりランプを投げ出しながら叫ぶ。

「てめえ抜刀齋!!次は容赦しねえからなあ!!他の奴より先にあがるんじゃないぞ!!」

「あ、あがつちやいました」

「ちくしよおお!!」

それからダウトが終わると、初めてのランプ遊びに皆は気に入ったのか、今度はババ抜きへと突入した。

そんな中であつた。

「というか、なぜあなた達までもここにいるんですか?何も罪を犯してないのに」

鹿取にカードを引かせていた千弘は斎藤達になぜ自身のみならず、関係ない彼女らもいるのか尋ねた。

それに対して斎藤が答える。

「俺達も時灘って奴に目を付けられてるらしくてな。爺に言われたんだよ。騒ぎが収まるまでここにいろつてな」

「え?あの時灘という人って、何か企んでるんですか?」

斎藤の答えに千弘は時灘の企みについて初耳であったために首を傾げながら鹿取へと尋ねる。

すると、鹿取も聞かされていたのか頷いた。

「はい。詳しくはまだ分かりませんが、彼と馴染みの京楽くんから幾つか進言があつたとは仰つていましたね」

「成る程。だから貴方達を…あれ？でも貴方方ならその企みを阻止できるのでは？」

彼女の答えに再び疑問を抱いた千弘が尋ねると、その答えに尾花が笑いながら答えた。

「はっはっは！爺様の事だ。オイラ達がいれば奴さんも計画が実行できねえと踏んだんだろう。ほれ、引きな」

「確かに…」

尾花の答えに千弘は難しい表情を浮かべながらもカードを引く。

「貴方達の強さは異常ですからね」

「オメエに言われたかねえんだよ抜刀齋」

「だから抜刀齋と呼ばないでくださいって……あれ？なら何で卯ノ花隊長は……」

その時であった。

「まさかこんな形でお会いできるとは思つてもいなかったよ」

「……！」

暗闇の奥から何やら異質な霊圧が感じられた。その霊圧を感じ取った全員はトランプを中止して立ち上がり、その一点を見つめる。

「更木剣八に似た恐ろしい霊圧：流石は歴代最強と謳われた隊長の方々だ：」

その声は耳にするだけで、背筋が凍り、聞くものの心を掌握するような恐ろしい声であった。

その一方で、その声に聞き覚えがあった千弘は嫌そくな表情を浮かべる。

「そつか。ここには貴方も捕まってたんでしたね」

「園原千弘：貴様の虫唾が走る声をまた聞く事になるとはな」

暗闇から聞こえてくる声も千弘に対して嫌悪感を露わにするかのように声色を低くさせる。

すると、闇夜に灯されるその光は次第に強くなっていき、声の主が露わとなった。

「ほう？何とも凄まじい霊圧じやのう」

「チーくんよ。コイツが山本の爺様が言ってたオイラの後輩かい？」

「ええ」

千弘が賞賛の声を漏らす中、尾花が千弘に尋ねると彼は頷く。それと同時に周囲に次々と火が灯され声の主の姿が露わとなった。

「元五番隊長 藍染惣右介」

そこには椅子に縛られた藍染の姿があった。

「いい年こいて天に立つたのなんだの口にする厨二病おじさんです」

「黙れッ!!!」

## 滅びの降臨

千弘達が収監されてから数日。瀨靈廷はいつもの日常へと戻っていた。

だが、普通の日常に戻ったからこそ警戒しなければならなかった。千弘という隠れた抑止力が失われた事で時灘はついに行動へと身を移す。

「さて…ではそろそろ始めようか」

千弘達が収監された事で時灘はすぐさま貴族御用達の治療所へと赴き、先代の4番隊副隊長である山田清之助の回道によって傷を回復させすぐさま計画を開始する。

◇◆◆◆◆

所変わって十二番隊隊舎にて。技術開発局は千弘が収監されてから空気が一変していた。

「ん？いつのまにか茶が切れてやがる」

研究室内で休憩のため、湯呑みに手を伸ばし口に運ぶが、中には既にお茶が無かった。

すると、それを察していたのか苦笑しながらニコが現れる。

「いつもは千弘ちゃんかいつのまにか入れておいてくれますからねえ。私が入れてきますよ」

「おう、悪いな久南」

そんな中、ニコは今回の千弘の投獄の件に思うところがあるのか尋ねた。

「それよりも、なんで隊長は千弘ちゃんに全部責任をなすりつけたんですしよう…？それに最近では昔の隊長さん達も全員無間に収監したって聞きましたけど」

「うん…」

それに対して阿近はしばらく唸り込むもすぐに首を横に振る。

「俺もソイツについては分からん。まあ理由あつての事だが、無け

りや千弘は災難だろうな…」

「また怒っちゃいますね…」

そんな中であつた。

「前から思つてたんですけど、千弘ちゃんって一回 隊長に激怒した事があつたんですね？」

「んん？まあそうだったな」

ニコの疑問に阿根は頷くと、お茶を啜りながら思い出した。

「あれは確か副隊長が今のようになつたばかりの頃だったか」

—————

—————

—————

それは数十年も前の事であつた。

浦原喜助と猿柿ひよりが藍染の策略によつて隊長職を退き夜一と共に現世へと逃亡した事で十二番隊及び技術開発局の局長の席に空席ができ、マユリが新たな隊長及び局長となつていた。

その中でマユリは自身の研究者としての夢である命をつくる研究『被造死神計画』を開始していた。

それは困難を極め、出来上がった命は形になる前に死ぬ事もあれば、形になつたとしても流産したときのように外の空気に触れた途端に死んでしまう者もいた。度重なる研究の末、遂に無から胎児へ。胎児から赤ん坊へ。そして赤ん坊から少女へと成長し、新たな命を作り上げる事に成功した。

その少女こそ今の副隊長である涅ネムであり又の名を眠七號と叫ぶ。どんな研究においても彼女は結果を残してマユリをして彼女を最高傑作と記すほどであつた。

だが、ここである一つの問題点があつた。

今でこそマユリはネムに対して素直になれない素っ気ない態度で接してはいるが、千弘が入隊して間もない頃は研究への執念のあまり彼女への態度は親子とは全く言えないほど残忍なものであつたのだ。

ある日。マユリはネムへ実験の観察を任せていたのか、データの記録を求めていた。

「おいネム。前に言っていた実験のデータはどうなっている?」

「はい。此方に…」

ネムの懐から出されたデータの結果を受け取るとマユリは確認する。その内容は研究中の化学製品の日数経過による観察データである。

そんな中、観察日数が書き記されたデータの中である一日の欄のみに空欄が見られた。

「…この期間は何をしていた…?」

「任務の治療で四番隊隊舎にお世話になっていたため取ることが出来ませんで」

その瞬間 ネムの頬へとマユリの拳が撃ち込まれた。その場に彼女の声と共に口元から血が飛び出し足元に飛び散る。

「なぜ診療所を出てまでデータを取らなかった…?」

「も…申し訳ありません…卯ノ花隊長と虎徹副隊長に監視を」

細々とした声でネムは謝罪をするも、言い終える前に彼女の頬へと拳が撃ち込まれた。

「このグズがあ!!誰がお前をここまで育てた?誰がお前を作った?卯ノ花烈か…?」

「いえ…マユリ様にございます…」

「ならば何故私以外の言うことを聞くんだい?」

「も…申し訳ありません…」

その後もマユリの拳が彼女の頬へと放たれていき、彼女の口元のみならず鼻からも血が流れ始める。

バキィ ———— メキッ

その鈍い音が周囲へと響き渡り、局員である皆がざわめき出す。だが、それでもマユリは止めなかった。

何度も何度も彼女の頬へと拳を打ちつけたり、彼女の頭を掴み揺らした。



その時であった。

「ち…ちよつと待ってください局長！娘さんに何やってるんですか！？」

マユリの肩を背後から現れた千弘が止めた。当時、彼はまだ十二番隊に所属したばかりなために皆と顔馴染みでは無かったのか、マユリの肩を掴んで止めた事に周囲の皆は驚き始めていた。

「うるさいヨ。これは親としての教育だ。部外者は引っ込んでいたまえ」

「だからってあんまりですよ!!血が出てるじゃないですか!!」

「…んん？」

千弘の言葉にマユリは手を止めると彼女の顔へと目を向けた。

「殴っただけでこれ程の傷か。これは一度…バラバラにして作り直すべきかな？」

「…!!!」

その言葉を耳にした瞬間 後ろに立っていた千弘は固まってしまった。う。

その一方で、マユリはバラバラにするとは言いながらも何もせずただゆっくりと立ち上がった。

ネムに対する暴力。それはマユリの『自分の最高傑作がこの程度で壊れるはずがない』という自信からくるものであった。

それにこの姿になるまでにマユリは己の意識に反するかのような行動で多大な苦勞をしており、仮に死んでしまえば最初からまた研究のし直しである。

故にマユリは彼女をバラバラにするつもりなどなかった。全てただの彼にとつての冗談である。

だが、冗談とは言えどその言動が

千弘を激怒させてしまう引き金となってしまうた。

「テメエ今何て言った？」

その瞬間 千弘の全身から黒い靄と共に巨大な黒い暴風が溢れ出した。

「「「「?」」」」

溢れ出た暴風は瞬く間に周囲へと広がり実験器具や書類、そして天井を破壊するなど次々と周囲へと影響を及ぼしていった。

「わあああ〜!」

「うお久南!」

周囲に暴風が吹き荒れる中、近くの手すりに掴まっていた阿近は千弘の暴風によって吹き飛ばされたニコをキャッチする。

「阿近さん!!これは一体…!!」

「分からねえ…!!」

「おい阿近!!霊圧の観測機が測定不能って出ちまつてるぞ!!」

「なにい!?まずいな…このままこの霊圧の嵐が収まらなきや瀨霊廷がぶっ飛んじまう…!!隊長ツ…!!」

ニコのみならず鶴州の言葉に阿近は理解が追いつかず、暴風の発生源である千弘に掴まれているマユリへと叫んだ。

「ぐぎゃ…きゃきゃ…!!」

黒い暴風の中、顔面を掴み上げられていたマユリは目を凝らしながら目の前の此方を見つめる千弘へと目を向けた。

その目は先程の落ち着きのある瞳とは全く異なり、まるで別人のように鋭くなっており、目玉も充血するほどまで開かれていた。

更に異様なのは姿だけではない。全身から発せられる霊圧の激しさだ。その霊圧は言うなれば地球全土を包み込むほどの暴風雨であ

り、その激しさから瀾霊廷全体が揺れ、近くに置かれていた計測器も次々と破壊されていった。

「き…貴様…これ程の力を宿していたとは…随分と横暴じゃないかね…？まさかネムに情でも湧いたのか…？」

「ええ。ネムさんには隊士としての職務を教えて頂いた恩があります。なので例え彼女が嫌でなかうと血を流すならば見ている訳にはいきません」

「このガキめ…!!ネム!!」

マユリが叫ぶと千弘の背後からネムが腕をドリルのように回転させながら飛びかかってきた。

それに対して千弘はその手を掴む形で止めた。

「次、ネムさんに攻撃させようとしたら顔面潰しますよ」

そう言い再び千弘の目が此方へと向けられた。

「ツ…面倒な事になったネ…」

掴み上げられていたマユリは次々と頭の中で思考を凝らし目の前の千弘から逃れる方法を模索していく。

だが、どの方法でも彼から逃れることなど不可能であった。しかも至近距離でこれ程の霊圧となればどのような攻撃も弾き飛ばされる可能性もある。

だが、模索していく中で、研究思考であるマユリは別の疑問に駆られた。

「(この霊圧…総隊長と戦った時の霊圧よりも桁違いだ…いや、これもまだ完全ではないのか)」

自身を追い詰めているこの死神の全力はどれほどのものなのだろうか——？そして彼をいのように使えば自身の研究も捗るのではないか？そして新たな研究へも進歩できるのではないか？

そう考えたマユリは霊圧の嵐が吹き荒れる中、千弘に右手を掴まれているネムへと目を向ける。

「ネム、お前にもう一つ任務を与えよう。コイツの監視役だ」

「…はい」

ネムが頷くと今度は千弘へと目を向けた。

「ネムをお前の監視役にさせた。守りたいならば好きにし口。その代わり私の研究にはとことん協力してもらおう」

「……分かりました」

すると、先程まで周囲を吹き荒れていた霊圧の嵐が止まり、千弘の全身から溢れ出ていた黒い霧も消え去っていった。

だが、その場を目にした技術開発局の局員達は決して忘れる事はなかったと言う。

――

――

――

――

「あの時は瀟々たること消す勢いだったからな。後から駆けつけた総隊長達への説明も大変だったし……それに今回の護神大戦の時もそうだったでしょう。本当に焦ったぜ……」

「懐かしいですよね〜今じゃ副隊長のオモチャですし……私達よりだいたい年上ですし……」

「まあ1000年以上も生きてっからなく」

そう言い阿近やニコは思い出を懐かしむ様に話していた。

そんな時であった。

「そんな昔の話を意気揚々と話すんじゃないヨ」

「隊長!？」

突然と背後から声が聞こえ、驚いた二人が振り向くとそこには相変わらず妙なメイクを施しているマユリの姿があった。

「ネムを見なかったか？」

「副隊長を? そう言えば先程から姿が見えませんか……」

――

場所は変わり真央地下大監獄 最下層の無間。

「なく…そろそろトランプも飽きてきたぞ…」

「確かにさつきからずつとババ抜きから始まって7並べ、ダウト、ペー  
ジワン、とか色々やってますけども流石に飽きますよね…」

灯りのみの監獄の中、斎藤と千弘は退屈であるかの様に地面に寝そ  
べっていた。

「おい抜刀齋く他になんかねえのかく？」

「うんそうですねえ…取り敢えず藍染隊長の耳元でカラオケでもし  
ますか」

「やめろッ!!」

千弘のふと口からこぼれ出た案に藍染は真っ先に拒否の声を上げ  
た。それもそうだ。今ここで大声など出そうものなら手が拘束され  
ている藍染自身の鼓膜が消し飛びかねないのだから。

すると千弘はその場に再び寝転がり、真っ暗な天井を見上げた。

「あくあ。眠さんどうしてるかなあ…」

その時であった。

「…ん？」

突然と無間の入り口が開き、数人の貴族の護衛らしき男達が入って  
来た。それを見た斎藤は起き上がると刀に手を掛ける。

「なんだあ〜？退屈凌ぎを察してサンドバッグでも放り込んでくれ  
のか〜？」

「いや、そうではなさそうですよ」

見れば男達のうち、一人は何やら巨大なタブレットを抱えており、  
その画面を千弘達へと向けた。

すると、その画面が突然と光だし、ニヒルな笑みを浮かべる男性を  
映し出した。

ジジ

『居心地は如何かな？元隊長の方々に園原千弘くん』

「……誰？」

「綱彌代時灘……君が話していた男だ」

付近で同様に見ていた藍染が答えると、千弘は驚き目を向けた。

「貴方が東仙隊長の……何故にモニター越しですか？」

『四大貴族であるこの私がそんな薄汚い場所へ赴く筈がないだろう？』

「まあ確かに」

『それよりも、私は君に会いたかった。園原千弘』

「私に……？」

千弘の質問に軽く答えると時灘は単刀直入と言わんばかりの様に手を差し出した。

『これからは護廷隊ではなく私に協力する気はないかな？』

突然すぎる提案に千弘は首を傾げる。

「いきなり何を？」

『前任の霊王そして、それを吸収し膨大な力を得たユーハバツハも死んだ事で尸魂界は更に荒れ始めた。滅却師の脅威が去ったと言えど、未だ我々に敵対する危険分子はまだまだいる。監視されている地獄など……ね』

「あ……」

地獄に関して、何か思い当たることがあるのか、千弘のみならず背後に立っていた鹿取や皆は顔を逸らした。

その一方で時灘は続ける。

『今この世界のバランスは前よりもとても不安定だ。だからこそ我々力あるものが結託しなければならない。特に千弘くん、君は既にそれを証明できるいくつもの功績を持っている。逆賊 藍染惣右介の捕縛そしてユーハバツハの討伐……表向きではユーハバツハの討伐は黒崎一護のみの功績となっているが、映像庁を取り仕切る私からすれば、君も功労者の一人である事も見通しているよ』

「いや別に私が相手にしていたのは分身体であって本当の強さじゃ……」

『さて、では返事を聞こう』

「全く話聞いてくれないじゃんこの人」

時灘は返事を待っているかのよう千弘へと目を向けた。初対面である上に突然と世界規模の話がされた事で流石の千弘もすぐに信じる事も理解することもできていないのか首を傾げていた。

「どうするの?」

「いや断りますよ普通」

鹿取から尋ねられた千弘はアツサリと断った。

「貴方とは初対面ですし、確かに四大貴族という高貴な方なのであまり疑いたくはありませんが、私の性分じゃ会ってもいない人の話に乗るのは流石にできかねますね…」

『そうかそうか。いやあ残念だ。純粋な君ならば私の考えを理解してくれるとは思っていたんだがねえ』

「初対面の人の考えを鵜呑みにするなってお父さんとお母さんに教えられたので。それに、なんか貴方の言葉…真意がそれじゃない感じがして何か別の目的がありそうでしたし」

『そうか。疑われてしまったか…:うん。どうすれば君と交流が持てるだろうね。君の隊長殿と親交を築くべきか…?いや、あの男が私の考えに同意してくれるとは思えないなあ』

「そう言い時灘は腕を組みながら考える中、ふと何か思いついたのか口にした。

『なら君の上司である涅ネムを口説き妻として迎え入れれば君も付いてきてくれるようになるのかな?』

ピキッ――。

その場に骨が軋む音が響き渡る。その音は千弘の腕から聞こえており、藍染自身は額から冷や汗を流しながら時灘へと忠告する。

「時灘…挑発をするならばやめておいた方がいい。奴は一度暴れ出せば手に負えなくなるぞ…?」

「黙っている逆賊め」

藍染の忠告を一周すると時灘は続けていく。

『迎え入れては逆効果か。なら――

酷く殺すのはどうかな?』

「「.:!」」」

その言葉に今度は藍染のみならず千弘の後ろに立っていた斎藤や鹿取達の額から冷や汗が流れ出した。

時灘の特性。それは完全なる『煽り』煽って煽って相手を苛立たせていき、冷静さを欠かせ最後に己の隠し持っていた実力で斬りふせる生粋の外道である。格上の相手であろうと毒口を交えながら怒りを仰ぐその『挑発』はたとえ総隊長である元柳斎に対しても抜かりない。

ネムに対しての侮辱や殺害の意図を交えた挑発――。

その挑発行為に対してこの場にいる全員が思った。『これ以上はやめろ』と。皆はその強さによる勘の鋭さから、あと一言で千弘の怒りが頂点に達してしまう事を感じ取っていたのだ。

だが、時灘はその意を知っているかのように笑みを浮かべながら最後の一押しを掛ける。

『おっと失礼。彼女…いや、あれは“人形”だから――』

“壊す”と言った方が適切だったかな?』

最後に放たれたその言葉。それはもはやネムを人としてではなくただの“作り物”と見做している醜い言葉であった。

その瞬間



「殺す」

千弘の目が血のように赤く光出すと全身から黒い霊圧が溢れ出した。

## 滅びの進撃

「ふう…!!ふううう…!!」

強烈な呼吸音と共に千弘の全身から溢れ出る霊圧は更に激しさを増していくと遂にその色は次第に黒へと染まっていった。

「お…おい抜刀齋!!落ち着け!奴のはったりだ!!」

「それはどうかかな?」

齋藤が千弘を宥めようと叫んだ時であった。

目の前の空間が裂けると、その中から映像に映っていた男『時灘』が現れた。

「初めまして。護廷隊を立ち上げた開祖の方々。だが今は貴方達に構っている時間はありません」

現れた時灘は口先だけの言葉を口にした後に刀を抜くと千弘へと歩み寄った。

「さて、先程の言葉だが…これを見てそうは言えるかな?千弘くん」

そう言い時灘はゆつくりと“自身の手にあった”ものを千弘へと見せた。

「え…?」

それを見た瞬間 千弘の顔色が一変し 先程の怒りが突然と消え失せた。

だがそれと同時に大切なモノを失ってしまったかのようにその表情はゆつくりと壊れていく。

目の前に立っている時灘の手に掴まれていたのは

無惨な姿となってしまうたネムであった。

「あ…ああ…!!」

顔の所々が腫れ上がり、髪も引きちぎられたかのように不揃いとなり、そして片方の手足がへし折られていた。

愛する者がまるで肉の塊になってしまったかのようなその姿を見た事で千弘の表情は次々と崩壊していく。

「あ…あ…ね…眠…さん…!!!」

そして

「うああああああああ!!!」

千弘の理性は崩壊した。

—————

瀧霊廷の一番隊隊舎にて。

「元柳斎殿…良ろしいのでしょうか？時灘の部下を無間へ通してしまっても…」

雀部は何やら浮かない表情を元柳斎へと向けていた。それに対して元柳斎は相変わらず表情を変えず事なく答えた。

「四十六室の許可が降りたのじゃ。了承せざるを得ぬ」

「しかし…奴は明らかに園原隊士との接触を考えております…万が一奴の口車に彼が乗らされてしまったら…」

「奴としてそこまでバカではない…」

雀部は時灘と千弘の確執が起きる事を恐れているのか懸念の声を上げるが、元柳斎は首を横に振りながら湯呑みを口に運び茶を啜る。

その時であった。

「…!?!」

床下からとてつもない霊圧が生じた。その霊圧を感じ取った二人

は即座に戦闘態勢を取りその霊圧が感じ取れる足元へと目を向ける。

「この霊圧は…!!!」

感じられる霊圧はとてつもなくドス黒く恐ろしいものであり、感じただけで心の底から恐怖心が湧き上がってしまうほど悍ましいものであった。その霊圧は濃度を増していきながら這い上がってくるかのように近づいてくる。

そして

ツ  
!!!!

巨大な破壊音と共に隊舎の床が爆ぜた。

執務室が破壊されて空中へと放り出されていく中、雀部は予感が的中していたのか元柳斎へと叫ぶ。

「元柳斎殿ッ!!!」

「分かっている!!すぐに地獄蝶を飛ばせ!!」

—————

突然と爆ぜた一番隊隊舎。その付近で散歩をしていた日番谷、雛森、平子はその光景を目にしており唾然としていた。

「あそこって総隊長の…」

「何が起こったんだ…!?!」

すると

「…!!!」

背後から背筋が凍る程の冷たく不気味な霊圧が感じられた。その頬を撫でられるかのような不気味な感覚に日番谷達は驚き振り向く。

そこには空を見上げる千弘の姿があった。

「園…原…!?!」

「ちーちゃん…!?!」

突然と彼の姿が現れた事で日番谷と雛森は言葉を失ってしまおう。だが、その中で平子だけは死神としての実力の年季から最も早くその異常性に気づいていた。

「待て…様子がおかしいで…!!」

平子は咄嗟に手を出して二人を制止し千弘を見つめた。

「……見ツけタ」

「二…ツ!!」

突然と聞こえてきたその声。その声色は普段よりも一層低く、更にイントネーションも本来とは異なっていた。その声に日番谷と雛森はようやくその異常性に気付き身構えた。

「園原…何があつた…?」

「…」

日番谷が問い掛けるも、千弘は何も答えることなく、ただ流魂街へ向けて歩いていった。

すると、突然と彼らの肩に地獄蝶が止まる。

「地獄蝶…?…こんな時になんだ…!?!」

日番谷が疑問の声を上げる中、地獄蝶からある司令が出された。

『護廷十三隊全勢力を総動員し脱走者の流魂街接近を阻止せよ』

「!?!」

その指令は3人を驚かせるには十分すぎる内容であった。

その後 通信のみの短時間での隊首会が行われ、元柳斎から経緯を伝えられると同時に護廷十三隊の総勢力をもって園原千弘の捕縛を命じられたのであった。

そして勿論だが、隊長、副隊長、そして千弘の関係者以外の隊員に



—— 周囲に刀と鞘が擦れる音と共に向かっていった数十名  
以上もの隊士達が宙を舞った。

吹き飛ばされた隊士達は次々と周囲の建物の屋根や塀の上、そして  
地面へと次々と落下していった。

先程まで周囲を取り囲んでいた数十人以上もの部隊を一瞬にして  
戦闘不能へと追いやった千弘はその光景へと目を向ける事なく、再び  
流魂街へと足を進ませていったのであった。

—————  
—————

それから場所は変わり、瀨霊廷に続く道のうち、最も建物の数が多  
く高低差のある場にて——。

「用意は良いか碎蜂？」

「はい！」

現世にある浦原商店に在住している夜一と彼女の弟子でもあり、現  
二番隊隊長である碎蜂は共に迎撃の用意をしていた。

「幾ら何でも急すぎやせんか…？ 隊首会もなしに突然 包囲網を張れ  
など」

尸魂界へ来ていた夜一は先程の指令を聞き、千弘の暴走を止めるべ  
く駆けつけたのだ。

そして彼女自身は既に黒幕が時灘である事を見抜いていた。

「しかし時灘め…まさか千弘を暴走させるとは…何を考えておる…」

夜一はやれやれと額に手を当てながら頭を振ると、碎蜂へと目を向  
ける。

「碎蜂、奴は今正気を失っておる。涅の話じゃと今が好機じゃ。無理  
のない範囲で足止めをするが、倒そうとは考えるな」

「はい…」

碎蜂が頷くと、今度は夜一は付近の建物の影に隠れている平子達へ  
も声をかける。

「其方も良いか？」

「いつでもいけるで〜」

平子が手を振る形で答えると夜一は頷き、作戦決行の合図を伝えようとした。

その時であった。

ズン  
ズン

巨大な足元が聞こえてきた。その音に驚いた皆は一斉にその場へと目を向けると、そこには黒い霊圧を放ちながら進む千弘の姿があった。

「来おったか…全員、作戦通りに動け…!!」

「ツ!!」

夜一の合図と共に、全員がその場から消え、それぞれの持ち場へと付いたのであった。

◇◇◇◇◇◇

全員がそれぞれの配置に立つと、その場に残った平子は千弘の進行を止めるかのように彼の目の前へと降り立った。

「……おいおい。ふざけんなよ涅マユリ…これで“弱体化”してるとかおかしいやろ…?」

平子の前にあったのは、以前の姿の面影が全くなくなり別人と成り果てた千弘の姿であった。

全身から発せられる霊圧は黒く渦を巻いており、そしてその目は真っ赤な血の色に染まっていた。

だが、何としてでも止めなければならぬ。それが指令なのだから。平子は斬魄刀を取り出すと千弘へと歩いていく。

「よう千弘…随分と怖なったな。いや、年上だから千弘さん…言うべきか？」

「…」

現れた平子を見た千弘はその歩みを止めることなく彼を横切ろう



としていった。

「待たんかい…アンタを止めるんが…俺らの役目や」

その言葉と共に 平子は斬魄刀を引き抜いた。

倒れる【逆撫】

「悪いな千弘。これもお前を止める為なんや。堪忍な」

その言葉と共に逆撫から桜色の霧が発生した。

その瞬間

「!？」

突如として千弘の体勢が崩れた。何の前触れもなく。まるで身体全体が言うことを聞かずによろけてしまったかのようにであった。

だが、それこそ平子の斬魄刀の能力なのである。

平子の斬魄刀の名は『逆撫』

斬魄刀から発せられる匂いを嗅いだ者の感覚を上下左右に自由に置き換え狂わせる事ができるのである。

しかもそれは上下左右のみならず言葉の文字列も対象である。

「お前には見せたっけか？俺の斬魄刀『逆撫』は匂い嗅いだモンの上下左右の感覚を変えられるんや」

そう言い平子は刀を揺らす。

目の前の千弘はその能力によって感覚を支配されてしまったのか、先程までの足取りが少しばかりが千鳥足のようにふらつき始めた。

それは正に最大の好機である。

「今や」

平子が声を上げた瞬間 周囲から次々と影が飛び立った。



やられてしまう。そう心の中で何度も言いつけながら、己の力を全て絞り出すかのように乱舞を放っていった。

そして 遂にその連撃が数百発目へと到達した時であった。

夜一は乱舞を止めてすぐさまその場から後退すると、空中に向けて叫んだ。

「今じゃ碎蜂!!」

「はい!!夜一様!!」

その空中には碎蜂の姿があり、地面に倒れている千弘に向けて巨大な砲台を構えていた。

【雀蜂雷公鞭】

碎蜂の斬魄刀が卍解した姿であり、彼女の右腕を覆う程の巨大な砲台の形をしている。

その砲台から放たれるミサイルは一度使えば数日は扱えなくなるとても燃費の悪く一か八かの博打のようなデメリットが存在していたゆえに碎蜂自身もあまり使う事はない。

だが、その分——ミサイルの破壊力は他の卍解の威力を軽く凌駕する。

「終わりだ…!!!」

そして 碎蜂の目が一瞬 鋭くなると同時にミサイルが放たれ、地面に倒れていた千弘を爆炎へと飲み込んだのであった。

—————

—————

———

その後 夜一は碎蜂達と合流すると、千弘を飲み込む爆炎の様子を見つめていた。

「やったんか…？」

「いや…分からぬ。じゃがダメージは与えた筈じゃ…」

平子の問いに答えながら夜一は先程の規模の攻撃に僅かながらも希望を抱きながら目の前の巻き上がる煙の中を見つめた。

だが、現実はそのをアツサリと否定するのであった。

「……邪魔をスルなあ…!!」

「!?!」

突如として煙の中から聞こえてきた声に皆は驚き、すぐさまその場へと目を向けた。

そこには 煙の中からゆっくりと立ち上がる影があり、その影は煙を払い除けるかのようにゆっくりと手を水平に降った。

その瞬間 煙が晴れ、その煙の中心地から死覇装のみがボロボロとなった千弘が姿を現した。

「なに?!無傷…じゃと?!」

「くっ…!!」

煙の中から現れた千弘は衣服がボロボロになったただけであり、それを纏う身体には所々が少し焦げた跡が見つかるだけでありそれ以外の外傷は何も見当たらなかった。

先程の連続攻撃が全く効かなかった事実、夜一は冷や汗を流し砕蜂は歯を噛み締める。

だが、3人は諦める事はなかった。

「…もう一度、じゃな。今度は砕蜂も頼むぞ」

「はい…！おい平子、始解は解くなよ」

「わくってる!!」

そう言い3人は再び戦闘体制を取った。

その時であった。

千弘を取り囲むかのように周囲から次々と日番谷や吉良、雛森、鳳橋など隊長、副隊長達が現れた。

「間に合ったか…!!」

それを目にした平子が安堵の声を漏らした時には千弘の周囲には10名以上もの隊長と副隊長の姿があった。

その中で一人、千弘の前に降り立った隊長『日番谷 冬獅郎』は自身の斬魄刀『氷輪丸』の鋒を向けた。

「……は通さねえぞ園原」

「……」

## 次元の違い

数分前。全隊長と副隊長は千弘の事を熟知しているマユリと通信を行っていた。

『さて、諸君らに先に言っておこう。暴走した千弘はこのまま時灘を消すまで追い続けるだろう。それによって霊圧も激しさを増していき、やがては尸魂界に崩壊を招く程の規模になる。そうなれば魂魄のバランス関係なく終わりダ』

「「：！！」」

通信越しのマユリの説明を耳にした全ての隊長達は額から汗を流し始め、何名かの副隊長は顔面を蒼白させた。

「何とかならないのか…!?!」

『勿論 何とかなる』

日番谷の言葉にマユリは頷く。

『ネムが奴の前に出て説得すれば万事解決だが、今の奴にそんな理性などない。隙を作るために現在、技術開発局の手の空いている局員総動員で対千弘用の鎮静剤を製作中ダ。だからそれまで持ち堪えてくれたまエ』

「お…おい！霊王宮で使ったお前の卍解じゃダメなのか?!」

『バカかネ?』

日番谷の言葉にマユリはやれやれと呆れながら首を横に振る。

『あんなもの使えば瀟霊廷など粉々に吹き飛んでしまうヨ。まあ、それでも良いのなら――』

「よし、じゃあ僕らで千弘くんを抑えようか」

マユリの言葉を遮る様に京楽が入った事で皆は頷き、作戦が決行される事となったのであった。

――

――

――

「…」

日番谷だけでなく、周囲に現れた他の隊長や副隊長達も、目の前の黒い霊圧を放つ千弘を見つめていた。

「何だこの霊圧…何も感じ取れねえ…」

そんな中、彼を目の前で見つめていた日番谷は、いつもとは全く別人と化している千弘の姿と全身から溢れ出ているにも関わらず全く感じ取れない異質な霊圧に額から冷や汗を流していた。

それは白哉自身も同じであり、一見冷静に見えるものの、眉間に皺を寄せながら千弘を最大限に警戒していた。

「もはや一般の隊士ならば近づくと事も叶わぬだろう…だからこそ我々が止めねばならん」

「確かに…」

白哉に頷いた日番谷は刀を握りしめた。

#### 卍解【大紅蓮氷輪丸】

その言葉と共に日番谷の手足が氷の竜のような手足へと変わると背中からは氷の翼が形成された。

そして、卍解した日番谷は刀を構えて千弘目掛けて飛び立つと、斬魄刀を天へと掲げる。

#### 『千年氷牢』

#### その瞬間

千弘の周囲の空気が白い靄に包まれると同時に一瞬にして8本の巨大な氷の柱が取り囲むように形成され、それらが一斉に中心へと進むと、押し潰すかのように千弘を飲み込んだ。

日番谷の目が白哉へと向けられる。

「行けるか？」

「無論だ」

白哉は頷くと自身の刀を握りしめた。

その言葉と共に白哉の手から落とされた刀が地面へと吸い込まれるようにして消えると彼を中心は無数の刀が現れると同時にその刀の全ての刀身が桜の花弁へと変わって行った。

これが朽木家当主、現六番隊隊長である白哉の卍解である。無数にヒラヒラと舞う桜の花弁はとても美しいものであるが、その花弁一枚一枚が鋭く鋭利な刃であり、白哉の意思によって操作されているのだ。

周囲へと桜花弁が舞い散る中、卍解を発動した白哉は千弘に手を向ける。

「ゆけ」

—— 吭景・千本桜景嚴

白哉の言葉と共に舞い散る花弁は暴流の如く千弘に向けて放たれ、全身を桜の渦へと飲み込んでいった。

氷の牢獄に加えてその隙間から流れ込む幾千もの刃の雨。日番谷の卍解と白哉の卍解が発動し、千弘を拘束するとそれを待っていたかのように周囲の卍解を持たない副隊長である乱菊、雛森、大前田、弓親は次々と鬼道の詠唱を始める。

「ごめんね…チーちゃん!!」

「少し痛いけど我慢すんのよ!!」

雛森は二つの鬼道を融合させた同時詠唱を行い、乱菊、大前田、弓親は詠唱破棄による鬼道を次々と放って行った。

日番谷の千年氷牢によって作られた牢獄そしてその隙間から襲いかかる白哉の千本桜、そして更に追い討ちを掛ける鬼道の雨。

それらは次々と千弘を焼き尽くさんがために中心へと向かって行った。



そして その攻撃が始まってからおよそ5分が経過すると、日番谷は手を上げる。

「全員…一旦止めろ」

日番谷の合図に周囲の皆は攻撃の手を止めた。目の前には多くのこうげきによってボロボロとなった氷の柱。先程まで集中砲火されていた場所は氷が砕けた事によって生じた白い煙に包まれていた。

「隊長…!! やったんですか…?」

「……」

松本の言葉に日番谷は疑う事なく、聳える巨大な氷の柱を睨みつけながら見つめると首を横に振る。

「いや…奴がこの程度で足止めできるとは思えねえ…だが、涅の言葉が本当なら…今の奴には少しはダメージが……」

日番谷は首を振りながらも先程の攻撃の雨を見てから少なからず僅かな希望を抱いた。

その時であった。

「成る程…貴方達も私の邪魔をするのですか…」

「「ツ…!!」」

氷の中からこの世のものとは思えない程の低い声が聞こえ、その声を耳にした全員は即座に警戒体制を強める。

すると、千弘を飲み込んだ氷の柱から巨大な黒い霊圧の竜巻が発生し、内部から氷の牢獄を粉々に粉碎した。

「もう出て来やがったか…!!」

それを見た日番谷は即座に周囲で鬼道を展開していた副隊長達へ

と叫んだ。

「今だ!!!」

日番谷の叫びに鬼道に秀でている吉良、雛森、七緒達は頷き、同時に詠唱を始めた。

——縛道の七十三『倒山晶』

すると、千弘を周囲に黄色の結界が貼られ、やがて千弘を包む様に四面体の形へと変形すると閉じ込めた。

この鬼道は主に相手の拘束を行う際に扱われる上に番台が高位な為、とても扱い方が難しいが、鬼道の技術が抜きん出ている3人が同時に行った事でその強度は本来の何倍にも引き上げられていた。

「普段よりも強固な倒山晶…これで少しは…」

千弘が結界へと閉じ込められた事で霊圧の嵐も一旦収まり、七緒は安堵の息をつく。

だが、内部にいた千弘は止まるどころか、鞘から刀を引き抜いていた。

それを見た七緒はすぐさま全員に向けて叫ぶ。

「攻撃が来ます!!!皆さん離れて!!!」

その直後

——“乱れ打ち”百連月牙天衝

結界内に立っていた千弘の周囲から無数の黒い斬撃が放たれた。

「これは…一護の!?!」

「全員離れろ!!!」

それを見た松本の驚きの声と同時に日番谷が全員に向けて叫び、そ

の場にいた全員は結界から離れた。

すると、内部から亀裂が走ると同時に一瞬にしてガラスの様に砕け散り、結界が破壊された。

それによつて破片が飛び散り、破片が雨のように降り注ぐ中、千弘がゆつくりと歩いて出てきた。

【月牙天衝】それは尸魂界において英雄と記されている死神代行『黒崎一護』が編み出した己の霊圧を削り斬撃として飛ばす業である。

その業を何度も何度も行動を共にし、間近で見っていた夜一は驚きを隠さなかった。

「あれは……一護の……いや……込められた霊圧の量も斬撃の数も桁違いじゃ……しかもあれ程の刃を放つたというのに……未だ霊圧が衰えるのが感じ取れぬ……!!!」

その表情は今まで余裕を見繕うために浮かべていた笑みが一切なく、ただ純粹な『驚愕』と『恐れ』が現れていた。

その一方で、結界から千弘が脱出した事によつて再び周囲には濃密な霊圧の嵐が吹き荒れ始め、周囲の隊長達はさらに警戒を強める。

「隊長……!!……からは……」

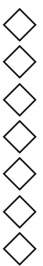
「ああ……予定通り……俺や朽木達で直接攻撃に移る……平子の始解がまだ解けてねえのが不幸中の幸いだつたな」

松本の言葉に頷きながら日番谷はまだ平子の感覚を狂わせる始解が発動中であつた事に安堵しながら刀を構えた。

その時であつた。

「……」

結界を破壊した千弘の目が日番谷達の包囲網から離れた場所へと向けられる。



千弘が拘束されてから抜け出すその僅かな時間の中、始解によって感覚を狂わせていた平子は逆撫の効力が続くギリギリの範囲まで離れていた。

「ッ…逆撫は上下左右が無くなりや意味がない…嫌な弱点に気づかれてしまうたわ」

そう言い平子は落胆する。平子の始解は惑わすには丁度良いが、一つ弱点が存在し、上下左右全ての方向に攻撃が放たれた場合は反対にしようがないために軌道を逸らすことが出来なくなってしまうのだ。

先程の千弘の斬撃は正しくその周囲一帯へと攻撃する技であり、見事に逆撫の穴を突かれてしまったというわけである。

「だ…大丈夫ですよ！今のちーちゃんの場合はまだ操れるんですから、私達で抑え込めますよ！」

「確かにそうであって欲しいんやが…いや、今はそんな事考えとる場合やないな」

雛森の言葉に平子は少しばかり苦悩しながらも立ち上がり、千弘へと目を向けた。

「ここからが踏ん張り所やな…氣い引き締めるで…」

「はい…」

平子の言葉に雛森も頷き、次の作戦へと移るべく足を踏み出そうとした。

その時であった。

——一瞬にして千弘の姿が目の前へと現れた。

「な…!!」

突如として自身の前に現れた千弘に平子は驚き、即座に斬魄刀の能力で彼の感覚を狂わせようとしたが、既に遅い。

「がはあ…!!」

平子が千弘の感覚を操作するよりも早く、千弘の拳が平子の腹部へと深く突き刺さり、彼の身体をくの字へと曲げた。

「隊長!!」

雛森の叫ぶ声が響く中、千弘の拳によって平子の身体はゆっくりとその場に崩れ落ちた。

「ぐ…!!」

平子が倒されたことによつて雛森は即座に始解した斬魄刀『飛梅』を引き抜き千弘に目掛けて振り下ろした。

「やあああああ!!!!」

「…」

雛森の怒りの一撃が千弘へと放たれるが、それが彼に見舞われる事はなく、一瞬にして千弘の拳が彼女の腹へと放たれた。

「がぁ……」

そして 平子と同じく拳を打ち込まれた雛森も刀を手放しゆっくりとその場に倒れたのであった。

雛森並びに平子の気絶。それによつて平子の始解の効力が切れ千弘の狂わされていた感覚が元へと戻ってしまった。

「……………」

「…ッ!!」

頼みの綱であった平子が一瞬にして倒されたことで白哉達の表情からは完全に余裕が消え去った。

「総員警戒を強めよ!!平子が倒された!!」

白哉のその叫び声に周辺にいた隊長や副隊長達も平子の脱落を察したのか、すぐさま卍解・始解をそれぞれ行う。

そんな中、平子が倒された事によつて彼と現世で共に暮らしていた六車と鳳橋は眉間に皺を寄せながら駆け出した。

「テメエ…よくも…!!」

「お仕置きが必要なようだね…!!」

向かっていく中、六車は千弘に向けて斬魄刀を向けた。

卍解——【鐵拳断風】

すると、六車の持つ斬魄刀が変化し、両腕を丸ごと包み込むガントレットへと変化した。

「いくぞ…!!」

卍解を発動させた六車は千弘へ向けて次々と拳を打ち出していく。六車の卍解【鐵拳断風】は殴りつけた相手に対して時間差で衝撃が送り込まれる超攻撃型の卍解なのだ。

その攻撃の威力は凄まじく、星十字騎士団のパワータイプでありながらもガードも強力なマスキュリンを下すほどである。

だが、

「ふん」

目の前に立っていた千弘は動く事なく鼻で笑い捨てながら向かってくる拳を次々と片手で捌いていった。

「何?!全部受け止めてやがる…?!」

「邪魔をするなど言ってるでしょ」

全て塞がれた事で六車の表情が曇る一方で、最後に放たれた一撃を捌いた千弘は六車を睨みつけると、

「ふん!」

「があ…!!!」

掴んだ拳を引き寄せ、一瞬にして六車の懐へと入り込み、両手で胴体を掴むと腹に向けて膝を叩き込んだ。

その場に鈍い音が響くと共に六車の身体は一瞬だけ硬直すると、すぐに力が抜けたかのようにその場に崩れ落ちていった。

「拳西まで……がはあ!?!」

そして千弘の姿が今度は近くに立っていた鳳橋の前へと現れると、彼の腹へと拳を打ち込み、彼の身体を地面へと崩れ落とした。

平子の始解が解かれてより数秒。二人の隊長が戦闘不能となつてしまつたのであつた。

もはや彼の進行はたとえ二人で掛かつても止められない。

「…もはや単独行動も連携も言つていられぬ…私も出よう」

遂に白哉自身も痺れを切らし千弘の元へと瞬歩で移動していった。

そして、それを見送る日番谷の背後にある氷の華も全て散つていたのであつた。

「俺も…そろそろだな」

そして日番谷も白哉へと続くように飛び出した。

—————

—————

——

「ぶつつぶ——がばあ!?!」

「雀ば——が…ッ!!」

始解しようとした大前田の大柄な身体が、そして始解し、千弘へと攻撃を当てようとした碎蜂の小柄な身体が千弘のボディブローによつて大地へと崩れる。

「破道の——!?!」

「そ…そんな…」

鬼道を唱えようとした松本、七緒も同じく、千弘のボディブローによつてその場に倒れた。

それだけではない。

新たに護廷隊へと復帰した元破面の軍勢『矢桐丸 リサ』は刀の鞘で腹を、七番隊隊長となつた『射場鉄左衛門』は膝で腹を殴りつけた事、その場に倒れていき、背後から侘助で10回ほど斬りつけた吉良も重量を物ともしない千弘の拳によつて大地へと倒れてしまつた。

それによつて

周囲には多くの隊長、副隊長達が倒れている光景が広がっていた。「一瞬にしてこれほどとはな…」

その光景に眉間に皺を寄せた白哉は目の前の自身の自身を鋭い目で見つめる千弘へと目を向けた。

「園原千弘…兄には黒崎一護と同じく恩がある。故に…ここで止めさせてもらうぞ…!!」

その言葉と共に白哉の身体が一瞬にして千弘の目の前に現れると、彼に向けて刀を振るう。

「…」

それに対して千弘は手に持っていた鞘で受け止めた。

すぐさま白哉は離れると、自身の周辺に集めた千本桜を彼に向けて放った。

だが、

「邪魔だ」

刀を振るうと同時に周囲に衝撃波が発生し、桜の花びらをまとめて吹き飛ばした。それによって桜によって遮られていた視界が戻り周囲の景色が露わとなる。

「まだまだ」

千本桜を振り払われようとも白哉は退くことは無かった。周囲に舞う桜の花びらのうち、人部分を自身の刀の鞘へと収束させて、一本の刀身へと変化させると、それに連携させる様に周囲に舞う花卉を収束させていき、一本一本を刀へと変化させた。

【殲景・千本桜景厳】

千本桜景義の御技の一つであり、数千番の桜が無数の刀へと変形し対象を囲い込む圧倒的な手数を得る技である。

そして千弘を包囲した数千本もの刀は一斉に

千弘へと襲いかかって行った。



【奥義・一咬千刃花】

「兄はこの程度では死なぬだろうが…重傷は免れないだろう。だが、許せ。兄を止めるためにはこうするしかないのだ」

そう告げた白哉は千弘へと哀れな目を向ける。周囲に浮かぶ剣が中心へと向かう速度は軽く音速を超え、霊王宮での治療により、その速度は更に高まっている。それはユーハバツハの親衛隊であるジェラルド・ヴァルキリーでさえも反応できない程だ。

その数千本の刀がインターバルを付ける事なく一斉に千弘へと向かっていく。

その時であった。

「邪魔だと言っているのが聞こえねえのか…?」

千弘の握り締める刀の鞘から黒いオーラが溢れ出し、千弘はゆつくりと鞘から刀を引き抜いた。

全方位——千連斬り

その瞬間 千弘へと一斉に向かって行った刀全てが千弘へと到達する前に全て掻き消された。

「な…」

白哉が驚く一方で、千弘は一瞬にして白哉の懐へと移動する。

「どけ…ッ!!!」

その言葉と同時にその場に鈍い音が響き渡った。

見れば千弘の拳が他の皆と同じ様に白哉の懐へと突き刺さっており彼の身体を大きく曲げていた。

「やは…り…私で…は…力不足…か…」

もはや彼には刀を握る力さえも残っていない。たった1発の攻撃によつて全体力を削がれた白哉は千弘を止めることも攻撃を当てることも出来なかったことを悔いながらゆっくりと意識を手放しその場に倒れたのであった。

「ふん…」

そして 白哉を撃破した千弘は背後から振り下ろされて来ていた日番谷の斬魄刀の刀身を己の刀身で受け止めた。

「…気づいてやがったか…まあそうだろうな」

背後からの一撃を受け止められた日番谷はすぐさま距離を取ると、すぐさま高台へと飛び上がる。

見れば、彼の姿が十年程成長した好青年のように変わっており、服装も所々が破けていた。

「お前には見せていなかったな。大紅蓮氷輪丸を発動した時に氷の紋章があらわれ…それが時間経過とともに崩れていき、全て崩れ去ると俺の正解は完成するんだ」

そう言い日番谷はコチラを睨む千弘に対して軽く説明をすると、少しばかり歩く。

その歩数はおよそ4歩。たった数秒歩く時間だ。

だが、その時間が経過しただけで

千弘ごと周囲の景色が全て凍りついた。

辺り一面が氷の広がる美しき世界。そんな景色の中で高台から飛び降りた日番谷は凍りついた千弘の元へと歩み寄っていく。

【四界氷結】四歩を踏み締めた内にあらゆる物質を氷結する技だ。雛森や朽木達を巻き込む恐れがあるから敢えて使わなかったがな」

そう言い日番谷は凍りつき、一歩も動かぬ千弘の目を見る。

「だがお前のことだ。この程度じゃ死なねえだろうし、少しは冷えて



咄嗟に日番谷は再び四解氷結を発動させた。

だが、発動させた氷は千弘の霊圧に触れると粉々に消し飛んでいった。

「霊圧で無効化しやがった…!?クソ!!」

氷輪丸の氷雪が効かないと認識した日番谷は眉間に皺を寄せながら剣術で対応するべく彼に接近すると刀を振り下ろした。

対してその振り下ろしを千弘は難なく防ぐが、日番谷は決して引くことは無かった。

「はああ…!!!」

呼吸を整えながら何度も何度も千弘へと剣を振るう。だが、その全てを千弘は一步も動くことなく受け止めて行った。

「ぐう!?」

何度刀を払おうとも、それが彼の身に届くことはない。振るっていく内に、日番谷自身も卍解の影響もあってか疲労が溜まり始めていった。

「はあ…はあ…」

遂に日番谷の口からは白い息が漏れ始める。

疲労による過呼吸。日番谷の全身には氷が纏わりついているために呼吸の色が濃く表され空気へと消えていく。それによって完全に

千弘に敗北してしまった。

「消えろッ!!!」

その瞬間

日番谷の頬へと千弘の拳が打ち込まれ、彼の頬を歪ませると同時にその身体は付近の建物を次々と倒壊させながら吹き飛ばされていった。

日番谷を吹き飛ばした千弘は時灘の霊圧が感じられる方向へと目を向けると、その赤い目を細め叫ぶ。

「逃さねえぞ…逃さねえぞおおおおお!!!時灘あああああ!!!」

その叫び声は天地に響き渡るとともに、尸魂界全域を揺らし始めるのであった。

そんな中であつた。

「やはりお主らだけでは無理であつたか」

突然の声とともに曇天が晴れ、晴天となった。それと同時に周囲に倒れていた隊長、副隊長達の姿も消え、代わりに卯ノ花、更木、雀部、など姿を見せなかつた隊長、副隊長達が姿を現した。

それだけではない。

見れば千弘の進む先には元柳斎の姿もあり、立ち塞がる彼は千弘に向けて刀を向ける。

「ここから先へは行かせぬぞ…千弘」

## 絶望と希望

瀨靈廷にて。千弘の前に立った浮竹と京楽はあまりにも千弘の変わり様に冷や汗を流していた。

「あれが千弘くん…なのか…？普段と全く雰囲気…もはや別人じゃないか…」

「こりや相当な事をされたんだよ。正直…時灘を千弘くんの前に差し出せば丸く治ると思うけども、貴族様だから僕らじゃ無理だねえ…」

「くっ…力があれば無関係な千弘くんさえも巻き込むというのか…」  
「いや、思い切り関係はあると思うけど」

その一方で、京楽と浮竹のみならず、千弘を包囲していた元柳斎は杖を斬魄刀へと変化させると、大量の炎を纏わせ、千弘へと向けた。  
「さて…止まってもらおうか…？」

元柳斎の言葉に千弘の血走った赤い目が向けられる。

「貴方も私の邪魔をするのか…!!!」

そして千弘は斬魄刀の柄を握り締めると斬魄刀を引き抜いた。それと同時に、鞘と刀が擦れる音と共に黒い霊圧が溢れ出し、その鞘の中からドス黒い血の色に覆われた斬魄刀が現れる。

禍々しいその斬魄刀を取り出して、遂に刀身を露わにさせた千弘に周囲の皆の目が注目する。

「それが貴様の斬魄刀か。随分と物騒なものよ」

初めて見る千弘の斬魄刀とその禍々しい状態に元柳斎は眉間に皺を寄せる。

その時であった。

「ハッハア!!!嬉しいぜ千弘おお!!」

高らかな笑い声をと共に上空から始解させた野晒を担ぎながら更木が飛来した。

「こうしてテメエとまたやりあえるんだからなあ!!!」

その言葉と共に飛来した更木は歓喜の表情を浮かべながら担いでいた野晒を千弘へ目掛けて振り回した。

「オラアツ!!!」

「…」

振り回された野晒の巨大な刃を千弘は次々と斬魄刀で捌いていく。野晒は振り回されていくたびに力が強くなっていくのか、千弘が刀を受け止めたと同時に周囲の瓦礫へと衝撃が伝わり粉々に粉碎していった。

それもそうだ。更木は始解した状態で星十字騎士団の一角であるグレミイの生み出した隕石をも粉々に破壊したのだから。その威力は隊長格の中でも元柳斎に匹敵する程のものだろう。

そしてその実力は何度も何度も千弘に奇襲を仕掛けていた事で既に元柳斎

をも越えようとしていた。

だが、それが敗因であった。力任せという力量の戦法こそ、千弘にとってこれ以上にならない程の有利なものである。

それを咄嗟に感じ取った元柳斎は更木へと叫ぶ。

「下がれ!!馬鹿者!!」

「ああ!?!」

その時であった。迫り来る更木の斬魄刀を、千弘は何と素手で受け止めた。

「さつきから言ってるでしょうに…」

「…!?!」

更木は咄嗟に後退すべく野晒を引こうとする。だが、掴まれた野晒は決して千弘の手から離されることは無かった。故に更木は斬魄刀を諦め、自身のみで距離を取ろうとするが、それすらも叶わなかった。

「ぬ…!?!」

見れば野晒だけでなく、自身の足までも踏みつけられていた。それによって更木は野晒を手放す事も、離脱する事さえも封じられてし

まった。

そして

更木の野晒を受け止めた千弘はそのまま拳を握り締めると、彼のその鋭い目に向けて怒りが込められた目を向けた。

「邪魔だツ!!!」

その直後

!!!

その場に肉を叩く脆い音が響き渡ると同時に千弘の握り締められた拳が更木の腹へと深く突き刺さった。

「があ…!!」

それによって更木の巨大な身体がゆっくりと地面に倒れた。護廷隊において、元柳斎の次に力を持つ歴代最強の『剣八』である更木剣八は一撃も与えられる事なく、拳によるたった1発の殴打によって打ち沈められたのであった。

更木の瞬殺。その光景を目の前で見ていた京楽は冷や汗を流した。

「ちよつとちよつと…幾ら何でもこれで『弱体化』なんておかしいって」

そんな中で京楽は数十分ほど前のマユリとの通信を思い出した。

—————

—————

—————

———

それは数分前。暴走した千弘を止めるべく通信を介して彼の足止めを依頼したマユリが通信を切ろうとしたちよくぜんであった。

『さて、では頑張ってくれたまエ』

「ちよつといいかい？」



マユリが通信を切ろうとすると京楽は声を出して止めた。

「涅隊長、幾ら何でも千弘くんを止めるなんて無謀でしょう。彼の強さなんてここにいる隊長達は皆知ってるよ?」

その言葉に日番谷や白哉など、霊王護神大戦の時に隊長を担っていた皆は頷いた。

「それに今の千弘くんはド怒り状態…近づくのも危険なんじゃないかい?」

それに対してマユリは予想外の言葉を口にした。

「何を言ってるんだネ? 奴は今この上ない程にまで『弱体化』してるヨ?」

「!?!?!」

マユリのその言葉に一同は硬直してしまふ。

『弱体化』一瞬ながら彼はその言葉を辞書で引いて調べたことがあるのか?と疑う程にまで皆は唖然としていたのだ。

「あれで…普段よりも弱いのか?!?」

「そう言った筈だが? 聞こえなかったのかイ?」

日番谷の言葉に再び返したマユリの言葉に皆は今度ばかりは現実として受け止める。だが、一向に信じることができなかつた。

「奴の特徴である『剣術』と『体術』。それは奴がどんな状況下であろうと冷静かつ敵の動きを正確に見極める観察眼があるからこそできる芸当だ。だが、今は怒りという感情により我を忘れ、冷静さが欠如しているために通常の抜刀術も見切れない太刀筋も君達が見切れる程にまでなっている筈だヨ」

「……その言葉…信用していいのかい…?」

「ああ。過去のデータだが、偽りはないヨ。まあくれぐれも攻撃には当たらないようにしたまエ。当たれば――まあ言わずとも分かるネ」

――

――

――

――

「こんなんが弱体化なんて…本当に本気出したらどうなっちゃうの？」

「今はそんな事を考えてる暇はないぞ！何とか涅隊長達が到着するまでに食い止めないと…!!」

浮竹の言葉に頷いた京楽は彼と共に斬魄刀を始解させ、千弘へと向かっていった。

「…!!」

先に駆け出した京楽は己の二刀流である斬魄刀『花天狂骨』を千弘目掛けて振り回した。

「うづああ!!」

それに対して千弘は此方へと目を向ける事なく、鞘に収めた斬魄刀を振り回し、二人を吹き飛ばした。

吹き飛ばされた二人はすぐさま体勢を立て直すと再び千弘へと向かっていく。

「千弘くん！悪い事は言わない！今すぐこんな事はやめるんだ!!」

「いつもやんちゃな君がこうも怒り狂っちゃうなんて一体何があったの!? 詳しく教えてごらんよ!!」

そう言い二人は左右から次々と斬撃を放っていくが、それを千弘は全て斬魄刀で捌き切っていた。

そんな中であつた。

「話して何になる？ やめてどうなる？ この怒りをどこで発散すれば良い…?」

「!？」

突如としてその場にとつともなく低い声が響き渡る。それは千弘の声ではあつたが、いつもよりもより一層低く威圧感があり、耳にしかただけで全身から鳥肌が立ってしまう程のものであつた。

「アンタらに何と言われようと私は止めるつもりはない。たとえこの身が減ぼうとも…貴方を蹴散らしてでも…私の愛する人を傷つけた時灘をこの手で惨く殺す…!!皮を剥いで肉を削ぎ落として死んだ

後も苦しむぐらいになあ!!!」

そして千弘の全身から黒い霊圧が溢れ出した。

「だから私の邪魔をするなあッ!!!」

その瞬間

千弘の全身から放たれた黒い霊圧が嵐となって周囲へと吹き荒れた。

「うおお!!」

「京楽!!ぐう!!」

その激しさはもはや立つことさえも叶わず、付近に立っていた京楽と浮竹、そして雀部はその暴風によって吹き飛ばされてしまった。

そんな中であつた。

「ふふ…この程度では…私は怯みはしませんよ…」

その荒れ狂う霊圧の嵐の中を掻い潜りながら卯ノ花が現れた。その目はいつもの母性溢れる優しき瞳ではなく、1000年前の彼女の姿である戦いに飢える『剣八』としての瞳となっていた。

【卍解】《皆尽》

すると卯ノ花の持つ湾曲した斬魄刀が真っ赤な血で覆われた。

「フフ…!!」

「…」

その瞬間 卯ノ花の斬魄刀と千弘の斬魄刀がその場で衝突し、その場から一瞬にして消えると次々と周囲でぶつかり合った。

「…!!」

「ふふ…いつもよりも剣速が鈍い…いつのまにか少し見切れるようになってしまいました…」

次々と金属音を鳴り響かせながら千弘と斬り合っていた卯ノ花は

何度も何度も彼と刃を交えていたためか、今ではその速度を微量ながらも見切り始めており、彼の剣速へと対応し始めていったのだ。

だが、

それでも千弘の剣術は彼女をより大きく上回っており、気づいた時には既に彼女の腹には千弘の拳が突き刺さっていた。

「があ…!!」

その痛みはようやく彼女へと伝わり、千弘の動きについてきていた身体はその場に崩れ落ちた。

「…」

ゆつくりと意識を手放す中、卯ノ花の目には倒れる自身に向けて涙を流す千弘の顔があった。

—————

—————

—————

倒れた卯ノ花。周囲に残っているのは京楽、浮竹、雀部、元柳斎の4名のみであった。

「…」

そんな中であつた。元柳斎は一瞬にして瞬歩で千弘の周囲を移動し、離れている京楽、浮竹の元へと卯ノ花、更木を届けると再び千弘の前へと移動する。

「3人とも…命令じゃ。虎徹副隊長の元へ行け。二人の治療じゃ」

「…!!」

その言葉に3名は即座に元柳斎の意思が伝わったのか、すぐさま瞬歩でその場から姿を消した。

そして、元柳斎は自身と千弘のみとなると腰に掛けてある斬魄刀を掴み引き抜いた。

すると元柳斎の斬魄刀から大容量の炎が溢れ出て千弘ごとその場

を覆った。

「園原千弘…儂はただ規律に従うのみよ。貴様が恋人を傷つけられようと侮辱されようと…儂はここを通さぬぞ…!!」

その言葉と共に

周囲を覆っていた炎が一瞬にして斬魄刀へと吸収されると共に瀟霊廷の気温が上昇した。

《卍解》【残火の太刀】

過去現在において、護廷隊を創立した当初から鍛え続け、ユーハバツハを敗北へと追い込んだ元柳斎の【卍解】である。

そして、現在の姿は4つのうちの一つ「東」旭日刃である。

「行くぞ…!!!」

その言葉と共に元柳斎の身体が飛び出し、千弘目掛けて焼け焦げたその斬魄刀を振るった。

「…!!」

対して千弘はその振り回しを斬魄刀で受け止める。だが、

「な…!?!」

受け止めた身体は突如として巨大な衝撃波と共に上半身の衣服が消え去り、そのまま近くの瓦礫目掛けて吹き飛ばされた。

「ぐう…!!」

吹き飛ばされる中、千弘は状態を立て直そうとするが、それを行う前に元柳斎の姿が現れた。

「この程度か…!?!」

その言葉と共に今度は千弘の身体へと焼け焦げた斬魄刀が当たると共に彼の身体を再び大きく吹き飛ばし、倒壊しようとした瓦礫へと叩きつけた。

「……」

元柳齋はその場に降り立つと、ゆっくりと歩き出し、瓦礫の下で虚な目で虚空を見つめていた千弘を見下ろした。

「身体が動かなからう。怒りや投獄によるストレス。そして監獄生活による睡眠障害…怒りによる単調な動きと隊長の皆との連続戦闘による疲労…もう主の身体の活動は限界に達しておるのじゃ」

「…」

そう告げる中、千弘の手から斬魄刀が零れ落ちると元柳齋はそれを拾えないように蹴り飛ばした。

「千弘よ。主は黒崎一護と同じくその力で尸魂界を何度も救った。儂としても感謝はしておる…じゃが…今回の事態とは別よ。たとえ恋人を傷つけられようと…貴族へと牙を剥き瀨霊廷を破壊した罪は許されるものではない」

彼の罪を咎めるように告げた元柳齋はゆっくりと、斬魄刀を振り翳した。

「しばらく」

「反省しておれ…ッ!!!!」

その瞬間 元柳齋の斬魄刀が千弘へ目掛けて振り下ろされると共に、その地点一帯を巨大な炎が包み込んだのであった。



「…」

大量の煙が舞う爆心地の中心で刀を振り下ろした元柳齋はその体制のまま煙が舞う目の前の光景を見つめていた。

「(許せ千弘よ…貴様の許せぬ気持ちは痛く分かる…じやが、規律に従ってこそ護廷十三隊…しばらくは休んでおれ)」

そう言い元柳斎は心の中で彼への道場の言葉を向けると、刀をしまおうべく、千弘から引き剥がそうとした。

そんな中であつた。

「〜!!〜!!」

コチラに走ってくる京楽の姿があつた。その表情は喜びではなく、むしろ何かを伝えたいのか叫んでいる様子であつた。

「〜!!」

京楽は何を言っているのか?元柳斎は彼の方へと目を向けた。すると、彼の叫ぶ声が聞こえてきた。

「山爺いいいいいい!!」

!!!!!!!

その直後

目の前の煙が晴れ、その中から刀を掴んだ千弘が現れた。

「な…!?!」

「この程度の一振りでは私を殺せませんよ」

その瞬間

「があ…!!」

千弘の拳が彼の腹へと深く突き刺さり、彼の身体が地面へと崩れ落ちた。

「山爺…おい!山爺!!」

駆け寄った京楽は山爺の身体を揺さぶるが彼の身体が起き上がる事は無かつた。

「全く。私がただ考え事をしていただけなのに何を言っているのやら」

その一方で、元柳斎の残火の太刀の刀身を掴んでいた千弘は放り捨てると、ゆつくりと立ち上がった。

「ですが、貴方方のおかげで少しばかり頭が冷えましたよ。これなら真心を込めた殺意で時灘を殺せます。じつくりと痛みを与えながら…」

「…待ってよ…」

千弘が告げて立ち去ろうとすると元柳斎を介抱していた京楽が呼び止めた。

「それ以上は…いくら君とて除名か投獄処分になっちゃうよ…!? 僕らでもどうする事もできない…!!」

「結構です。眠さんをあんな姿にした奴を殺せば後はどうでも良いです」

そう言い京楽の言葉を一蹴した千弘は彼を横切り、再び時灘の霊圧が感じ取れる流魂街へ向けて歩き始めたのであった。

そんな中であつた。

「待ってください。千弘さん」

「!?」

突如としてその場に女性の声が聞こえ、その声を耳にした千弘は思わず振り返る。

「眠…さん…!?」

そこには自身が怒った元凶である時灘によって無惨に殺された愛する女性『涅ネム』の姿があつた。



いつも通りへ

時灘に殺された筈であるネムが現れた事で千弘は硬直し、先程まで瀨霊廷を覆っていた霊圧が消え去っていった。

「え…？貴方は…時灘に…」

「何を言っているのですか？私はマユリ様とずっといましたよ」

「局長の…!？」

すると

「全く。私が目を離している隙に下らん幻覚を見せられただけでこんなに暴れて…随分と迷惑な助手を持ったものだネえ」

彼女の背後からマユリも姿を現し、首を横に振るう。

「局長…!？え…!？どう言う事ですか!？」

「まだ分からないのかネ？お前は奴に幻覚を見せられていたのだヨ」

「幻覚…!？」

「そうだ。零番隊から聞いた話では、奴の斬魄刀の名は『艶羅鏡典』一度見た斬魄刀の効果を模倣するものだヨ」

「…ってことは私が見た幻覚ってまさか…」

マユリの言葉に千弘はようやく理解したのか、先程、時灘が自身に見せた光景を思い出す。

「あれは…【鏡花水月】を模造した幻覚!？」

「その通り。まんまと奴に嵌められたという訳さ」

「…」

その言葉によって、先程まで周囲に吹き荒れていた黒い霊圧の嵐が収まっていき、千弘の瞳も元の色へと戻っていった。

「…ってことは…私…」

千弘はようやく理解した。彼の策略にハマるのみならず感情的になり暴れ回ってしまった事を。

そして、その様子を近くで見ていた京楽は安堵の息をつきながら尋ねる。

「ふう…ようやく落ち着いたかい？千弘くん」

「京楽隊長！」

京楽の姿を見た途端、千弘はすぐさま彼に向かって土下座した。

「ももも申し訳ありませんええん!!! 本当に隊長方にはご迷惑をおおおお!!!」

「ええ!? いやいやいや! そこまでしなくても… (ええ!? これがさつき  
の千弘くんなの!?)」

そのスライディング土下座には勿論だが、先程とはまったく真逆の  
雰囲気にも京楽は驚き、アタフタとしていた。

そんな中であつた。

「はあ…。全く。相変わらず手の焼ける助手だネ」

その様子を見ていたマユリがこちらへと歩いてくる。

すると

——— 千弘へと手を差し伸べた。

「ほら、さつきと立ちたまえ。君が留守にしている間、保留にしている  
研究が山程あるのだヨ」

「へ…!?!」

彼から差し伸べられた手。長年、彼と共に働いていた千弘は初めて  
見るその人としての行動に驚きの声をあげると共に硬直してしまっ  
た。

「あらら。普段は冷たいけど、案外優しい所もあるんだねえ」

「ふん。一応部下だからネ」

マユリが手を差し伸べるその姿に、京楽は感嘆の声を漏らす。

その一方で、手を差し伸べられた千弘は、目元から涙を流し始めた。

「きよ…局長く!!!」

「全く。いつまでもこんな気持ち悪い姿勢を取らせるんじゃないヨ。  
さつきと手を取りたまエ」

「はい!!!」



巨大な大爆発が起こり、千弘を飲み込んだのであった。

「(。D。)……………」

天にも昇る勢いで爆発したその光景を唾然としながら見つめていた京楽はゆつくりとマユリへと目を向ける。

「え……く……涅槃長く……？」

そこには

「あくスッキリした。にしても、火薬の量が少ないねえ。もつと増やしても問題無さそうだよ」

「ええ……!？」

鼻に指を突っ込みながらその様子を観察するマユリの姿があった。

「さて、馬鹿騒ぎは治った事だし、我々は研究に戻るヨ。ネム、ソイツを引つ張ってこい」

「はい」

命令を受けたネムは爆発が晴れ、その場で全裸になって倒れている千弘を背負い、マユリと共に歩き出した。

「ちよちよちよー!?!ちよつと待って!?!さっきの感動的な場面は!?!」

「私が奴にそんな気遣いをする訳ないだろう? あく技術開発局の修理が終わり次第寄越すから心配ないヨ。あとは煮るなり焼くなり好きにするといい」

「い……いや……堂々と勝手な真似されちゃうと困るんだけど……」

京楽の声に耳を貸す事なく、マユリ達はその場から去っていったのであった。

「は……はは………」

周囲の景色を見渡しながら京楽はゆつくりとその場に腰を下ろす。周囲の建物は倒壊し、地形は歪な形へと姿を変えており、その有様は数年ほど前の霊王護神大戦の時と比べるとまだ規模は小さいと見てもいい。だがあの時よりも一層、命の危機を感じていた。まるで、尸魂界を蹂躪したユーハバツハが“子供”に見えてしまう程にまで。

自身らは改めて千弘という男の「真の恐ろしさ」を知ったのだ。

すると

「隊長……無事ですか!？」

後方から副隊長である七緒の声が聞こえ、振り向くと駆け寄ってくる彼女の姿が見えてきた。

「本当にこの世界は……何があるか分からないねえ……」

――

――

――

――

その後、崩壊した瀨霊廷の建物は千弘が全力で修繕作業に当たることとなり、そのスピードや精密な技術から、たった「3日」で完璧に終えてしまった。

そして 暴れた千弘はというと。

「はあ……またここに逆戻りですか……」

再び無間へと投獄されていた。それもそうだ。中央四十六室は時灘の悪事を知らないため、今回はやはり千弘の独断で下手をすれば逆行為としてもとられておかしくはない。

だが、その辺りは京楽達が何とかしてくれたのか大事にはならなかったようだ。そして隊士達にも瀨霊廷をメチャクチャにし暴れ回った死神については総隊長達が結束して倒したと知らされており、重要人物を除き、誰一人として千弘が暴れたと認識する事はなかったという。

更に一隊士の暴走も未然に防ぐ事ができなかつた責任を取らされ

る形で、総隊長である山本重國も収監される事となってしまった。

千弘や初代隊長、そして総隊長という巨大な戦力を失った護廷隊は大幅に弱体化してしまったのであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一方で、その様子を映像越しで見る青年の影があった。

「いやいやよかった。上手く事は運んだようだねえ」

そして、この騒動のすべての結果さえも作戦の一つとして組み込んでいた恐ろしき男は遂に自ら動き出したのであった。

「あの邪魔な奴らがいない今、計画の発動には打って付けだね彦根」

「はい！時灘様！」

だが、彼らは知らなかった。これから自身らは――

――地獄以上の恐怖を味わう事を。

番外編 斬魄刀異聞録 その2

具現化した斬魄刀達は次々と瀨霊廷を襲い始めていった。その力は絶大であり、一般隊士達は勿論だが、卍解どころか始解さえも封じられてしまった隊長達も苦戦を強いられる事となり、瀨霊廷はパニックへと陥っていたのだ。

頼みの綱である元柳斎は乗っ取られた斬魄刀達の霊圧によって境界に封印されてしまい、もはやなす術がない。

唯一無事であるのは、始解も卍解も習得する事なく隊長へと登り詰めた更木 若しくは「本来の自身を封じている卯ノ花」ぐらいであろう。

そしてもう一人は

—————

—————

—————

「…」

「どうした村正」

瀨霊廷の巨大な建物の屋根の上で大混乱に陥る瀨霊廷を見渡していた村正は、何か違和感を感じたのか別の方向を見つめた。それを不審に思った鎧を身につけた武者『千本桜』が尋ねると村正はその方向をじつと見つめた。

「……」瞬だが…とてつもない霊圧を感じた…。この廷内に…山本重國に匹敵する得体の知れない「何か」がいるな」

「む…う…それほどの奴など…」

千本桜は眉を顰める。そして自身の白哉と共に過ごしてきた記憶を辿り、それらしき人物がいたのか確かめた。

その時であった。

ツ  
!!!!

巨大な破壊音と共に自身らが立っていた建物が爆破した。

「!?!」

唐突に鳴り響いたその音に驚いた2人はすぐさまその場から跳躍する形で離れ、別の建物へと移動する。

「…なんだ? 殺気も何も感じなかった…一体何が…」

村正が驚きながらも、崩壊したその建物へと目を向ける。

「な…!」

そこには、完膚なきまでに叩きのめされている鬼灯丸の姿があった。全身に目立った傷は見えなくとも、顔には巨大な腫れ跡があり、殴打によつて吹っ飛ばされた事が分かる。

「鬼灯丸…一体誰が…」

斬魄刀を殴打1発で倒す実力者。その者の霊圧をすぐさま感じ取ろうとするも、それらしき死神の姿は見当らず、村正も千本桜も不安要素を抱えながら無駄な時間を過ごしたのであった。

その後、斬魄刀達は夜明けと共に姿を消した。 “1人の死神” と共に。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

夜が明け、斬魄刀達が去つたものの、その傷跡は深く四番隊のベッドは怪我人で埋められていた。隊の要でもある一番隊隊舎も焼け落ち、たった一夜にして護廷隊は大打撃を与えられてしまったのだ。た。

偶然にも、襲撃後に調査に訪れた夜一は四番隊隊舎で待機している隊長達から話を聞いていた。

「全く不甲斐ないな…まさかいきなりの敵襲でこのザマとはね」

「だがどうする? 奴らはいずれまた来るぞ」

浮竹の言葉に額を手で覆いながら反省していた京楽は考え込む。

そんな中であつた。夜一は何かを思い出し、 “ある人物” について尋ねた。

「そういえば、奴はどうなつておるんじや? ほれ、あの十二番隊の」



◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

場所は変わり、技術開発局にて。

「あの局長どうしたんですか？いきなり呼び出して」

マユリから呼び出された千弘はネムと共に彼の研究室へと来ていた。目の前には笑みを浮かべながら身体の所々に装置を設置して自身の身体を調べるマユリの姿があり、千弘は彼に尋ねた。

それに対してマユリは彼の質問を無視するかの様に、目の前に表示された結果を見て、更に笑みを浮かべた。

「ふむ。予想通りだよ。身体から斬魄刀の魂が抜けている」

「え？」

質問よりもマユリの唐突に放ったその言葉に千弘は首を傾げた。

「斬魄刀って持ち主の魂を写し取ったものじゃないんですか？」

「今は別のものになっている。能無しの癖に知った様な口を聞くじゃないヨ」

「あ”あ!?!装置ぶち抜くぞ腐れ局長！」

「やめろ馬鹿者!!給料全カットの刑にするヨ！」

それから研究を終えたマユリは調査書類をまとめた。

「さて、取り敢えず凡人共へ知らせるとしようか。ほらとつと書類を四番隊に渡して来い。あと卯ノ花隊長にはここへ来る様に伝えろ」  
「はあ〜い」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その後、千弘とネムは卯ノ花へマユリの研究結果と研究室への動向の趣旨を伝えた。

その内容について卯ノ花は頷くと、千弘、ネムと共に技術開発局へと向かうべく治療の場を離れた。その際に勇音は卯ノ花が技術開発局へ赴く事を不安に感じていた。

「うう…卯ノ花隊長が涅隊長に身体を弄られるのは何か嫌です…」

「あ、ご心配なく。変な事したら私の作った特性タバスコ飲ませるので」

「逆に涅隊長が心配になってきますよ!!」

そんな中であつた。

「…ん?」

隊舎を出ようとした千弘は付近の隊舎から“異質な霊圧”を感じ取り、感じ取られた方角へと目を向けた。

「どうしましたか?」

「うくん…」

卯ノ花が尋ねると千弘は首を傾げながら答える。

「変な霊圧がありますね」

「変な…?」

「はい。何かこう…虚が混じった様な」

—————

—————

—————

—————

場所は変わり別の隊舎にて。そこでは周囲に巨大な氷の柱と共にクレーターが出来上がっていた。

広大な庭中心を丸ごと抉り取られたかのように出来たそのクレーターは深さは軽く10メートルはあり、ハシゴを使わなければ決してでられない程の深さであつた。そんなクレーターの中心では倒れ臥すルキアと正解し斬魄刀を構える一護そして—————

「私は君に興味がある。黒崎一護」

—————  
先日、斬魄刀をまとめ上げ瀨霊廷を襲撃した村正の姿があつた。

「私と共に来い」

「ハッ。誰がテメエらについてくかよ!」

村正のその誘いを一護は強く拒絶しながら再び刀を構えた。

「…場所を変えるぞ」

「好きにしろ」

そして2人はその場から瞬歩で姿を消すと、まだ傷のない隊舎の門の目の前へと現れた。

その時であった。

「あ、見つけた」

「ん？」

背後から何者かの声が聞こえた。その声に村正が振り向くと、そこには1人の死神の姿があった。

「(子供…？全く気配を感じなかったぞ…?)」

突如として現れた謎の死神に、一護の斬魄刀を振り払った村正は改めてその死神へと目を向ける。

すると、少年の死神は懐から伝令神機を取り出した。

「もしもし局長、変な格好した輩を見つけました。はい。何か変なコート着てます」

「お…お前は…」

そんな中、村正の振り払いによって距離を置かれた一護はその少年を目にすると見覚えがあったのか名前を口にする。

「千弘!」

「ちひろ…？彼の名か」

一護の声を聞いていた村正はこちらへと目を向ける千弘を観察する。

「(見るからに霊圧が…いや、感じられるが何だこの霊圧は？一介の死神と比べると大差ない…だから先程は気づかなかったのか)」

千弘の身体から感じられる弱めな霊圧に村正は彼については警戒する必要はないと判断したのか、彼に向けての警戒を解いた。

「君、今すぐ立ち去りたまえ。私を捕えに来たか知らないが、君程度の霊圧ではどうする事もできないよ」

警戒を解いた村正は馬鹿にしているとも、紳士的にも捉えられる様な素振りで千弘へと言い放った。その一方で、千弘は村正の言葉を意

に介す事なく通話を続けていた。

「え？あ〜分かりました」

ピッ

「どんな内容だったのかな？」

通話を切った千弘に村正が尋ねると千弘は答えた。

「えっと何が何でも捕まえろ…らしいですね」

「そうか。だが、もう一度言うよ」

その答えを耳にした直後、村正の姿が消え、一瞬にして千弘の前に現れた。その手には一護と対峙した際に使用した刀も握られており、村正は千弘目掛けて振り下ろした。

「君程度では私を捕えられない…!!」

「危ねえ!!千弘!!」

一護が叫んだ。その瞬間

「いや刃物とか危ないんでやめてください」

「がはあ!」

千弘の平手打ちが村正の頬へと刀を振り下ろすよりも前に直撃し、村正をその場から吹き飛ばした。

「……………え」

突如として目の前に広がったその光景を目にした一護は目を点にする。

「いや…まって…」

その光景を現実と受け止めきれず、一護は一度、目を拭い再び目を向けるも、先程と光景は変わらなかった。即ち、村正が刀を振り下ろすよりも早く千弘の平手打ちによって、瀨霊廷の壁を何重にも貫きながら吹き飛ばされていったのだ。

「えええええ!?!」

「全く。初対面の人に向かっていきなり襲ってくるとかどういう神経してんですかあの人。…ん？あ！貴方は旅禍の人！奇遇ですね」

「え!?!普通に話しかけてきた!?!あ…えつと…ああ」

一護が驚く中、千弘はその声によって一護に気付き手を振ると、一護は一瞬、驚きながらも返す。

「…って!?!それどころじゃねえ!?!アイツ捕まえなきゃいけないんだろ!?!」

「あ、そうでした!?!すぐに―――あれ?」

一護の言葉によって千弘は村正の捕獲を思い出し、すぐさまその場へと目を向けるが―――

―――既に彼の姿は消えていた。

「……………」

ピッ

再び千弘の持つ伝令神機が光り出すと千弘は恐る恐る通話に出る。  
すると

『今月の給料は50%カットだネ』

マユリの声が聞こえると共にすぐに通話は切れた。

「いやあああああ!!!」

そして千弘はその場で泣き崩れたのであった。

## 神罰

『綱彌代 時灘』5大貴族の中でも特に規模のある綱彌代家の分家の末裔であるが、非常な手法により当主へと成り上がった男である。

幼い頃に一読した本によって、己の家が、そしてその5大貴族の罪が何であるかについて知った事で彼は変わった。

彼の目的はただ一つ。己の綱彌代家に記された通り、暴虐の限りを尽くすのみ。そして、混沌となりゆく世界に死神や虚の存在を知らぬ現世の人々や国がどのように崩壊していくのか見届けるためである。

全てにおいて常識とされていた概念が崩壊して混乱していく大衆を見る事こそ彼の目的なのである。

そのために時灘は千弘と元柳斎が投獄され、邪魔者が消えたと同時に動き始めた。

2人のうち、彦禰 は時灘が王悦から奪った斬魄刀『己己己己』を使用し、虚圏で暴れ回っていたが、その際にその場にいたハリベルやクールホーン、そしてマユリによってパシリにされた元見えざる帝国の元星十字騎士団達が協力し、見事にその暴走した斬魄刀を撃破した。

そして、残る時灘も彼が断界にて楼閣を築いていた情報を事前に仕入れていた京楽は元柳斎に代わりに護廷隊を率い、数名の隊長達や破面そして特殊能力『完現術』を扱う者達と共に彼を追い詰めた。

だが、時灘は簡単に倒される様な玉ではなかった。

土壇場に追い込まれた時灘は自身の斬魄刀『艶羅鏡典』を始解させた。この艶羅鏡典には自身が見た斬魄刀の能力を全て扱えるという恐ろしい能力があり、威力ではなく人の五感を支配する藍染の『鏡花水月』や元柳斎の『流刃若火』を模倣し彼らを真正面から迎え撃ち圧

倒した。

それでも、勢いづいた彼らを止める事は叶わず、京楽と共に同行した檜佐木によってその身体を貫かれ重傷を負ってしまった。

だが、重傷を負っても時灘は諦めなかった。どこからか入手したのか、懐からソウルチケットを取り出すと尸魂界へと戻ったのであった。

「な……アイツ……ッ!!!」

「こりや参ったねえ……急いで戻ろう」

時灘がその場から消えた事で檜佐木は激昂し、京楽自身も傘の先端をつまみながら首を横に振るとすぐさまその場を後にし時灘を追い尸魂界へと向かったのであった。

—————

—————

——

「ハア……ハア……ハア……!!」

ソウルチケットによって自身の屋敷へと帰還した時灘は流血にまみれた身体を引きずりながらも、形勢逆転を図るべく医務室へと向かっていた。

「ふ……ふふふ……!!バカな奴らめ……!!この私がこの程度でやられる筈がないだろう……!?何度でもやり直せる……!!この程度の傷など……奴らがここへ来る前までに完治なんて簡単だ……!!!」

そして、時灘は自身の屋敷の扉を開いた。

そこには

「ん？おや、これは失礼」

「……え？」

椅子に座りながら本を読み漁るマユリの姿があった。

「なぜ……ここに……？」

突然と、まるで自分の家であるかのように平然と居座っていた彼の姿に時灘は思わず理由を問う。それに対してマユリは読書しながら答えた。

「どれもこれも興味深い本ばかりでネ。つつい読み漁ってしまったのだヨ。あく気にしないで。読み終わったらすぐに出て行くから」  
「泥棒の様な真似とは…冷徹な隊長殿も随分と薄汚くなりましたなあ…」

「確かに、そこは否定しない。前は朽木白哉の車庫に不法侵入したからネえ」

時灘の言葉に対してマユリは否定することなく受け入れる。

そんな中であつた。

「だけどその前に、そんな口を叩いている暇などあるのかネ？」  
「なに…？」

突如として本を読み漁っていたマユリの目が突然と時灘に向けられた。その動作に不穏を感じ取った時灘が身構える中、マユリは告げる。

「私がいるという事は――

マユリが言葉を言い掛けたその瞬間――

時灘の左腕が切り飛ばされた。

「え…？」

時灘は何が起こったのか理解できなかつた。気づけば自身のぶら下がっていた腕が突然と空中に投げ出されていたのだ。

「私がいるということは、奴もいるのだヨ」



——ボト

そして切り飛ばされた腕が地面に転がったと同時に左半身から身体が弾け飛ぶ程の痛みが襲った。

「ぐああああああ!!!」

「全く霊圧で気づきたまえヨ。さつきからずつとそこにいただろぅに」

ようやくその痛み気づいた時灘は切り取られた左腕がついていた肩を抑え始めながらその場に崩れ落ちた。

「あ……ああ……!!くそ……くそおおお!!何故だ……なぜ……」

痛みと共に湧き上がる怒りに歯を食い縛りながら時灘が叫んだ時であった。

——  
時灘の背中を黒い霊圧が撫でる。それによって全身に寒気が走り、全身を駆け回っていた腕の痛みが一瞬にして掻き消えた。

「あ……あああ……」

背中を撫でた黒い霊圧によって、時灘の精神からは怒りという感情が掻き消え、置き換えられるように全身から大量の汗と寒気に見舞われる。

そして、全身から湧き上がる恐怖感に支配されながらゆっくりと背後へと目を向けた。

そこには

「どうも。お久しぶりです」

ドス黒い霊圧を放ちながら満面の笑みを浮かべている千弘の姿があった。

「き……貴様は……!!!」

その顔を見た瞬間 時灘の全身から鳥肌が立ち、余裕の笑みを浮か

べていた顔からは大量の冷や汗が流れ出る。

「園原アアあ!!」

「あ、名前覚えててくれたんですね!嬉しいですよ時灘さん」

「何故だ…なぜお前がここに…!?!」

「いやあく無間でカラオケしてたら局長が来てボーナスをやるって言ってくれましてね!まさかこんな嬉しいボーナスをくれるとは思いませんでしたよ!」

その可愛らしい笑顔を輝かせる中、千弘は血のついた刀を撫で、その笑顔を目にした時灘はその場から腰を抜かした。

もはや京楽達に行った煽りなどする勇氣も胆力も何もない。あるのは目の前の存在に対する『恐怖』のみであった。

「やめろ…やめろ!!その顔を私に見せるな!!」

「ええ?人の顔見てそれは不是吗?よく!ねえねえ!そんなに怖がらないでくださいよ!」

そう言い千弘は血に塗れた斬魄刀を肩にのせながらゆつくりと歩み寄った。

「来るな!!来るなあああ!!くる—————え…!?!」

時灘は必死に斬魄刀を振り回す。だが、その腕も気づけば斬魄刀ごと粉々に切り刻まれていた。

「邪魔な腕ですね。斬りますよ?あ、もう斬ってました」

「あ…ああ…!!」

もはや痛みなど感じなかった。目の前の恐怖に顔を覆うことも振り払うことすらも出来なくなってしまうた恐怖に掻き消されてしまったのだから。

「やめ…やめろ…!!やめてくれ!!私にその顔を見せるな…!!」

「大丈夫ですよ。すぐ終わります。その顔が見られて私は大満足ですから!」

小動物の様に震えた声で時灘が願う中、目の前に立った千弘は刀を握り締め、満面の笑みを浮かべながら時灘目掛けて振り下ろした。

「さようなら」

「うあああああ  
!!!!!!!」

そして、『逃げる事ができない』という恐怖に飲み込まれながら時  
灘の意識は闇の中へと引き摺り込まれたのであった。

その後、後を追ってきた檜佐木達はその場に到着すると、そこには  
髪が抜け落ち、全身が真っ白になり廃人と化した時灘の姿があったと  
いう。